弘法大師行状記

地

リ印六

UNIVERSITY OF
ILLINOIS LIBRARY
AT URBANA-CHAMPAIGN

天保五年三月新鐫

東寺寶藏古畫巻縮圖

弘法大師行状記

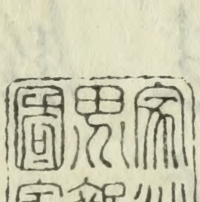
大勸進所藏版

聖人入懐霊胎有因遍
照垂跡徳齊洪鈞
恩昇兜率謂傳慈尊雲
蹤祐罰萬代長存

吾蔵籍中有　弘法大師行状絵詞者十二巻十輪院住持一音嘗請欲縮寫上木流布人間盖將述一代行化之境答萬人仰慕之意也近在江戸遍募緇素癸巳之冬刻遂成需余題一言余謝曰千年遠忌已逼廟堂

墻宇傾頽朽傷殆不能蔽風日何以能張法筵乎夫興造
経営必報恩也豈獨供法誦咒而已哉於是奮然發願
将以期年之間一新之夙夜焦心任世間三昧不得綴文
寫字是余之所以辭也一再懇請不已乃使田玄々聚
高祖大英蹟中之字録矣雁以作二頌以塞其責云
癸巳仲冬左大寺學頭沙門兼寶沐手謹志





平安 樋口與兵衛刻

附言

一此書の詞書ハもはら原本に従ひあへてさらに一字も改めず
一原本にハ真名字に仮名をつくる事稀也いへとも今童蒙にたよりせんかためにこれを加ふ
一画ハ原本のまゝ古意を失ハず縮写してこれを圖するのミ
一原本ハ固より巻軸なれハ画ハ一段ごとの詞書の末にありといへとも今便に随て是を略き

一巻の始に附する所乃標題は京都にてこれ写し
中古東寺観智院賢賀僧正見ることの便
あらんこと紙ありひてある紙加へいまして
彼僧正の遺意にまかせ揚て画の段毎にこれ
をしるせる耕索

弘法大師行状記標題

第一

第二

第三

東寺灌頂　官位追贈　大師謚號　博陸參詣

第十二

仙院臨幸

通計五十九箇條

寶暦七年歳次丁丑臘月十一日馳筆了

僧正賢賀　俗齒七十四
法夏六十五

弘法大師行状記巻之一

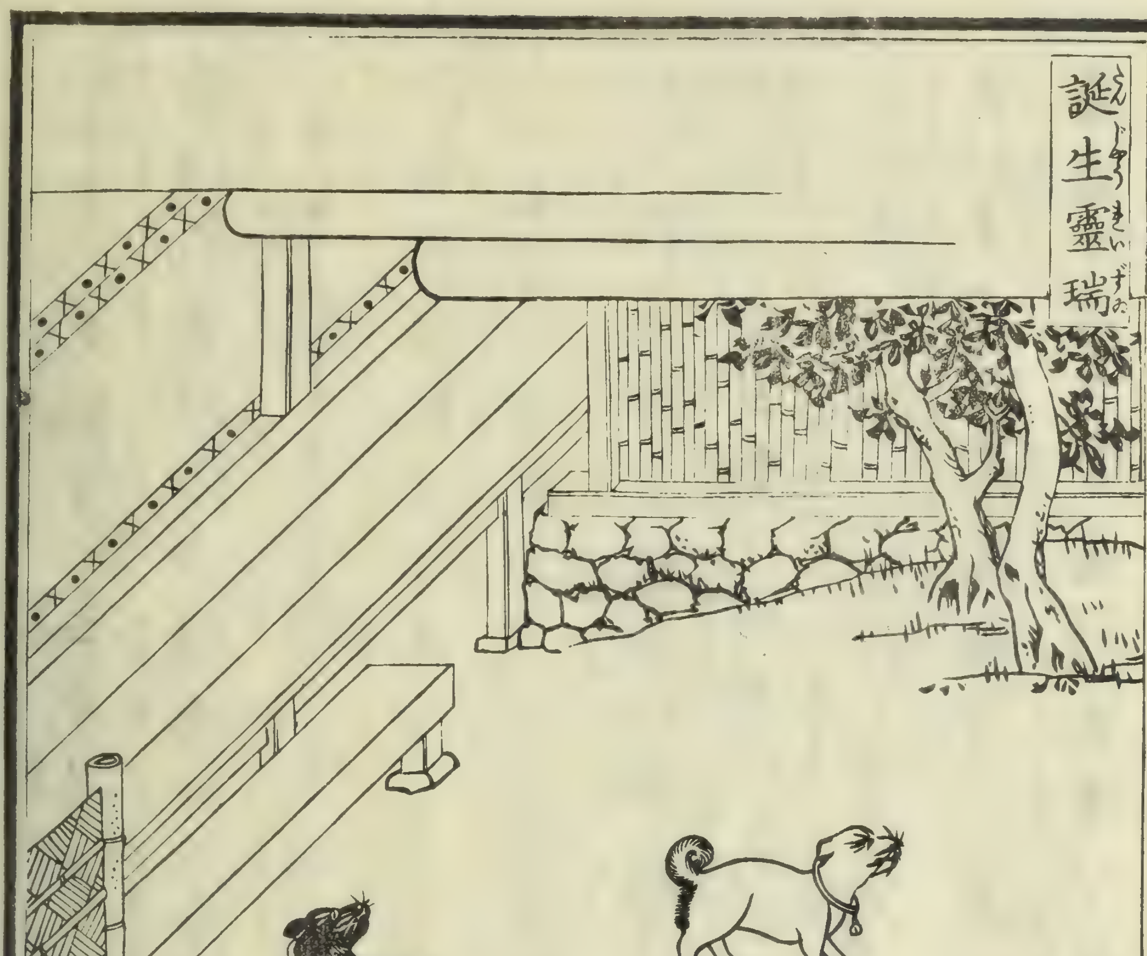
夫天地開はじまりて人民に道あらハれ佛法相つたハりて因果のことわりいちじるしく應化の如來迹を秋津洲にたれ法身は大士光を日域の塵に和らげ給ひ或ハ宗廟社稷の神祇として子苗を續て万姓を安じ或ハ有智高徳の法流となりて貝葉を傳へて四生をたすけ給ふ外には恵澤をほどこし内には道眼をひらく皇家のまもりとひとしきにあまりてかゝく法水の流是が為にふかし其の術なれども儒教道教の操行を制度する虚幻にして

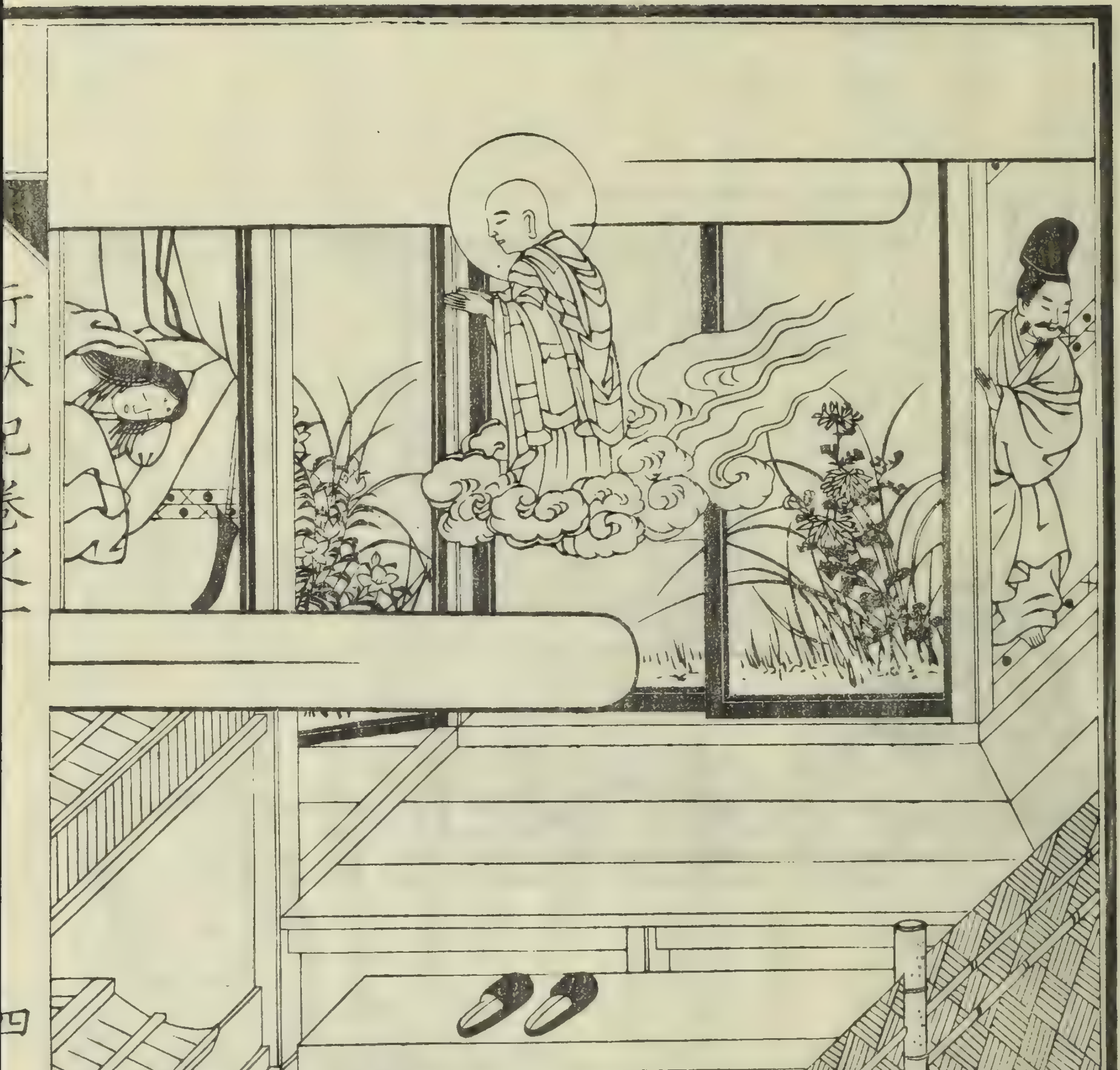
真実にかへれば小乗大乗の心性を研覈する因分にしく果海を窮むる遮那衆徳の実義を談じて法仏内証の極理をのぶる事もはらしながら秘密真言の一宗なり是則人の膏腴法の肝腑也
爰に大聖ましますを弘法大師と名付奉る初登のり本地を秘して跡を辺域に垂給へり降誕乃霊瑞童稚の徴祥奇特最多く希異極まりなし受業の後進具の学あまねく内外の典籍をうかびて真俗の奥旨をきはむ　本朝に津をとふに人なき事を歎き異域に留学して海をわたる　勅をかうむりて世志ゆくと

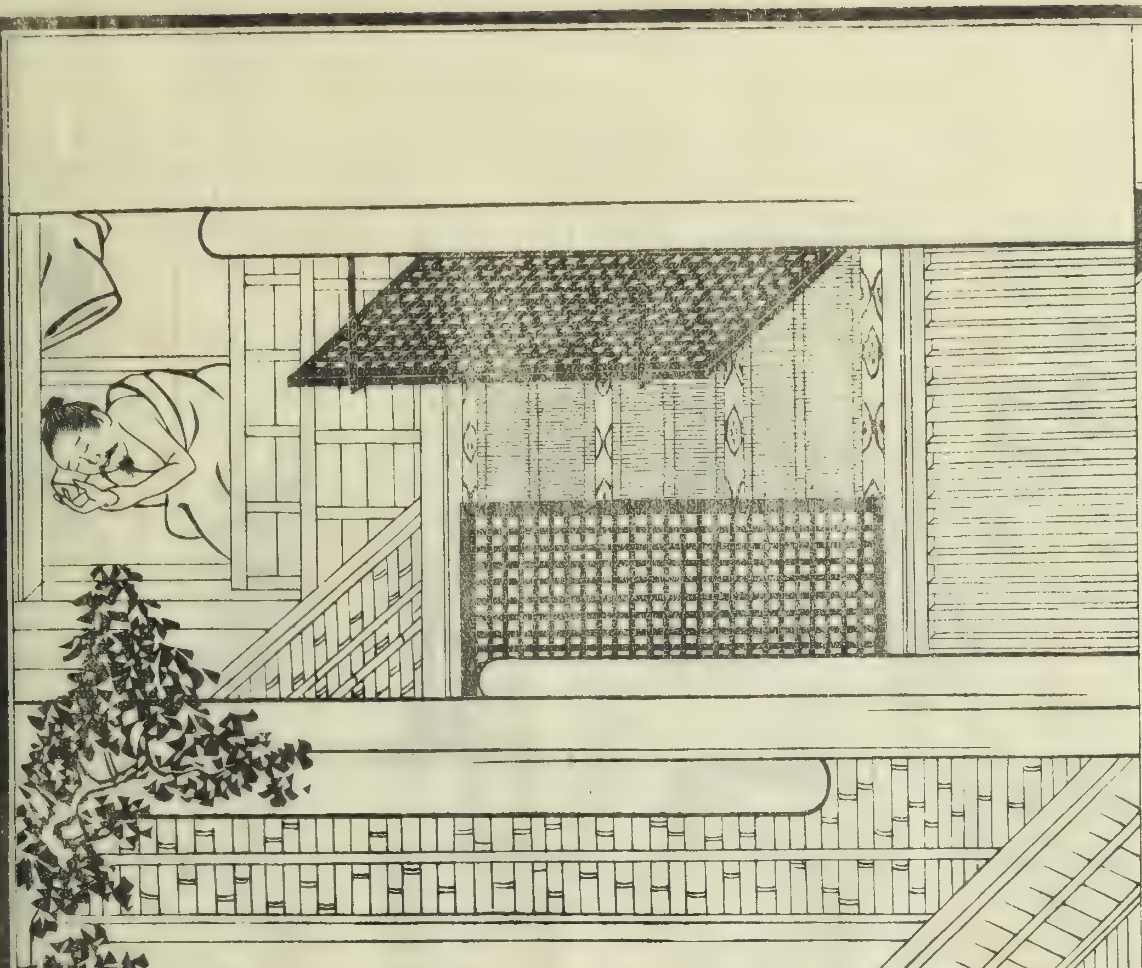
祢が上法ひふすなハち大日如来第七代の付法京師
青龍寺恵果和尚に逢奉りて両部の曼荼をつたへ
諸尊の瑜伽をならひ経論を荷負し道具を齎持して
帝城東寺に霊樞をとゞめられ　皇圖護持の秘寶
とす恵慈發を頂上宮経を講讃しよりよのくく
佛法我朝に傳り聖人此境に出といへども秘教を
宣揚して迷徒を汲引する事今正に新なり
遺流ながく法さかえて朝野うるほひを得ざるな
なし経に全身を南洞にかくして遙に鶏園の月を
詩画眼を上天にめぐらして遺跡の塵をうむ

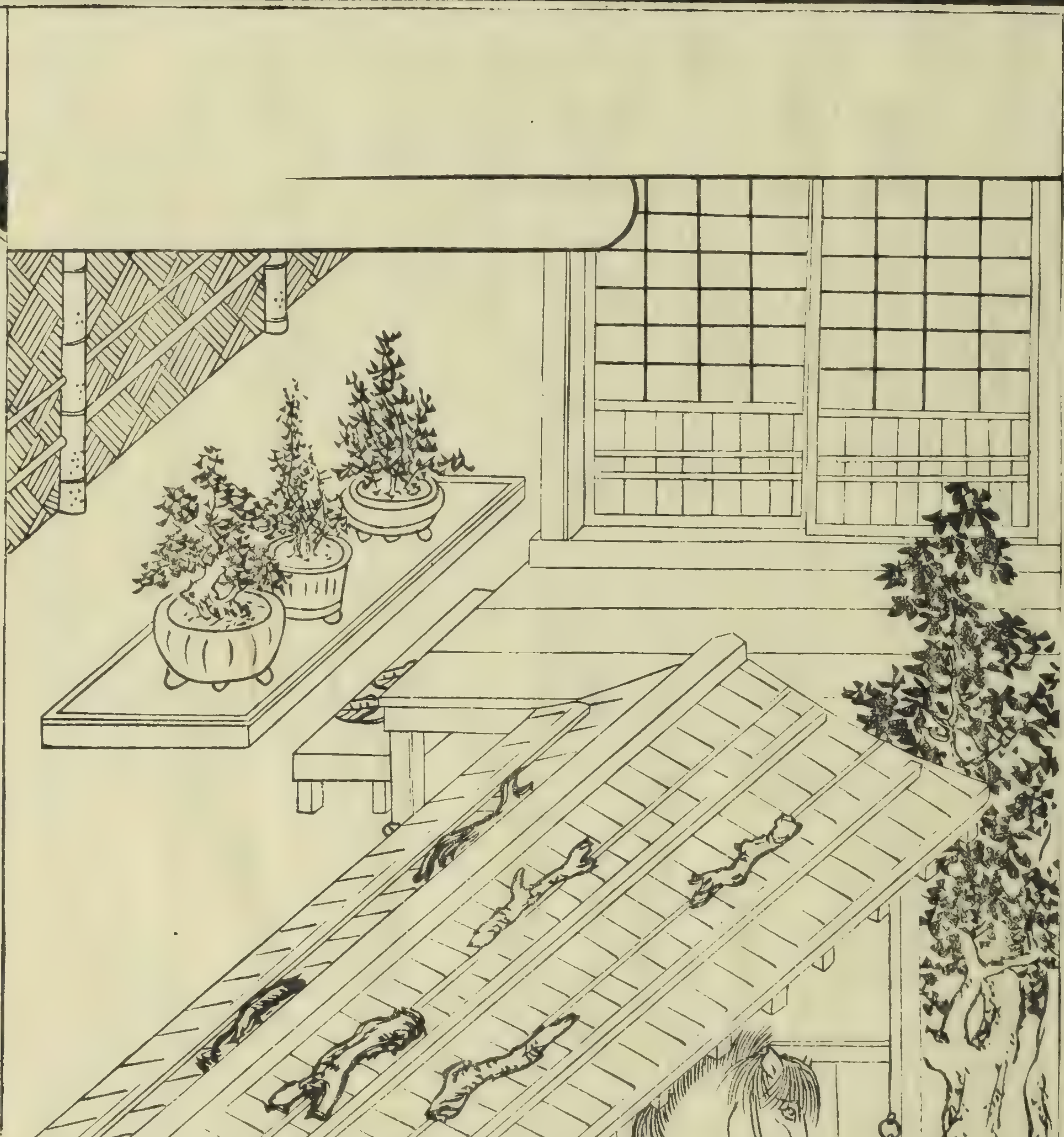
ぐゑん絵に至一々の行状まことに権化の跡多しといへ
ども此たぐひ有難かる例しいまだ詳く傳記にのせて
諸家にありていはゆる秘物となりといへども機縁なき人は
周覧しばしくものうき淺愚さまぐさき輩は魯性
まどひやすし故に後素のあきれわざによせて前蹤の
ふかき徳状顕をうつしつ併がくハ披覧の賢士嘲哢いさ
さず握翰の庸生疑殆をとがむるなくして入定留身は
高志とうひがゝ誓願捨命の報酬といつべし
抑本朝真言の高祖贈大僧正　勅謚弘法大師ハ讃岐
の国多度郡屏風浦の人なり厳親ハ佐伯直殿氏

みなりと天乱より出て流ま遐方ふ及べり
景行天皇の御子稲脊入彦命のまで阿良都別命
の男豊郷と云し人　孝徳天皇の御時はじめて
佐伯姓を賜り其祖日本武尊に随く東夷伐
しづ免し功勲世ふおりふよりて讃岐乃国ふ
地を班ち賜き此ふ小家居して胤葉相續で子孫
綿今より尊堂ハ阿刀の氏の人なり菱ふ天竺ふ
より聖人飛来りて懐ふ入と見て妊胎なり
光仁天皇の御宇寶亀五年ふなりく十二乃
遠辰とみち十指の爪掌と合て辛酉日とありて


誕生靈瑞







誕生は瑞を示せり懐妊月ひのまちて佳期歳にみち
しかども着帯身をくるしめず出産事やすらか
なり彼聖徳太子の斑鳩に跡をたれ広智三蔵の
神龍に生れ降給ひし奇異乃佳祥にもまさる
覚侍る
大師御年五六歳の比此間夢に常に八葉の蓮花の上に
坐して諸佛と物がたりすと御覧ぜられたりける
しかれども父母にもまさしく語たまはず況他人をや
爺嬢ことにいつくしみ奉りてたなごゝろの玉とおもひて
ひとしくおもひし御名をば多布度物と申奉る

十二歳の御時父母ゟ語り給ふ我子ハ昔の佛弟子
なる由し夢ニ天竺の聖人来りて我ふところニ入と
見て妊胎せり扨こそ此子ハまさしく佛家ニ
入り沙門となりて釈氏を續しむ由しと幼少の
御耳ニ是を聞給ひて深く心ニ染み御自ら佛の学
ひを専となし御歳たけまでも蓉鶏ハ遊び竹馬乃
たはふれもなくして常ニ泥土をもつて佛像を作り
草木をもつて童堂をたて内ニ安置し奉りて禮拜
なさる事を専とし給ひける
昔ハ公より御使を國々へ下させて民庶のくるしみを



童(どう)稚(ち)奇(き)異(い)





こゝろ努給ひたり其故ハ君ハ淫成さもて稀にも民ハ
食を好く命じて穀請さぬれバ國おとろへ民窮し
ぬれバ禮楽なりがたし疲るに鞭をおそれまするが
如し王化に及ざりて利潤に心覚して非法を
行ふ民に苛られ所ハ吏の咎なり吏に不善ハ國主
小過を君良吏を擇バずして貪婪の輩をもちぬれバ
暴虐を恣にして百姓をくるしむ民の憂天に昇
く災變となるも災變起れバ國土乱る是れ上乃清く
しまざるより起りて下におよぼすより成る毒土なし
みだれまさバ君行を改て下を屈すれバむかし其故に民乃


四王侍衛

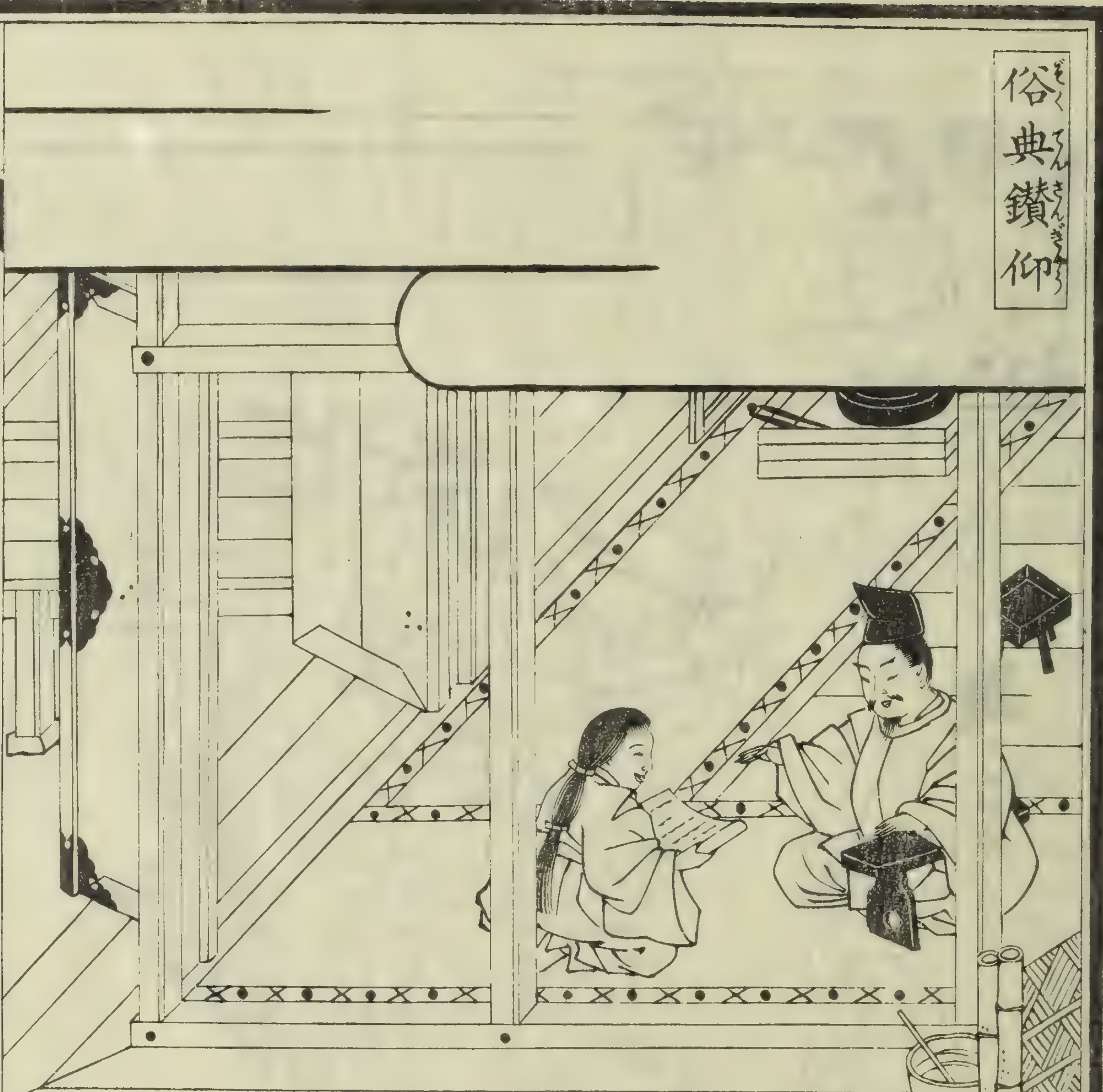


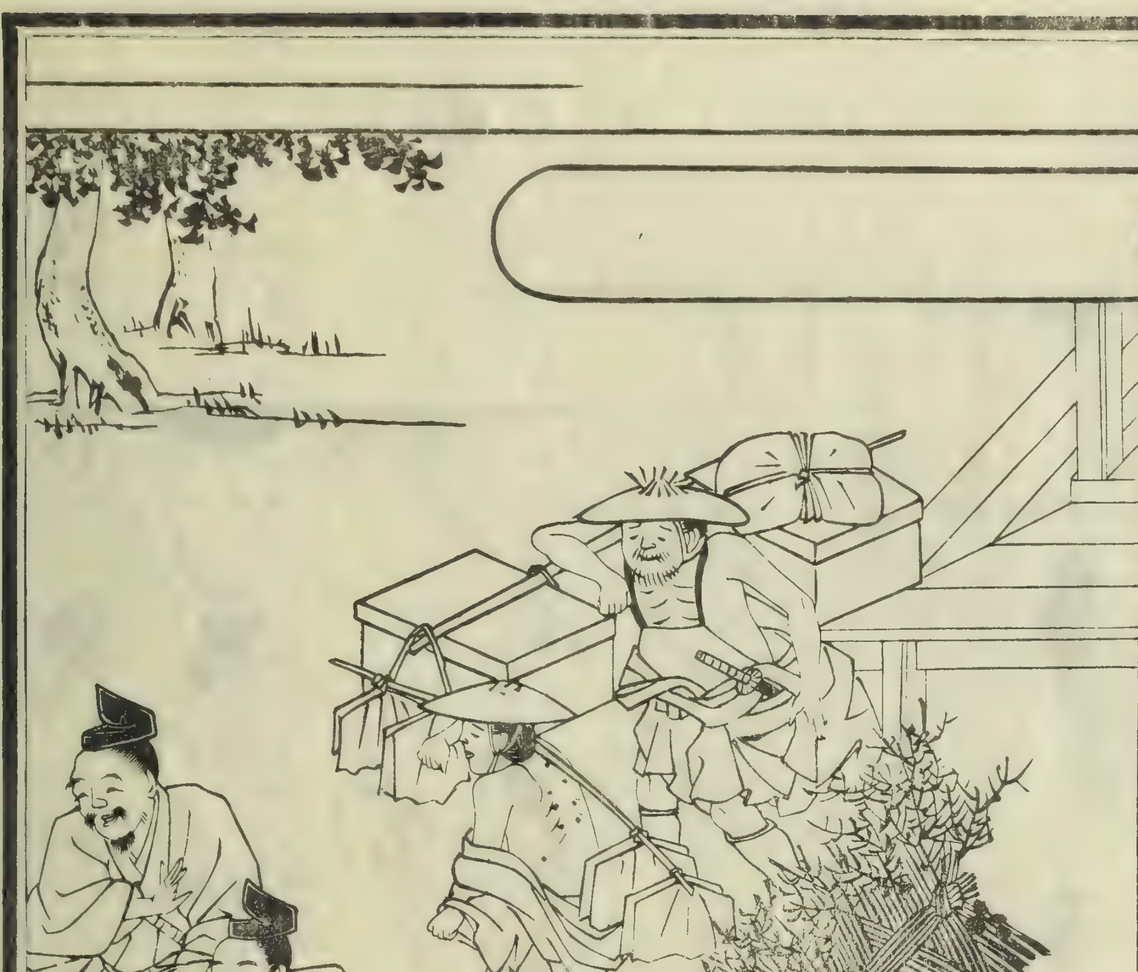


慈ども同ひ吏は何處まりをもたてさむが爲に御使
を請ふされば分りさまバ勅使を讃岐の國へ下され
ありけるに大師幼くして諸の童子に交りて遊び
給ひたる佛見奉りて馬よりおりて禮拜して曰公は凡人
にあらず其故ハ四天王白傘をとりて前後におほふ
ぞんじ定知ぬまゝ前生の聖人なりといひしと
其後隣里の人驚きあやしみ御名を神童と稱し
ある今童稚の戯ともむかへるに遥に神化の兆を顯
せり經中に深位の薩埵利生の相を説くとして是は
衆生化縁止とありて輪王の德を備へ頂上に白蓋を

現ずと見えたり是則四无碍智高くあらはれ四无量心あまねく覆からしむるゆへなり聖の感ずる所推て知ぬ無べなりけるとや

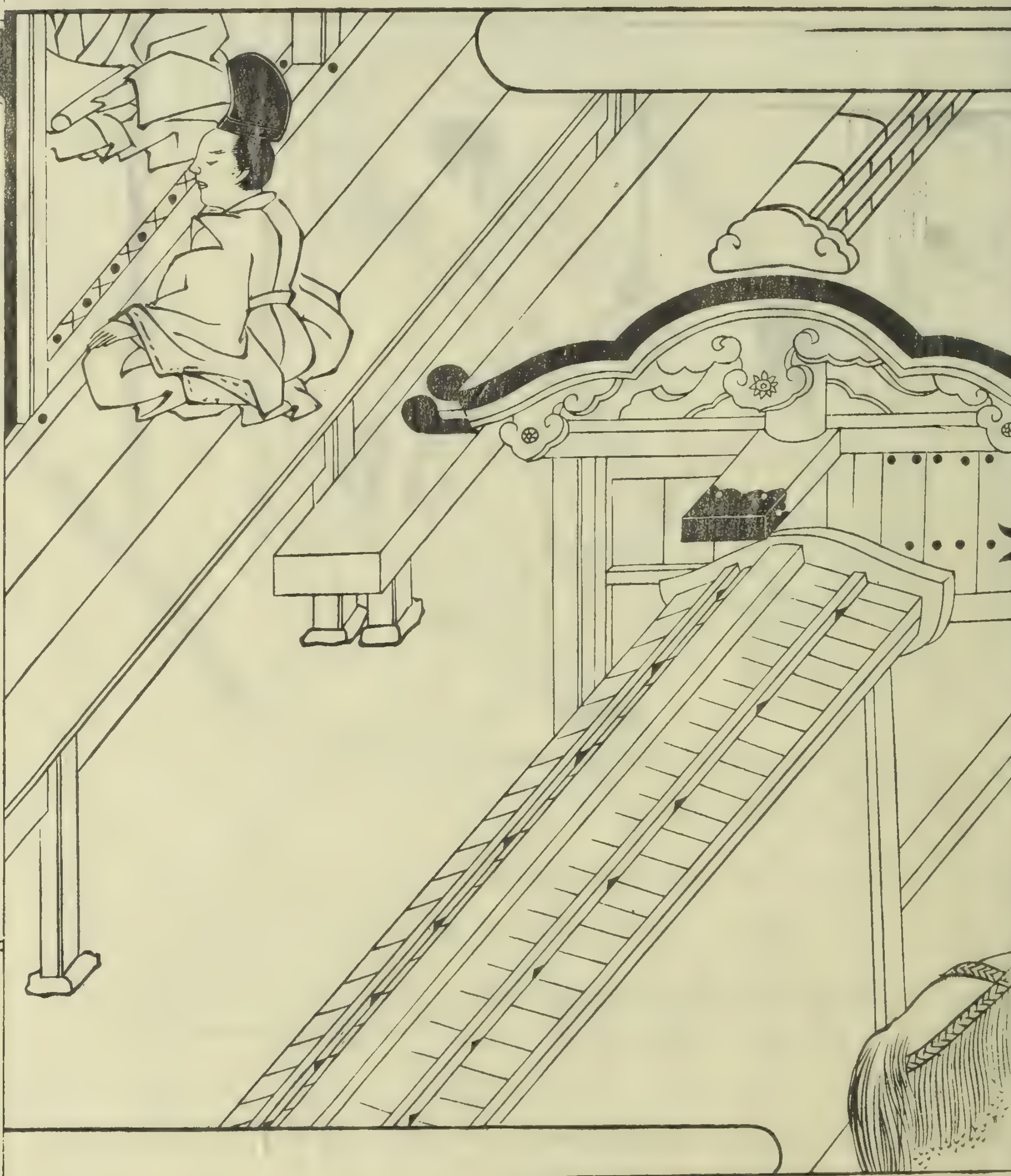
大師天性明敏にして上智の雅量ましまして給ふ顔回が十を知し古の陸士衡が多をうれへし昔のふりんしもかく慮と機おぼえけるきに外戚乃叔父阿刀の大足大夫（伊豫親王学士）双親に相語て四佛弟子となさむよりハ志らじ大学に入て経史をまなび文試立名とのぞむ志しむにいと此時しへにまつ坊て則舅氏に従きて俗典を学び鑽仰をはげまし給ふ

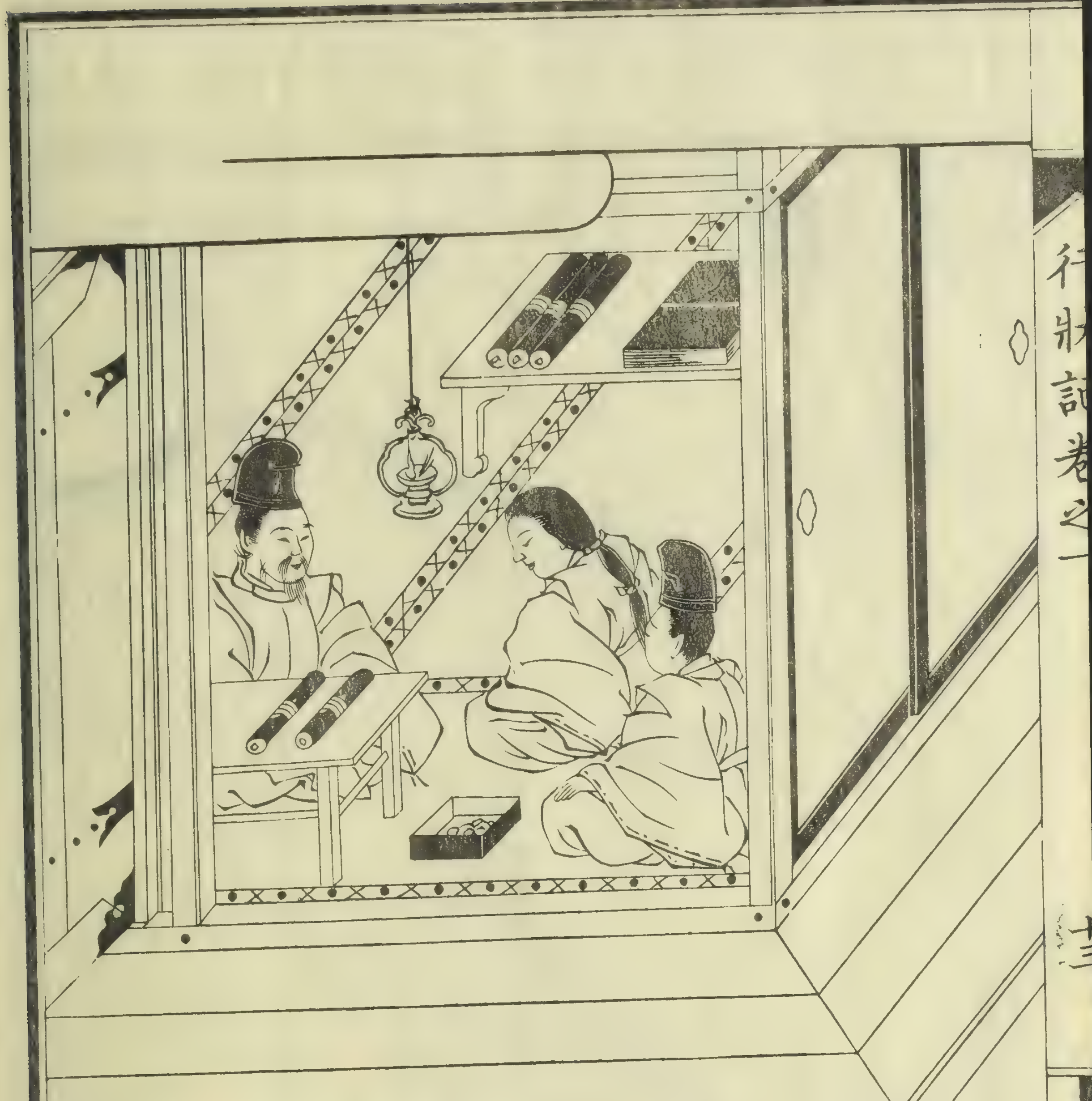

俗典鑽仰











遂に延暦七年御年十九にして家郷を辞して京洛に入十八の御年槐市にまじはり黌舎に遊び給ひ直講味酒浄成に毛詩左伝尚書をよみ岡田の博士に逢てかさねて左氏春秋をまなび給ふ

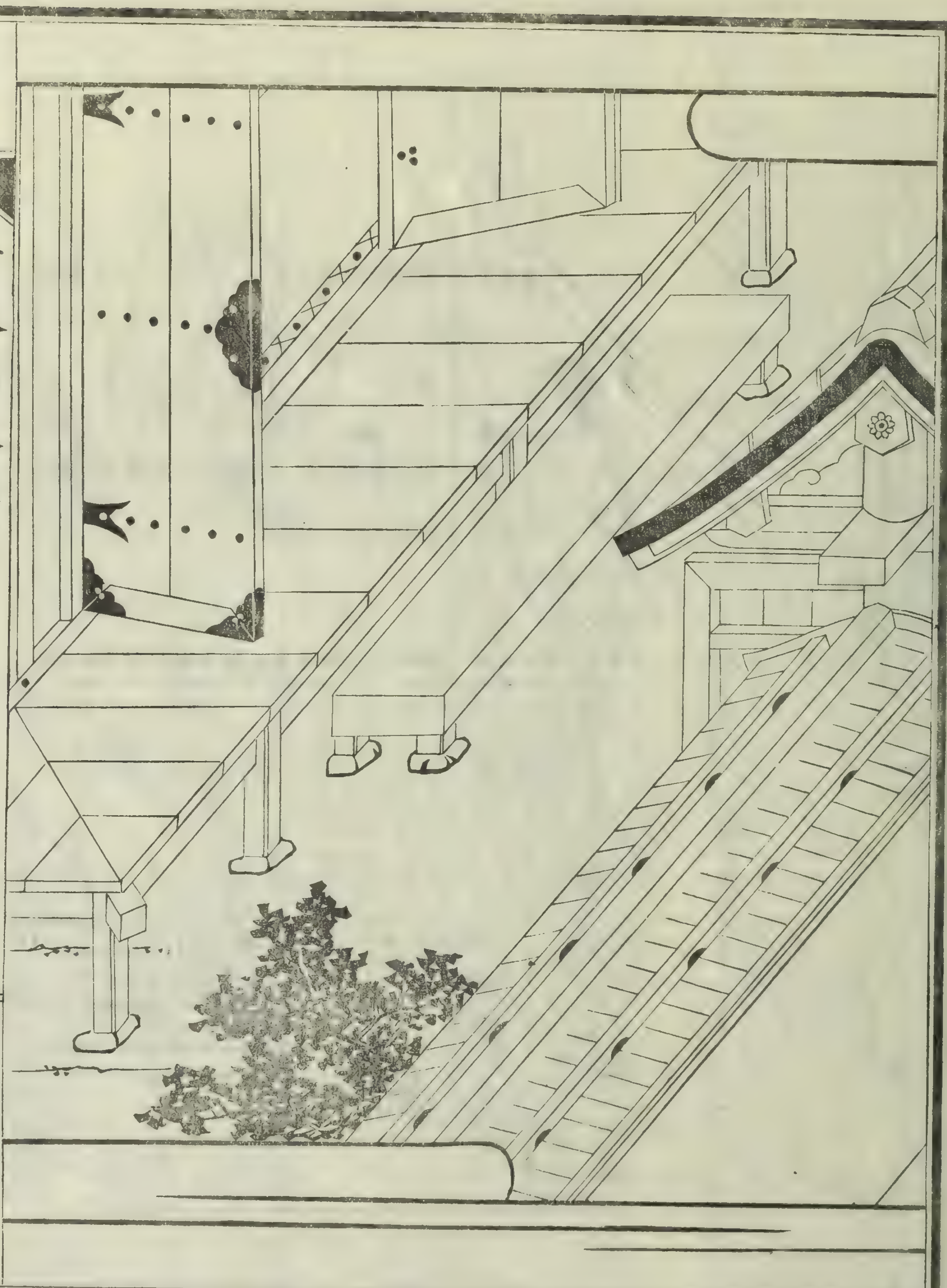
凡蛍雪のはげみ絶ゆることなく縄錐のいたりまでと心を尽し給ひしかバ学業はやく成て文質相備る千歳の日月心の中に明らかに一朝の錦繍筆のもとにあざやかなり

御入洛の後石淵の贈僧正勤操を師としてふかく

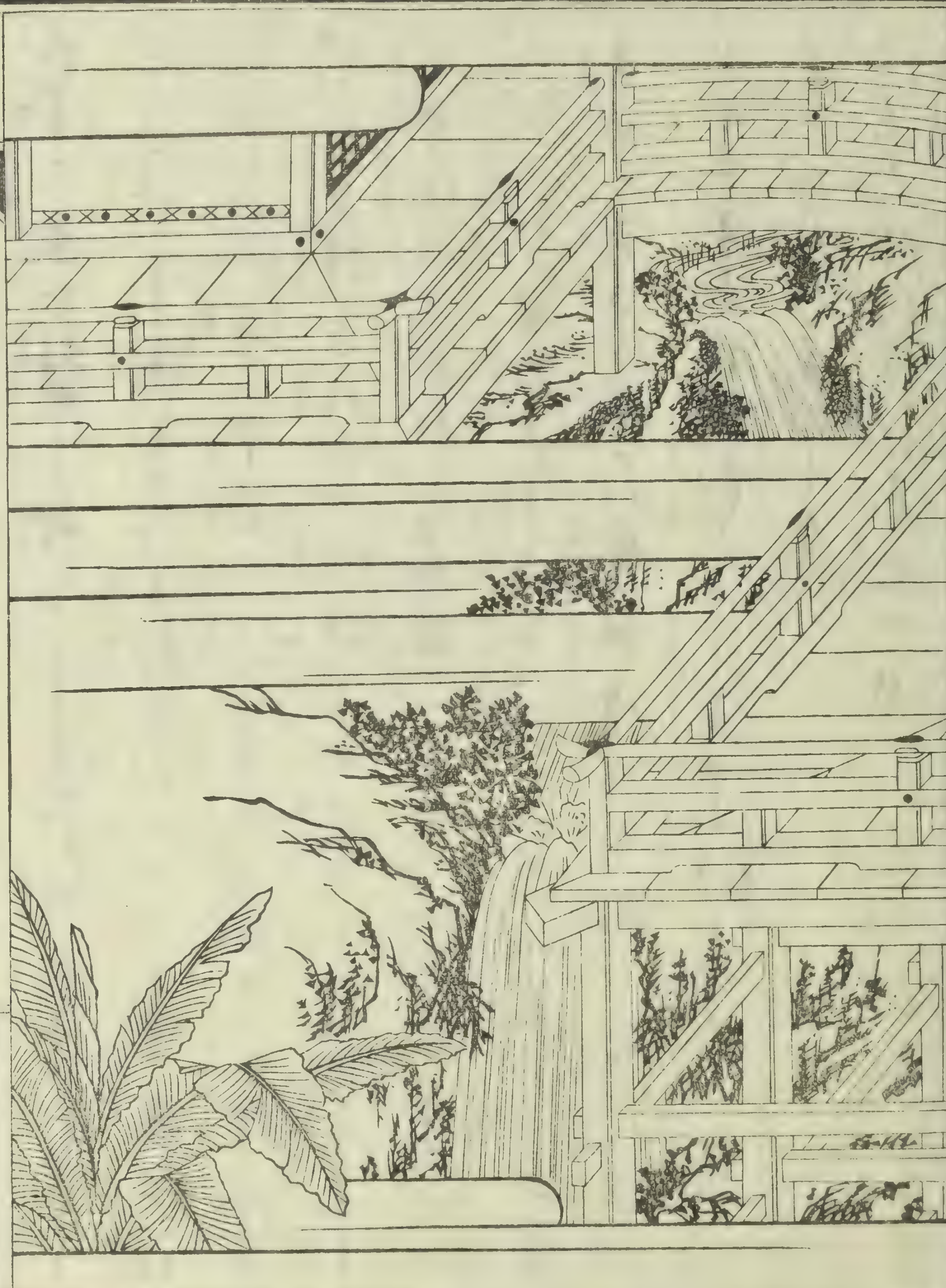
大虚空蔵ならびに能満虚空蔵等の法をうけ心府
に深く念持し給へり此法はむかし大安寺道慈
律師大唐にわたり諸宗をまなびしとき善無畏
三蔵に逢まつりてその幽旨を伝へ　本朝に帰
来りて後同寺の善議大徳にさづく議公又勤操
和尚にさづく此和尚此法の勝利を得給て英傑に
おはしければ世に溢ましかバ大師この面授をうけまして
深く披膺し給へり志あきたらねバ儒林に遊く廣く経
史をまなび給ひしかども文章ハ仏教にあらずとして
ひたすら避世の御心ざし深かりけれバ或時に思ひ給はく

我なりし所の上古の俗典にハ眼前にして一朝の後の
利弼也此風を慮みて志うじはのくの福田を仰むことを
則近士に命じ給て御名を無空と授け給ひける
延暦十六年臘月の初日三教指帰を撰しく
俗教の益なき事を述給ふ其詞に云名市の栄
花を念々に見をいとひ巌藪の烟霞を日夕す
未だ我が軽肥流水を見てハすなハち電幻の
なげき忽ちに起り支離懸鶉をみてハ則因果の
何の相日もとにふれし因にふまえて我をもむ継る
風をはらなぐも亥に一身は親戚有り我を志むるに


出家學法







五常の索を持てし我をとゞまるに忠孝に望むまと
いふを以てみれば余ありはく物の心一にかゝはず飛沈性
ことなりこの故に聖者の人をみちびくに教網に三種あり
いはゆる釋李孔なり浅深へだて有りといへども並びに
皆聖説なり若一つの羅に入るれば何ぞ忠孝にそむかむ
かくのごとく勧めたまへり此書一部三巻伝説の写に製
草せしまゝりしとは聾瞽指帰と題し給ひたる紙
後に三教指帰と改らる其書世に伝りて今に緇素の
めでる所のものなり
弘法大師行状記巻之一　終

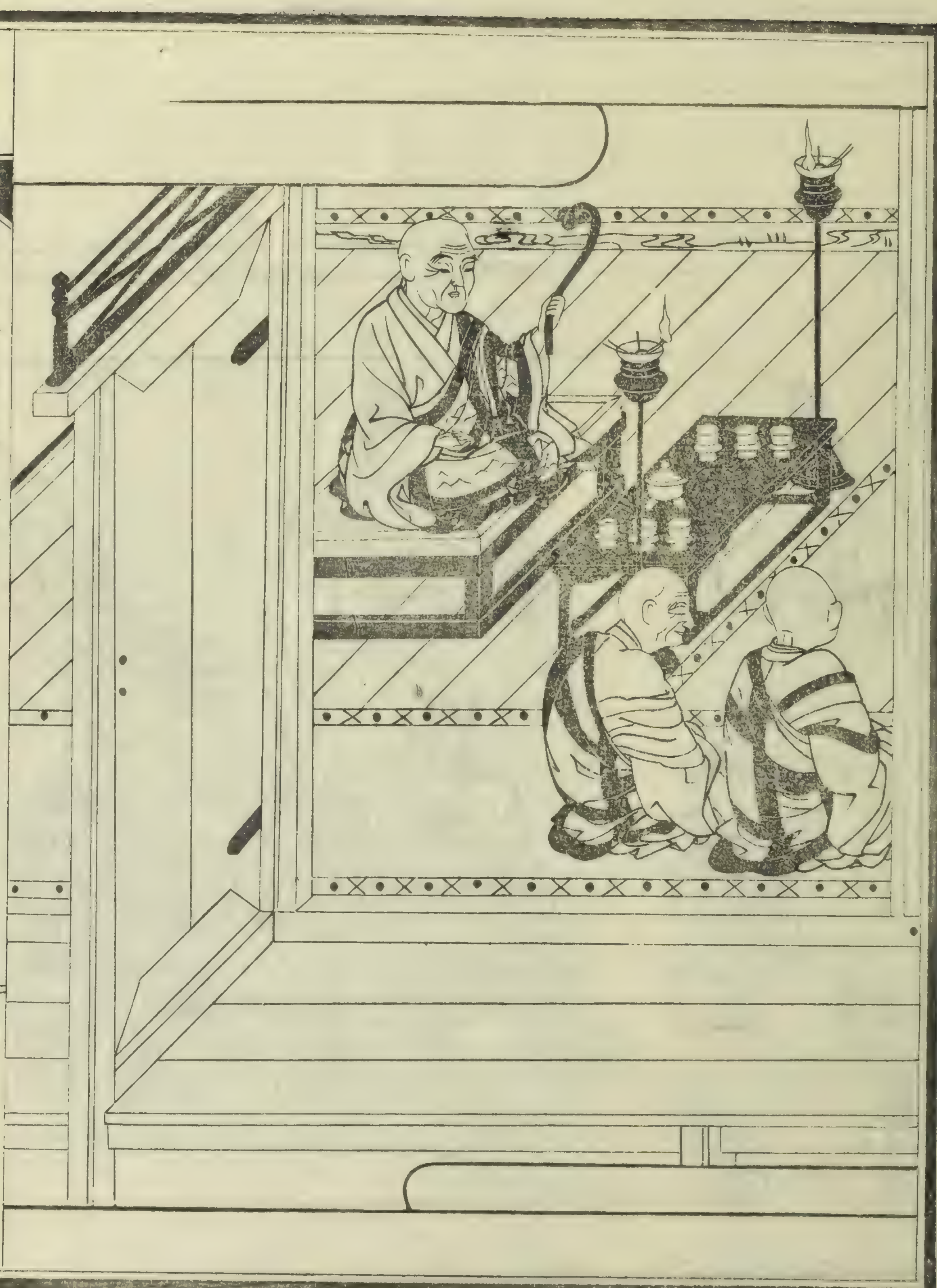
弘法大師行狀記卷之二

大師遂に豐門をのがれいでゝ山林に遊覧して修練
歳月を送り給ひしが石渕の贈僧正その苦行
をゆかしく大師を招引し給ひて延暦十二年御歳
二十歳にして和泉の國槇尾といふ寺にて髻髪を
剃く沙彌の十戒七十二の威儀を授り御諱を
教海と號し其後に如空と稱せらる
同十四年四月九日東大寺に於て戒壇院にして唐僧
泰信律師を屈して傳戒の和尚として律師豐安

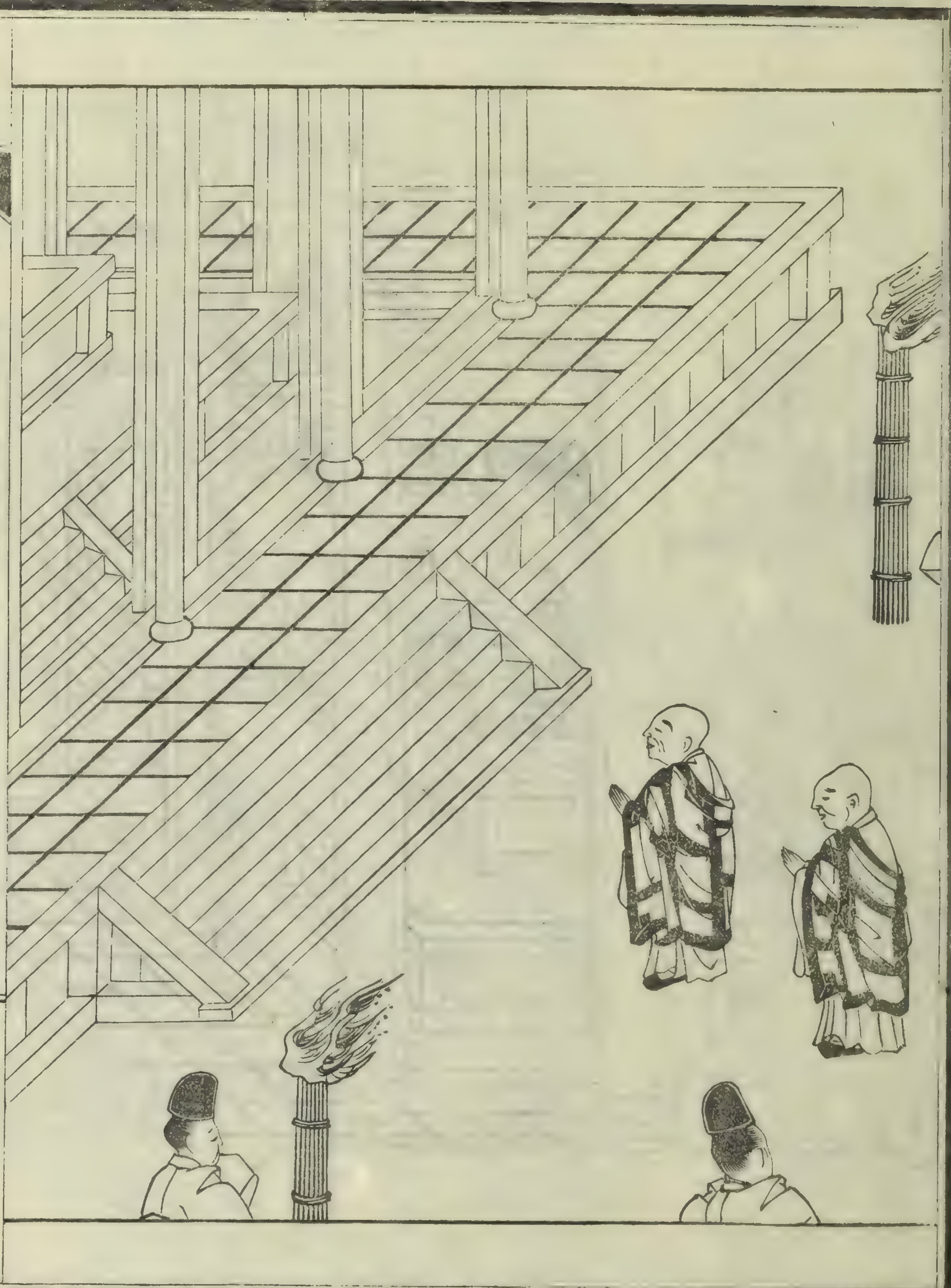

登壇受戒

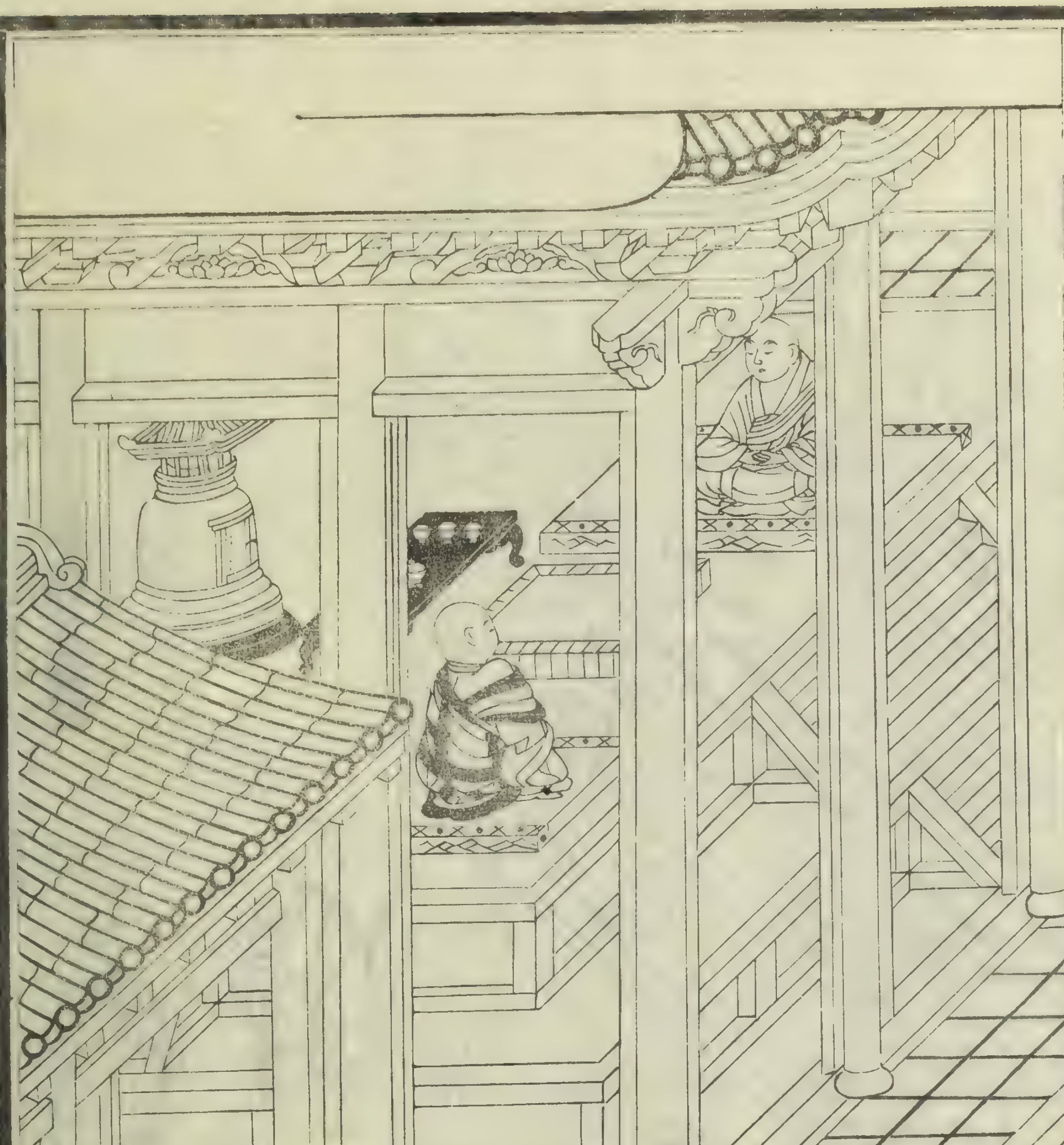






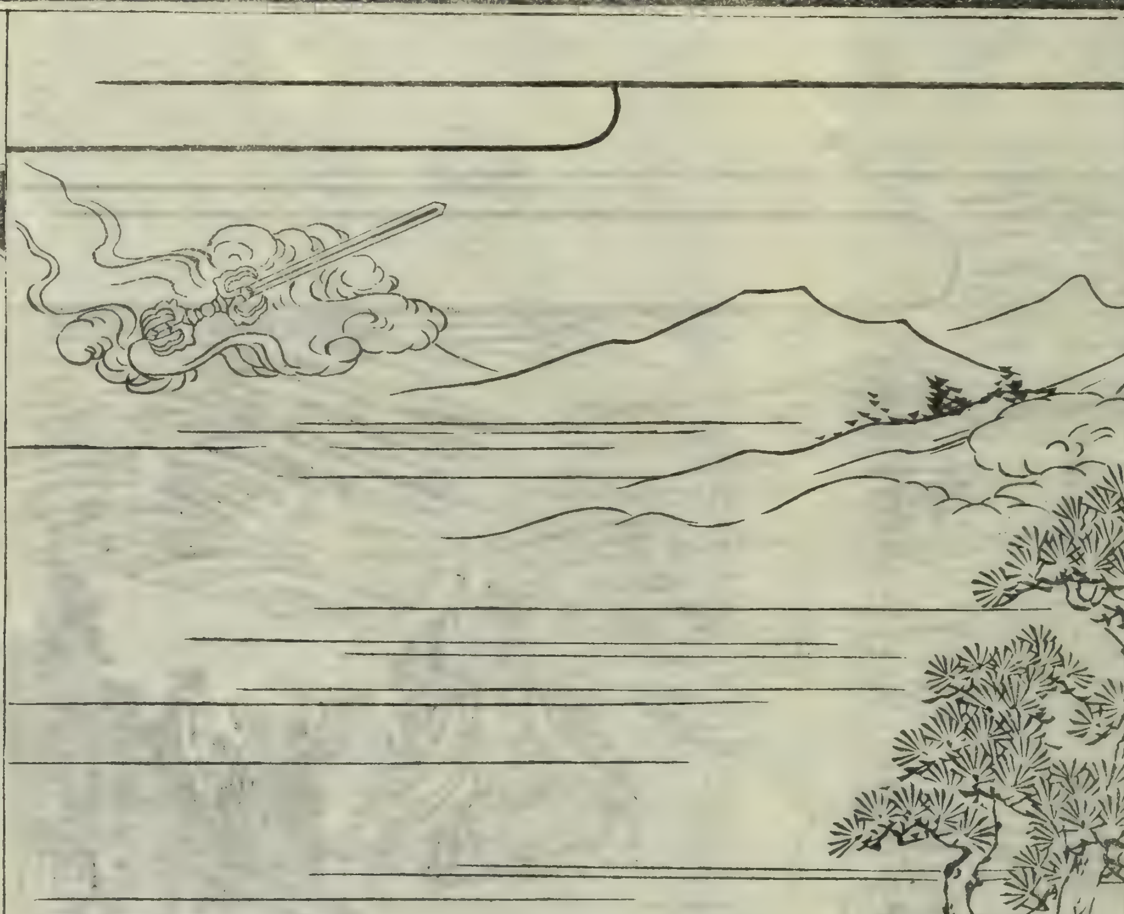


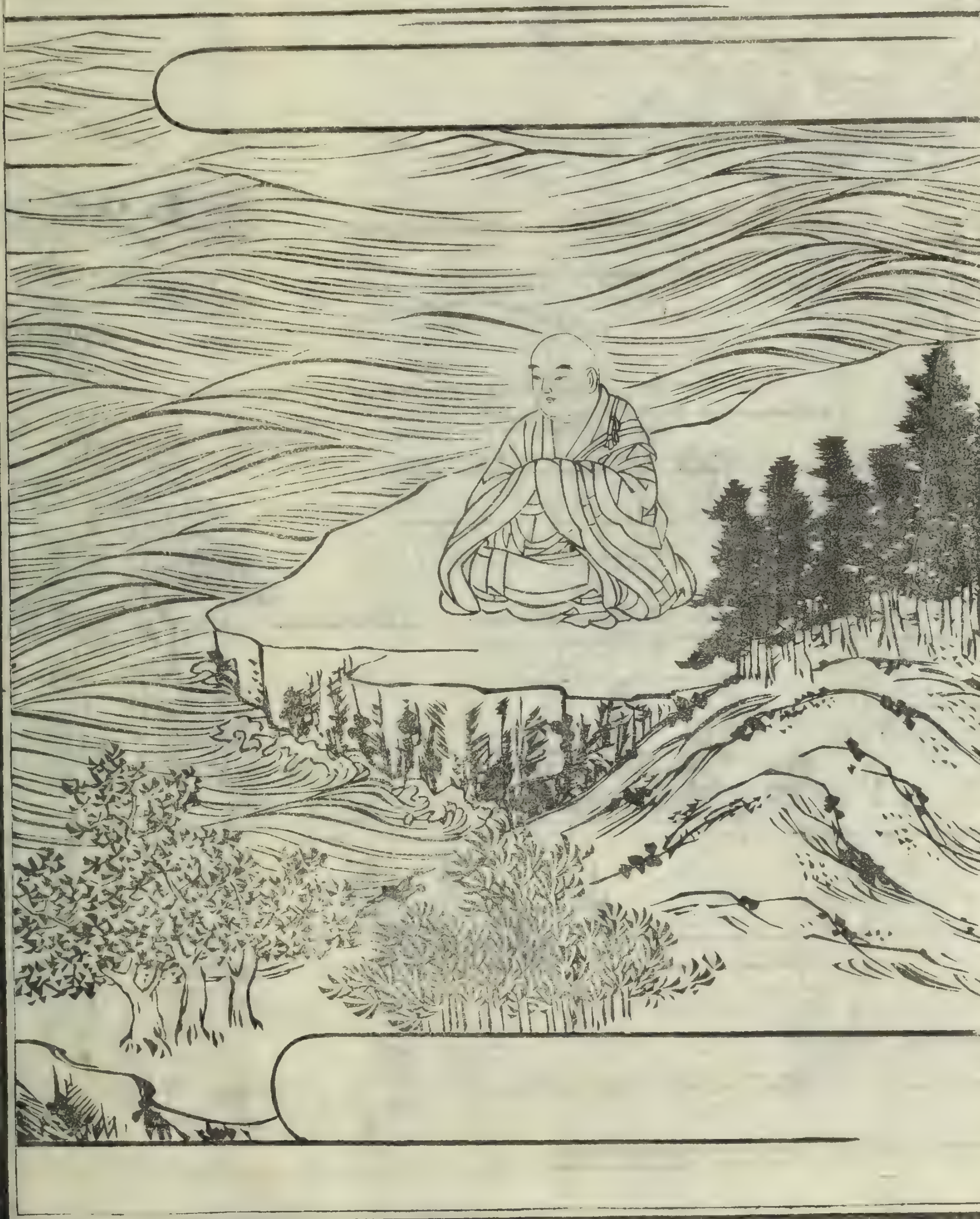


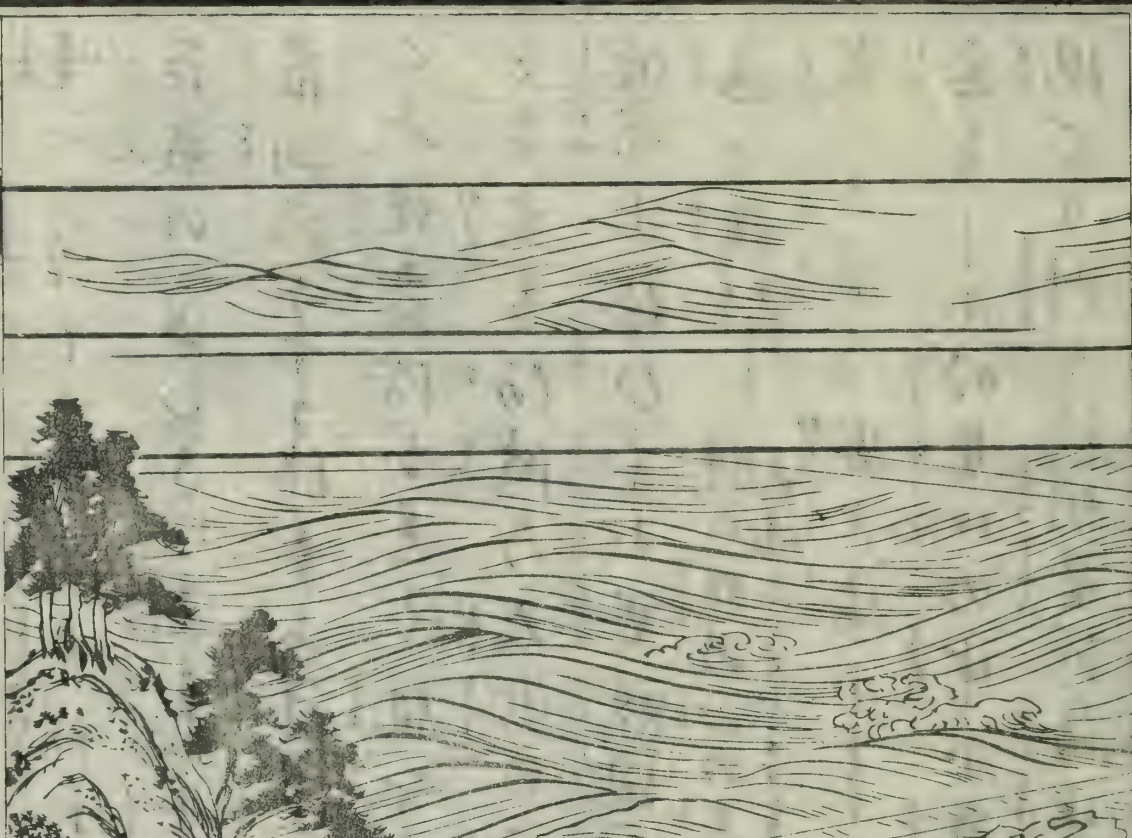


當於十師を卒して羯磨教授なし比丘の具足戒を
受給ふ此より御名を空海と改らる志うひけしより
志のゝ戒珠を胸乃間にかゝやかし徳瓶を掌乃中
り携ふ油鉢またもらさゞるかごとく浮嚢惜てあらまで
事なし大師御筆の牒書ひいつるまで今にいる
まで登壇受戒の模範と仰なり
大師弱冠の時のかゝ囂塵をいとひて勝を落し緇
林にまじハりて色を壊せしより此ことゝしるへに
人事をなげうちて世の煩をのがれ常に幽閑をもとめ
かくして寂黙を心とし給ふ山より山に入峯より


聞持修行





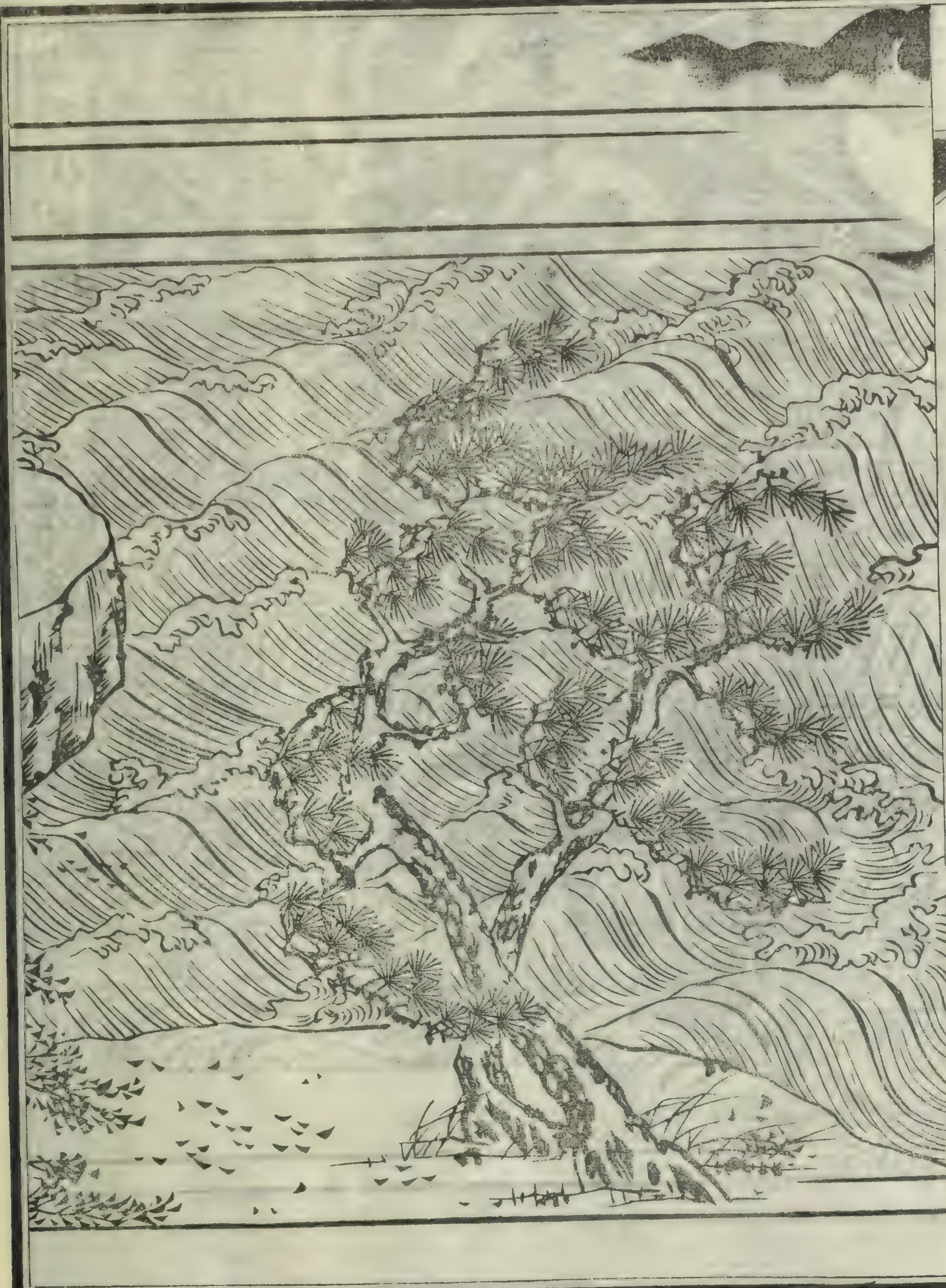


峰にいたりて練行年をおくり薫修日をかさね暁
苔巌のさびしきところには雲経行の跡をうづみ夜
蘿洞のうちにすめる那るには松風坐禅の窓をとぶ
らふ煙霞をなめて飢をしのげは獣馴て友
とせり或時は阿波の大瀧の嶽にのぼり虚空蔵の法を
修行し給ひしに宝剣壇上に飛来り菩薩の霊
應を顕はし件の剣彼山の不動の霊崛にとゞまれり
或は土佐の室戸崎にとゞまりて求聞持の法を観
念せしに明星口の中に散じ入て仏力の奇異を
現ぜり則かの明星を海中にむかひて吐出し給ひ

しに其光永ましづくく今にいたるまで闇夜に臨り
餘輝なほ粲然たり凡厳冬沍雲の寒夜に及ぶ
夜ときこて精を行道あるかし盛夏苦熱の暑き
日ハ穀漿を絶て懺悔の法を凝志ましますより
朝暮におこたらず歳月を積り行けり
室戸の崎は南海遥に見えわたりて高巖かゝり
ふもとそびへて遠くハ補陀落をのぞみ遥に鐵圍山
を限りとせり松を拂ふ嶺の嵐ハ旅人の夢を
やぶり苔をつたふ谷の水ハ隠士の耳を洗ふ村烟
渺々として水雲范々たり呉楚東南坼乾坤日夜浮

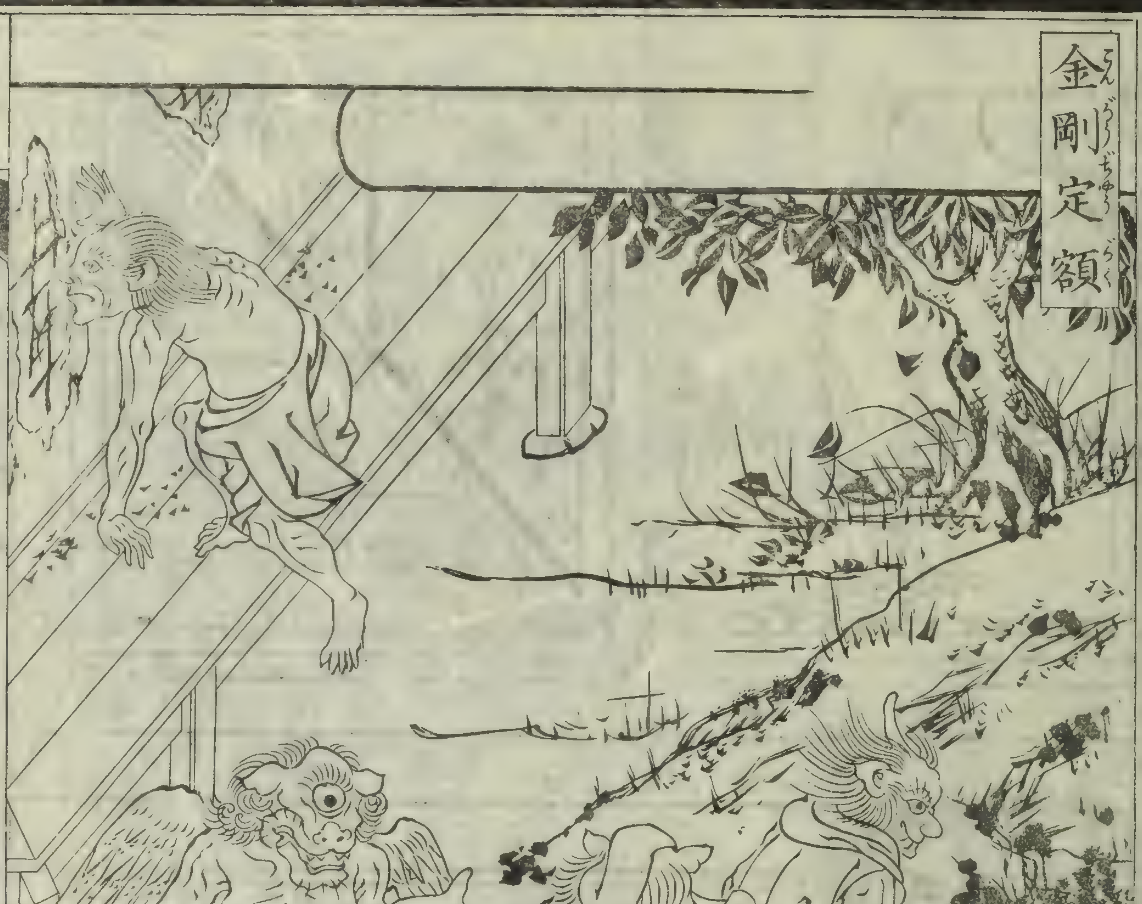
などいふ句もかゝる佳境にてやと思出られ侍べり
大師此砌歴覧し給ひしに修練相應の地形也
と思食てやがて此所にとゞまりて艸庵など結び
く行ひ給ひしに折ふし行く物ことにあられあり
なを我國詩風とく三十一字をつく清ば給ひ
あるとぞのや
法性のむろとゝきけどわがすめば
有為のなみかせよせぬ日そ那き
亦夜陰の暮むごとに海中より毒龍出現し
異類の形顕し来り行法を妨げんとす大師彼等に試


空戸伏龍

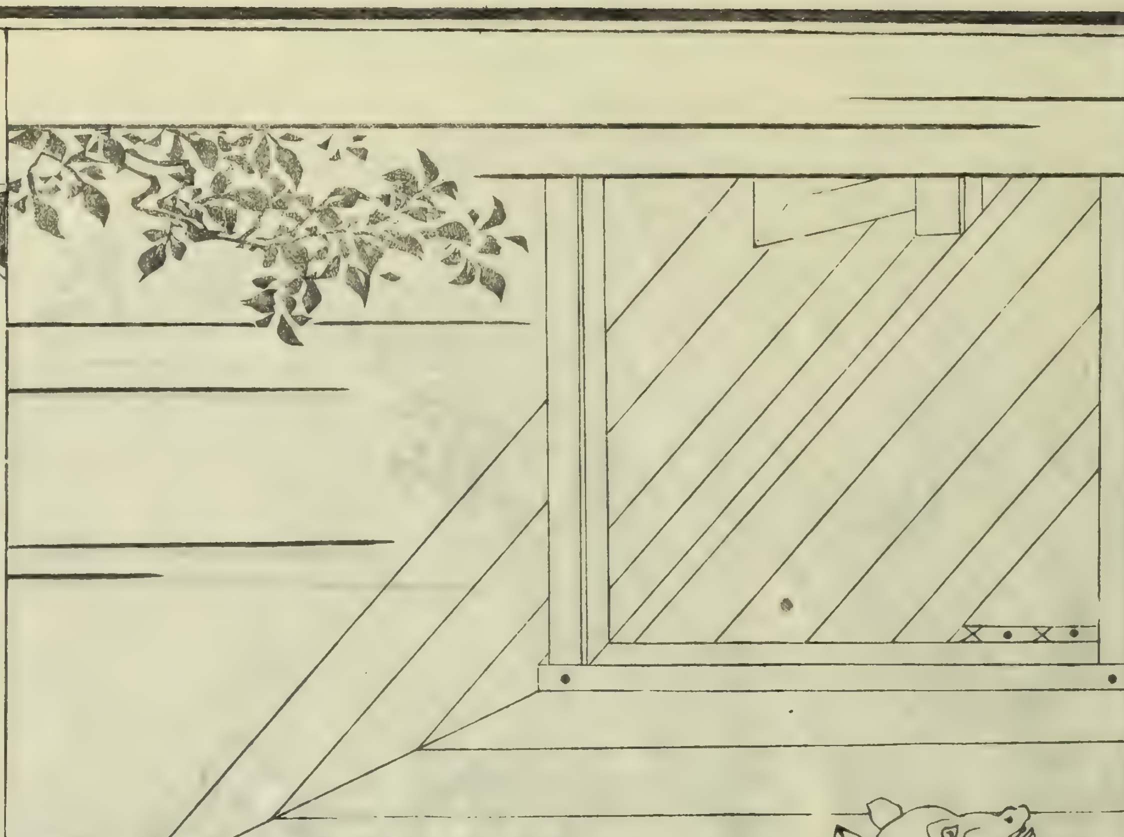


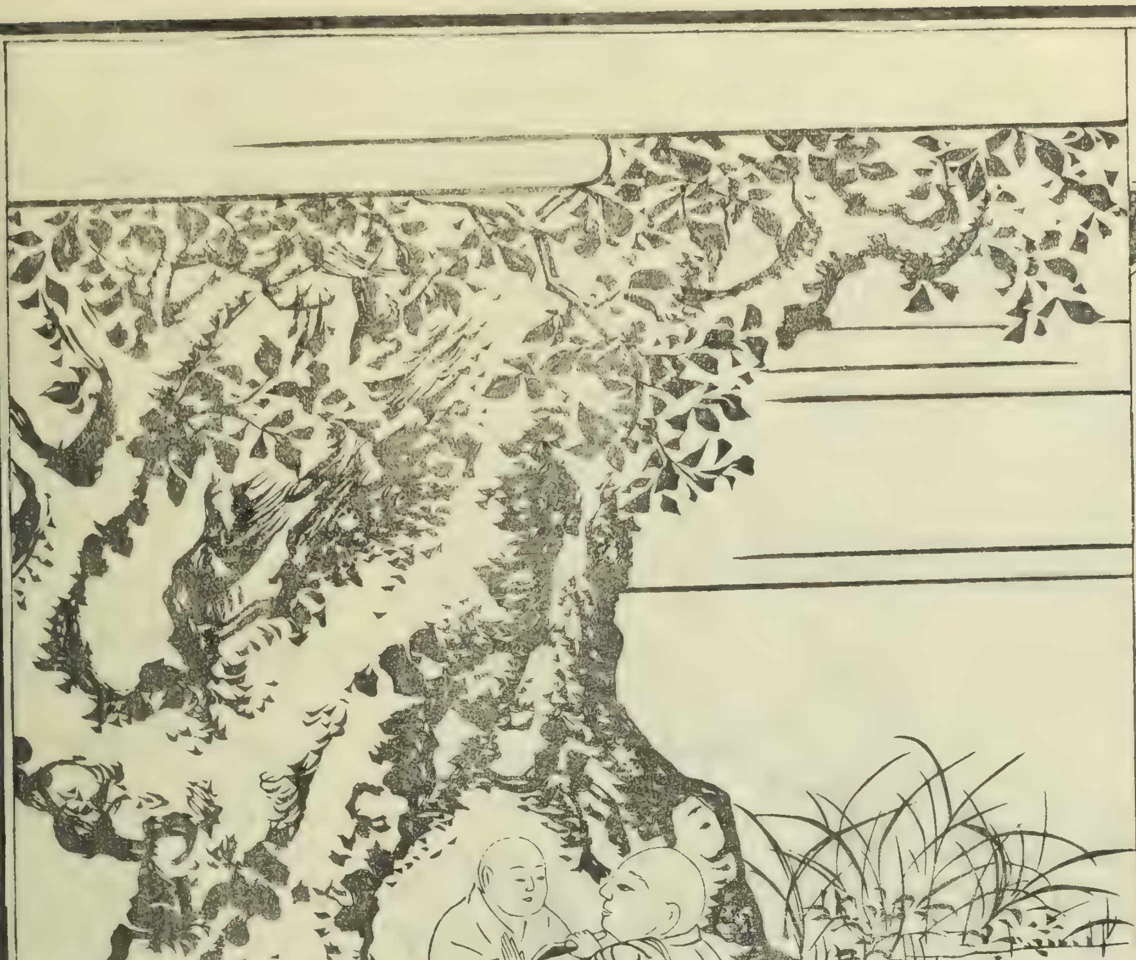


退んが為に急拝ありし呪語を唱へ唾を吐出し
給ふに四方よりかく風に散じく衆星は光を射が
如くなりしかば毒龍異類悉くに退散せりその
唾のかゝる所永く海濱の沙石にとゞまりて
夜光の珠のごとくして昏衢を照らしむ無
室戸の崎のおもてに三十有余町をはりて跳
地有り太師雲師の役につきて岬巌にかまへし
となし常に此砌にすゑ給ひしより宿願を果
さんが為に一の伽藍をたてられ額を金剛定寺と
名付給へりその所に魔縁競ひ發く種々あり


金剛定額







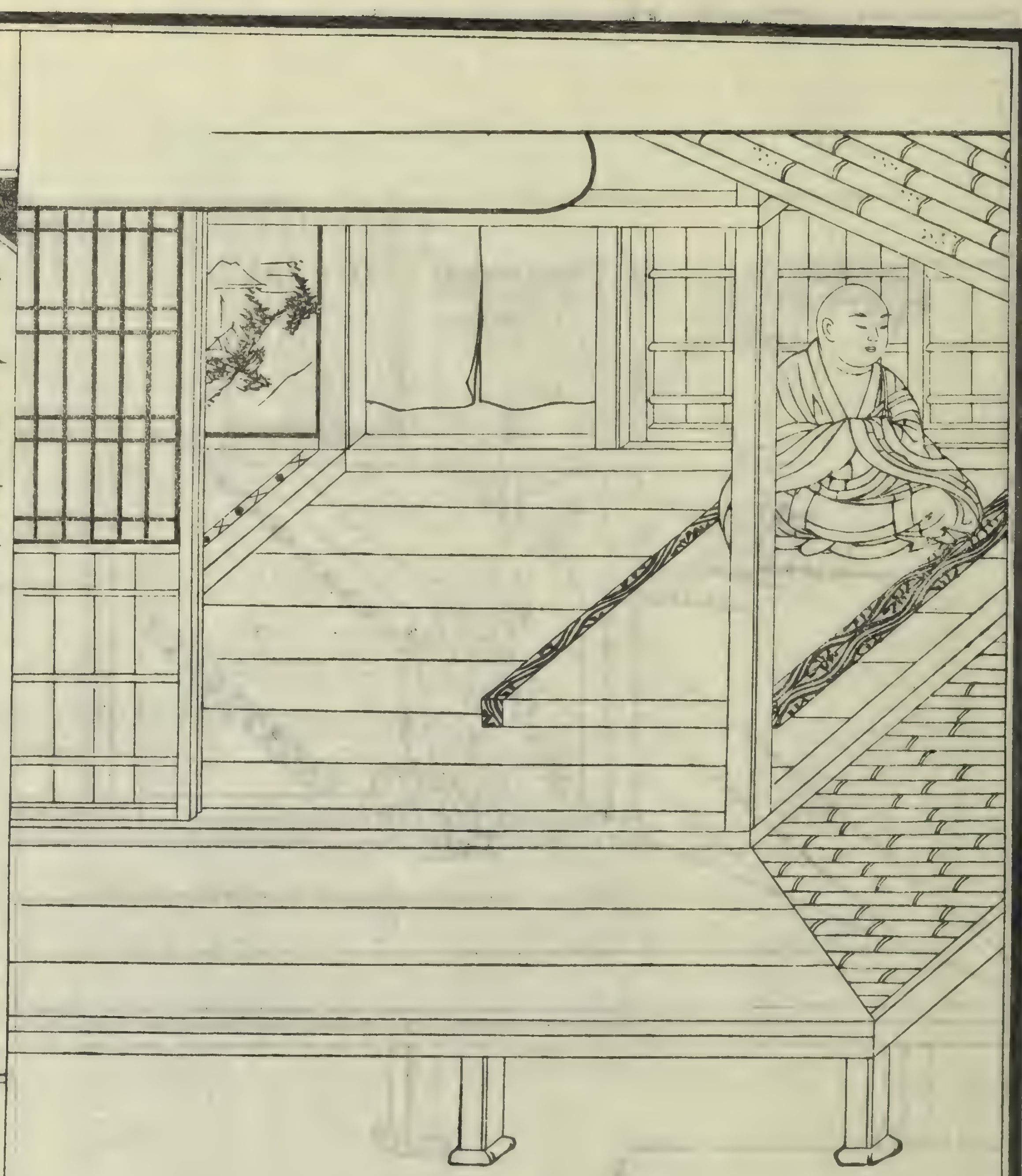
障碍をなしけるを大師則結界し給ひて悪魔
をさまたげ、御臨幸あり我宮にいつかしむかぎりは
汝等の勅を望むべからずと仰られて大なる楠
木に洞ありけるにかくし給を継り給ひしかバ其後
永く魔類競ふ事なかりけり楠を祭ん
枝茂げ繁茂して末の世までつたへけるが其
悪魔を同国波多の郡足摺の濱に追遣らる
しとぞ傳へたり昔釈尊月氏の毒龍を降し給ひ
真影を窟内にうつしく隠顕の奇異を示し今
大師当州の悪魔を戒めり挙げて影像を樹下に残

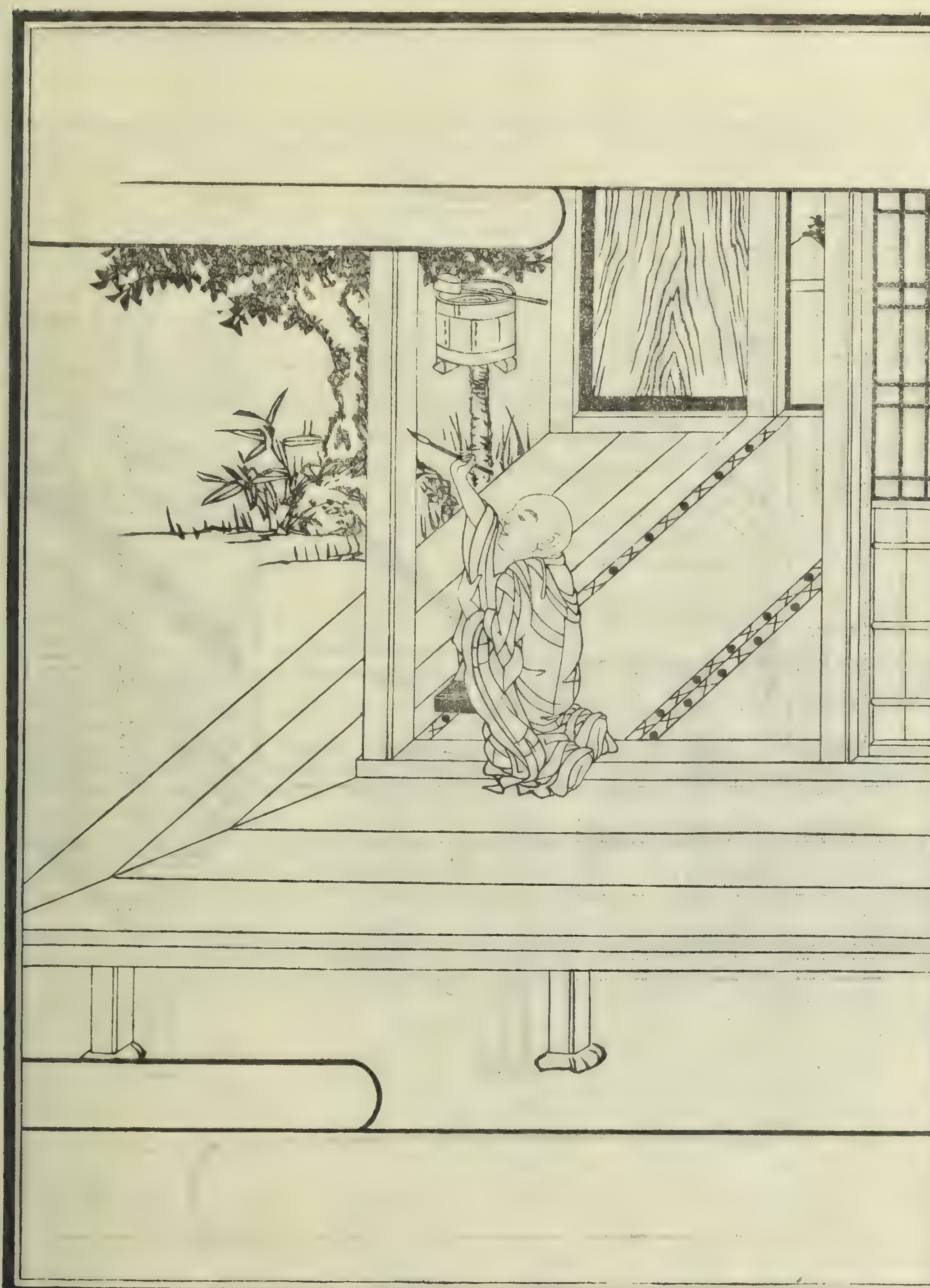
して古今に勝利をほどこし給ふなんぞ佛陀の奇特をあやしまむ又祖師の威徳にことならむとも無きありけるとや

播磨国印南路のほとりに隘廬あり太師修行の次ふ旅宿し給ひけるに老嫗壱人出来て纖鉢に飯盛て太師を供養し奉り則由緒をのべて申さく妾えとはもと行基菩薩の御弟子にて侍るが僧出家をとげし時の妻女なり彼僧の遺言に我入滅の後其月日菩薩来て汝が室に着し給ふ無しとのへり指をおりて日をかぞへけり今日


老嫗捧鉢



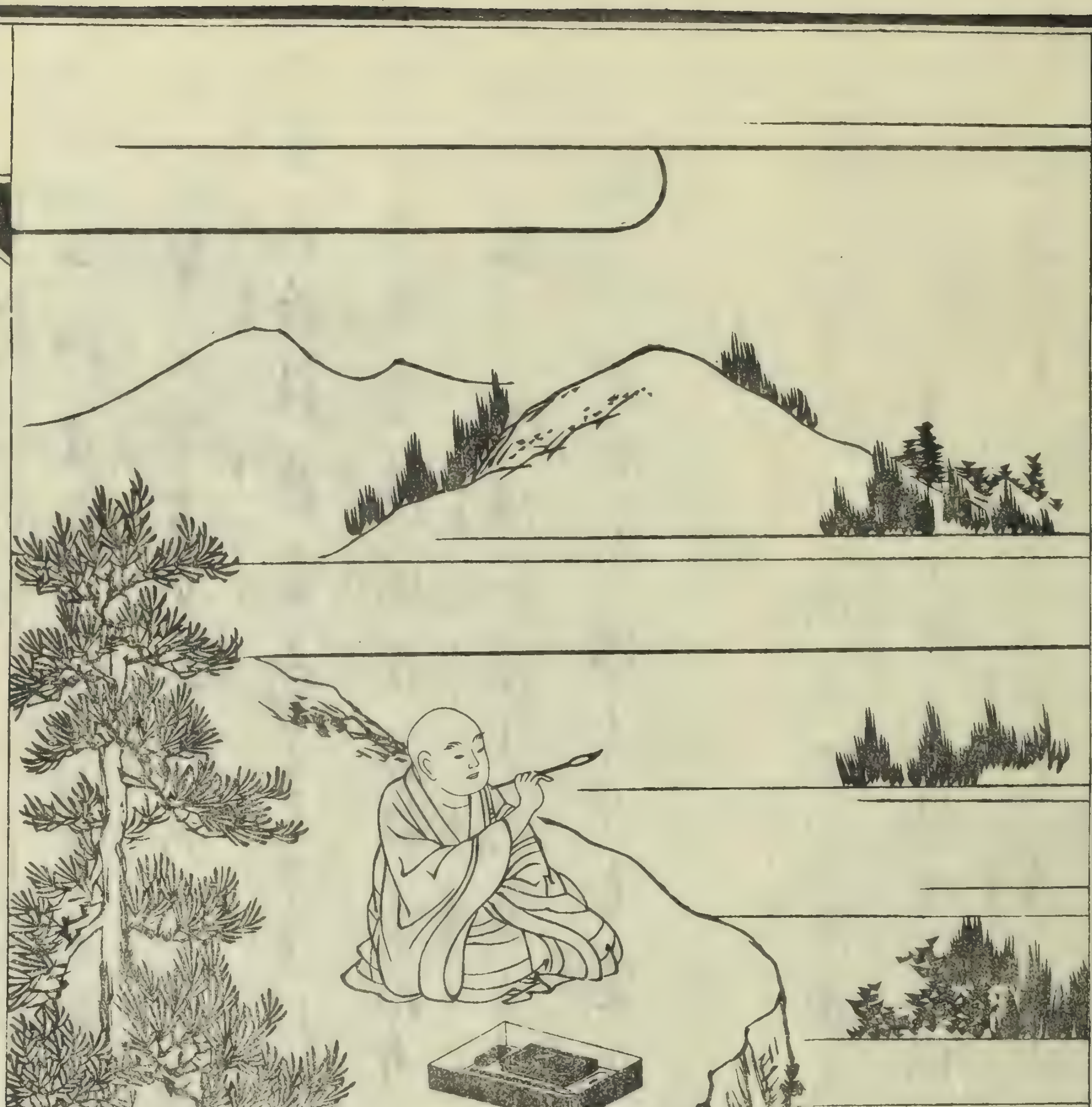




まで醍醐にゐてまつり身いやしといへども忽ち
菩薩に逢奉りし幸甚しきなり随喜の
心を表して此鉢を奉るなりと申き大師此
いなりと出させ給ひしに老嫗が為に天地合の
三字を椎に書付給ひしかバ其字ふかく染く
されバ今づるによなほ存坊当時氣瘧病に掛ち
さまるもののみづにすゝぎ是を呑に病うすらぎ清
除しけりとかや
伊豆の国桂谷の修禅寺も大師經行の勝地降臨
修錬の霊跡なりしかれバかゝる魔障のさハり



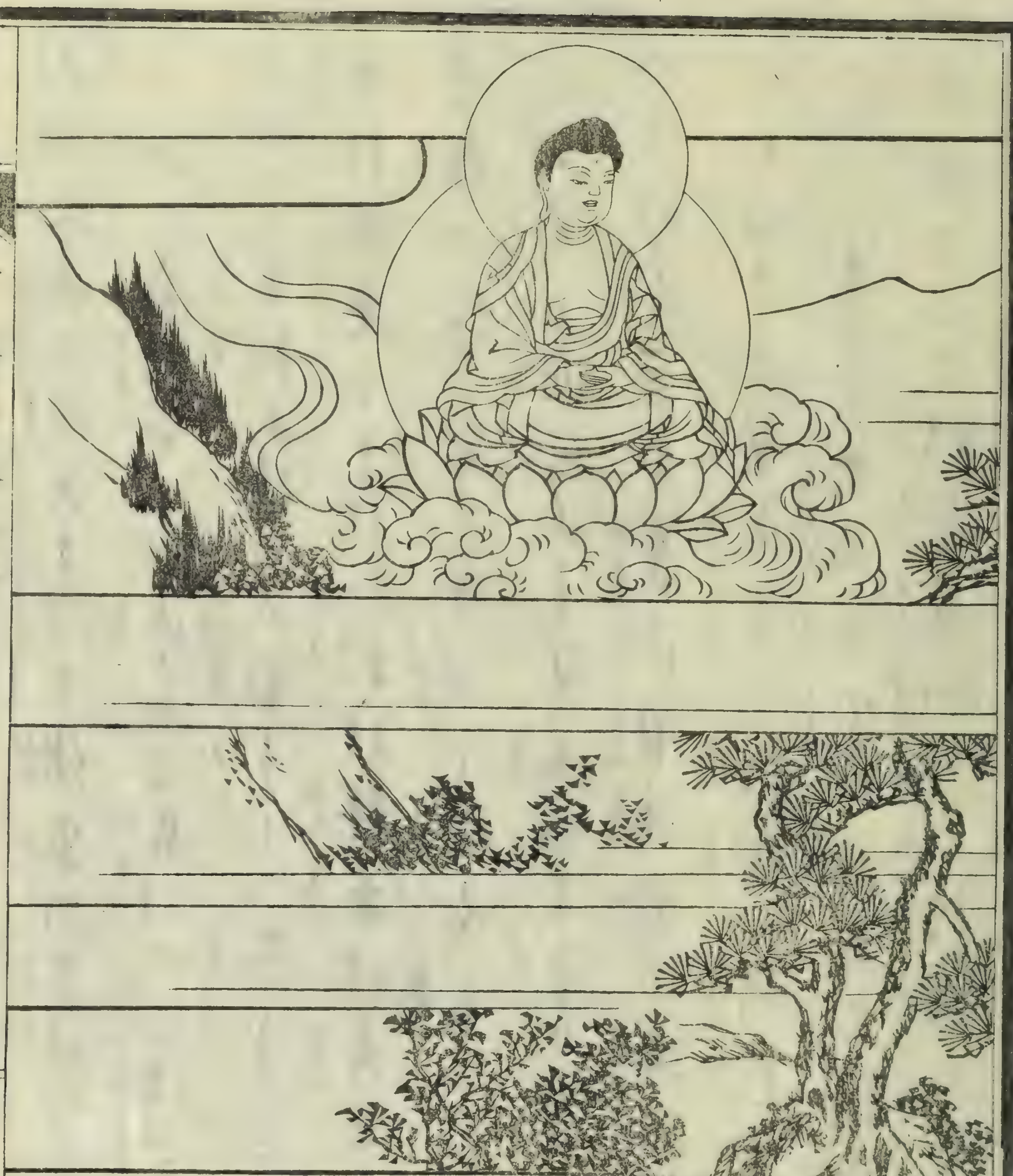
虚空書寫



多けれバ大師虚空に向ひて大般若乃魔事品
読く揚給ひけるに経乃文字忽に顕現して
六書八體に點畫みだれざりければ其後ハ魔縁
ながく絶て佛法稍弘まりけり大師此にま
しまし杲隣大徳と相共に造り給へる
尊像今に世に傳ありて霊験あらたなり
傳るとかや
大師誕生は地讃岐の國屏風が浦と岩木乃
姿もさながら丹青に綵給ひしごとく屏風
と云るに似たる故に屏風の浦と名づけ

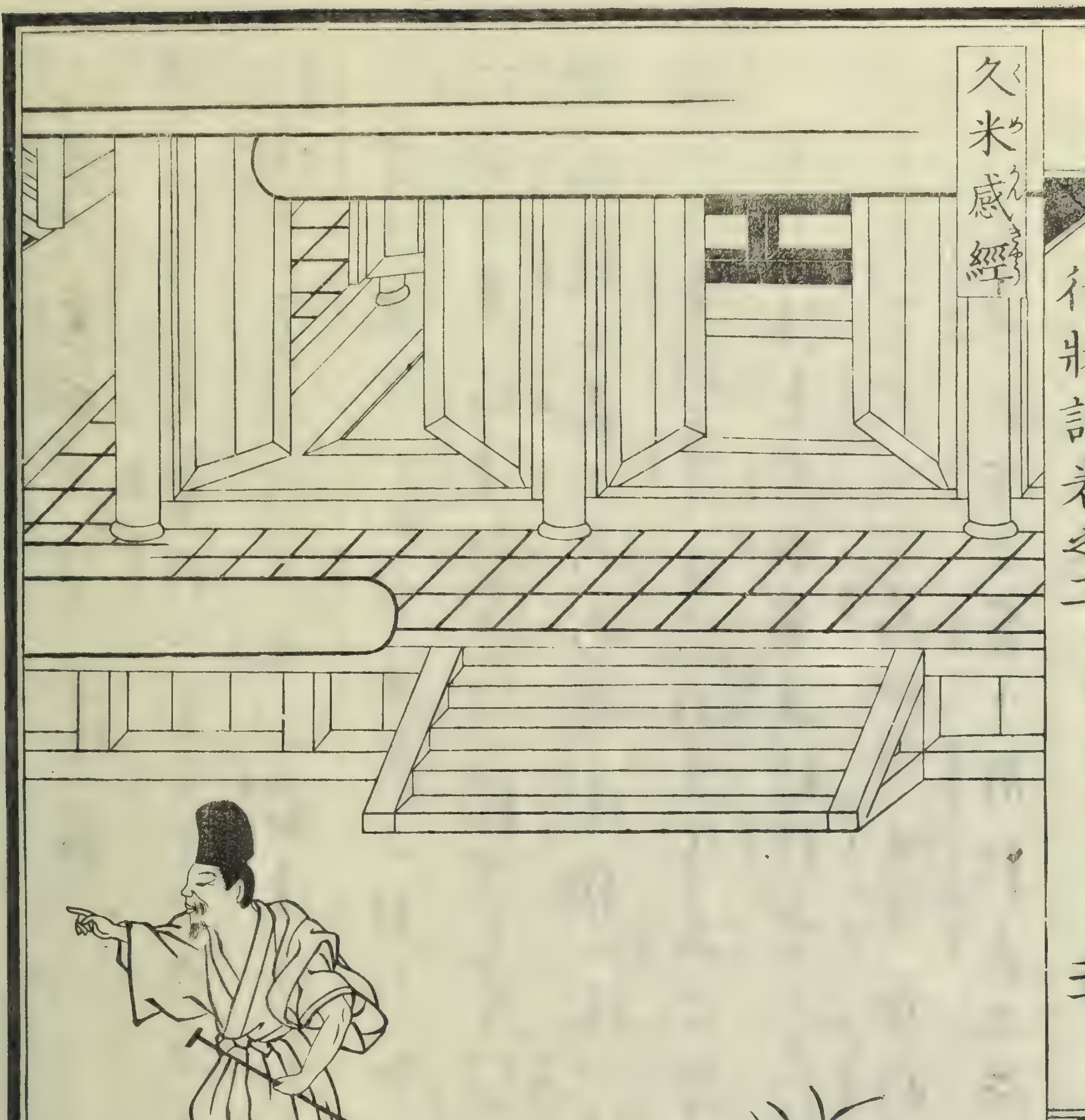
なり大師まさしくおはする坊舎をまうけひしに
孤峯の上に祥雲の中に釋迦如来安祥として
形を現じ給ひき大師歓喜の余りにそゞろに
其の有様をとらへしにおのづから絶えて彼所に
おはす坊絵へり其後より此山を我拝師山とも
號し又は湧出の嶽とも名づけ奉りて凡佛法
を渡らし神感に應ぜし然天魔を降し人民
を教すまず給ふあと呉江乃松よりも志げく
楚嶺の竹よりも多し縷陳にいとまなくも
擧盡しがたし


釋迦湧現

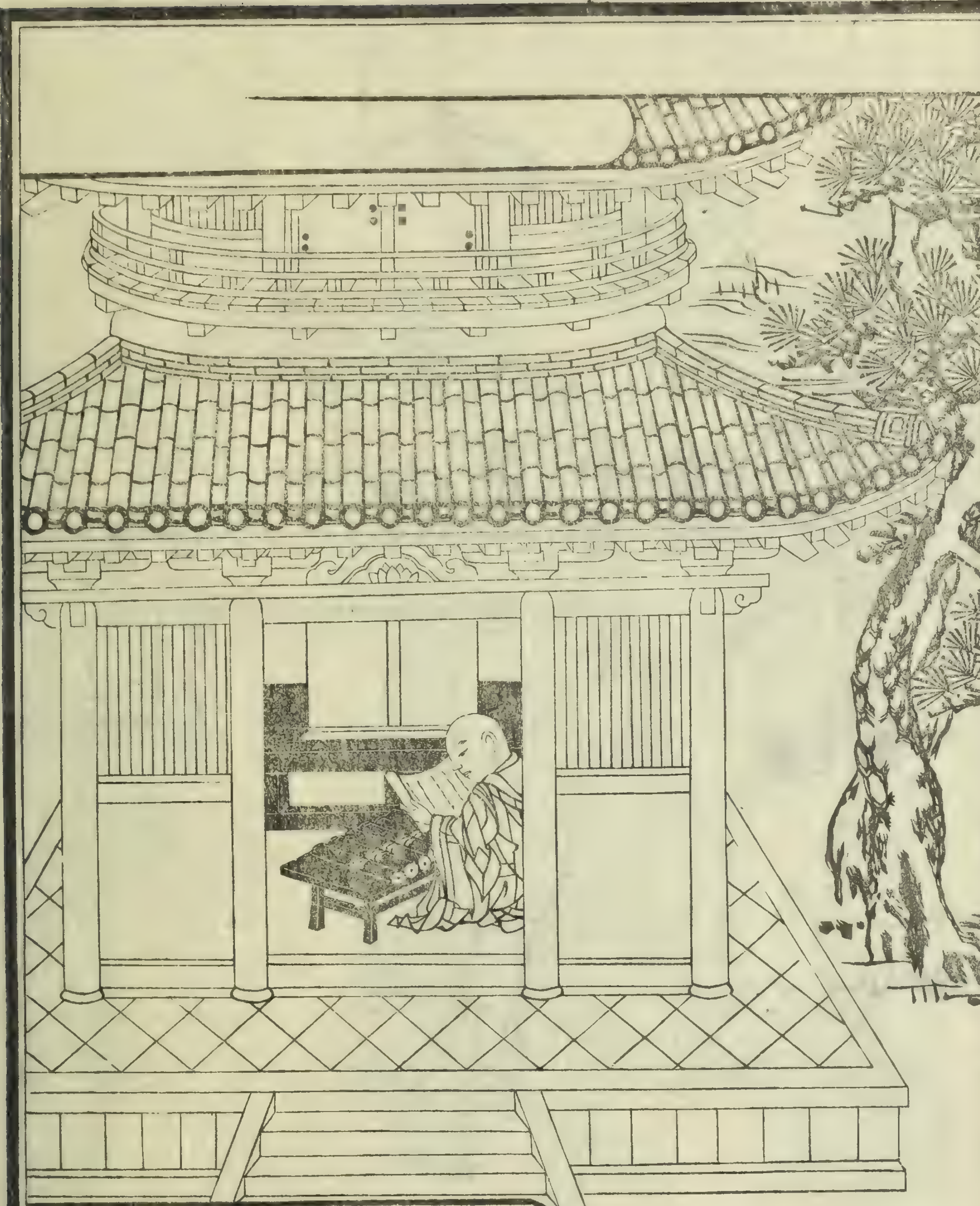


大師進具の後あまねく諸宗の名徳に尋ね廣く
法海の要津をとふ中にも岩渕の贈僧正勤操は
大安寺善議大徳の入室として久しく三論の奥
賾を極めたまへり一頭群英に秀たり大師
童稚のはじめより席を避て旨をうけ丈を
遜く端を問給ふこと寸陰おこたりなく寝食
やすき事なし龍樹提婆の遺教を精練
しかのみならず毘曇成実の法相を研覈し給へり
しかはあれども空論有宗の遮旨三諦十玄乃
妙義かけられ蜃楼幻化の道宮にして鵝王

真実ならバ宝亦あらざるにや
仏前にして誓願をおこしてのたまはく我
仏法に志ふかく常に要法経をよむなり
三宗を兼十二部経心神に疑ひありていまだ
決する事あたはずたゞ願がはくハ三世十方の
諸仏我に不二法を示し給へと一心に祈請し
給ふに夢の中に人ありて告ていはく爰に
経ましませ大毘盧遮那経といふ是則汝
がもとむる所なり大和の国高市郡久米乃道
場の東塔の下に有と即歓喜のおもひをなし


久米感經





彼所に尋る所件の経誠のと見えて一部緘をとくれ
由に疑ひなくこれる所有難経よ　本朝にしてとし
遂べき人なし是よりて始て渡海求法の
御志をおこさせまし給き
此経らは所におさまれる由来を尋まほしく
中天竺は三蔵善無畏和尚の密機の熟生と
あり源にて秘教の行蔵を知らむが為に一葉
の舟を浮く万里の浪をわたりきたるうに大唐
を辞して親見　本朝に来給ひ一時高市郡
王舎のほとりに庵して一字の寶龕を起立きり

今は東塔院といへる寺あり土俗にて空宥乳
蘇の法味を好し別氏いまだ秘密甘露乃妙薬
を背ざりしによりて三藏むかし大唐より
うけ来りて三粒の佛舎利を寶塔の底に納め
七軸の大日經を刹柱の下にしづめられ記文を
残していはく駄都はこれ釈尊の遺身經王は
まさに遮那の全躰なりしかれども小國邊域
大機いまだ熟せざるによりて此法を此地にとゞめ
まさに人をまちて時を期する所なり来葉必
弘法利生の菩薩来りて世にひろむべしと記し

給ひし震旦國に渡り給ひたるよしなむ機寺乃流起に見えたり

弘法大師行狀記巻之二終

弘法大師行状記

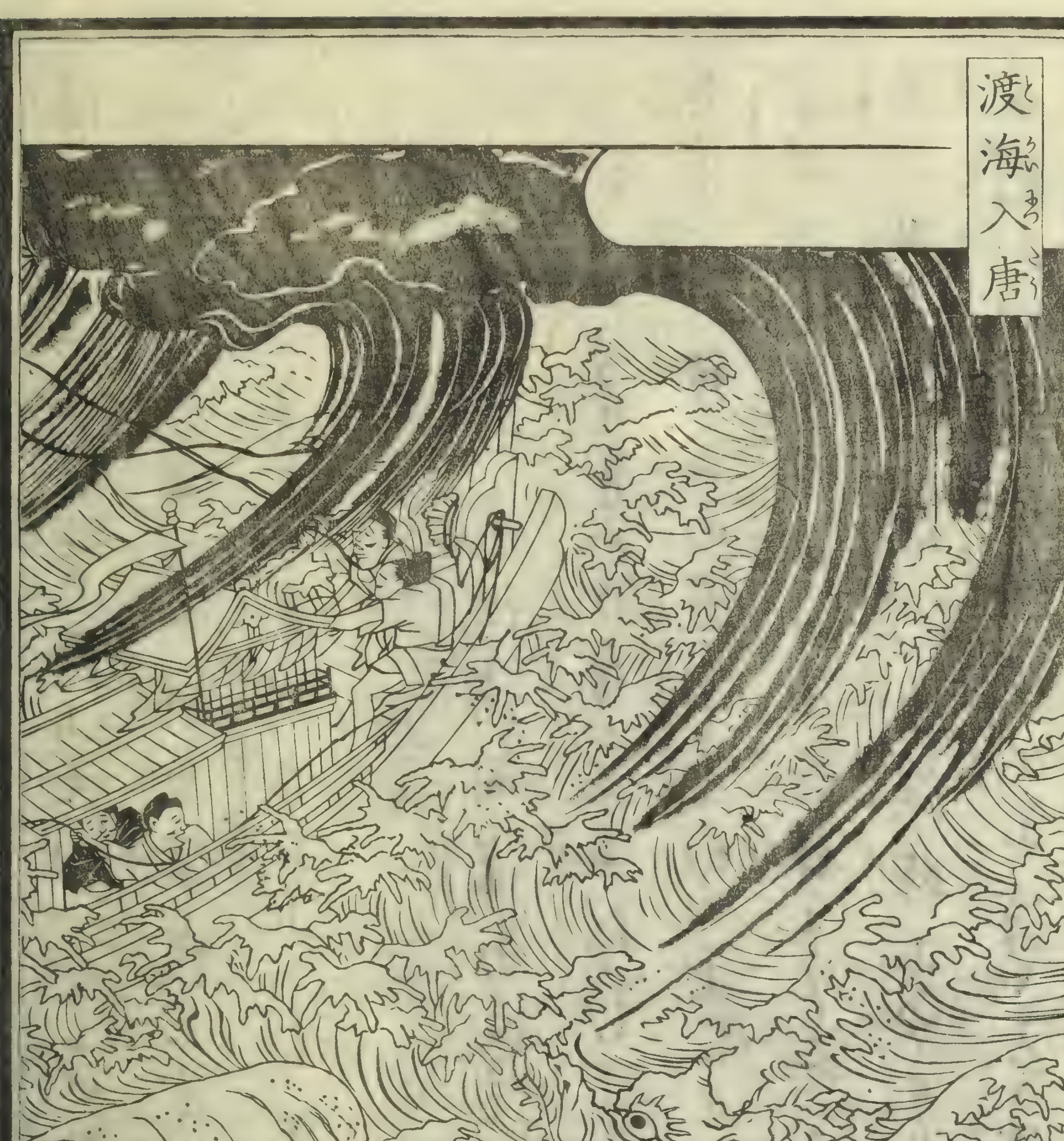
水

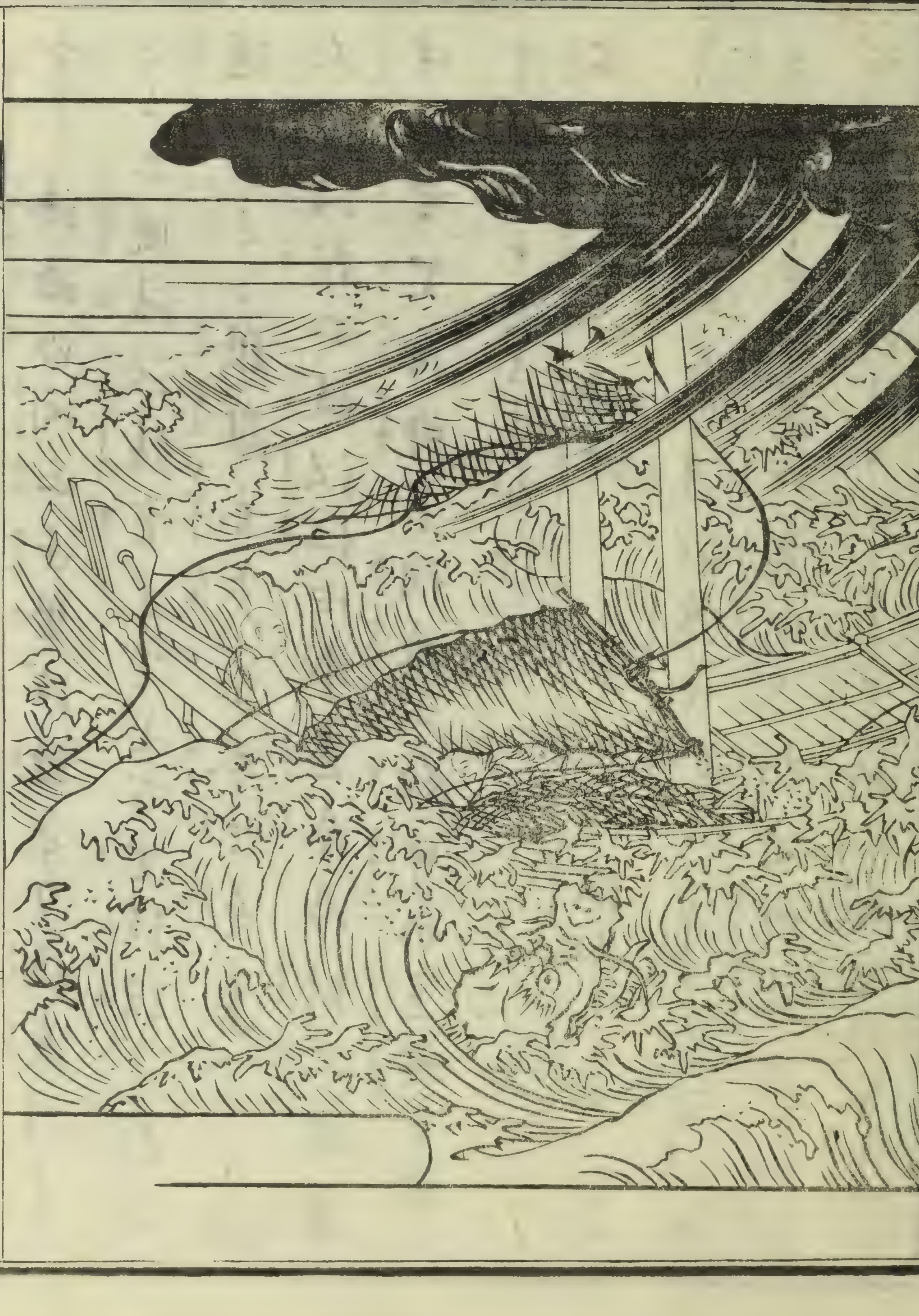
弘法大師行状記巻之三

大師のおもはく性靈我とともに発して還源を思ふに運路いまだ志らず岐にのぞみて幾たびか泣く精感ありて此秘門を得たり文にのぞみて心くらし赤縣におもむかんことをねがふ人の願ひ天これにしたがひて大唐に入ことを得たまへり給ふに桓武天皇の御宇延暦廿三年五月十二日大師御年三十一にして留学の勅命を承りて入唐乃宿志をとげ給ふ大使

正三位藤原賀能卿とて是に肥前国松浦の郡
より第一の舟に乗じて纜を解て発
せり巨舶は浮て東にかへりみれば一点の島嶼
のぞみ給ふ中にきらん片帆は飛して西に行も
むれば万頃の烟波眼は前に極まる棄梓
はるひ無ぐりね後会は秋の月に契り行李
はとをばし前途は暁の雲にまかす勢なり
まつに飄風俄に起て漲雨くもにはげしき
洪波忽に激て容舩まさにくつがへさんとせし
かば或は故郷に向ひて鷗鷺の盟空なりけむ

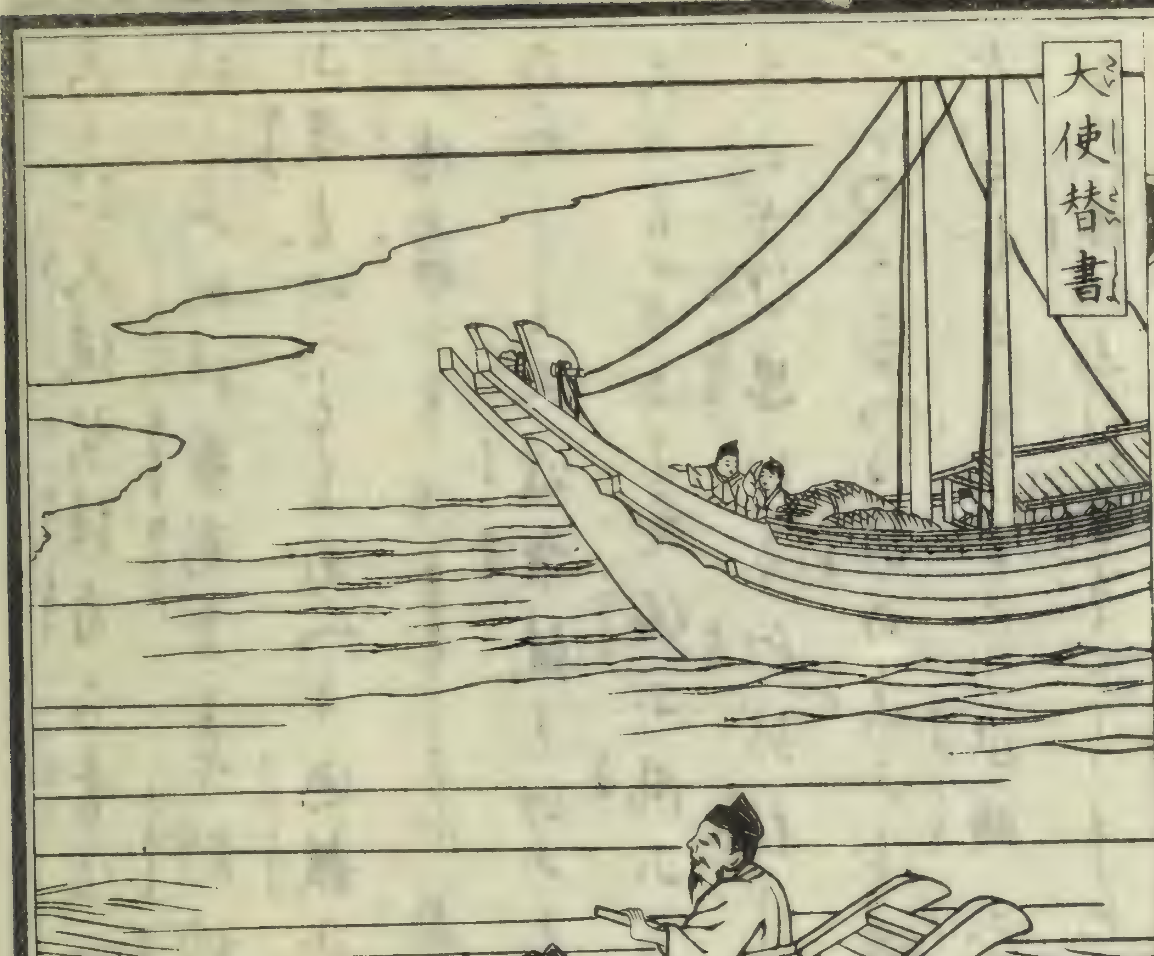
事を歎き或ハ巨海にしづみて魚鼈乃腹に
ほうむらるゝを悲む大師も冥護にもらさざる素
願のあげがきき事を以て今より一百八十
七所に天神地祇を祈念し給ひ金剛般若
経を文読しつゝ諷読回議ありて神おとり
法施しまつる無き肩をむごろり誓約
有しうバ鐘谷の感空しからずして氷月は應
忽にあらはれ風やみ浪静まりて八月上旬の
末に相むすびて福州長溪県にいたりたまへ
先例入朝の船揚蘇州に着きて漂蕩乃愁


渡海入唐



なし海路の間三千里を經より此度はから
ざるに風波の障有て七百里を増し嶺南
道にいたる艱難數多し挙て数ふべからず
大師歸朝の後弘仁四年孟冬乃比大使藤
中納言賀能卿と相共に船中の立願を果し
とげられたるとなむ
雲の濤煙乃波漫々として大洋際なし空しく
とも日をおくり月を迎て行々として福州の
岸に着ぬるの比當州乃刺史柳冕庵侯是
て任職を辞するにより新に観察使をかはる

さらに大使賀能自ら書状をくりて州の司に
いたしに州の長官きゝて則地よるかたゞの両三度
に及といへどもあへて返報に接ハずそ其故ハ此
船揚蘇へをはりぞして福州に到りまねる状
あやしミ又遣唐使といへるしかれども見
えざりけるにや偏に風にたゞよひきたるかと
うたがひ思ひて船を封じ人をおろし濱
づてのうるへる砂の上にあらしめ又よひのまゝに
なやむる事かぎりなし此時大使大師にかたく
其の悲へあはれびしまねかるべき謀を失ふ


大使替書





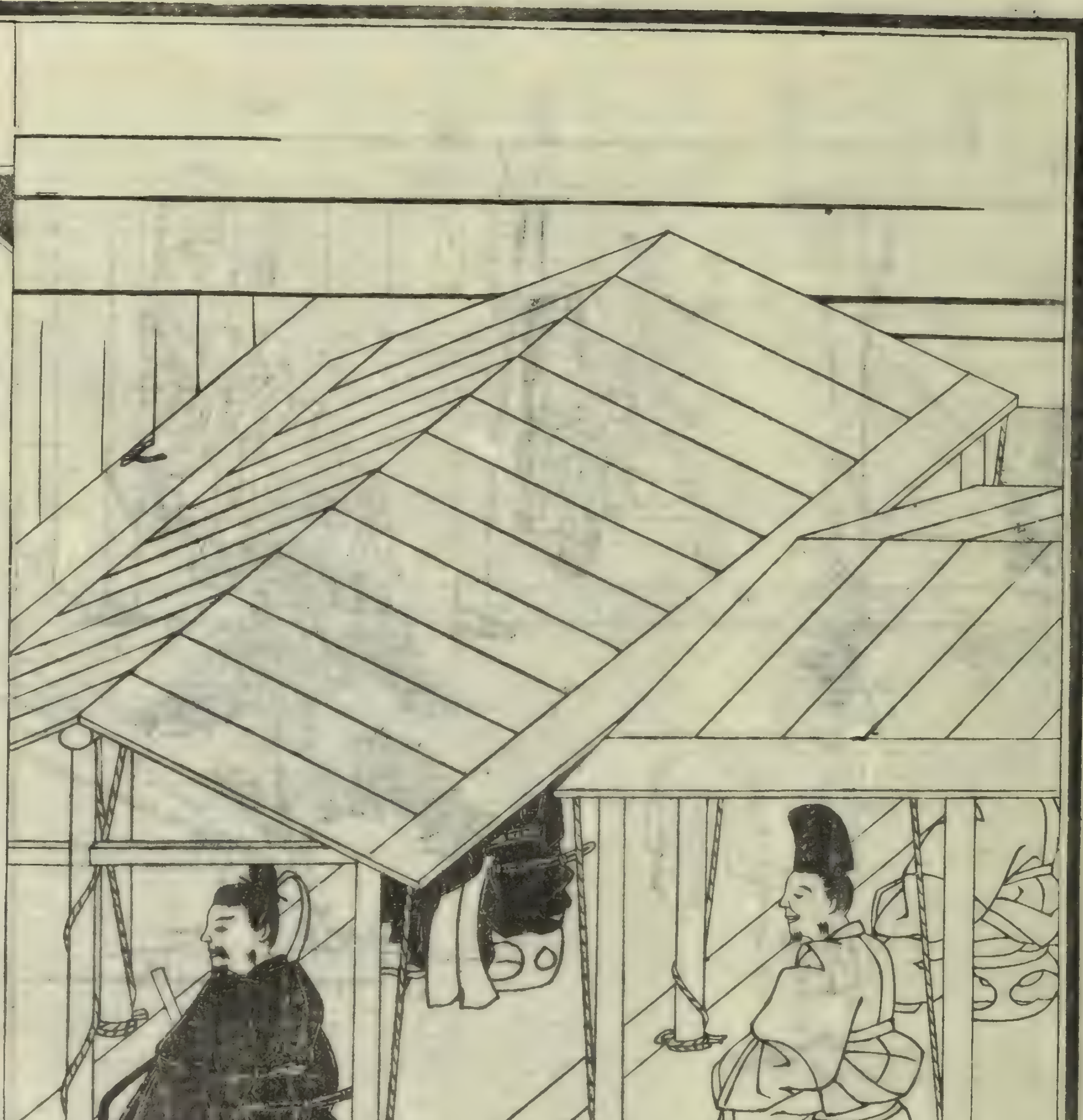




大徳は文業の重なり頽たる書を顕し給へと
あつま大師書を継てく大使は習りて州乃長
まよへ州の長様書を開き見て咲をふくみ甚
哉ゆるしてさまざまにいたはりとぶらふ事限な
かりつゝき

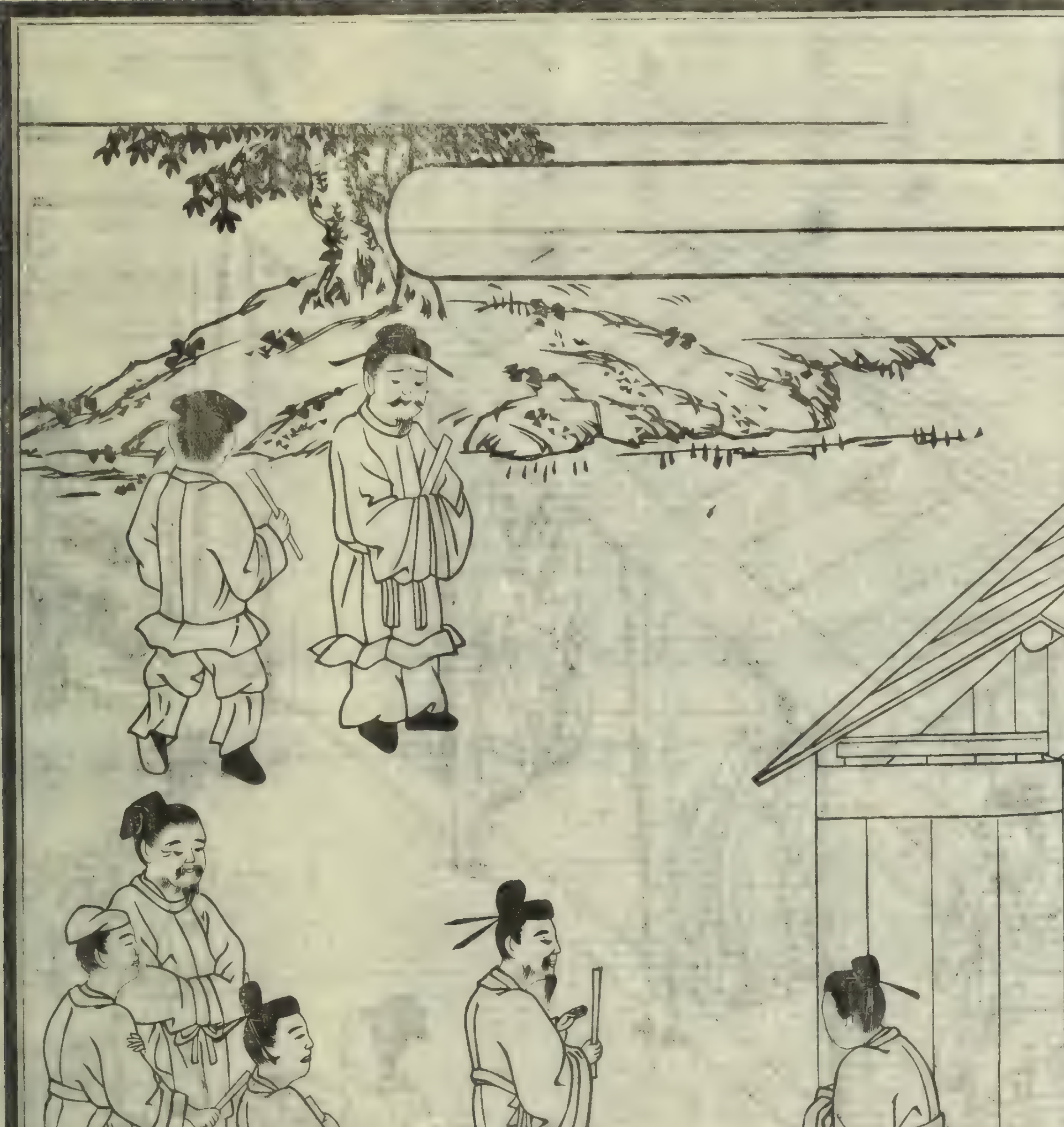
十月日大師すなはち行て都に入む事哉のぞむ
よし州書を継りて州の観察使すなはち則
長安に奏せしは廿九日を歴く州府の力使
四人を給はりて且資粮を送まり州長ましみ
をなしてねんごろは問ふてまつる文借屋十三


長安奏聞

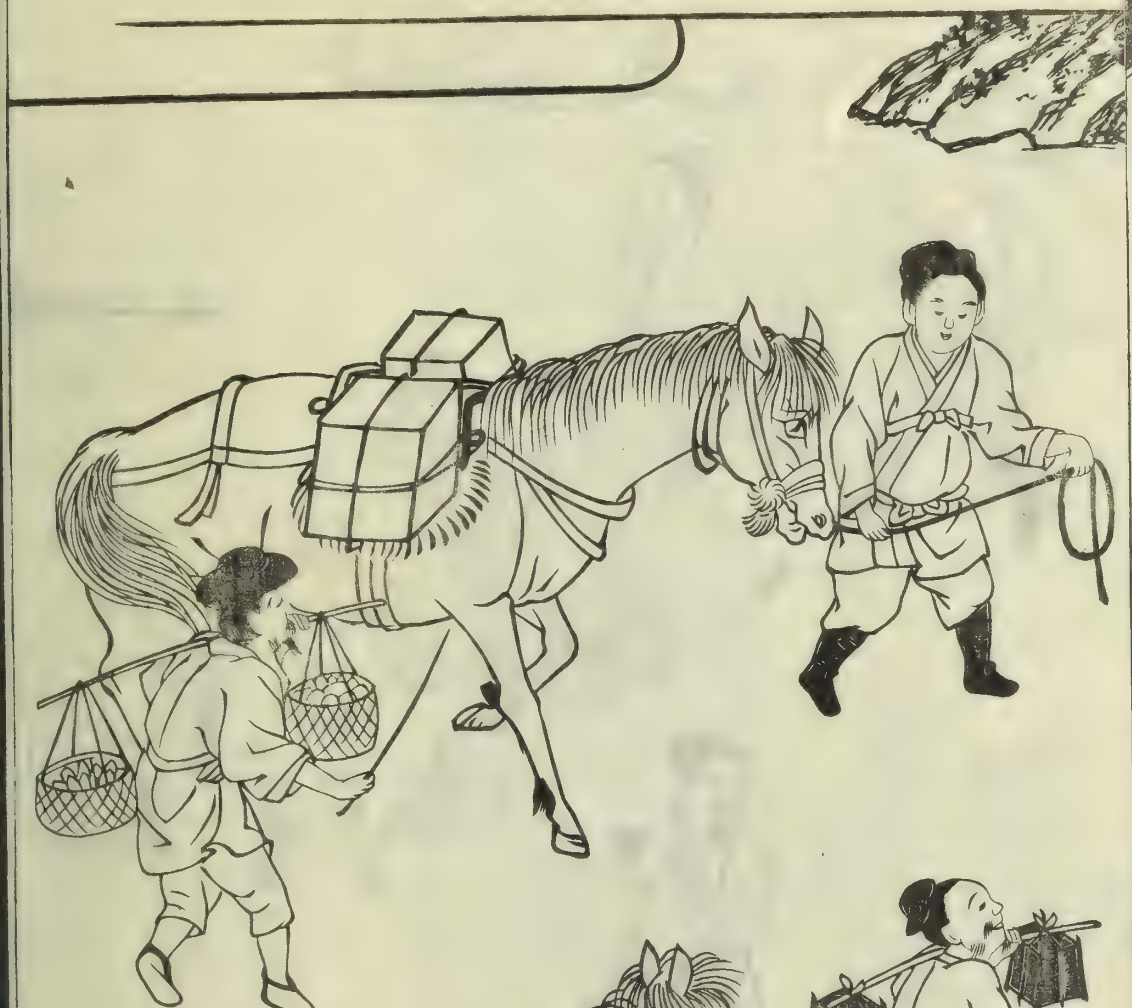








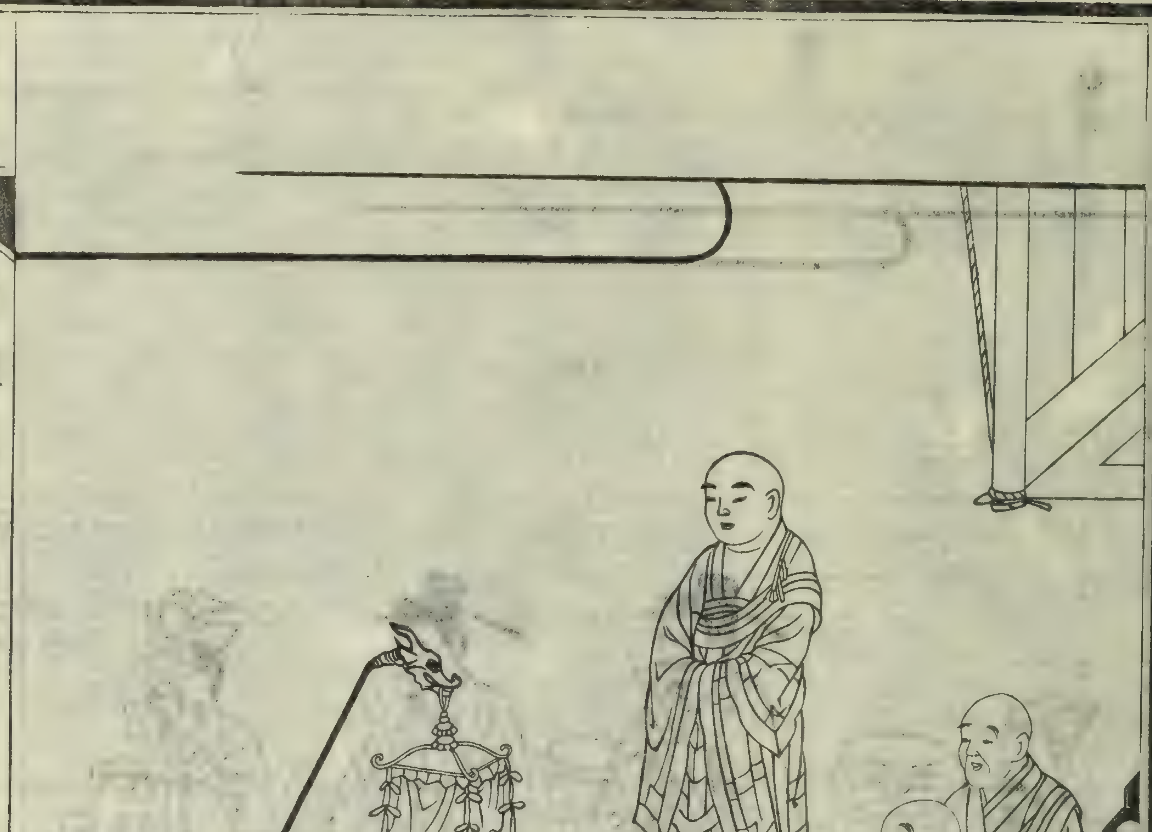




綱と作りて大使並に大師をも急ぎ奉らしむ世
其後凡十八ヶ日経て存問の勅使を遣はさるる
其儀式尤もおごそかにして是を見る主客
濃をなぐしれ又作客の使をさして七珍の鞍を
おいて大使並に大師を迎ふる沢々の使どもよ
皆かざれる鞍を給ふ入京は轎に紅畫を飾り
らざる一時の壮観千載の美談なり並て見る
その堵をなし集る人市をなし十二月
下旬より長安城に入りて宣陽坊の官宅に居し
給ひけり



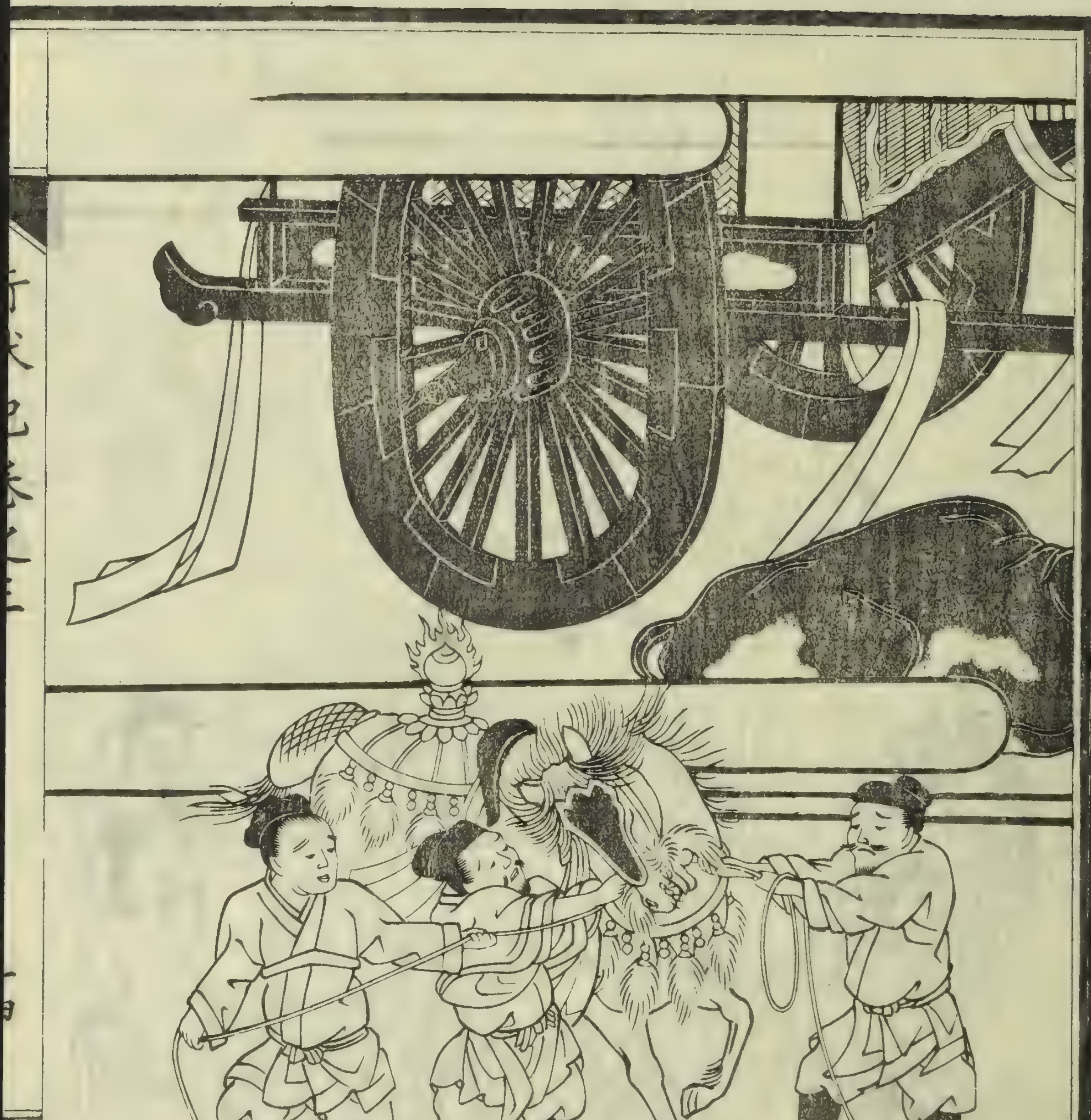
存問勅使（そんもんちよくし）





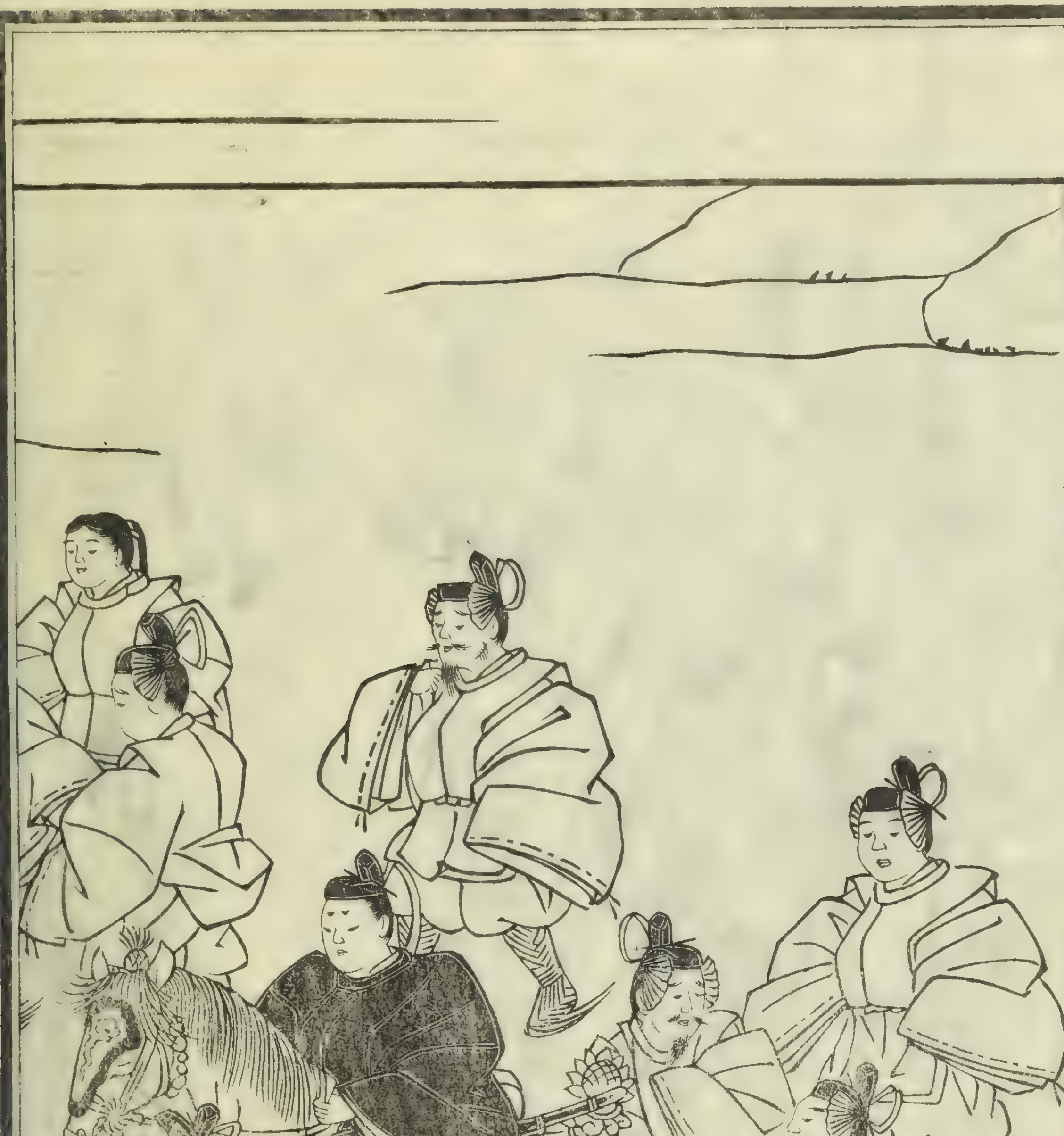






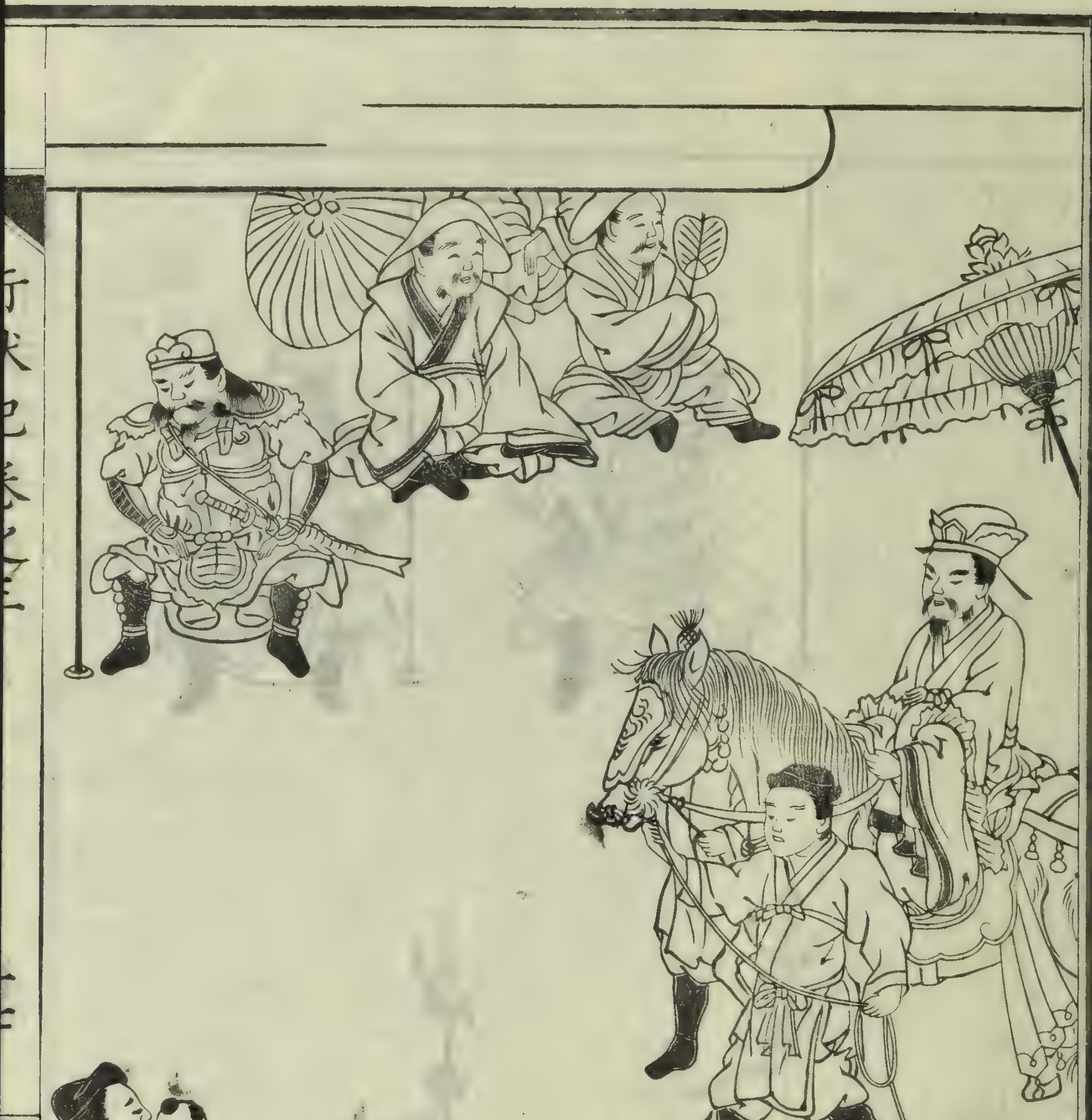




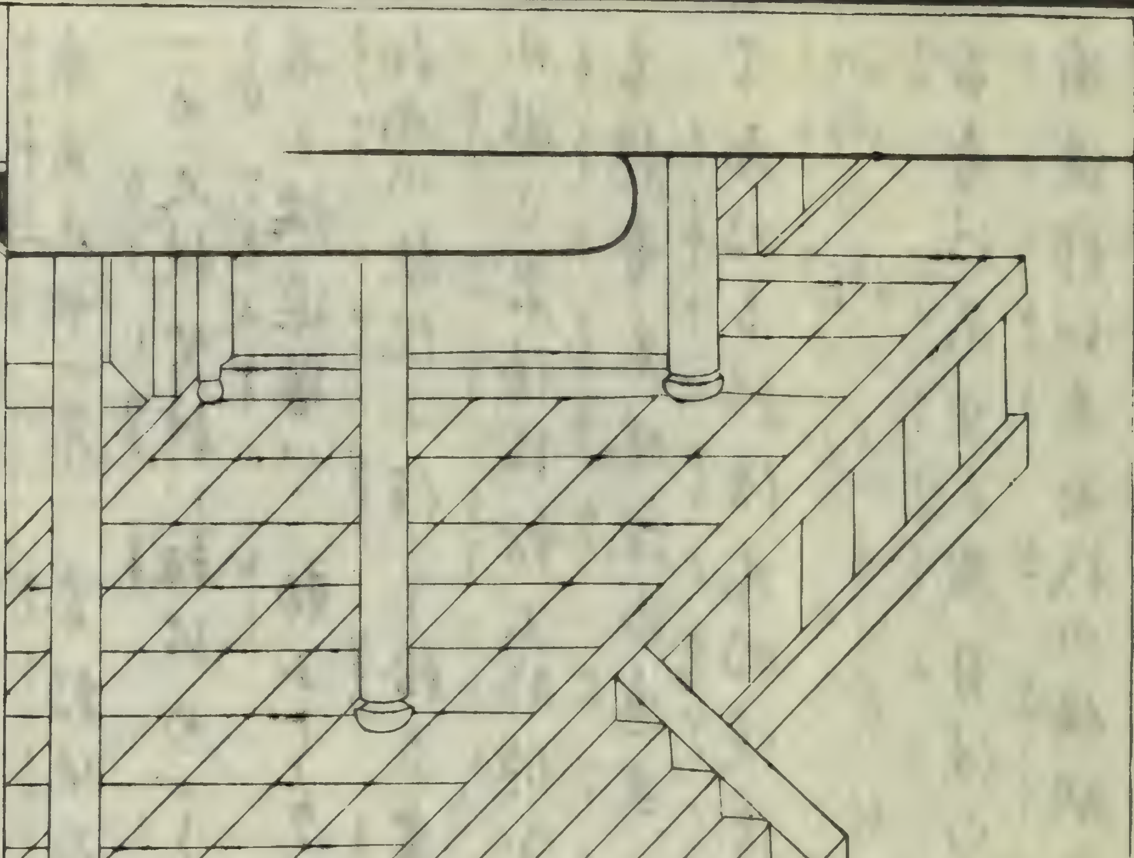












唐貞元廿一年　本朝延暦廿四年乙酉二月十
一日大使賀能ハ勅をかうむりて帰朝し大師
并に橘逸勢ハ　勅によりて留学を西明寺永忠
和尚の故院に住し給ふ寔に城中を巡て諸寺
に遊び名徳を訪ふ師依をもとめ給ふに長安
青龍寺東塔院の恵果和尚の御事を伝きゝ
て西明寺の僧志明談勝等五六人と相共に
和尚の御もとへまうで給へり彼和尚ハ則大興
善寺の不空三蔵付法の上足真言大祖大毗
盧遮那如来七代の嫡嗣なり徳ハ惟時の尊くて

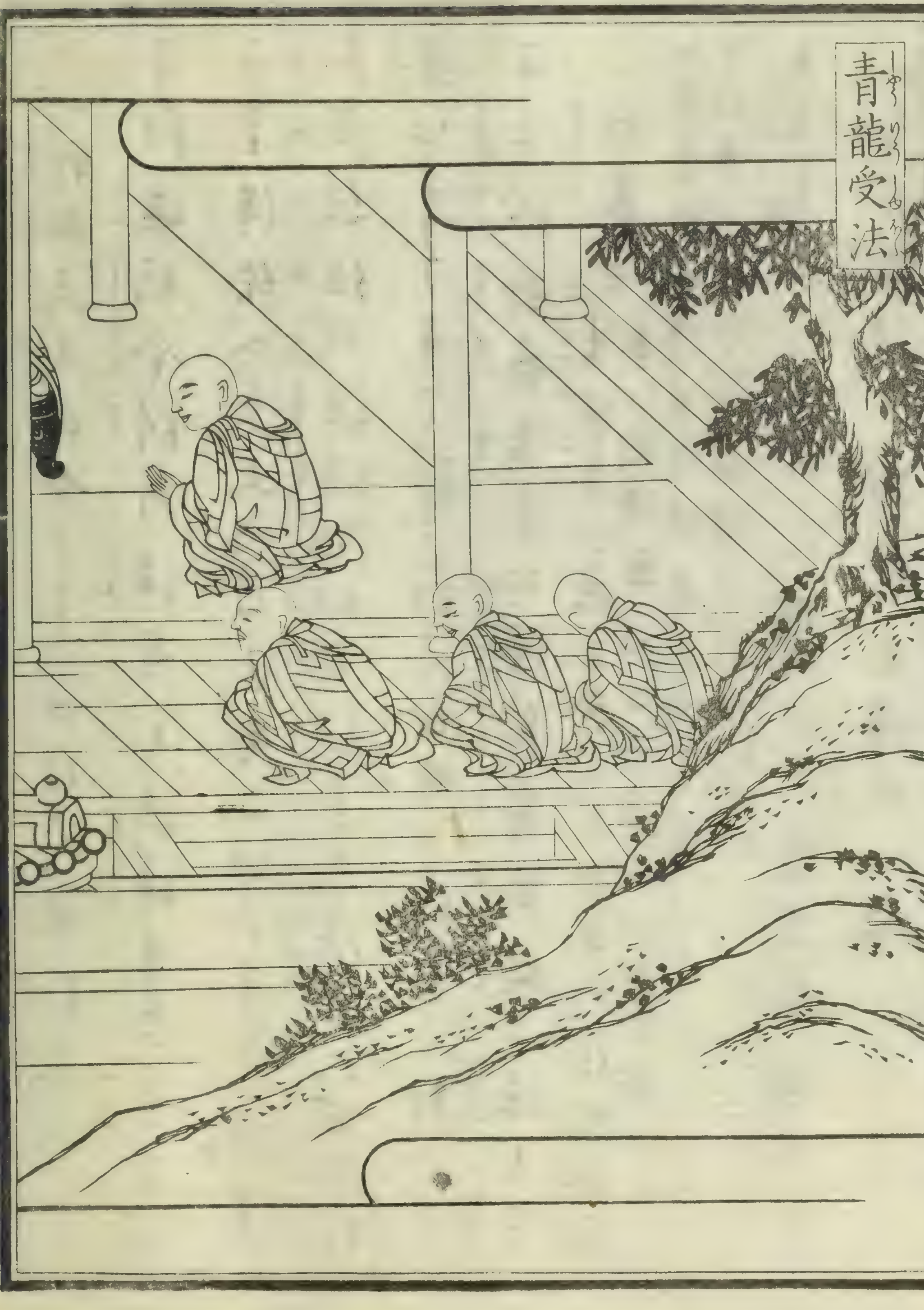
道を則帝が師なり三朝代宗徳宗順宗よまで灌
頂をうけ四衆よまで師で密教を学き忽り
大師乃まねりし房絵ひきる所御覧して嘆所
合を悦をなしてのまゝく客歩より汝が来
らむ事を志まて相待事ひさし今日適あひ
みる事所得たり大きふはし大きによし報命尽
なむとき法を付きるに人なし必きみ属うり
当苑を与ふへく灌頂が法をうけ属しと大師
則西明の本居よ還すく供具をとゝのへ調へ
東塔が精舎よ来り秘密の壇に入給ふ六月

上旬に大悲胎蔵の曼荼羅にのぞみて五部の智水に沐し三密の法印をさづかり梵字の儀軌をまなび諸尊の瑜伽を修し給ふ七月上旬小更に金剛界の曼荼羅に臨み重ねて五智の瓶水に浴し給ふ彼妙雲開塔のあひだ金薩灌頂のうけ衆聖来会の秘扃式れく諸佛受職の密壇に入給ひし軌則もかくや覚えて渇仰あまりふかき精誠感応のつゐにしに及で投花瑞をあらはし曼荼くちおを点ずる東西龍奔壇の佳観その兆ただちに来るかりし

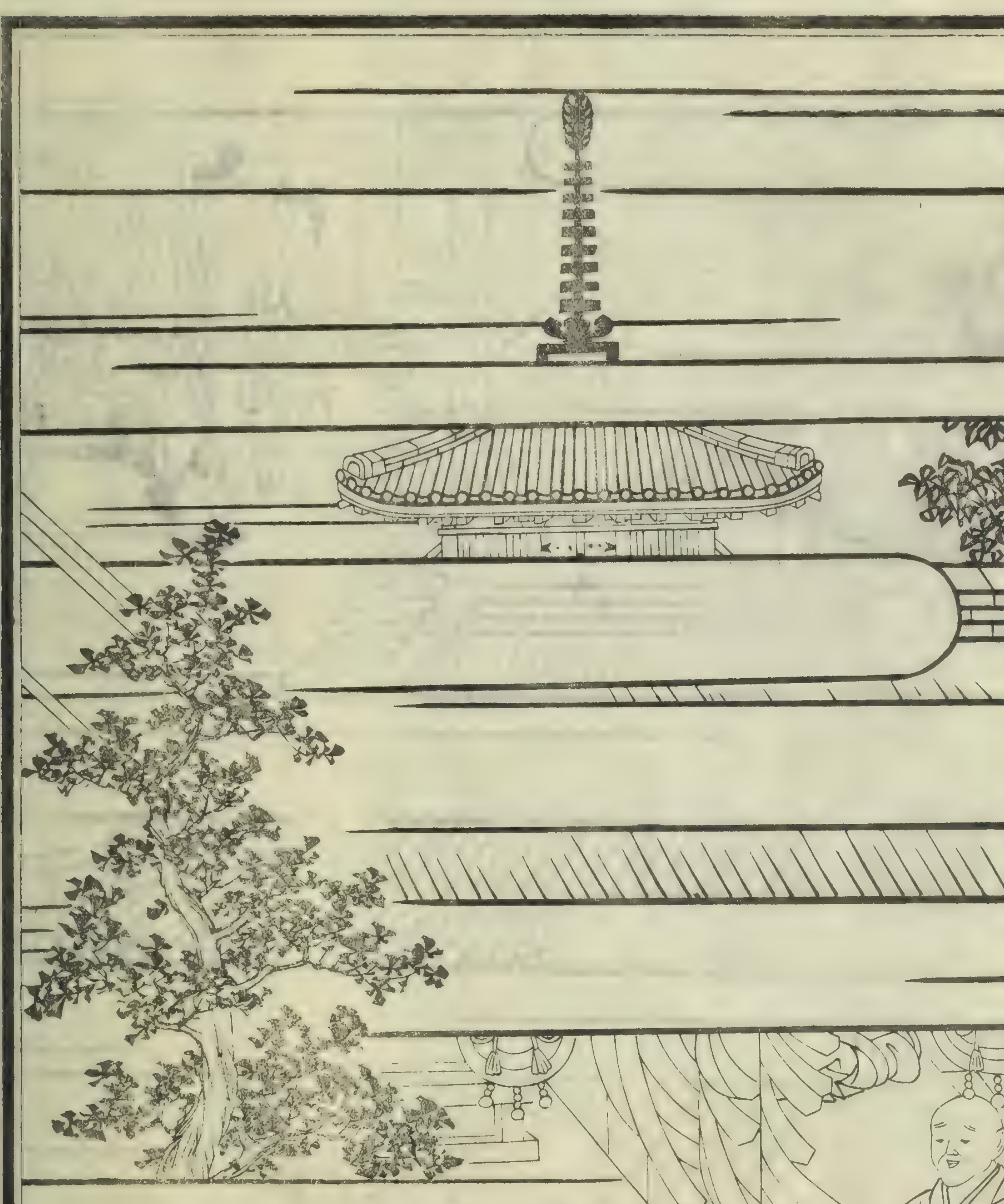
ぐ和尚大にあやしミ給ひて感歎大かたの
まれに遍照金剛の法号を此時さづけ
たまひ得給へり又八月上旬にいたりて伝法
阿闍梨位の灌頂をかうむり此日五百の僧
齋をまうけあまねく四衆を供養し給ひし
に青龍興善両寺の僧衆等齋筵に臨ぐる
く随喜せり 青龍寺の僧に云

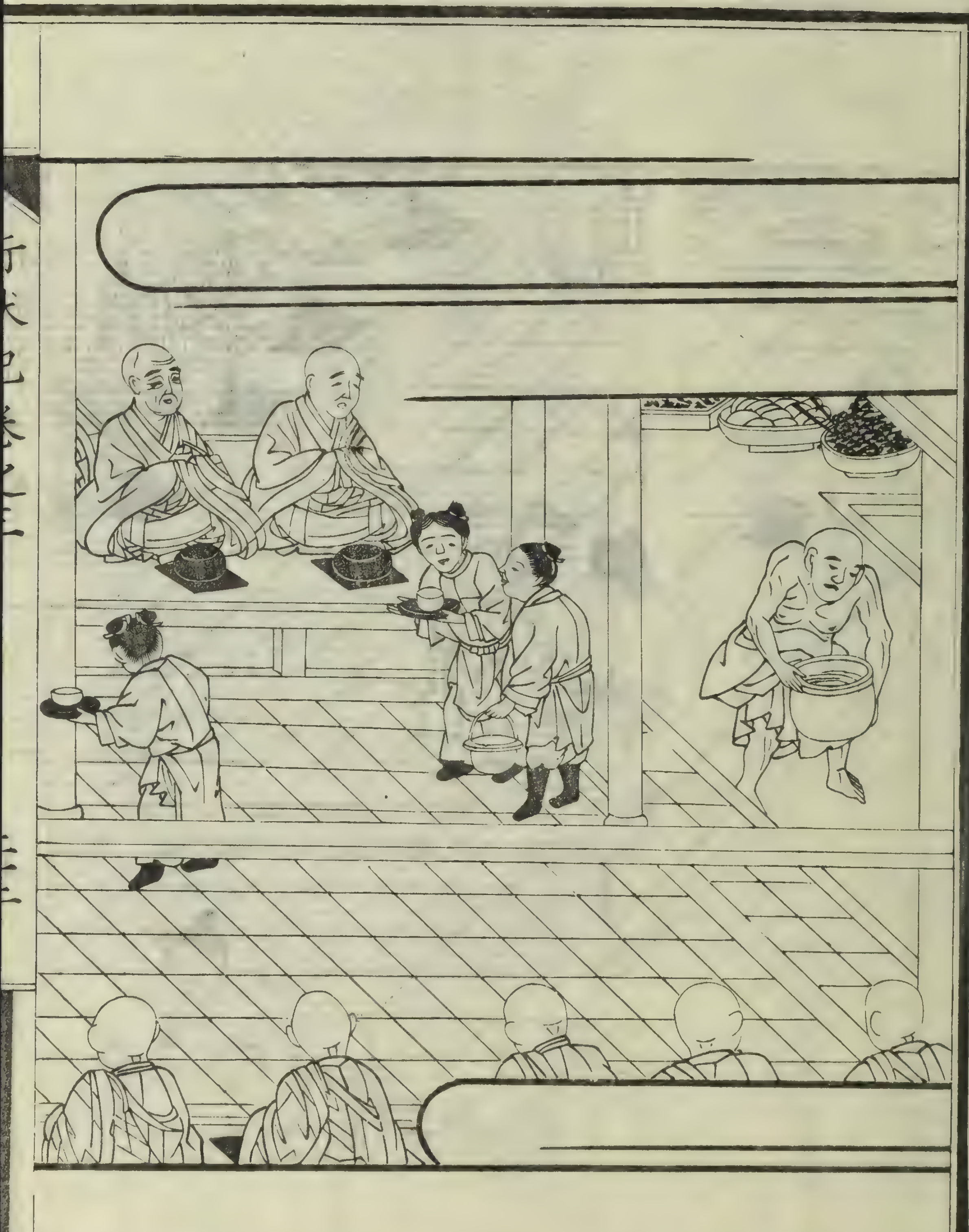
日本国の僧空海宗
奉勅将摩納及国信物五百余貫文奉上
和尚受将修三昧道場供養求授胎蔵
金剛界并諸尊瑜伽教法云云

真言印契相続して僧くうけ梵字梵讃間あり
もちて学習し給へり又灌頂の壇上の供み


青龍受法（しやうりうじゆほう）











給ひし時梵文素月にあらはれ光相清朗にして
御口の中に入たまふがかくのごときの霊感瑞多
しるしあげがたし
凡付法の傳来試かむがふるに廣智三蔵はじめ
て金智に法化を受て瑜伽の沖邈をさぐるとい
へどもふたゝび南海をわたり遥に西天に遊び
くいまだきはめざる所試尋採叟に解せざるところ
まのあたり龍智の室に入てかさねて總持の
美を盡し精を研き給へる奥旨八祖恵果
和尚の相承にとゞまり彼孔室三千が門徒德

許出口人にあり此廣智數萬於法中不可ならじ
て八箇なり然るに金剛乃含光崇福乃惠朗等
の部を琢磨しく四衆の依怙なりといへども
其蘊奥を尋ねず當金剛の一界より両部の
幽賾を探らく三藏の法裔と継ぐ是青龍乃
和尚一人也和尚於門人又數千なりといへども
傳燈僅に六負にあり其中に訶陵乃辨弘
新羅の惠日ハ胎藏の師位を受け剣南於惟
上〔上象音通〕河北の義圓ハ金剛於一界をさづかる
両部を兼ぬる人ハ義明供奉弘法大師是なり

大師淨謁の文のみ和尚に授くる法戒付せしむ
とあるに人なし請を久しく来ることゆゑ論を記
今吾道東しかむとのたまへり宗後嗣法乃
嫡資におゐては高祖大師その人なるべしや
大師自古稀法道は派に泳ぎ叢に攀今傳る
所は根となき源を尽きりと進友の文有哉
らまことありといふべ鷲王蓮壇を開説極鐵
塔に入しよりこのかた密教東漸しく流派
数万ありといへども祖嫡和續く八葉の法統
あるは豈吾大師にあらずや

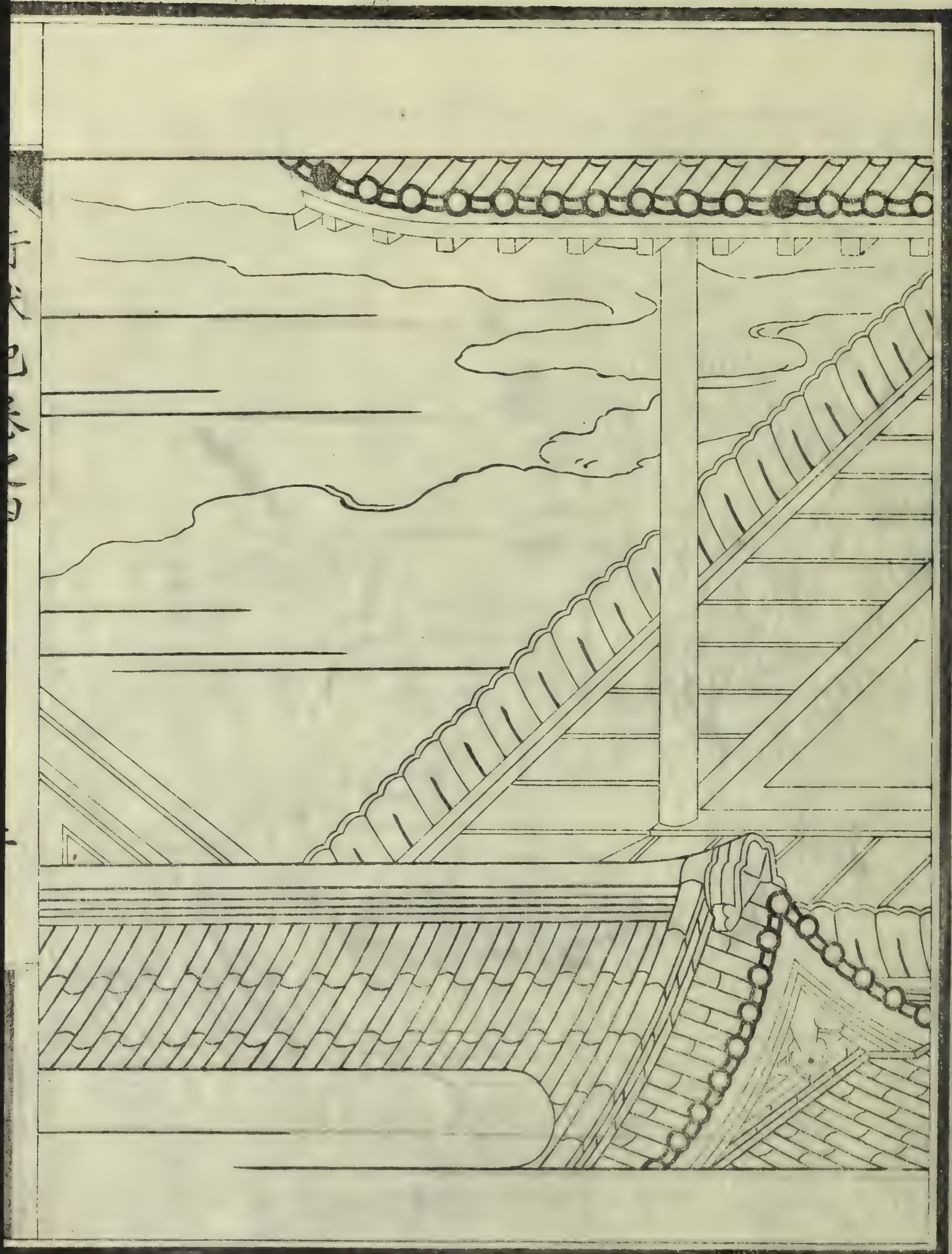
ひそかに渡海求法の由緒をおもふに善無畏
本朝に来りし時貝葉経のごとく梵篋経も
ずま恵果震旦にいまする日法宝経韞で請
益を得ずんば聖者妙感通凡慮計がたしと云
ども抑是南天の法水遠く流て暘谷の群
萌を潤し月氏の教風遥に伝へ日域の
迷霧をかゝぐべき基兆なるべし
されば宋朝の志磐法師記して云不空の弟
子恵果といふ人あり元和中に日本の沙門
空海中国に入て恵果にしたがひて法を学び

國に帰りてさかりに其道を行ふ唐の末乱離して経疏消毀せり今其法日本に行る と書けり異域までに大師の文学をたふとびて秘宗の流行を本朝にさへ和ばり衆生と文密教に志をはこばむ人誰か書籍写経の源流を酌み大師慈悲の恵沢に浴せざらむや

弘法大師行状記巻之三　終

恵果和尚の御弟子に内供奉十禅師順暁阿
闍梨と申おはしけるが弟子に玉堂寺珍賀と
いふ人ありけるが是人大師の受法をさまたげ奉り常
にむかひて和尚に申けるは日本の座主たとひ聖人
なりとも門徒にあらずば宜しく諸教を学せしむべし
何ぞ密教をさづけ給はんやといさめ申す事両三般
に及べり珍賀その夜の夢に神人来てさいなみて降伏し
給ふとみる朝に起ていそぎて大師の御許に来りて


珍賀懺謝

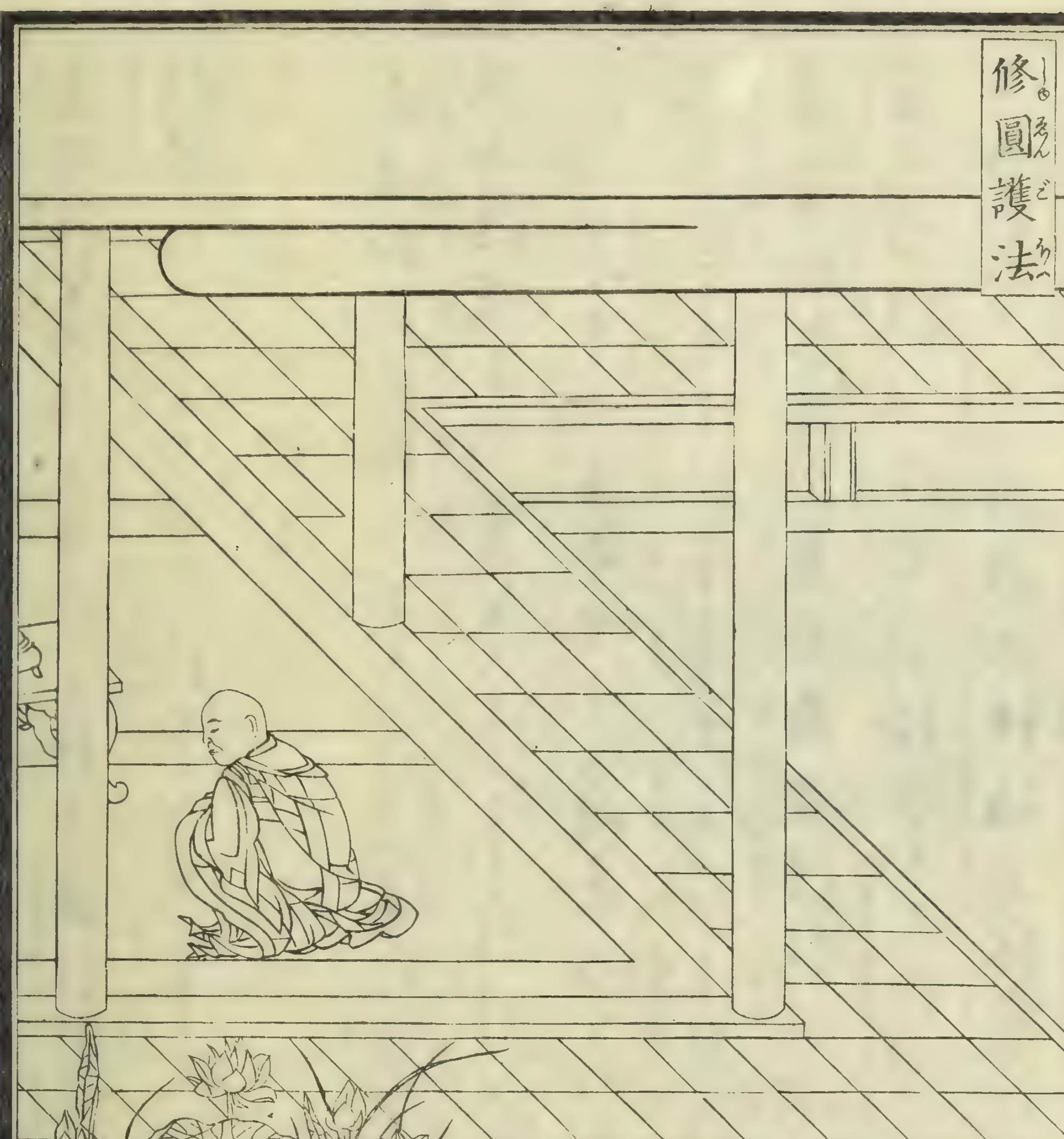


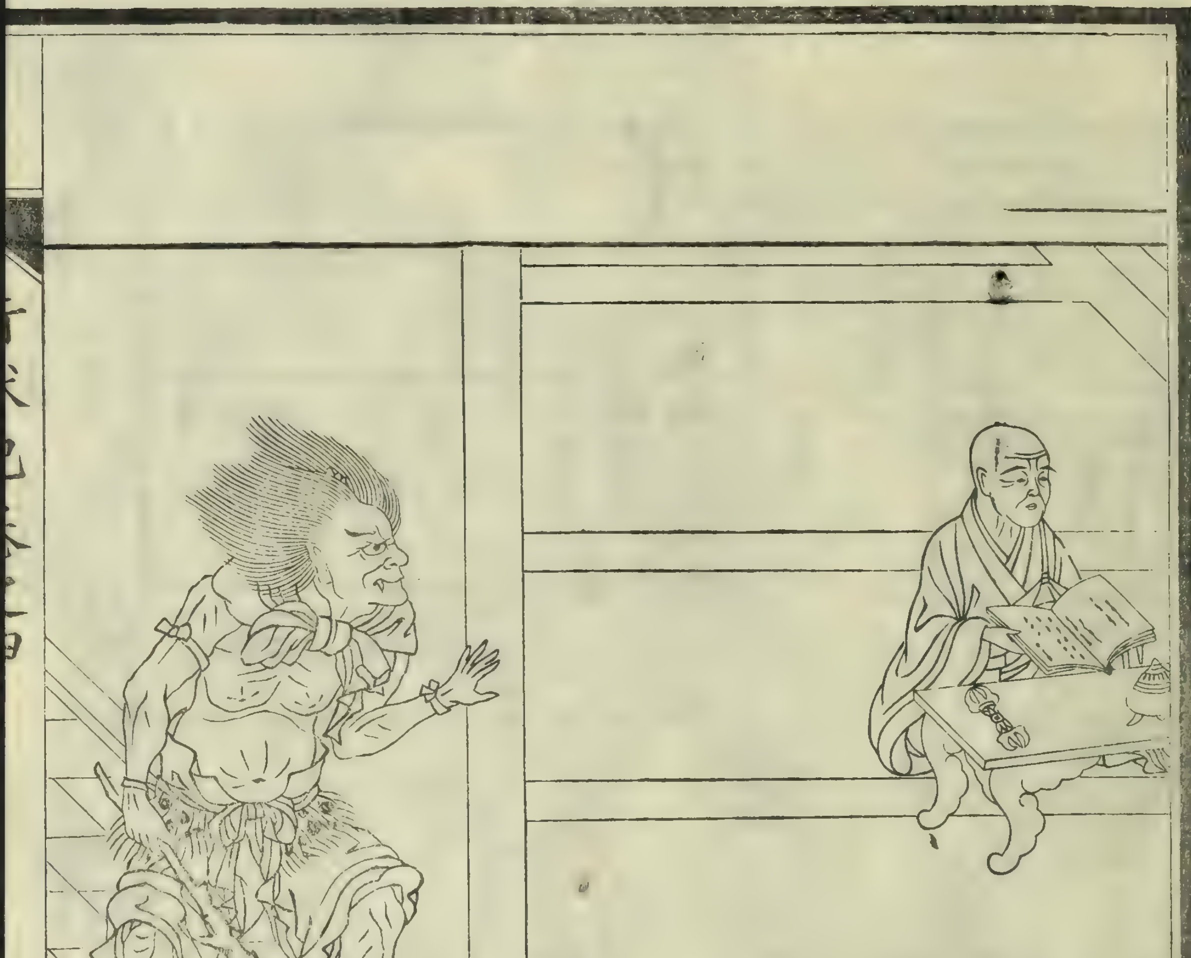


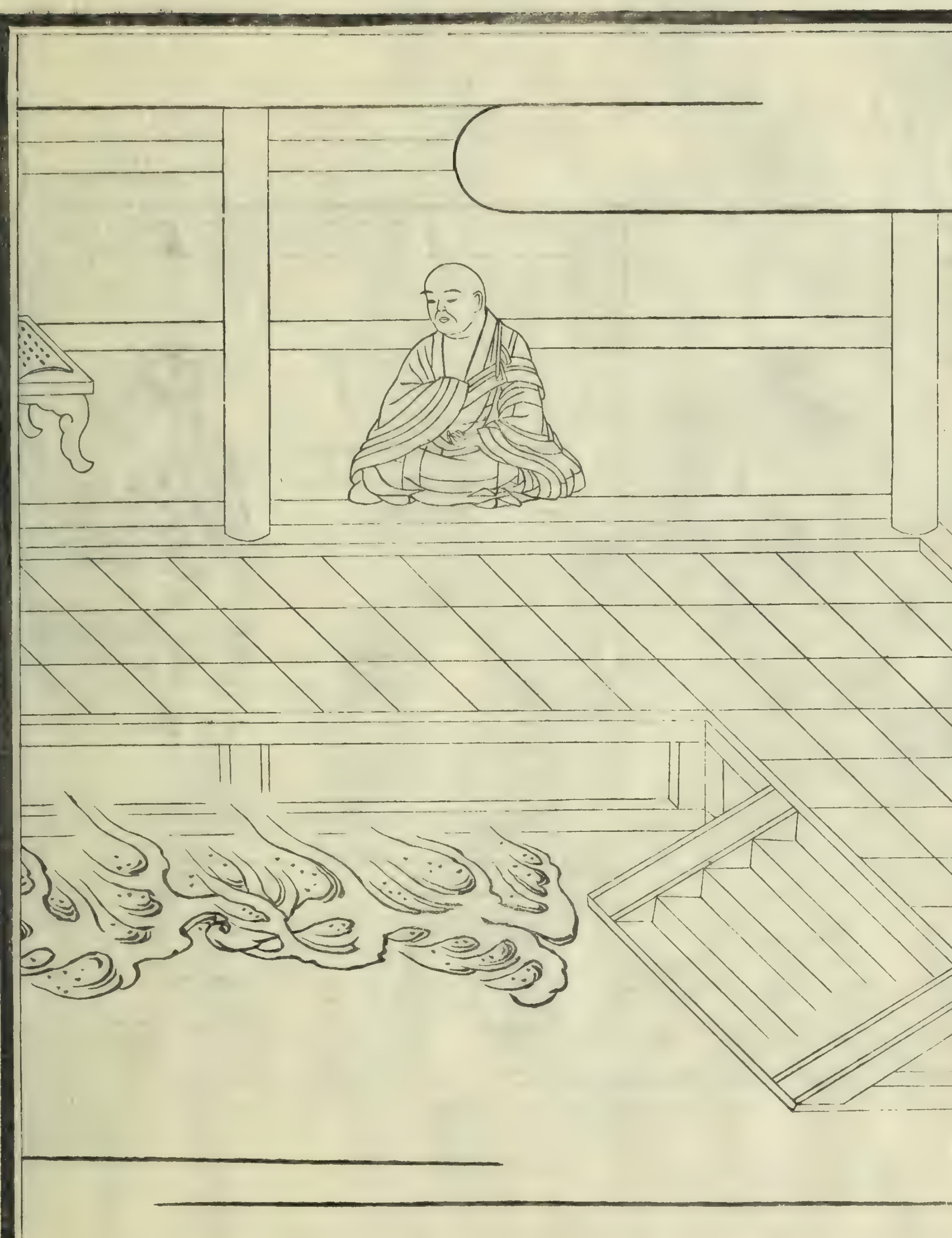


御孫を地に投三昧して申ていはく我あやうくして
御受法をさまたげれ共の罪よ今夜夢中よ冥の
責をかうぶれり今よりハ永く悪心をひるがへして
聖人に帰し奉るべしはやく罪をゆるし給へと
謝し申けるとなむ
本朝南京山階寺に修円僧都といふ人ありきに
おいて大師の名誉を嫉みてまつりけれ大師渡
海のびひに階に護法を法らはしして伝法をとらん
がひけり志む胎蔵界の大法を受給しけれ護法
是を聞て修円にかる大師志ま然しまへて金剛

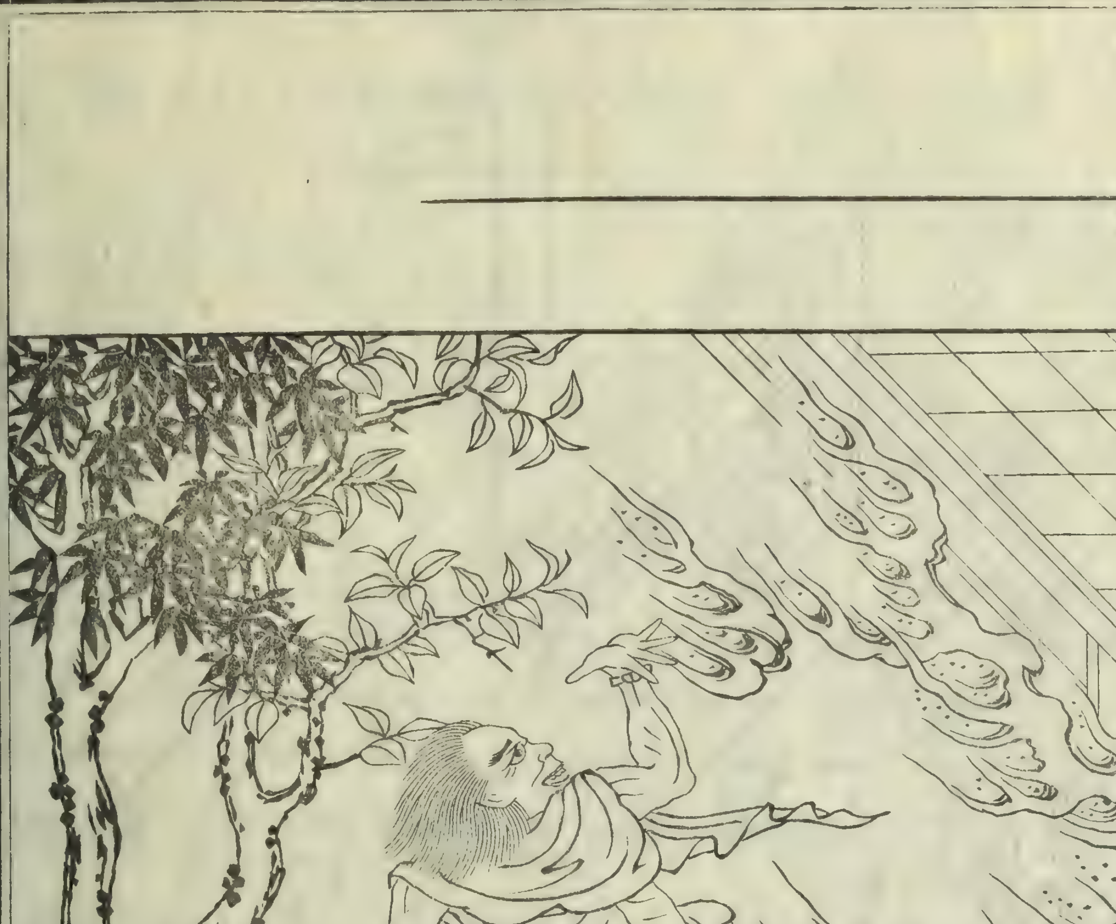
界の法をさづけ給ひしに盗法の者ありて聞く
結界なりしかば火焔郭をめぐらして護法ちかづく
事をえざりしとぞ
恵果和尚大師に告たてまつりて云真言秘蔵経
疏に隠密を図画をからざれば伝ふる事なし
いざや宮丹青に命じて絹素にうつさしむべしと
是にとりて供奉李真等十余人を喚て胎
蔵金剛界の大曼荼羅及伝法阿闍梨の影像
等一十鋪を絵画し給へり又経生二十余人に
仰つけて一百余部の経論等を書写し兼て続


修圓護法

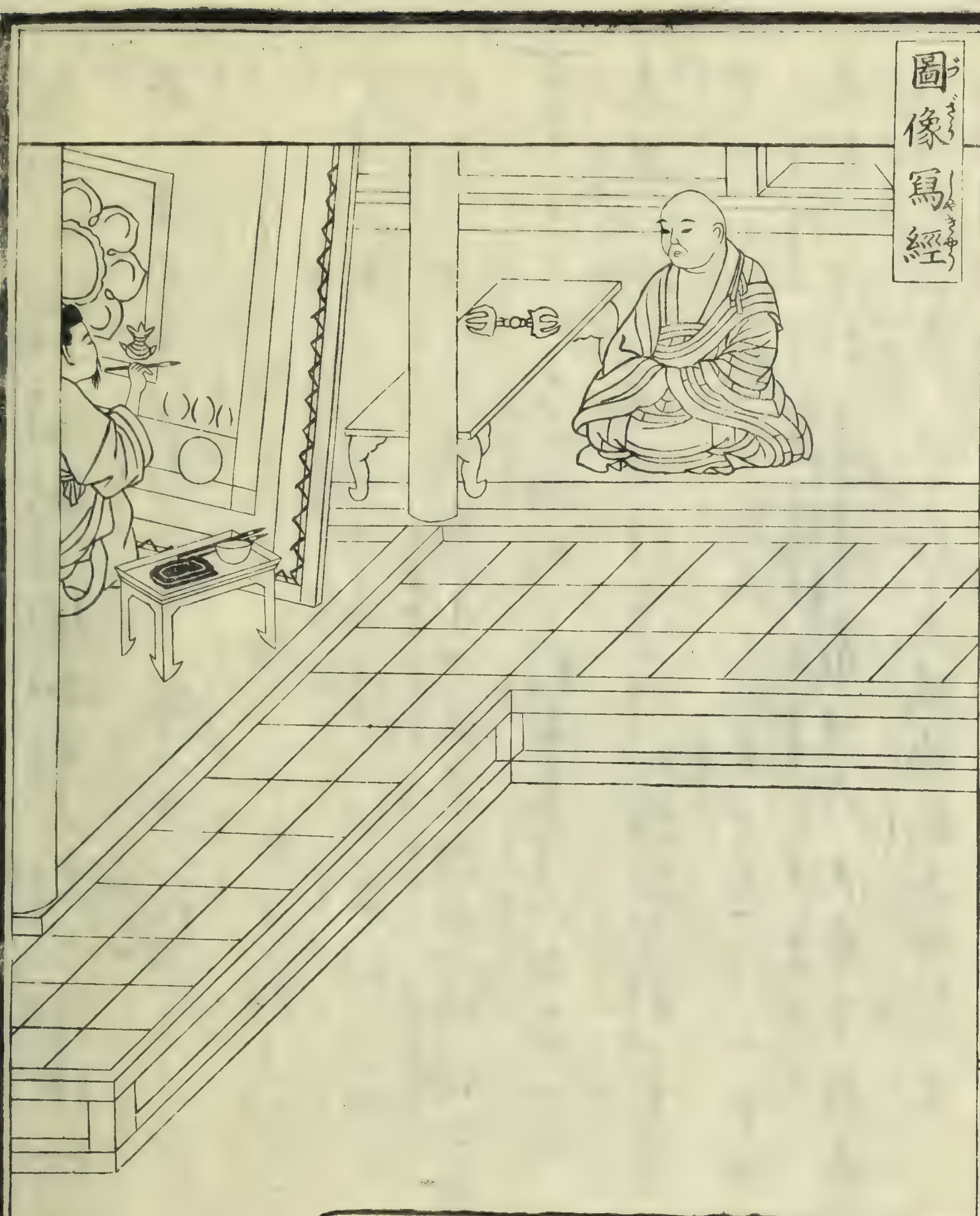




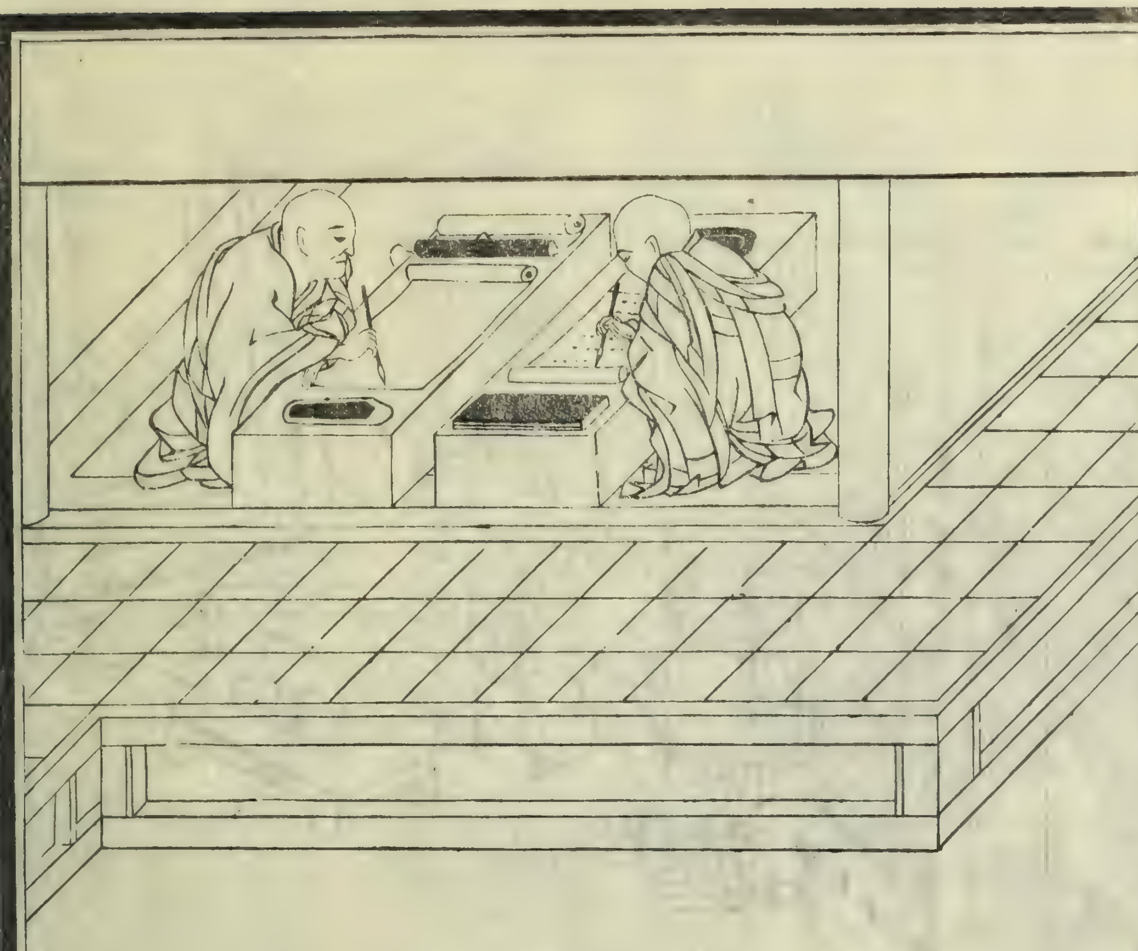


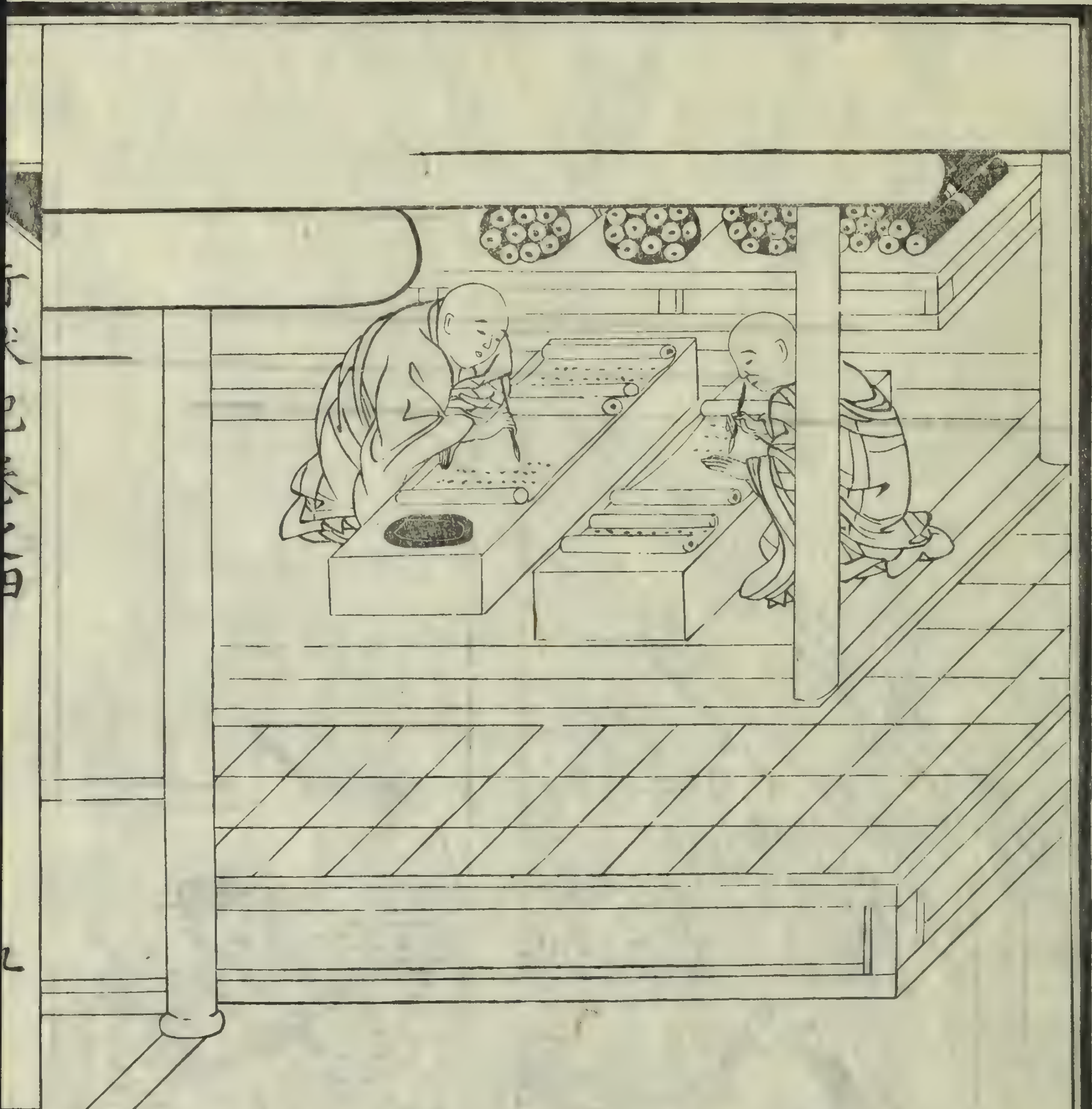


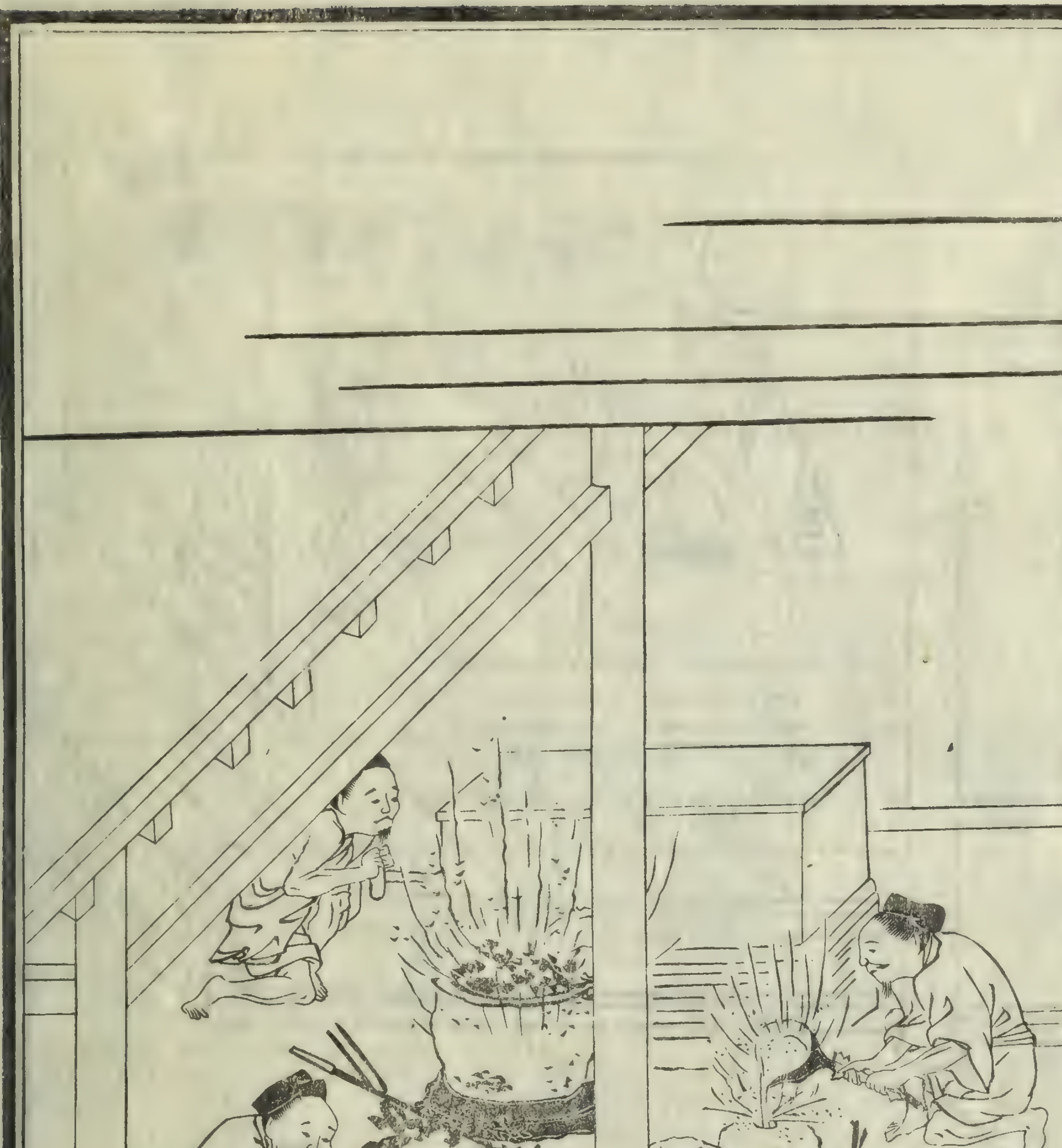
奉請の博士揚忠伝超呉等を召て鈴杵輪撥の道
具一十五事を新造し給ふ是錬冶せる所にして
法によりて種々の宝物を合成せしならびにみな
如来乃智印法門の表像なり又持頂戴せるに福
利極りなし外にハ魔軍を退け内にハ煩悩をきす徳
に是法を請る異物人を利せる宝器なりとや
恵果和尚入滅の時ちかづき給ひぬれバ本尊乃具
等悉く大師に付属し奉らせ給ふ其中に佛
舎利八十粒 純中金色舎利一粒 白縹乃大曼荼羅及宝乃
三昧耶金剛ならびに犍陀穀子の袈裟にハ経て


圖像寫經





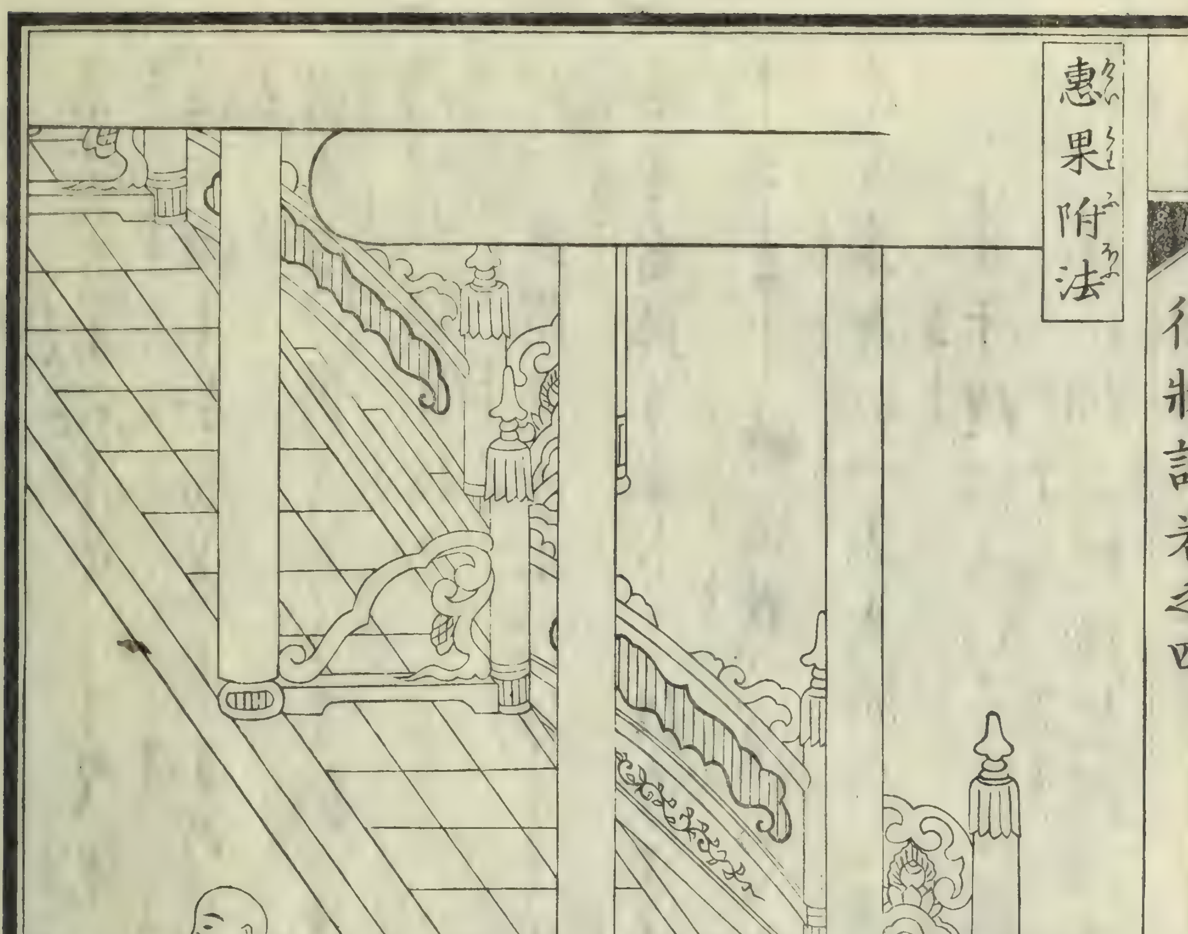




祖師相傳のうちにて敢てかはらざれば是則傳法の
印信萬生の依怙なり志かるに恵果和尚唐土にても
嫡統をえらびて大師に授与し給へるひの重ぐき
やむごとなき事なり則告てのたまはく我鬢乱乃
時はじめて廣智三藏にみへまでまつるハ三藏
たちまちにひかりをみ携る事子のおもひをなす内に
まいり寺に候ふに受乃ごとくましてまなびし来
らば竊に告給はく汝密蔵の器なりと是に
よりて両部の大法秘密の印契ことごとくまなび
えたり自余の弟子若ハ道若ハ俗或ハ一部の

大法をうけ或は一宗の秘契を得て法嗣となり
かゝる好事なし岳瀆の恩を報じまつらむと
此みに昊天も極なし今此土は化縁盡るとも
も久しく止まるべからず竺の大曼荼羅一百余
部の金剛界數及三蔵轉付の物并に佛器の具
等本朝に将て海内に流轉せよ我汝が来るを
事ばかりみて命のきえざらんことを恐れ今は
すればはち法の命きとしめるをさづけ継嗣功
おちさまぬよく郷国よ返て玉都ふしてまはり
天下に流布して蒼生の福をまさせしから四海

度すく萬人をのしまむ是則佛恩を報じ師の
徳を謝するなるべし君の為に忠あり家に於て
孝ありいはしめむと説る事なりと稱むれば
法に教誡し給ひき
後三条院東宮におはしましし時小野の僧都成
尊令旨によりてまゐらせて真言の要事をしるし
申されし時密教を傳ふる家と不同なりといへ
ども東寺の一宗大師の法流に付て諸家より勝
るる事十種なりいはゆる灌頂殊勝受学殊勝
梵文殊勝相承殊勝誓顕殊勝寶珠殊勝道具殊

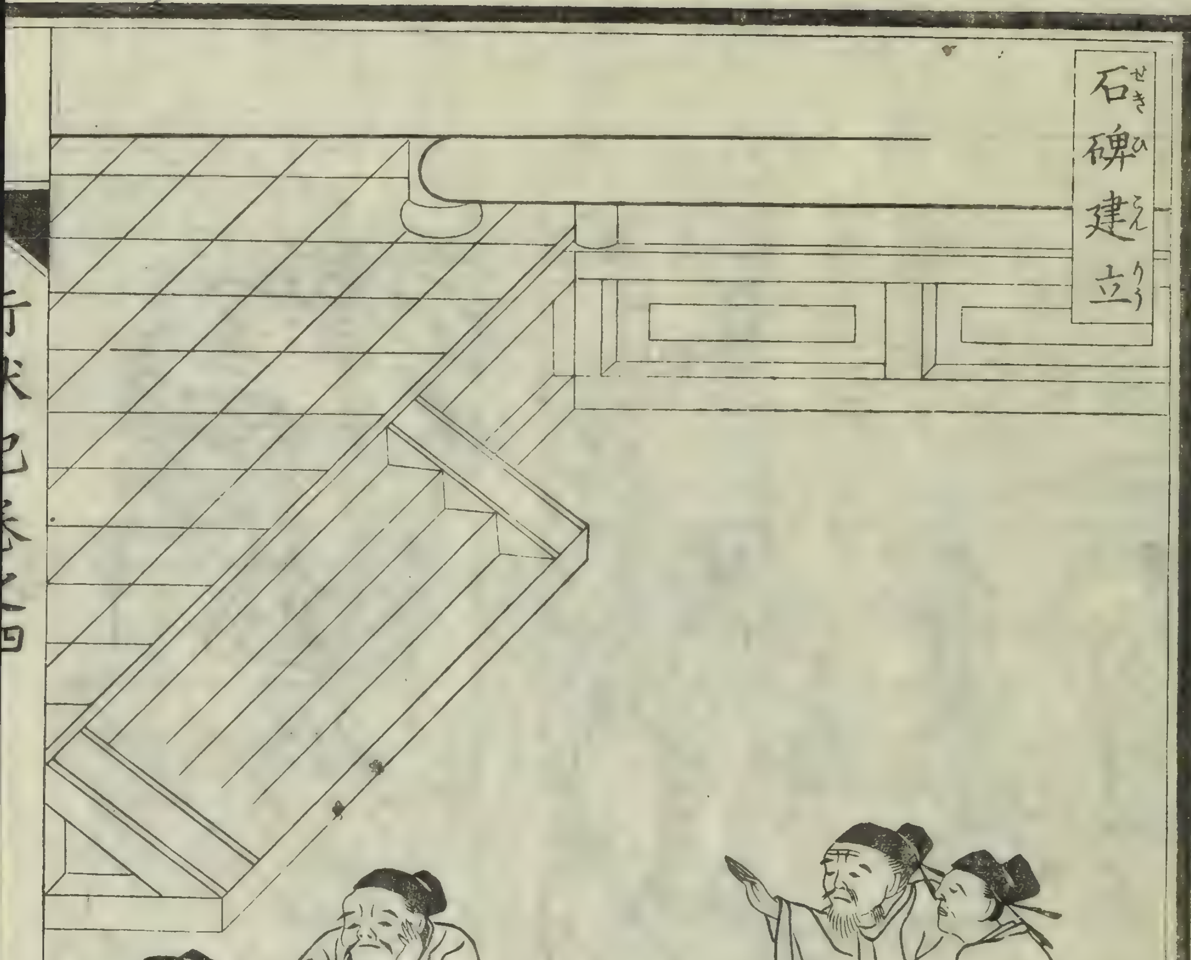

惠果附法

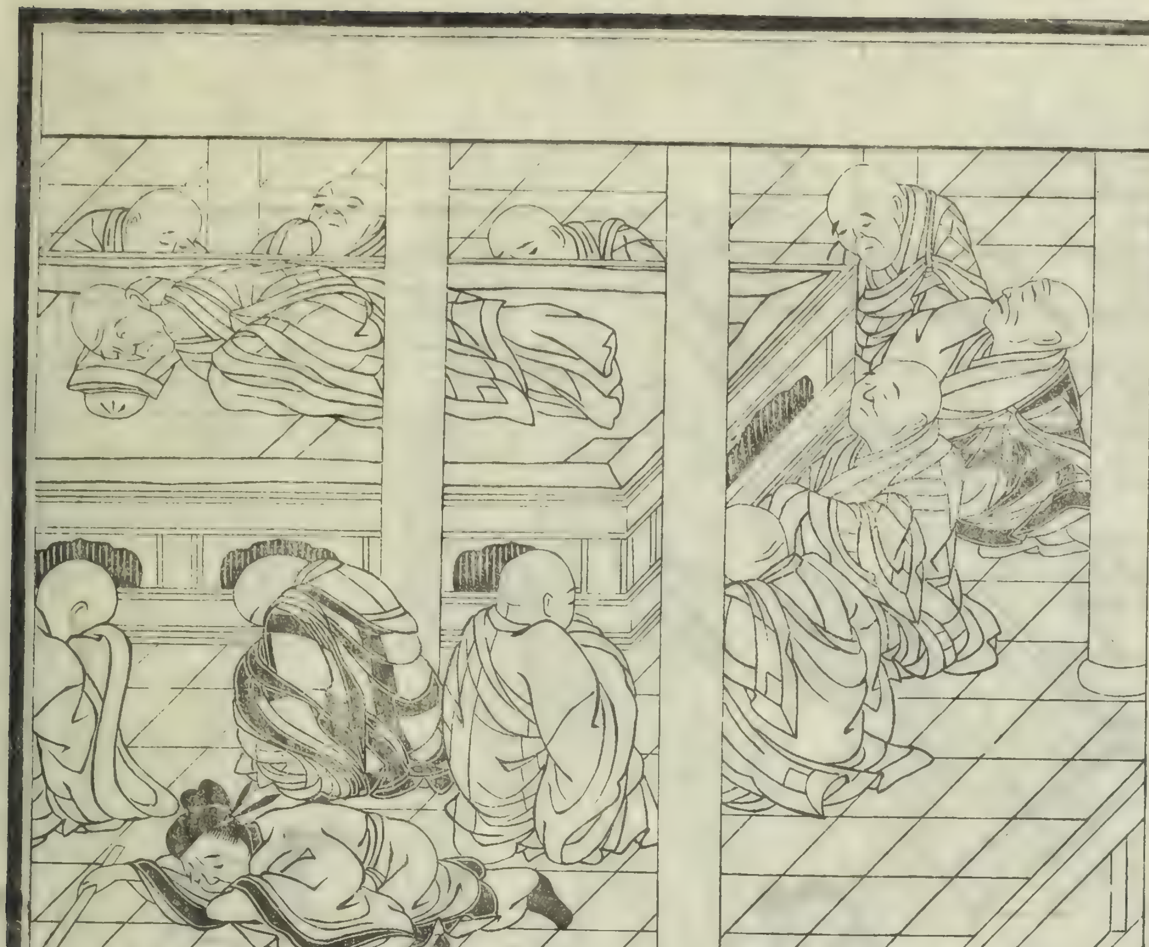


勝入定殊勝法則殊勝外護殊勝あるなり其中
小道具殊勝の意を述て如来付嘱の袈裟ハ永く
天竺の鶏足山にありて達磨法伝の袈裟ハ今
震旦なる曹渓寺にあり唯真言一家の衣伝及具
のみ遠く月氏より出て大唐とあれ日本に傳て
今に東寺にあり真言の厳重知ぬべし者経と
かくまで誠におもひみれば大師書誌乃闕付
戒得給し高鳥卵を利済きんるすとちうへ是ま
よりて西天累祖の異物を請うへきさく東寺
鎮護の道場にとゞめ置給ふ法縁此まに學れを

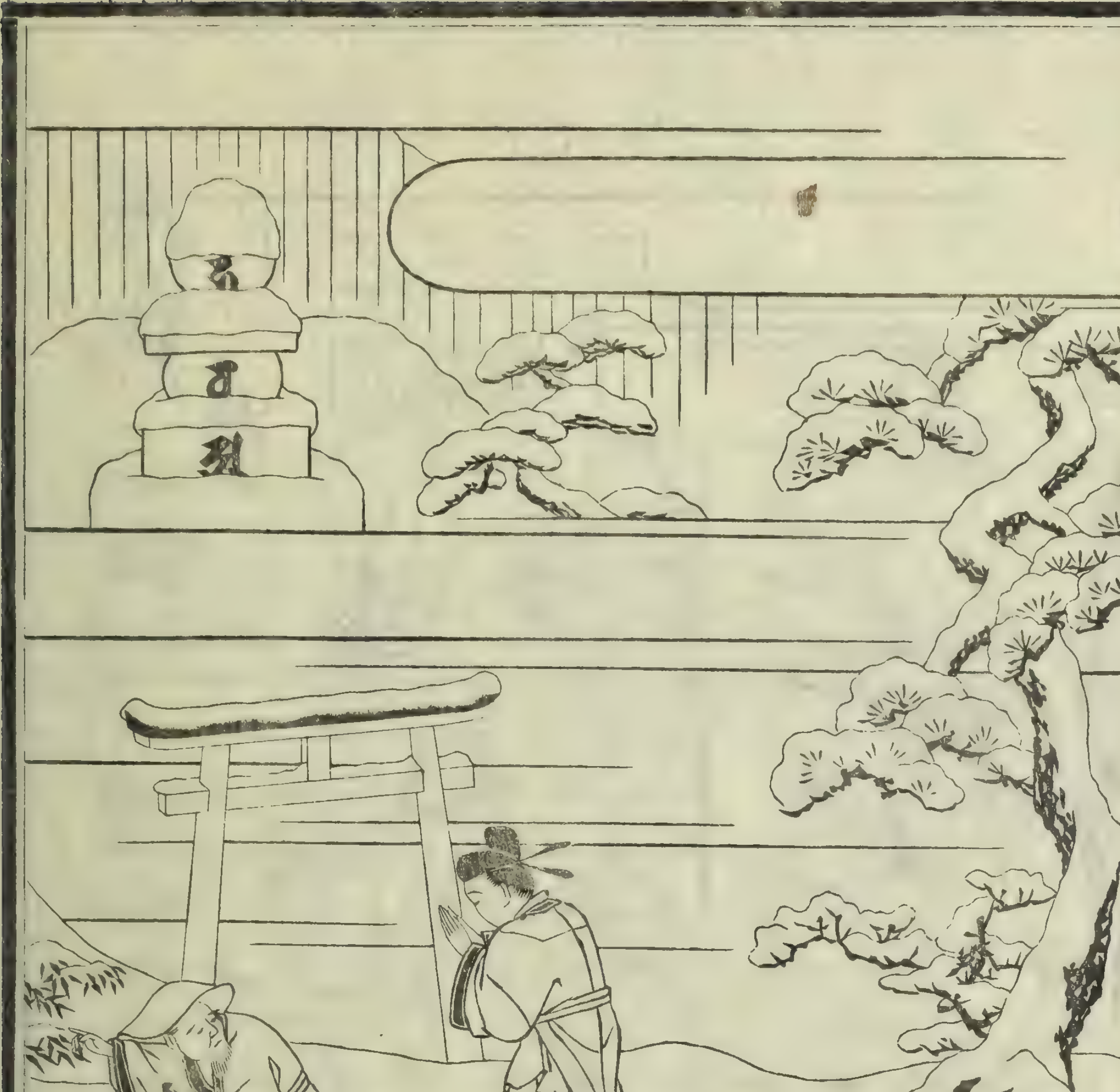
をとめて志りぬべし志かいはゞ枝葉に生ずる事も
人誰か匪石のおもひを凝さゞらんや
恵果和尚入滅の時門人に告ての給はく我が両部の大
法を将来の秘蔵仏の経路あり普く法界に
流伝して有情を度脱せしむる縁深ずに今
日本の沙門空海ありて両部の壇儀尽く契心伝云
漢梵たがはず蘊奥をうかゞひ書と瓶とをうつせしが
おもへば是元徒にあらず三地の聖者なり内大
菩薩埵の心に具し外に小乗沙門の相を示せり
日出ればひかりあり油尽ぬれば火きゆる物の

法爾の理なり菩薩もとゞまらず如来も滅し給
ふましてや真は悔きんの試禅の人とすれバなり唐
の永貞元年十二月望日躬を蘭湯にすゝぎて手に窓
印をむすび告るに微疾を以て示す寂命を終るを
背釈為の化をや告志赤栴檀の春乃洞空しく
いまし今和尚の寂に入る青龍寺の松の月独り
のこる彼も五十二類血の涙をながして縁援乃
るまとうしなへ事をるが是ハ一人弟子拝膳を割
て護持のちからをうしなひぬる事を歎かれしむ翌年元和元
正月十六日城東龍原に葬してまつるに四紀


石碑建立



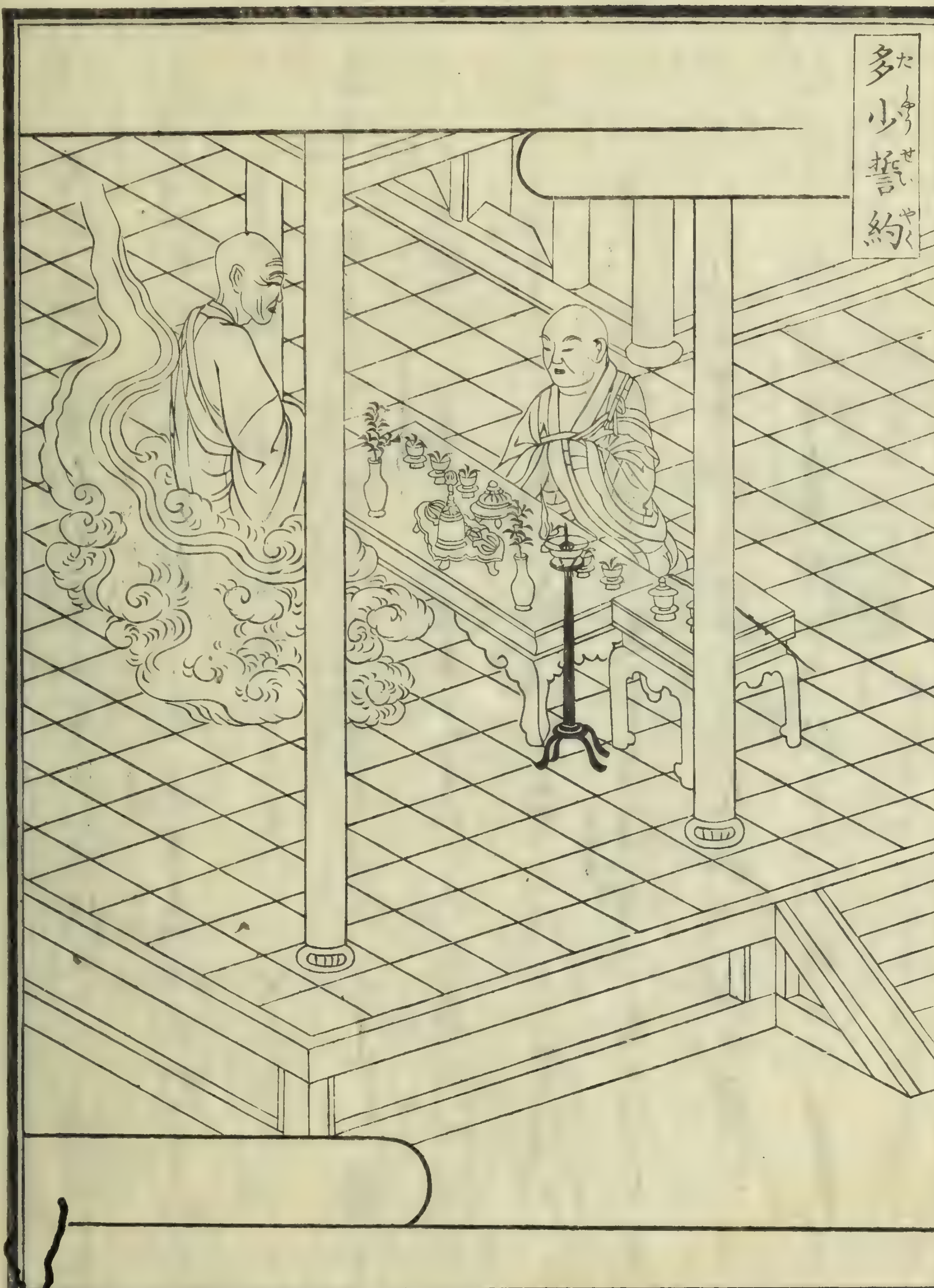






の含識にみちて萬人の悲感天に動せり
大師ことに戀慕のおもひにたえずして石碑の文に
られ十二願の縁をあらはされて和尚の德行をのべ
又廟塔の下に立さり給ひけるは和尚と大師と
多生がうちに誓約してかたく契し密教をひろめ
給へる事のまことにかしこき權者の師資とあらはせたま
ふこと見聞の緇素あやしみ貴まずといふことなし
まことに類絶せるためしなるべし
和尚入滅の夜大師追戀の心をいたし悲歎の思に
たへずぞ道場に入給ひ流紅涙を三衣乃袂に

きよみ丹誠を寸心の底にこらして精念し給ふに
和尚まのあたり宛然として前に立てのたまはく
しらずや我と汝と宿契のふかきゆへ多少の中に
あひともにちかひて密蔵を弘演を世て一生に師資と
なることたゞ一度のみにあらずいまの度に汝をすく
はんとて遠くより来て我法をさづけはじむ同法まで
に終りぬれば宏願すでに足りぬ汝を西去にしく
我足をいたゞき我は来生して汝が室に入るべし
ひさしく留る事なかれ我これにありてさらむと
の給ひれ大師ふたゝび温顔をみせてまつりうかねく


多少誓約

芳談とうち給て歎うつゝともわれがちに悲歎の涕
涙袖よりあまれり生々師資乃ちぎりかくこそと汲
ありて書およし給へる碑文にも未非我力帰非
我志根我以鈎引我以索泛溺之舶数示異相帆
之夕屢説宿縁進退非我能去留随我師孔宣雖
泥洹異之説而妙幢説金鼓之夢所以挙一隅示同
門者也と載られたりくれの菩薩大士の方
便いづれも形をかへはして三界の趣の冥に接び
法の正法をひろめ衆生を度し給ふ希有なる事
にや侍らし おもひみれば香象ハ香象と友とし

輪王ハ輪王と父とを師と云資と云皆成覚乃如来
得道の薩埵なり昔迦葉佛の時にてましませし菩薩お
はしまし兄をば日珠と云弟をば月鏡といふたゞひとり
願をおこし契をむすびて世々に知識と成て生々に
に正法をひろめ世をわたす彼の日珠月鏡ハ釈
迦滅度のゝち馬鳴龍樹とあらはれ外道の邪林
を摧て如来の法輪を轉ぜり彼をもちて是を思ふに
龍猛龍智西天に弘化し金智廣智中州に来
遊し恵果弘法東隅の傳燈をかゝげ三国の師
資としてまじはり王律と成給事皆是宿願の

いづれとも誓約の志かゝりしも難はかるべし蛇にかゝざれバ蛇のかしらハ志して古徳の筆跡誠に下愚のはかる所にあらざることとや大唐の宮中に三間の壁あり晋の右将軍王羲之筆跡をのこし置る年久なりて破壊しけり有けれバ二間を修理ありて清き筆をくだし人なかりける故唐帝　日本の和尚に書せしめ給ふべきよし勅ありけれバ大師左右の手足に筆をとり口にも筆を含て五所に五行を同時にかゝせ給ふ今一間にハ墨をすりて盥に入壁の面に投かけさせ


宮中壁字





給ふも自然に樹といふ字になりて間にみえけり主上も殿下もあまたある人驚歎せずといふ事なし帝叡感のあまり勅を下して五筆和尚となづけ給ひける臨池の功をあらはし入木の跡をとゞむる人唐朝にこれありといへども大師ひとり垂露の點をとゞめ給ふ事　我朝の徳をあらはすにあらずやされば真済僧正大師の筆跡を見給ふ詞に啄雞奔獣の畫獨九疑にとゞまり湧雲廻水の點纔に八法を變ずと傳ふるもことはりなりけるや文帝のこまつはく和尚此生に畄まり人師とされのこ

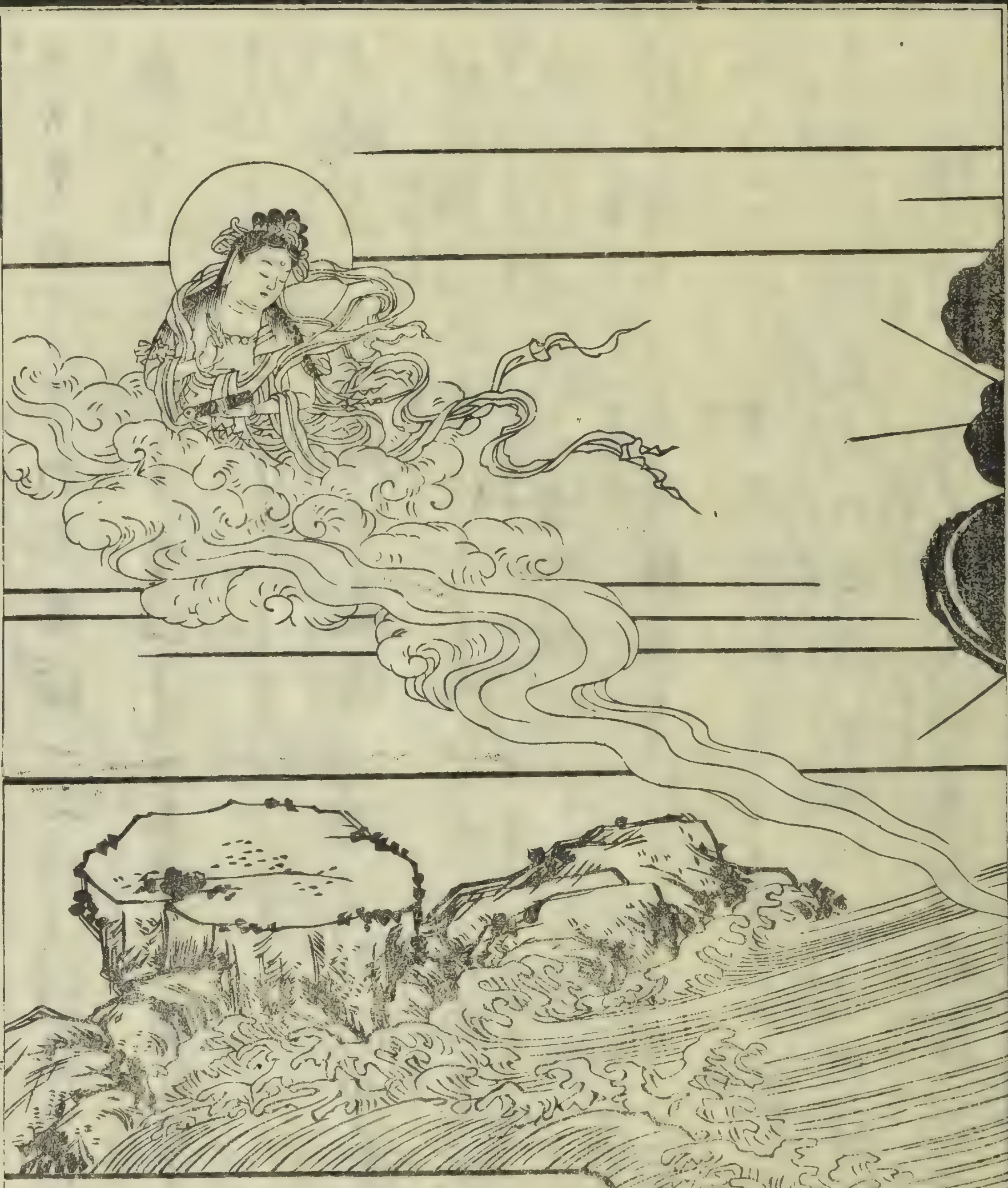
たてまつる時に大師申させ給はく[illegible]命をかろくして遠く蒼溟(さうめい)をわたる事は仏法(ぶつぽふ)を伝(つたへ)て辺俗(へんぞく)を利(り)せむがためなり今帝(てい)の師(し)たる事をうけとも我本懐(ほんぐわい)にあらずと辞(じ)申させ給ひける帝勅(ていちよく)ありて師のおもむきいかにもとゞむる[illegible]まことに理(り)に当(わく)れり我(われ)とゞむるに及(およ)ばず朕(こ)が年(とし)すでにふるか限(ぎ)あり願(ねがはく)は一期(いちご)のゝち仏恵(ぶつゑ)を[illegible](で)せんとて信仰(しんかう)を表(へう)し来縁(らいえん)を契(ちぎ)りましまして菩提子(ぼだいし)の念珠(ねんじゆ)をたてまつらせ給ひけり志のあまりは賞翫(しやうし)し給へる[illegible][illegible](ぞく)なりと見えたり彼(か)の念珠(ねんじゆ)はいまに東寺にとゞ

まはしけり
大師城中を巡揆し給ふに何ぞ流水のほとりに
たゝずみ給ふに蓬の髪みだれて肩にかゝり
かゝれ萩の衣やぶれてひざぶしもあらはなる
童子一人出来てとひよりてまゐらせて云く和尚は
日本にて御筆上人と聞大師答てのたまはく
然り童子いはく志あらば是流水に字を書給
へんやと大師則かれが詞にしたがひて清水を讃ぜ
らる詩を書給ふに文点みだれずして流下る
童子これを見て慶感嘆の氣色ありて童又我

もろこしにて世和尚みたまふべしとてまゐらせしに水の
うへに龍といふ字をかゝれけるが文字うかびあがりては
まいて流る事なし但右の方に小点をうたず大師是
をみていかにと此点をば打まし給へると問給ふに
まづはおろかなりとて次で件の点を付るとき此字
響を発こし光をはなちて真龍となりて空に
のぼりにけり寂に童我もまた文殊なりと云て
かき消すやうせにけり後衣も瓔珞ありて幾宿
けるは是大師の手書をあらはさんとて大聖文殊
きたりたまひて教へるべしとかなん其在唐の


流水點字

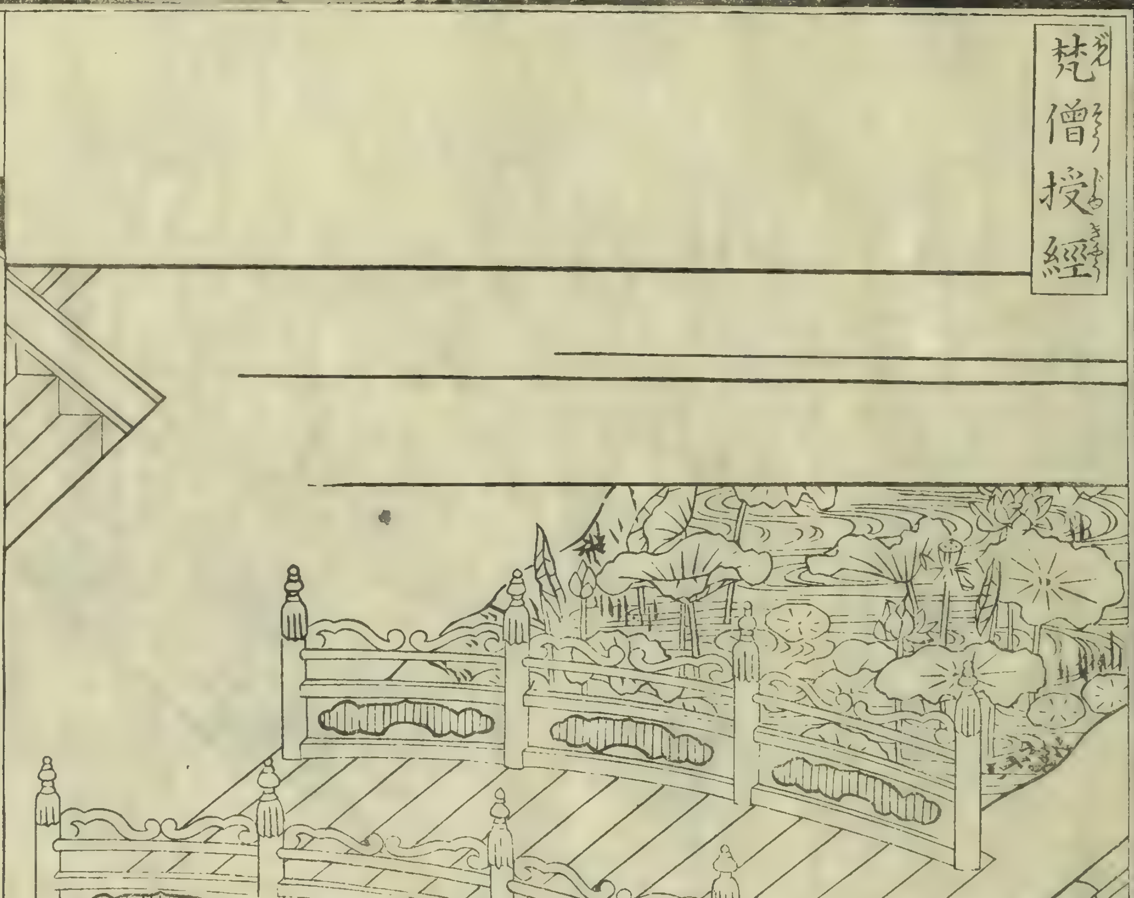




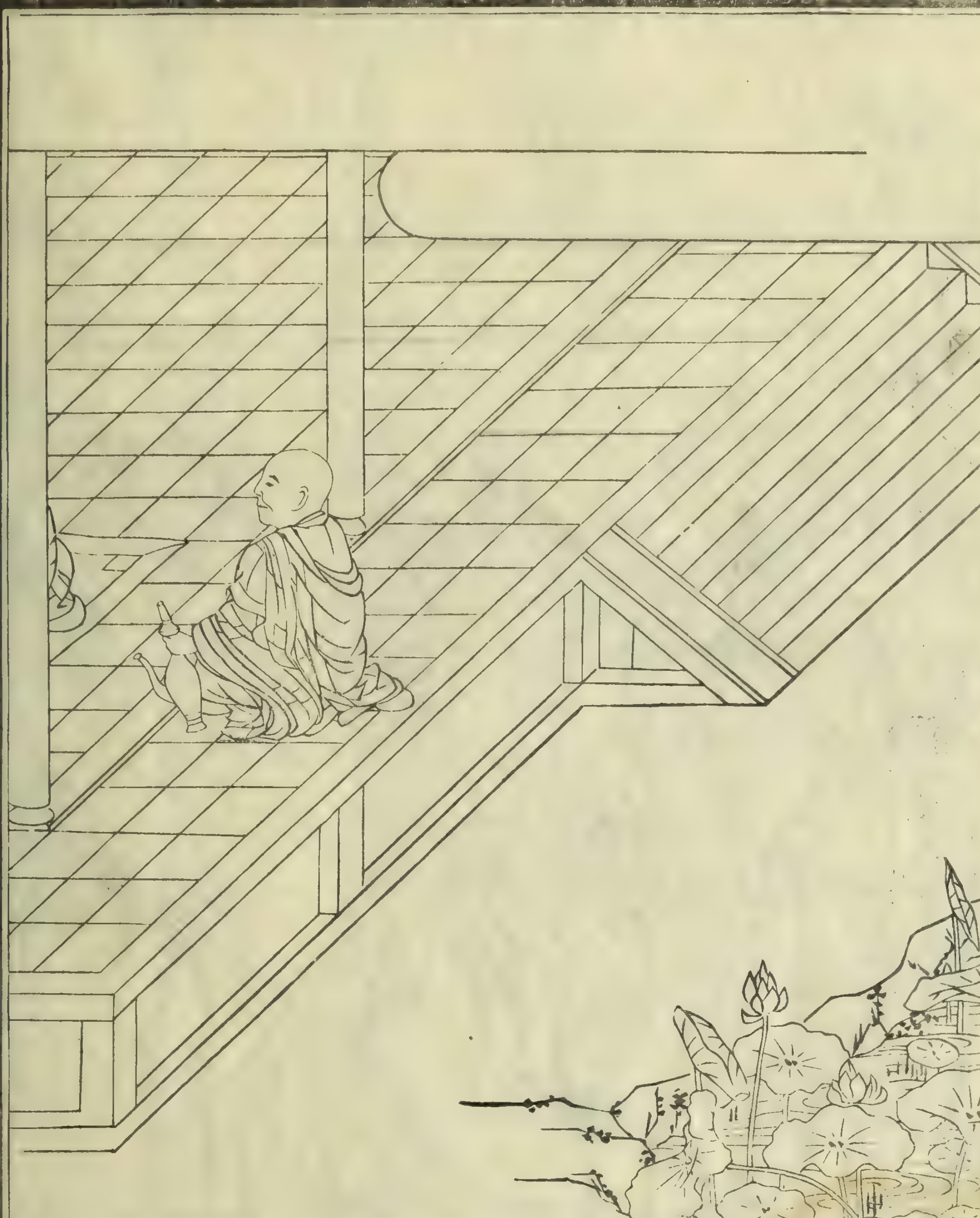
聞く事のごとくの不思議一にあらず或ハ犬を飛し
鬼を使ひ或ハ呪詛と菓を拾る術
作ぶ事ども記すにいとまあらず
大師在唐の時中夏邊州の間にあそびてあま
ねく顕密の名徳にまみえて三蔵の奥區を尋
広く釈儒の叡匠に訪て幽明の遠致をきはめ
給ふ中にも長安醴泉寺にましくし時ある
ひハ般若三蔵利莎にして南天の婆羅門にあ
ひて義渕の法源を伺ひ法味の甜苦を決
し給ふ彼般若三蔵ハ中天竺那爛陀寺一

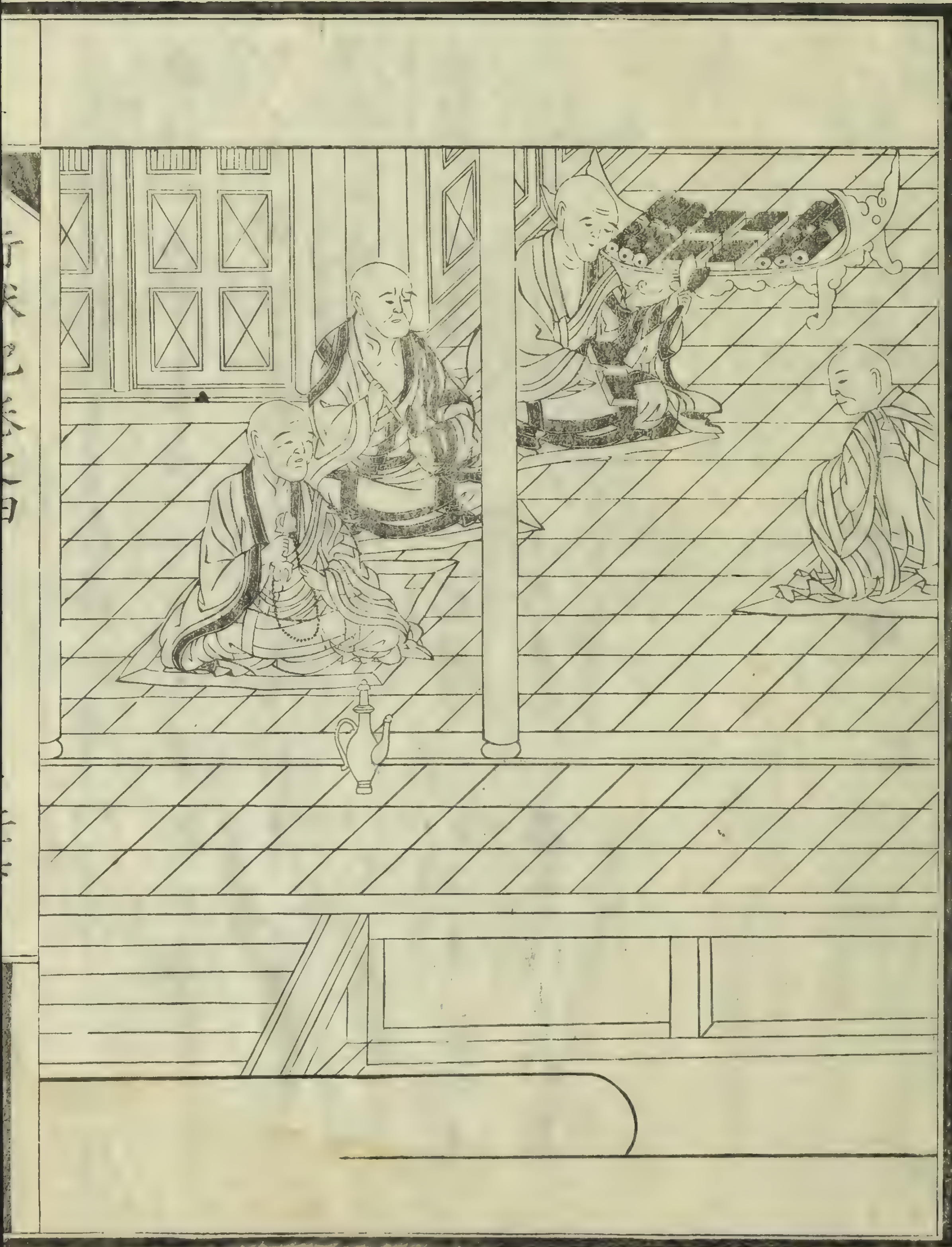
餘僧の纏繞より般若三藏も説智菩薩の所より
して瑜伽の大教を學び又ら龍猛菩薩今梵南
天に見在し給て秘密の法輪を轉じ給ふ面皃
三十許の如くにして其年九百餘歳なりおもへば
胸ふれしと語りされば眞言の甘露を嘗ましして
不老の延益をえらまへる事疑ひなかれかし
るべし
又三藏大師に告まして汝が衆生縁ハ罽賓國なり
少年より道に入て天を經て法をもとむ常に
傳燈を誓て此國に來り擧べきぞよ東海

に縁なくして志願遂ぐることを恨む今訳する
ところの新花厳六波羅蜜経に及貝葉乃梵篋
三口和尚本国にかへさりて修造宣揚志給ひし
旅のはじめ縁を彼土に結て元こゝを接済せん
とおもへり東隅の偏域いやしといへども西土の
高徳化をしたふ。さらに絶て知ぬ我邦ハ是大象
好風の佳境なりといふて候
又越州の節度使中丞大都督ハ一時の大才なり
まれをまもり総て衆を披れ救済べきものいくばく
故旅かねくハ遠方に流伝し給はんと請じ給ひ



梵僧授經





しに經論傳記并に詩賦碑銘卜醫等の内外の
教法を研きて究め得ずといふ事なし凡日東より
がごとく發起ありてたちまちに世事をなげうち榮容
の圖畫典籍の繕寫ありし紙清くし人跡稀く
衣鉢となるが食寢を忘れ給ひしかば十年其功驗を
四運にかゝはらず三密結印おこたらず一志に凝しねもすと
のたまへり

弘法大師行状記巻之四　終

弘法大師行狀記

火

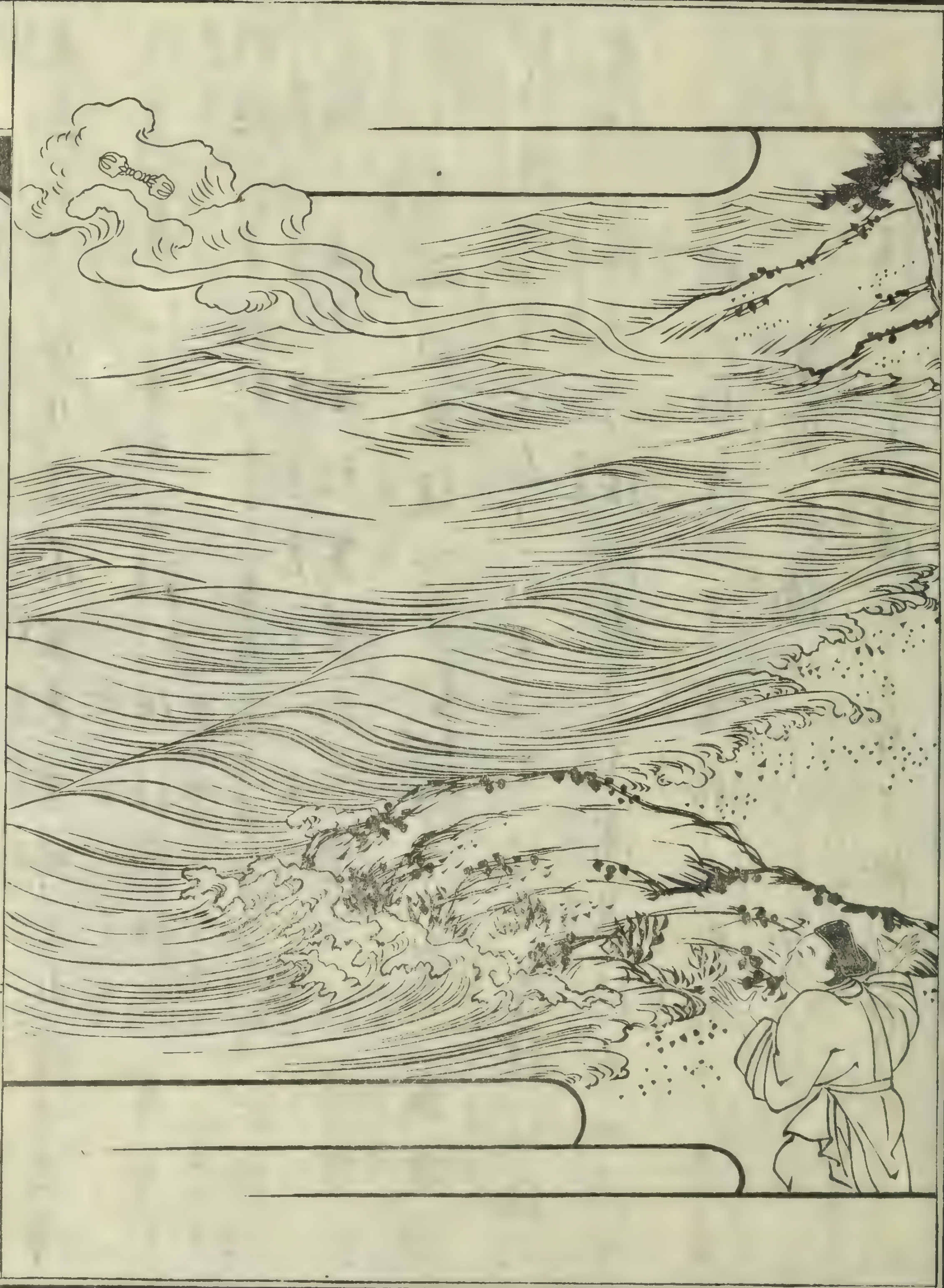
弘法大師行状記巻之五

大師学法事終て写経功なりしかバ大方に法海を渉て東密を究畢然潤さんとおぼしめして本国の使高階真人とゝもに帰朝せん事状上奏志給ふ（橘逸勢同奏帰朝）唐帝憲宗あまくときこしめし天恩めぐミおもひく地をたちまちに達し給ひしかバまりて元和元年（本朝大同元年）八月の日船を浮べ纜を解し時祈請ありてのたまはく登増せし給ひ乃

の秘密の教法なりし流布相応の地あらば今
投しところの三鈷早くいたりて其所を点ず
べしとて本朝にむかひ給へく遥に紫雲の
聳ぬる所を見て金杵を投給ひしかば則飛
ゆきて雲の中にいりぬ京畿の士庶名残を惜み
たてまつり道俗の諸衆数をしらずあつまり
其時ば見てまつらく驚あやしまずといふ
ことなかりし此杵もとは是龍猛菩薩龍智阿
闍梨に授給ふ所なり金剛智南天にいませし
時龍智の付属をうけましましゝとをまちの由く


三鈷投所

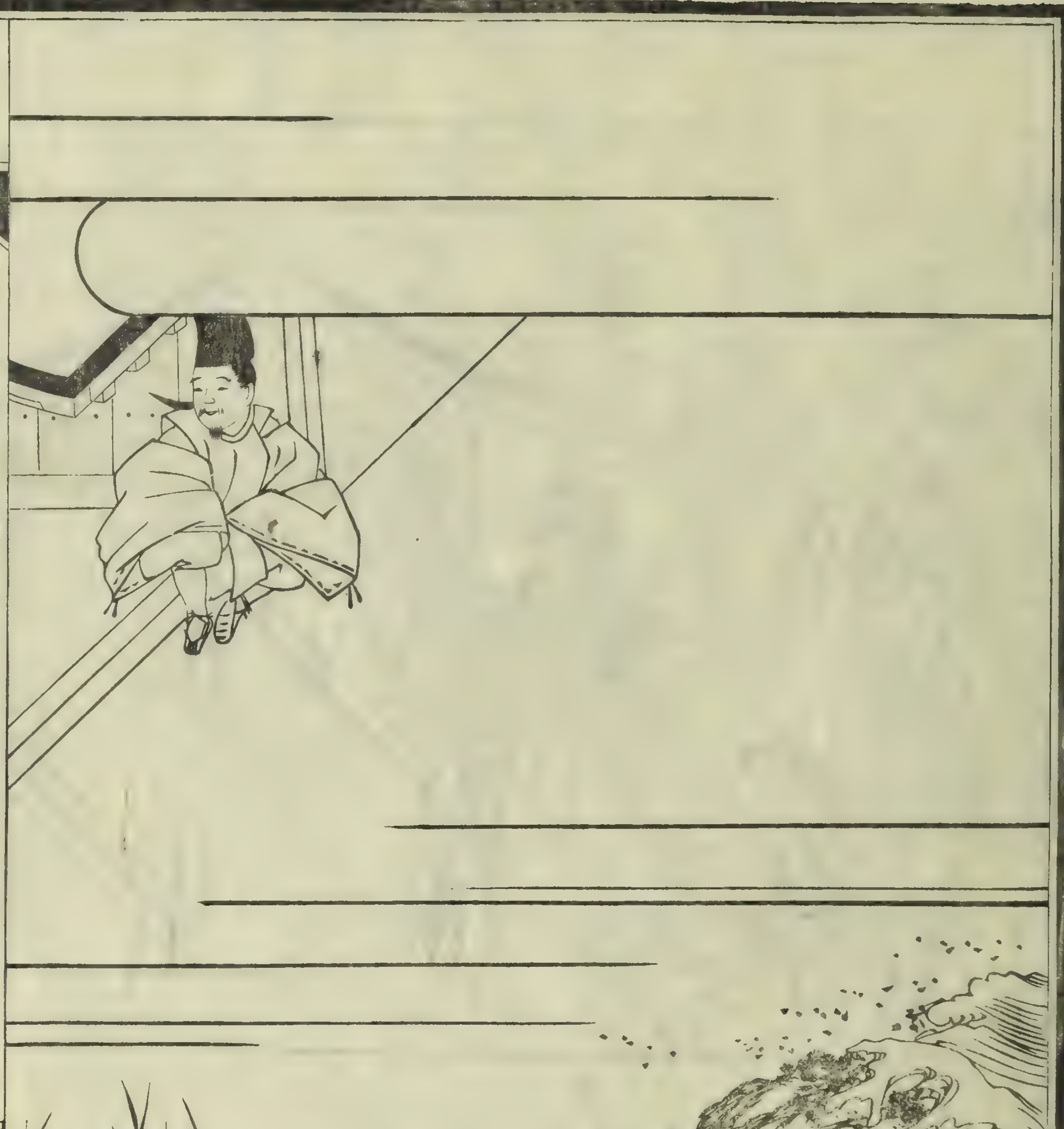


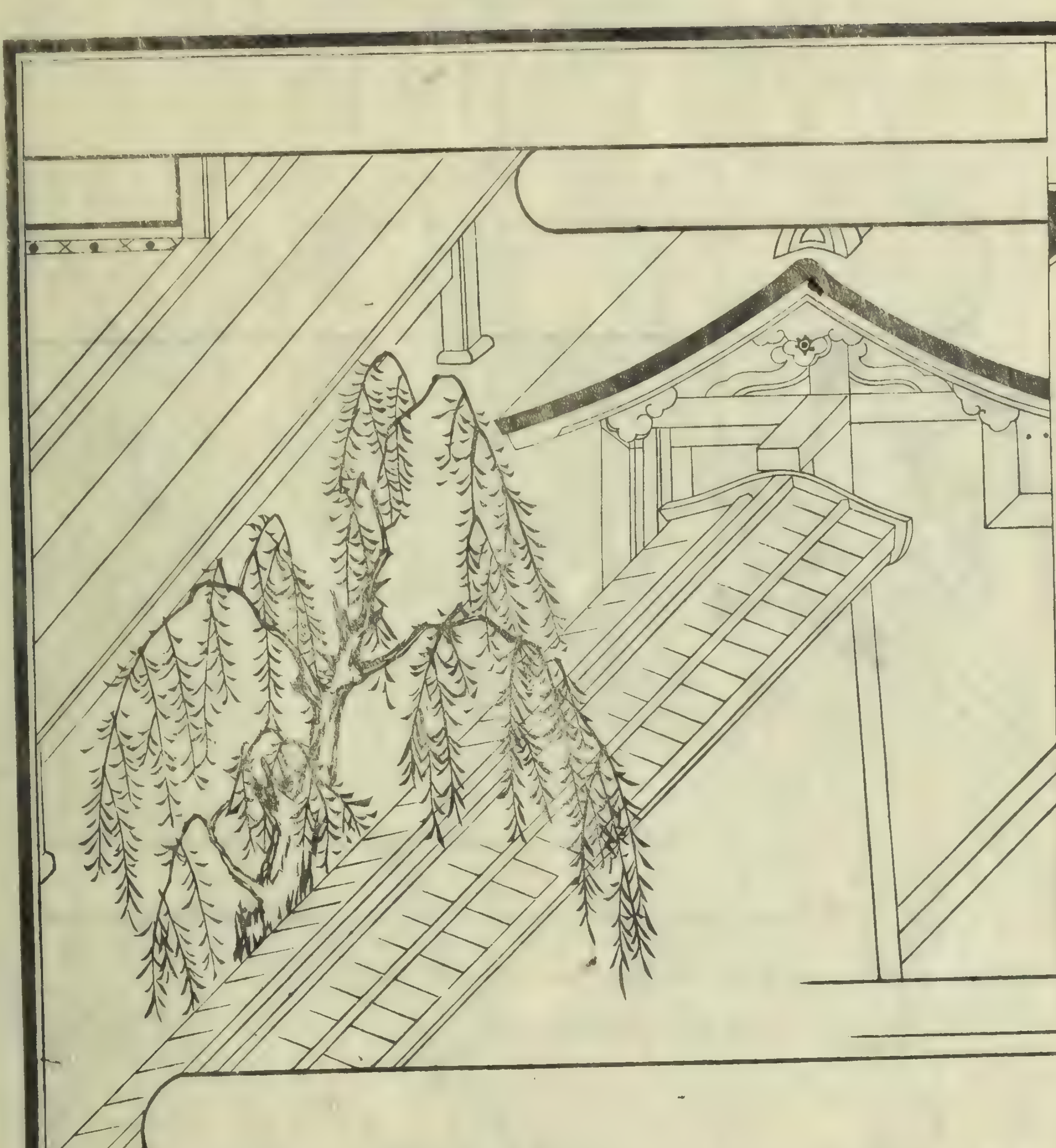


東土につたはりて不空恵果師に相續で大師
にさづけ給き志かれバ傳法の信物悉く
列祖相承せしより今千里万里の煙波
に臨く遥に西朝累葉の印璽を授まふ
ろ若て凡俗の思議をよびがたし聖人感通の
いくまる事を志めしよからずや其後渡海の
あひだ風波の難にありて漂没をあやぶみ
ありし時大師ふかく誓給く我諸天乃威
光をまし国家の福利をたすけむがために
一の禅院を立て法によりて修行せん善神

護念ましまさく本郷に達せしめ給へと
祈念志揚しに種風ふきとゞまり給によく〻
逆浪もとしくも志づまりしかば恙なく志
ほりなうまれ今の高野山金剛峯寺のかは
素願とはさされんため先に建給所の仁祠
なり飛行せし三鈷又此所に留りましましに
お儀奇異の儀事なるとや
平城天皇の御宇大同元年十月に大師帰朝
し給則請来せし法文道具等一巻の書に甄
録して大宰の大監高階の真人遠成に清帯て

表をたてまつりて奏聞せり進官せらるゝ所の
經論二百一十六部四百六十一巻その外兩部曼
荼羅の尊像傳法阿闍梨位恵果師より付属
せる具等その數稍多し皆これ國を護る城
郭世を救ふ舟檝なりと述ぶ委くは表せる文に
みえたり
おほよそ釋尊滅度一千六百六十餘歳に及
て唐玄宗皇帝開元年中に無畏金智の兩
三藏長安に來て翻經を弘うさかんに密教弘
時中夏に盛なりその後九十餘年の星霜をへて

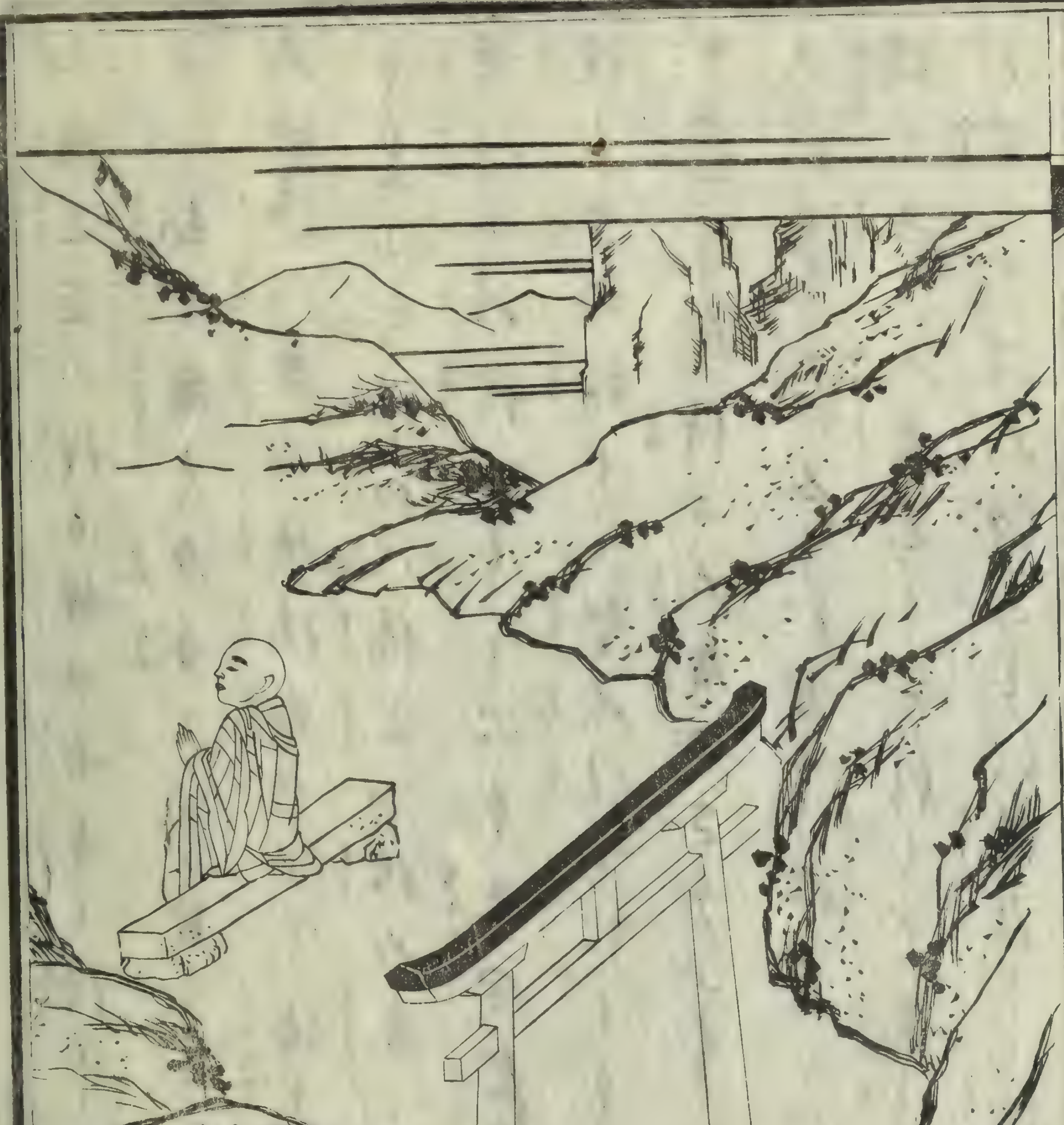


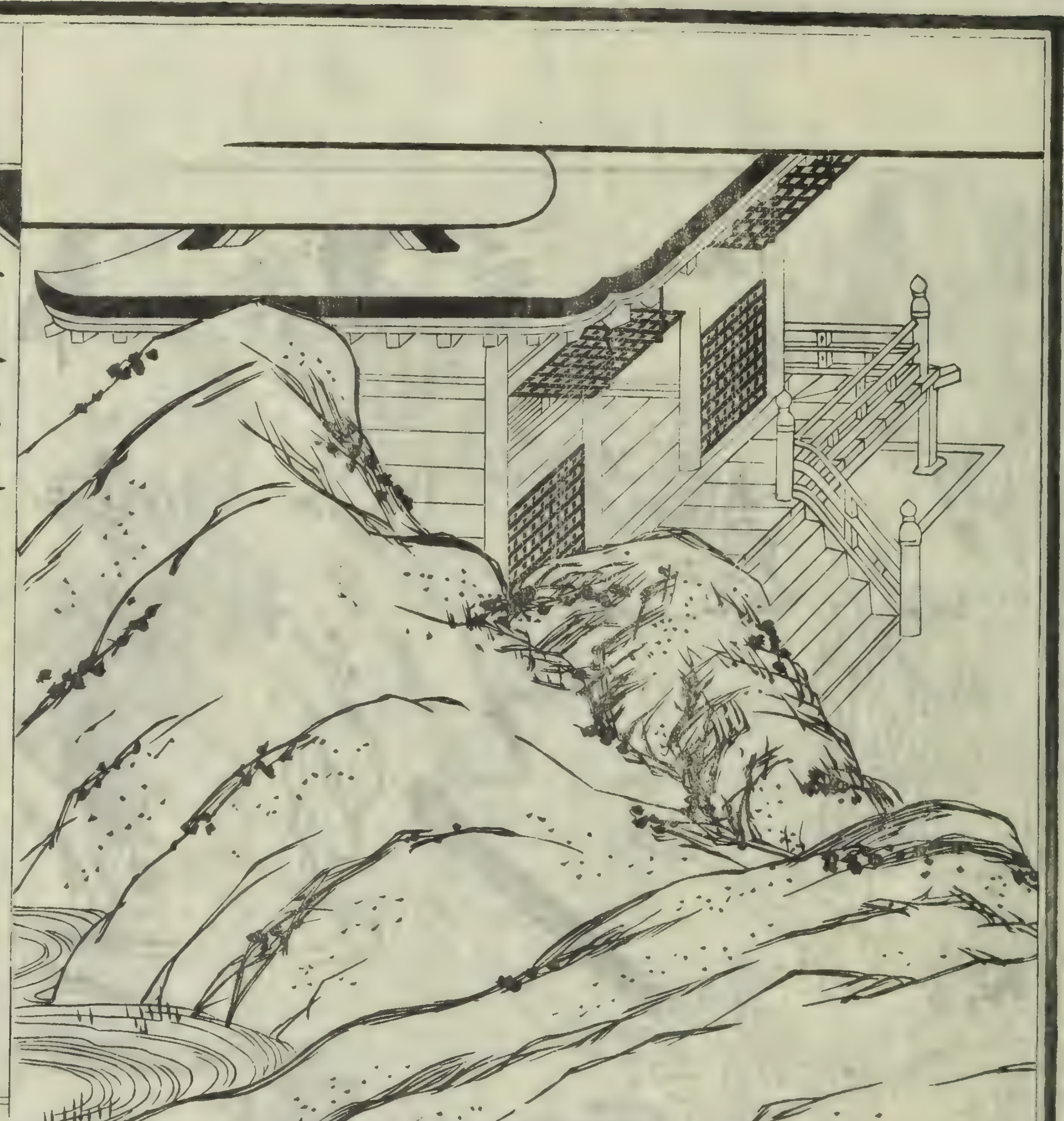




大師李唐に入て傳燈寫瓶の願成果し桑梓
に來りて虚往實歸の旨をひろめ扨て彼道
照は慈の異域に佛と同く當七宗の範乃
顯綱にかゝり恵慈潅の本朝に道をつ
むる此二諦八不の權園にとゞまれり
宗に大師はじめて三密の恵炬をかゝげ給ど
智者法門をとくえ給しに及く烏卯のうち
保青龍の流にうけ傳り志うけつぎて大師ハ
法身如來第八の嫡嗣として本朝真言初
一宗高祖たり大同二年四月に府牒を下され

西府逗留の程は観世音寺に住し給ひて其
年勅に應じて平安にいらせ給ひしより
大師渡入唐の時結縁として海上衛護の
ましますに宇佐の八幡宮を始め奉て肯勢乃
明神に祈請ありしに豊前国賀春大明神
詫して給はく聖人法をたもちし令試
かろくして給に大唐のさかひりおもむき
おはしまさんに志ある我を匿し給ハゞ我聖人に
随て共に入唐ありてたゆまず護持となるべし
と宥ありしば大師おほいに歓喜し給ひしかれ趣









忘ぐさとして大師帰朝のとき春日明神乃
寳前にして申給ふ難を遠に大洋の波濤
をわたりて今禅里の郷国にかへる是神の衛
護せる所なる肝に銘ぞいま此山をみるに
岩石たかく聳て草木さかれに松ひぞ我法力
をりつく樹木とれほさんとの給ふれバ明神
感嘆し給ふとかぎりなし刹香水加持
して巌岳にちかき給しうへ樹木うちまじ
りむひ清るりて千株万株の松ふみどりを
和雪ふもとへみへ一入再入の花乃紅を

煙霞に映じてあざやかなり洗溪乃梢にも
うつるぞ劉林が枝もうるほふと覚ゆる神徳
が惟馨ましかつはし佛智が孔昭なる
ことを孫ごとぶ垂援をへぎして今も志ぶれ
山まで侍るとかや
大同二年仲冬八日実慧喜済等が龍象を
卒して大和の国久米が層塔において善無畏
が疏に付て大日経の文を講じたまひし時
一萬餘の有勢が神祇来がわり容儀をかへ
かし講席に臨く聴学をいたし擁護哉あし



久米講經





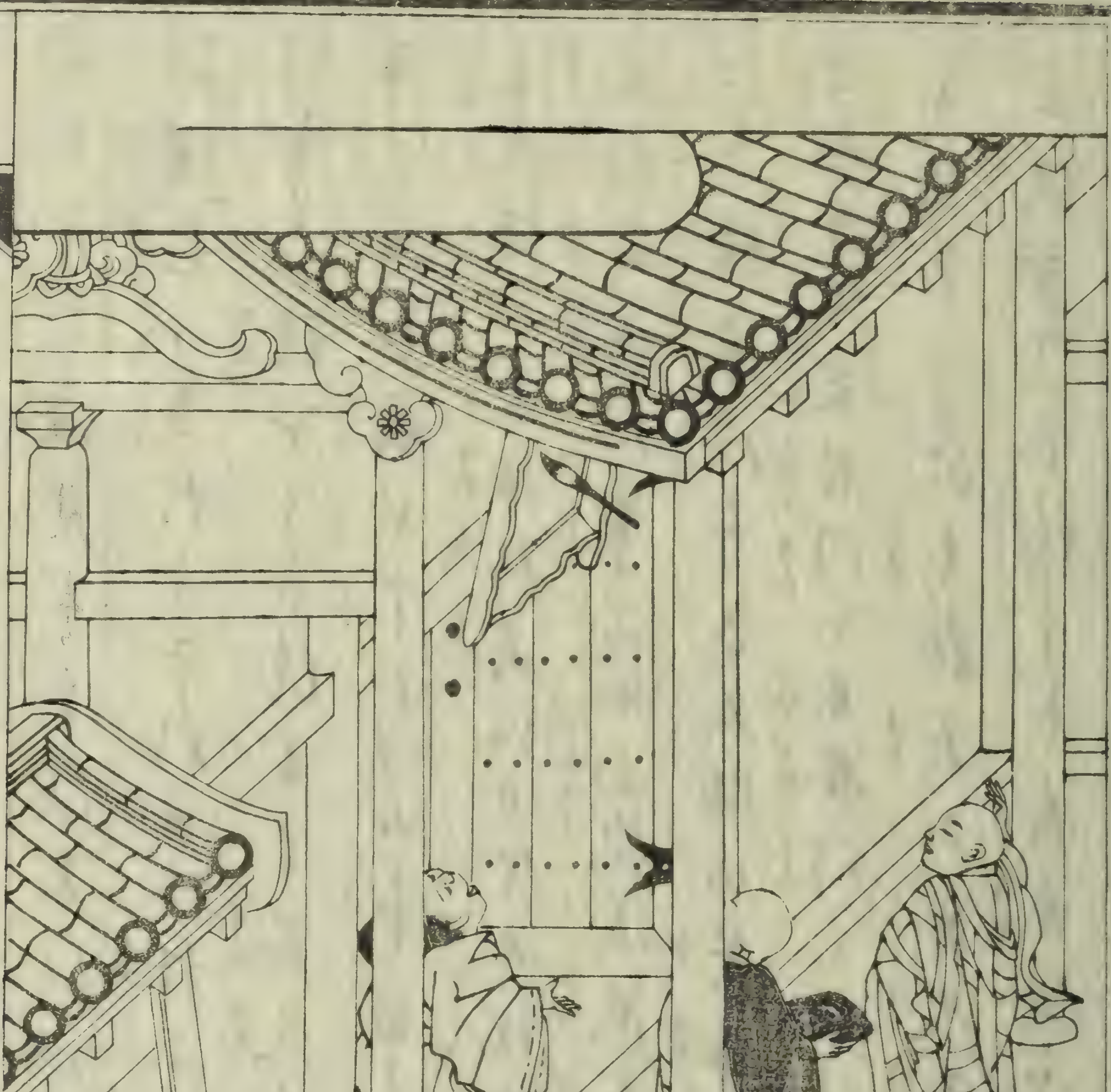
給へる事彼寺の記にみへたり。これ則大師の夢にして無畏三蔵に經王を得給ひ入唐留学に宿志を遂給ゆへなや恵果の室初の砌に来臨して三蔵の秘法を傳へ七軸の遺ると の畫給へる事誠に有る物とや柏原天皇延暦年中長岡の故京を遷して平安の新宮を建らる。其後嵯峨の聖帝登極の始弘仁元年に大内の周廓殿寮の諸門華構まぐにありけるといへども名額いまださかりしかば東面の門の額を

天皇みづから龍管を揮て宸筆を下し給
小方も橘の大史逸勢もしるしめし給
家よ勅宣ありて大師の神筆唐家に
美誉をふるひ帝都南面の三門よ
應天門の額ふ地かくも和尚もしてかくし
むべし雲天跟顔よあげりけれバ大師もる
いち勅に應じて禿筆を染給ふ鸞鳳
落ふがきりと象をふくみ龍蟠蒼海に遊
て義をはらかり張芝羲之も妙を奪はし
鍾繇蔡邕も恥をいだかしむ又應天門の額



大内書額

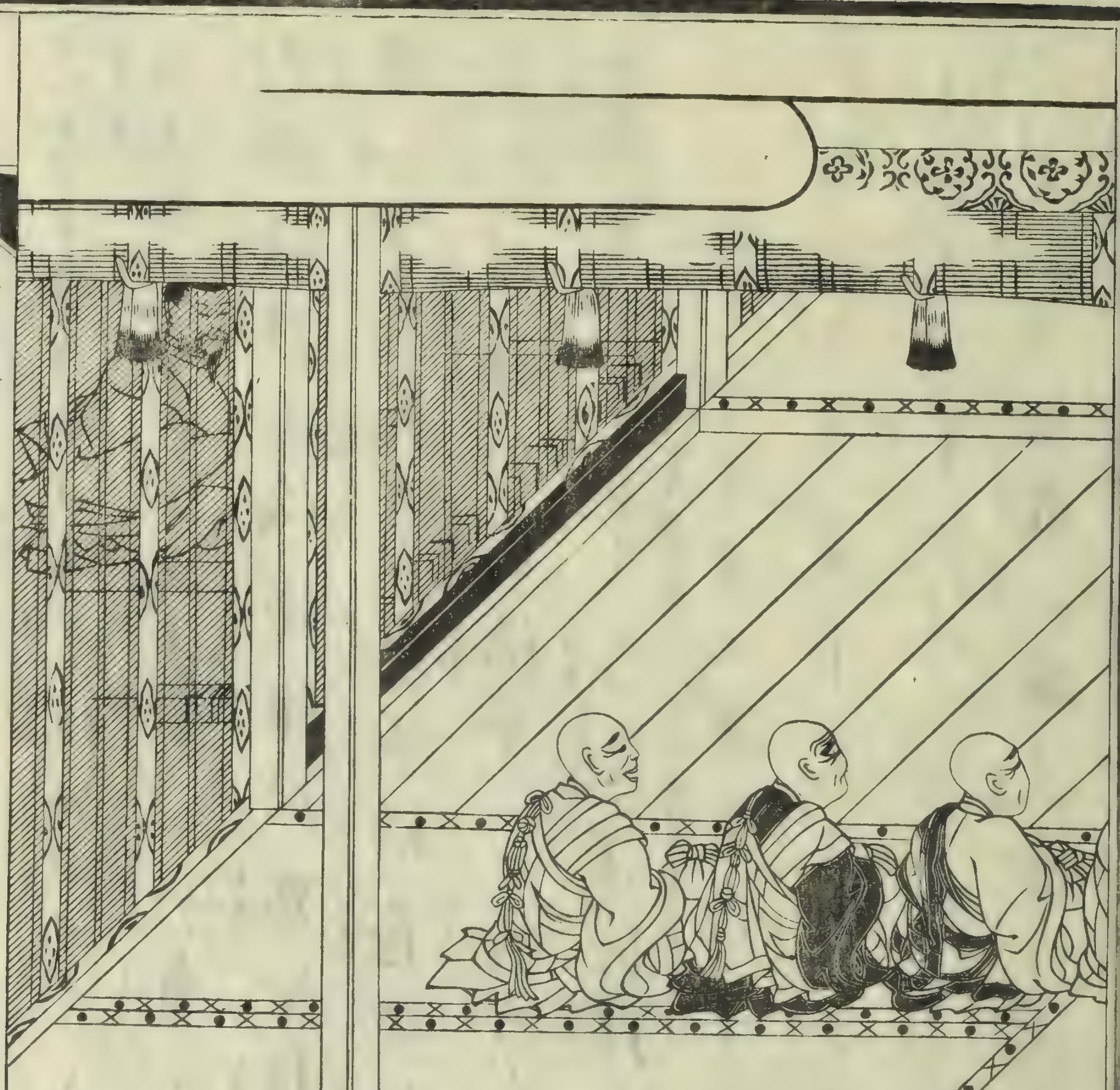




うち付て後見たまひけれバ應の字乃上の圓點かきおとされたる程に筆をなげあげはぢきて點をうちたまひ萬人手をうちておどろき感ぜずといふ事なし凡大師の眞跡精異ありて奇瑞しば〳〵おほし天徳年中に事あや小野道風大内乃額をかき續事侍りき大師の筆勢を難じてまつりて朱雀門を米雀門と云べしとあざけりたりしに其夜夢に異人来て弘法大師御使なりと稱して其首をふまへて打に

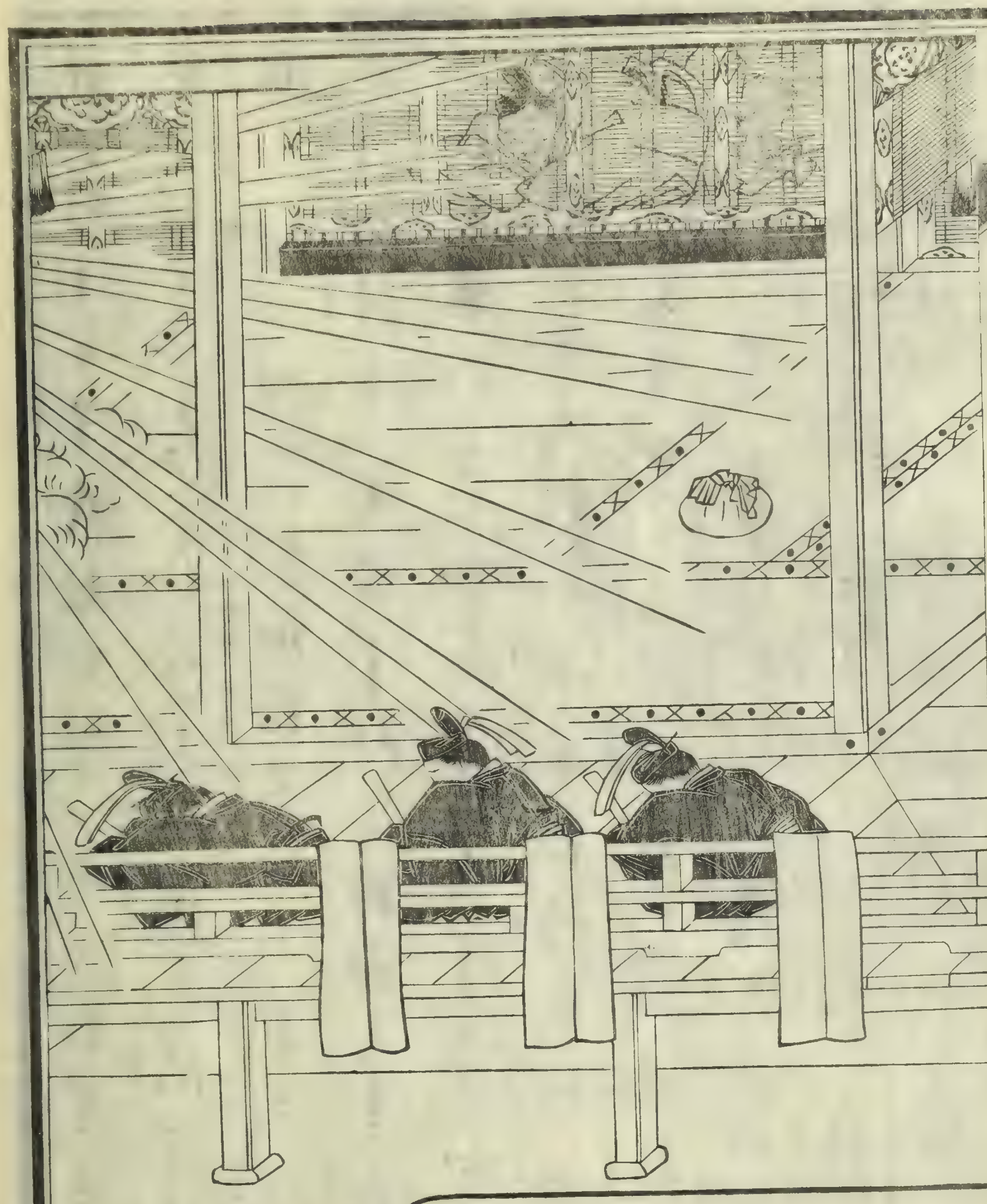
道風も驚かに仰見るに霞莫雲に入てそれ
人とみざりれ
圓融院の御宇天元五年の冬北嵯峨の福皇
泰安門を修造ありし時門基是赫耀して
額の字既に暗し旧文をうつしかえずしく
閻亀と加焦れる旨を権大納言行成卿于時参議
綸言を蒙りしに前車のいましめ然式存し
聖跡於是なりとおもひ清東寺灌頂院
にして祭奠とまふす諷誦を修して姑く
大師の冥鑑とこのくりに祖師の許容とのぞむと


清涼宗論

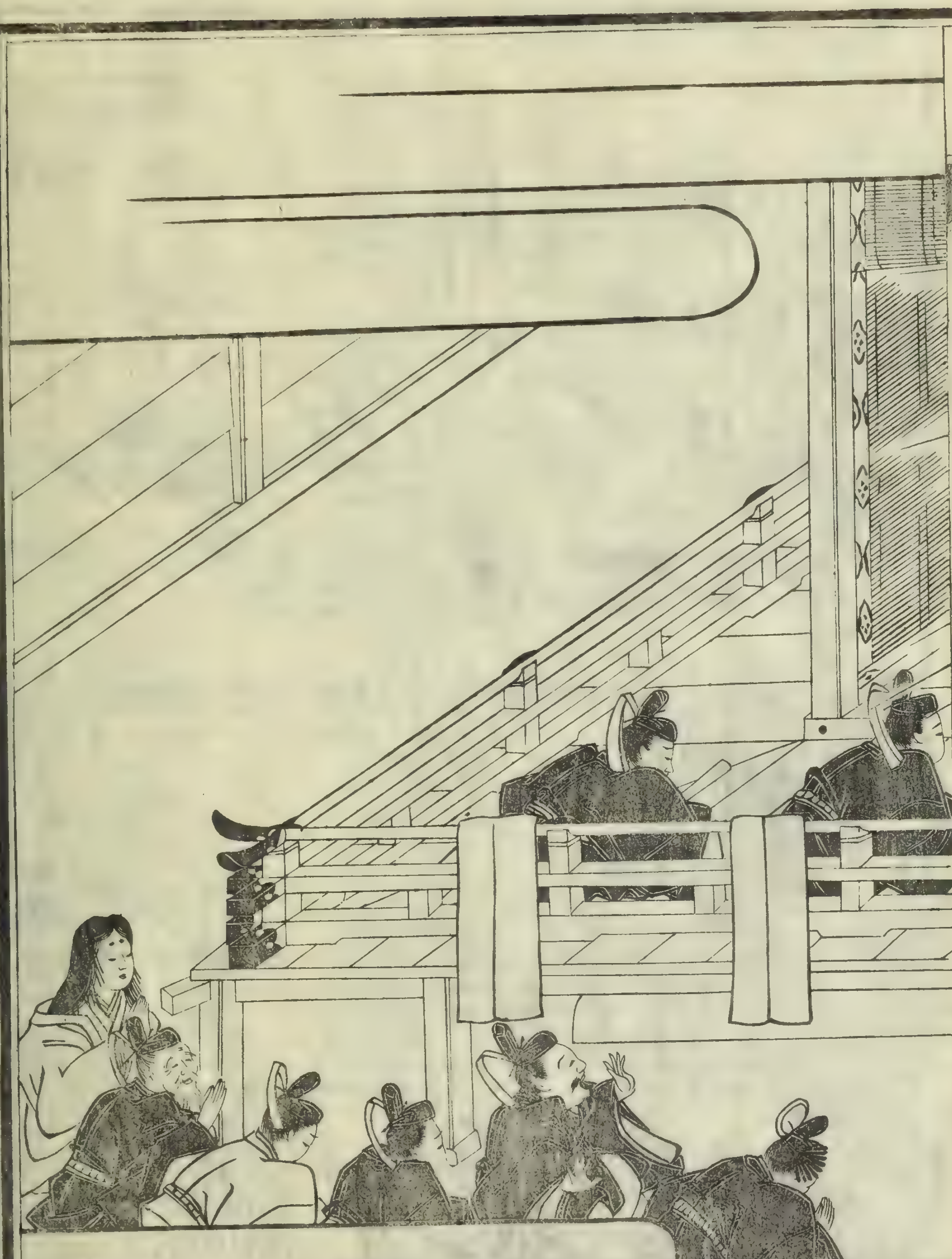


見えたりゆゑに円珍はいさゝしきる老子孫
緑池の長として久しく師庭に仕へ侍りや
大師伝教の後仏祖の恩を報じ国家の
福をまもらんがため秘蔵の教門にひろ
めて性海の真源とおもひさだめ給し
不道余宗よりも高く法流の冨ること
殊なるやこの名の英道絆とおもひをく
伏膺をなさざりしかば法水ながれとどまる
まして人機芽とはく事あらしむる時有
宗空宗の智象弘華法花の義読師庭に

競あつまりて旗鼓をならべ挑ひあらそ名迹
稱のならびくらひあらがひふ域蒙の風伐傳ふ
辨才浪をわかし論難双ともに末葉に清辨
護法の往事も来るやと思出しまし戒賢
世親は叢許しておしてみるべきことあらん
志かれども大師無碍辨の詞義懸河乃
流れとどまるなく三秘密乃加持時境顯
まれなれやかるを一生の現證即座の成佛
文理極成きらく南方にむかひて契印と
むすび真言を誦じて秘観を凝し給し時







肉身忽に遮那の真容となりければ風闕立どころに玻璃乃妙界にかゝやきしかば
びく一人首をたれ群臣掌をあはせ諸徒地に
おりて讃謝し百寮其式をなして禮敬を
しばらくありて本躰に還複して生仏の
無二なる事をあらはせり即身頓悟のうた
ぐひその日忽にとげ秘密曼荼の道彼時
まさにひらけける
昔八歳の龍女無垢界に速證を得しかば
智積身子疑惑の心をやむ今三密の祖師

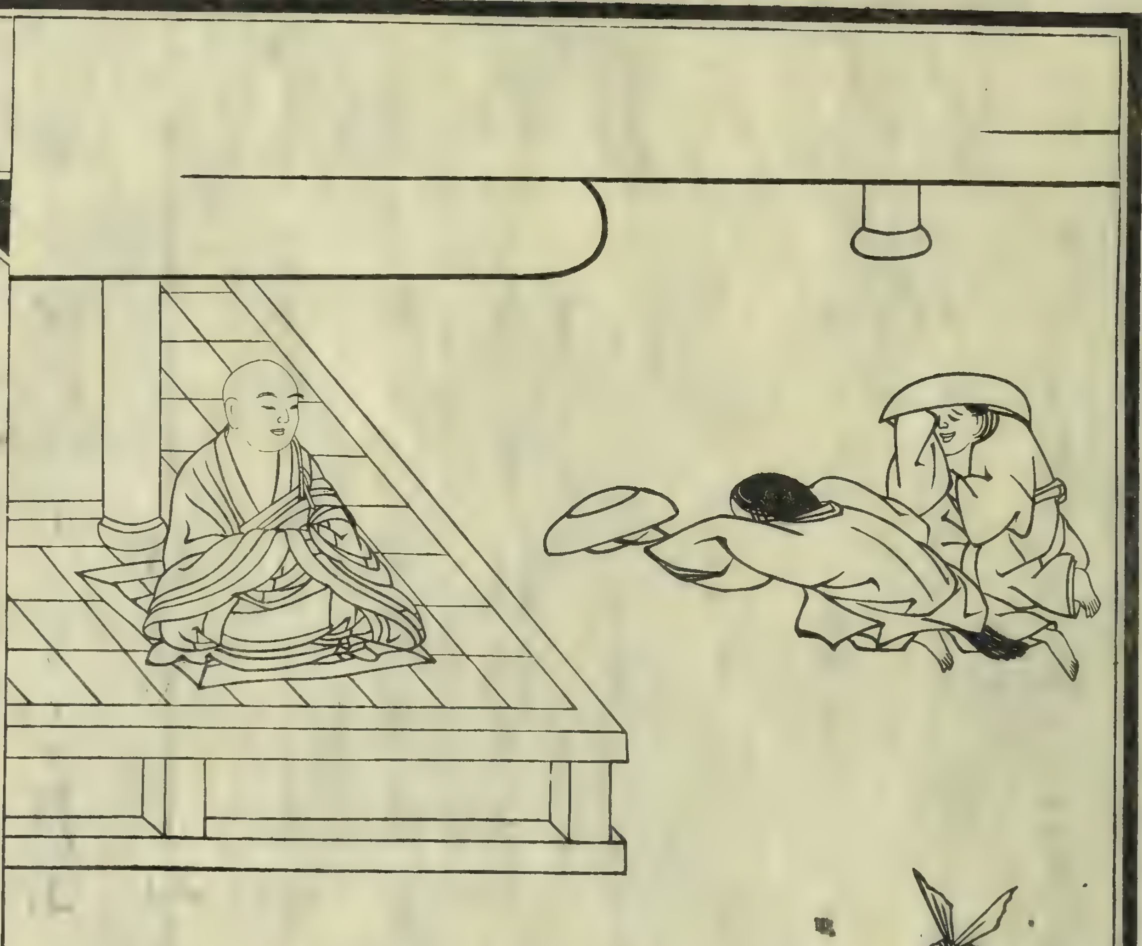
清涼殿の現成をあらハし給ふ義解の高
僧綱権律師となる彼在世説法の
砌なりし縁あれバむかしにかへりける是季
末濁増の時也いづくか御座しまざらんや
遂に則諸宗悔伏して門葉にまじハり一統
欽仰して道流をうく聖主延して席を
さり皇后敬て衣を送る恩寵のあまねき
しれ事ひげ尽き盡らば

弘法大師行状記巻之五終

弘法大師行状記巻之六

東大寺ハ聖武皇帝御願の精舎良弁僧正菩薩の梵閣なり霊跡なりて年ひさしく佛法さかりにして日のごとく良弁はじめて寺の別当に補せしよりこのかた良興良恵霊義等是なり釈門の大梁相続しく寺家を耗勢を嵯峨の聖代弘仁のはじめ年にいたりて大師をえらびて其の職に補きうなる比のころの事にや侍りけん大なる蜂


東大寺蜂（とうだいじはち）



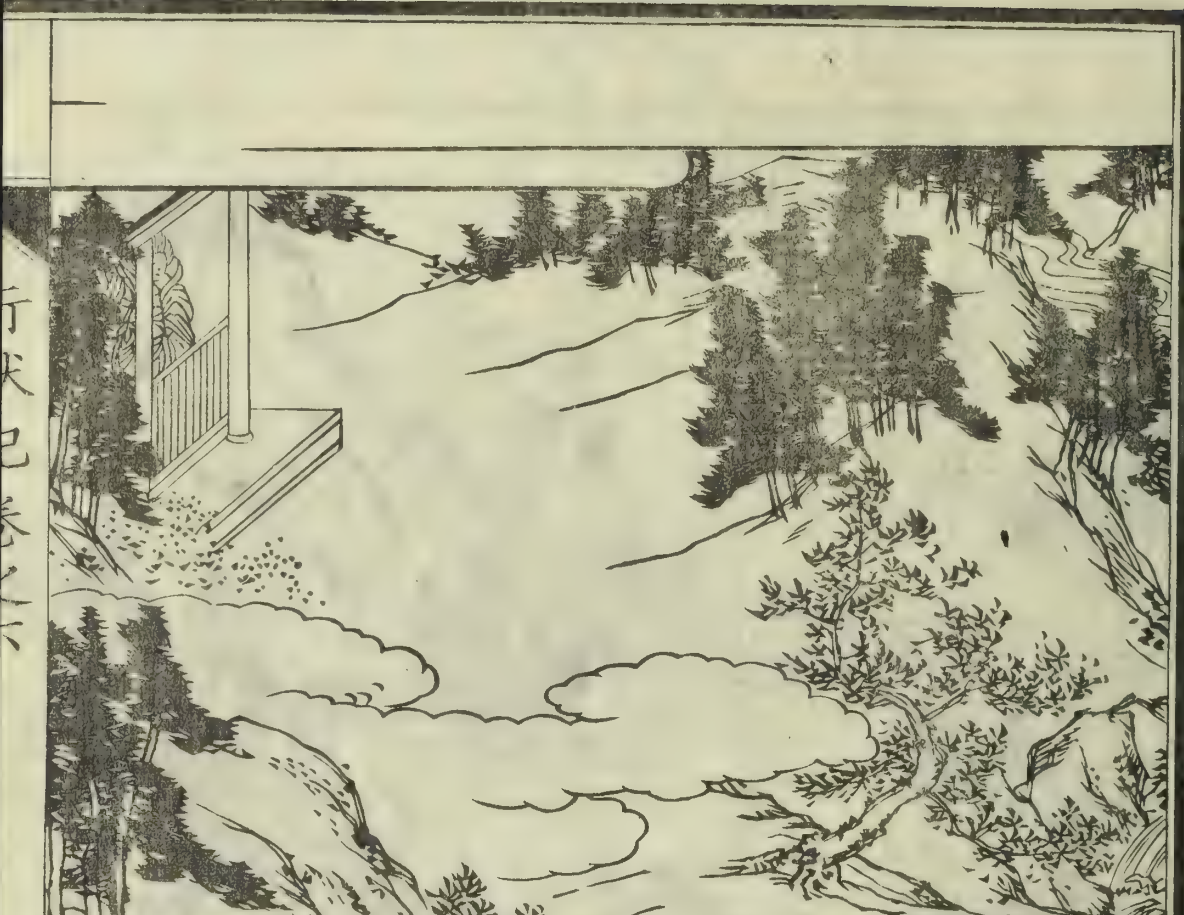
於勢分口ゟ寸ぎりける程にいろいろ出きたりて
人をさま事もおはゞしみるりける程にてきり代
なしさる事のもちう所に身をほろがせり
古賢の詞に人能搏二暴虎一不レ能レ安レ笑二聲於蜂蠆一
といへり思出る禍得りさるがよし法然まりけり
猶徒なる命を捨しに捨宝にとまるといへども
身をおしむ凡俗たるものとかくしてあとさり
ふき道ふよりて学業成やくまもりまもりて法
命波さふらへなんとすまことに寺の大魔縁なり
とこおしえゐへり公家この沙汰をきこしめして

宸襟しばしもやすからずしかるに大師より
勅ありてかの寺にうつり栖しめ給ひしかば
その蜂起なかく起る事なかりしかばおのづからよりて僧
侶寺にうつりて学校林となし京畿の緇素
ともに入唐和尚の威徳なりと感悦斜ならず
いよ〱たふとかりしかれば叡信いよ〱ふかく
して　勅賞ましましけるなり大師その寺
にまし〱しころなりけるに八方結護の神を
あがめ給ひまた三七修法の僧を奏をさまく
修法事一々にせられしげし修練の旧跡今に

あひのまゐり西室南院等にまゐり
清瀧の峯神護寺ハ稱徳天皇の御宇神
護景雲年中和氣朝臣清麻呂勅使と
して宇佐宮に詣せし時八幡
大菩薩神勅ありしによりて建立する所乃
仁祠なり息子眞綱の大夫大師の徳行をたふと
びて師檀のちぎりひさしきによりてゐましく此
寺に住し給く練行日をかさね禪観をこらし
つゐにありし颯々たる暮風房にみちて住乃
袂をふりとゞめうし陶々たる清流岸をひたし

て四倒の垢をすゝぎ雲巖に臥て茵とし松
栢を友なひて隣とせり松まにふるゝ感通道
をあらはしきまりにかりしかば地京にあまね
く松おしめされく公家にめしありて出洛し
給ふわらはつ孫にまの所に栖宅し給へり
弘仁元年遷舎けし綸表をたてまつり十月乃
一日より山つといでゝ秘法を修練しき
皇銘の福祚ながらんとれむ深ありま紙中らけ
ら家香詞にいはく空海幸に先帝の造要
に沐しとほく海西にゆゑびてかまし灌頂の


高雄練行







道場に入て一百餘部の金剛乗の法門をさめ
うるとはえらり此經をまなぶ佛の心肝に
乃霊寶なりもちきこゆるところの經法の中に
仁王經守護國界主經仏母明王經に乃念誦
法門なり仏國王のためにことに此經をとき給ふ
七難を摧滅し四時を調和し國をまもり家を
まもり己を屈し他をやすくするものの為
の秘妙なり空海師授を得といへどもいまだ
練行あらはず伏て望らくは國家の為めに
諸の弟子をひきゐて廣雄の今の高雄山門に

抑かく来月一日より起首して法力の成就に
いたるまで且ハとしへ且ハ修して其中間におゐかく
経所といひて其餘の坊をかうふらしむ伏見天
皇叡感此心を鑒察ありてまへといへり其後さらに
御願と為し給ひて密教の道場となせり
ゆへに神願寺と名づけしとのちにいたりて
神護国祚真言寺と号す弘仁三年におよび
て実恵杲隣智泉をえらびはさだめて寺家の三
綱に補任し天長元年にかさねて定額僧を奏
しおかる真綱大夫此寺をもつぱら大師に附

属してまつりて灌頂堂護摩堂納涼房阿闍
梨坊等数宇の威風並の功果を成まり
其後真済僧正大師の付属をうけ給ひて一重の
宝塔を建立し又大虚空蔵の霊像を安置し
かさねて御願と奏しおかれ給へり又八幡大菩薩
大師と倶に盟約ありしによりて影現し給ふ時
或説御涙銘の
時於中新響云て
たゞひに其の真影をとうつしまし免
給へる神筆の影像いまに此寺の納涼房にとゞ
まれり大師のうつさせ給へる神影を鳥羽乃
法皇勝光明院の御庫におさめ給しを去建久

八年文覚上人しきりに奏事ておなじく神護寺を
にひかへたてまつりおほしまして真言灑水の
庭として尊神栖息の所とし給ふべき託宣
の旨鄭重なりしかば大師練行の砌を守り
あまさへたがひに影像をうつしとゞめられけるな
常住なる事にあまねくしるしや
欽明天皇の御宇仏教はじめて我朝につた
はり聖徳太子の御時法ことさかりに海内にひろ
まりしより七宗の行果を人毎にまなぶといへ
ども両部の灌頂は世にいまだしらざる所なり

釈尊滅後八百年のうちに龍猛はじめて内證智
城西天の境にひろめ給しがおとく聖教乃傳来
廿許代のうち大師つゐに秘密宗を東域にわたし
まゐらせ給ふ是まさに極果にいたる妙道仏家に
いる秘術なり凡智を一心にひらき三密を凡身に
得せしむ頓悟の径路是より宜なるべし今
機熟し時いたりて緇素化に伏し王臣徳に帰す
此代の天子まうとしく稽首し安給ふ嵯峨淳和の
皇居にまうしく灌頂をいはゆる弘仁二年の冬
わたる天皇勅ありて大師をもつて乙訓寺

は別當に補せられて高雄をさりて其ところに
移住し給ふ
同三年十月は傳教大師頭陀のはめで試も
ちて此の寺に来着して面とちうづき膝をまじ
へて大法儀軌とうまむしわよ灌頂の大経をひら
かん事を請じ給ふきくり大師はあましはく宗
生年四十許命清きね唯し念佛のためよ高雄
は禪居にうつり住まんとのところへきたり給ふ
唯これも許諾ありれ大師まさかりち乙訓寺乃
別當と辞して高雄の舊居に復せしよ歩じく


傳教灌頂（でんげうくわんちやう）



傳教大師この山にいたりて其心ざしをとげ給ふ
十一月十五日とりおく金剛界灌頂修す
らる播磨大掾和氣真綱大學大允和氣仲世
美濃種人おなじく密壇にのぼりて智水に浴せり
同十二月十四日又傳教大師のために胎藏の灌
頂をひらき給ふ此時賢榮。泰範。長榮。圓澄。光仁。光
定等は大僧二十二人此外の沙弥三十七人近士
四十一人童子四十五人惣じて緇素一百四十五人
誓水に沐し恵沢にうるほへり兩部都會の灌
頂此時まさにはじ傳まり同四年三月六日又

高雄におゐて泰範圓澄長栄光定康教等が
ために金剛界の灌頂を修せり同七年孟秋乃頃
又同寺にしてあまねく名徳を率して勤操大
僧都のために三昧耶戒を許して両部の灌頂を
授け給ふ彼僧都は高祖剃髪の和上にして釈門
秀逸の耆宿なり年歯かたぶきて六旬にあま
り大師弱年いまだ知命にみちたまはざれ
どもかくまで尊師の禮をいたし秘宗の脈をつぎ
給ふありがたきためしなるべし同十三年
平城の太上皇仙蹕を枉げらして達嚫を

施し仏戒をうけて灌頂を授けましまし海を大師
啓白の文にいはく幸に諸仏の應化金輪の運啓
の朝にあひ大同元年をもて曼荼羅并に
經篋をたてまつりしかはりしよりこのかた
愚衷感なくして忽に一十七年を經たり天は人の
ねがひにしたがひ聖は人の心をかゞみて因縁感
應せるゆへに今日　龍顔に對したてまつりて
ひとたびはよろこびひとたびはおそれ心神おく
所なしといへり
同十四年　嵯峨天皇十善の玉体を屈して

五智の瓶水に浴し万乗の宝位を遁て三密乃
法門を修しましゝよりこのかた　聖帝
皇后相続して師依とし群臣百寮競隨しく
帰頼あり
昔大織冠鎌足子奉公の勞によりて藤原の姓を
給ひ内大臣に補任しかく採禄の臣より嫡男
左大臣不比等興福寺を建立して氏寺となり
其後年序漸移り藤氏おとろへもてゆく殆他氏に
うばゝれんとせし處閑院左丞相冬嗣公大師と師檀
のちぎりあさからざるによりて藤氏の繁栄は

いのりたまふ。弘仁四年興福寺の中に勝處をと擇點して八角の圓堂をたてゝ不空羂索の像をすへたてまつりて修行持念し給へり。今の南圓堂これなり。大師みづから鎮壇を行ひ給ひし時、壇をつきける人夫の中に異相の老翁ありて詠じていはく、補陀落のみなみの岸に堂たてゝいまぞさかへむ北の藤なみ。これ春日大明神かさねば厚くし恭給く家門の繁栄まべきをつぎましめし給しかり其よりこのかた藤氏の執柄世とかさねていまゝにいたるまでさかゆる

ことなし閑院の丞相慈仁の志いよ〳〵増ゆく
信法の思ます〳〵深かりしによりて
陶化坊の内に甲第の地京をえらびて大廈の
構をいとなみ一所の黌舎を建らるゝのち券契
を授くなづく大師にたてまつり彼給孤長者
の沙金を志きし誠にひとしく又勝軍太子乃
林泉を捨したまひしにおなじし大師この精舎
を點じて綜藝種智院となづけ内外文業乃
規式をさだめおかれ汎く英通を招く三教
の簽策をひらかれあまねく童稚とすくひて略の


圓堂鎮壇



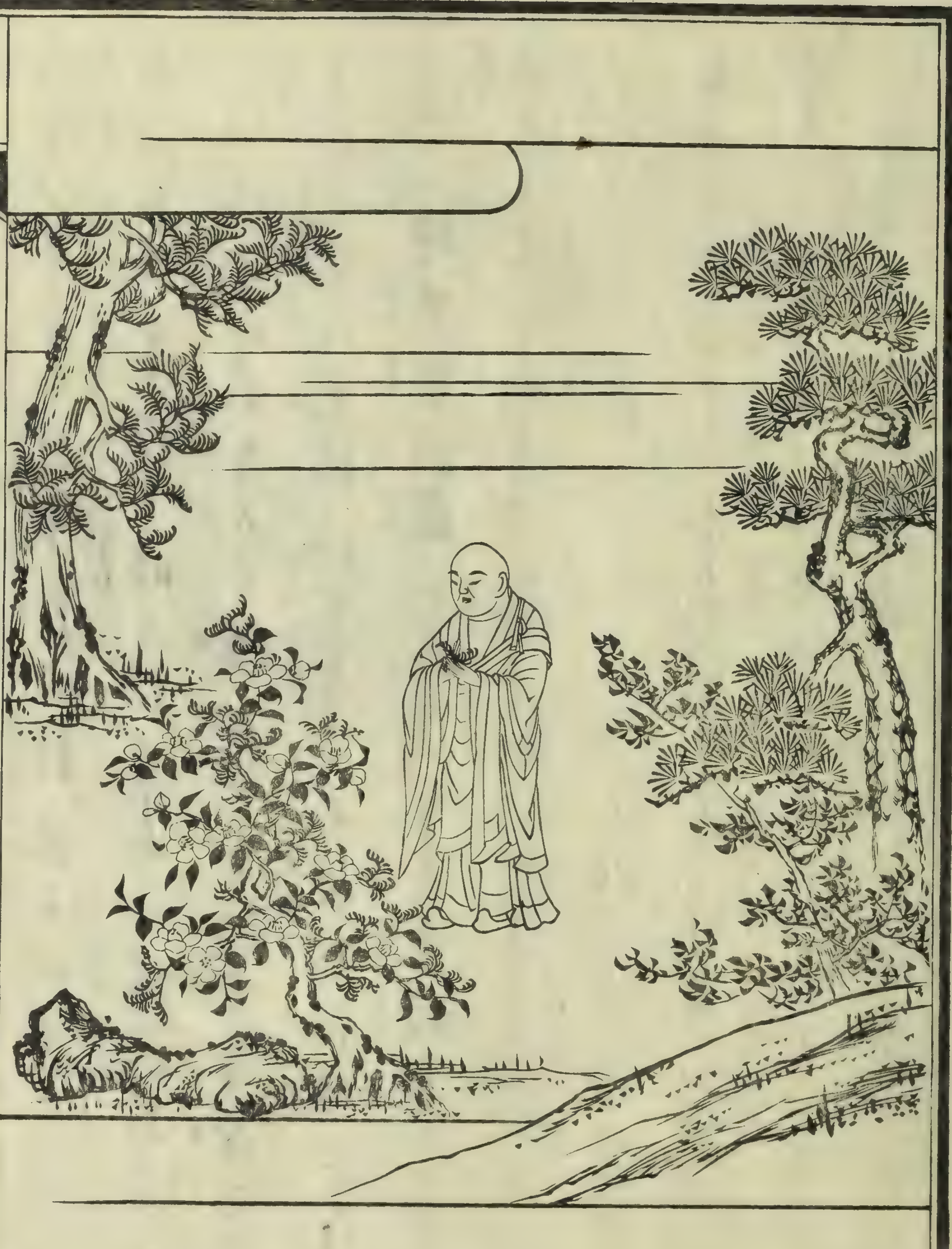


鑽堅とは常にましむするものは弟子どもより
いづれも藝士にしてなかにも冬嗣公の息忠仁公
一人師範の官に任ぜし日高友嘉并に追贈せ
られ万機の政理をみづからして大化遐迩に滂流
せり　國母　帝王も所齋よりいでゝ給へり
凡伊尹姫旦輔佐の任職を清ぎ三槐九棘顕要
の職掌となりし故まさにかつへは大師の法験り
おほくは明神の感應しくまへがたらしむる
ところなり
和泉國槇尾寺にて大師出家の初なりつ節よこの

所にとゞまり宿しましまして經誦し給ひけるに
この地もとより水とぼしきによりて住侶つねにこれを
うれへければ大師これを哀みて平地にむかひて神咒
を誦じ密印をむすびて加持せられ給ふに清
泉湧溢して其流汪洋たり緇素きたりのぞ
みて驚歎せずといふ事なし此の水をのむ人
やゝ精神爽利なるがごとし因て是を智恵水と
なづけりかの悉達太子射藝を学ましまし
し時釈種とちからをあらそひ給ひし矢に
金鼓をうがちつらぬきて地に徹して清流を


濁水手水

涌しけるを尋て浴池と為しければ土俗相傳
て薦泉となづく病ある者の飲沐するに効
験あり大師加持の霊水の徳被またく羅べ
清べれとや
又檜葉とりもちて浄衣まりきよ給しれ便宜
にさしひて楂のうへに挿うけ給し時浄誓約
ありて安着願もしはとしかバ此の木
の葉も本の葉に清くべしとの給ふよ檜の葉
をそれいち楂のうへにむひつきて根枝ひつて
かりて枝葉いまに繁り世の人是を葉水



となづけゝり昔印度の龍泉におはしまし阿羅漢にとまりし時かむところの楊枝をもてさしかば其の木なすぐく根をむすびて樹茂の林となり土人是をながめて奇観の佳境とせりいま大師明誓の感にまつえて異葉枝につらなり叢木ことゝ相まるあるにいやしきまざりしや松柏より経止住し給へる地とよぶら殊に奇特瑞多く勝絶とぞいはれけり法ぶさしにかのつきすべからずて釈尊西天に出世してを五竺に勝地をしめ文殊震旦に遊化して五台に霊窟のあとす

あまねく衆生をすくひ物を利せらるゝものなり
大師東海に誕生し給て聖跡下土に弥綸せり
もし遺流をくみ餘風をしたふ人は練行の
旧跡をたづねてまうづべく在世の親観にまゐ
らんとまてまつらんものとや

弘法大師行状記巻之六　終

弘法大師行狀記

風

弘法大師行状記巻之七

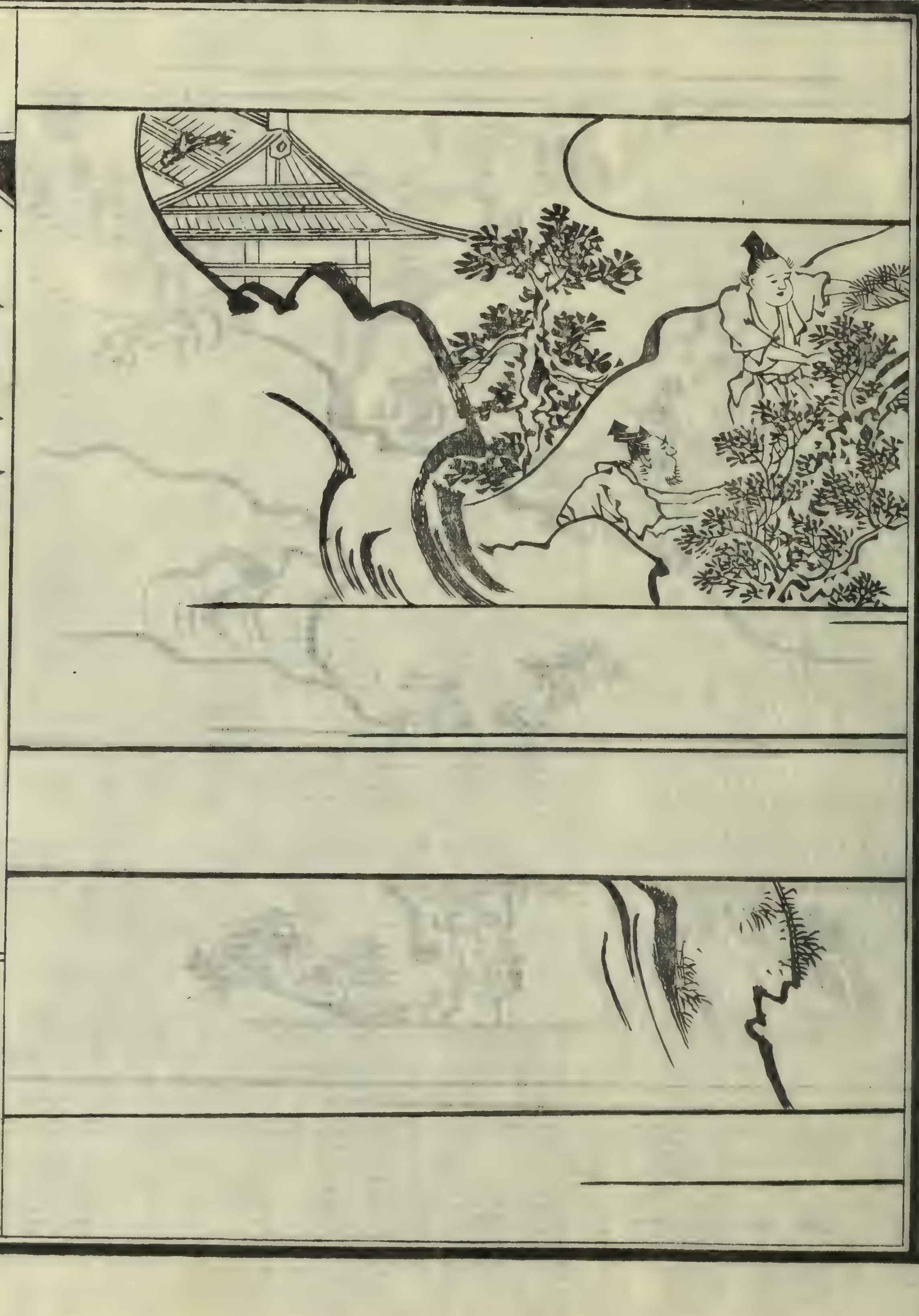
大師帰朝にあたり海路風波の難をまぬかれ給ひしも
ひとへに天神地祇の感応を仰がせたまふ所なれバ
すみやかに誓約をはたさんとおぼしけれど日月
ながるゝごとくして星霜もはやあらたまれバ
四運年既にかさなり一紀期を過ぎ弘仁七年季
夏乃ころ彼の素願を遂給ハむために相應の
勝地をえらびて修禅の梵宮をたて諸の弟子
をして法によりて修行せしめ諸天威試まし

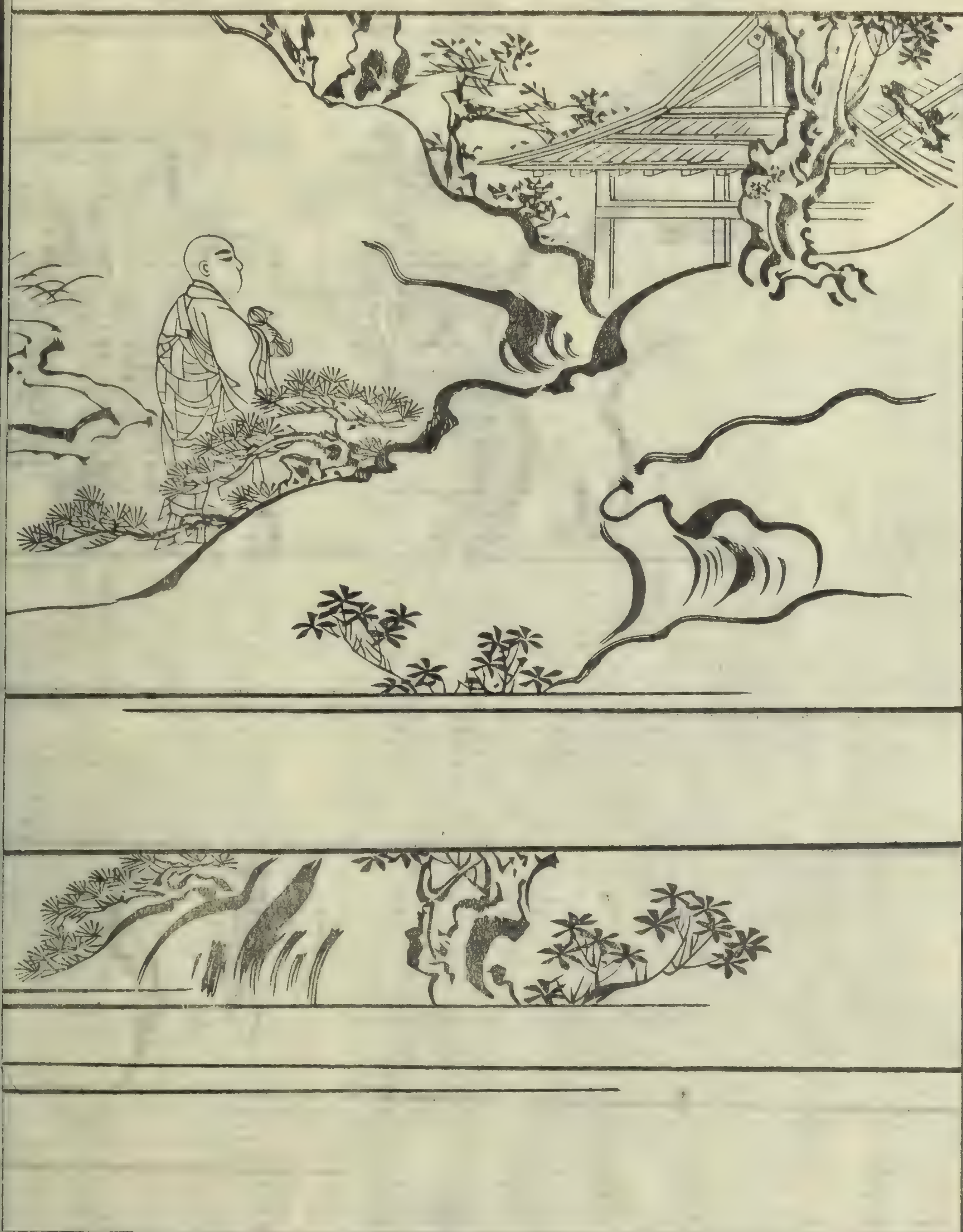
善根力を得て國をまもり生死利する基なるべ
しと乞食なる家に少年より世のうみ山林を遊覧
志給しが吉野山より南に去る事一日更に西す
向て毎日の程を經て平原の遊地より紀伊の
伊都の郡より南に到る今の高野山是なり
其地形を尋ぬるに葱嶺銀漢にさしはさみて白
峯碧落に連けり東西は龍の臥せるがごとくき
して流れの水にあり南北は虎の踞まるがごとく
棲息する地なり浮査に祭ざれども忽に雲漢より
入妙業を脊ざれども神靈とみるこゝ紙えより

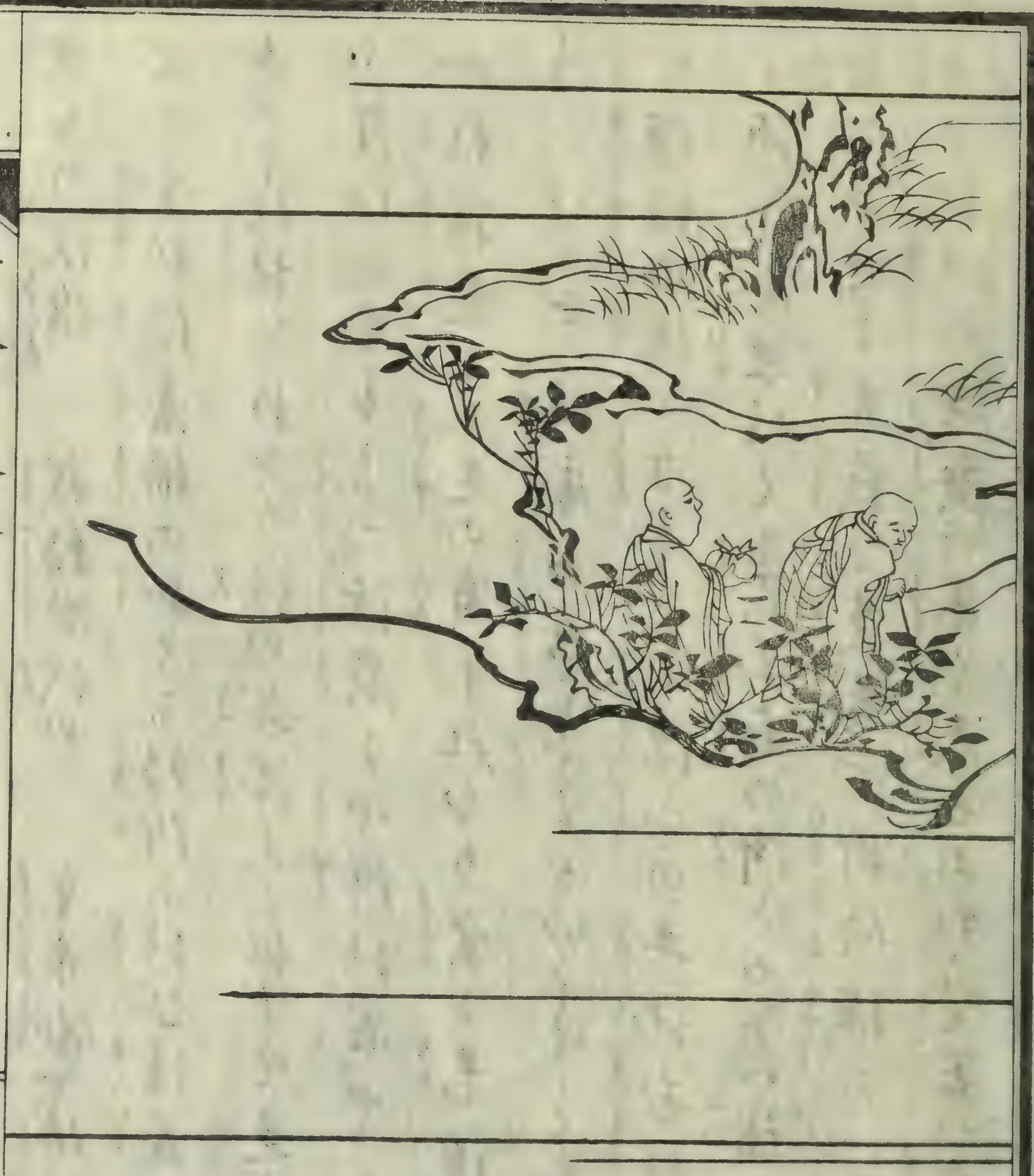
妙高をさして友とし輪識を引て常とせり
此の地も教旨にかなへるよし経禅乃許
なるべしと思食事まで六月十九日表を奉て
此山ハ請られ入定の地と定給へり
表の文にいはく山高して列雲及拘とかわし
水積くハ則魚龍産絶えもの心へに耆闍乃峻
岩に能仁の蹤体まで孤岸の奇峯に観世の
蹤相続たりまき許由を尋ねるに地勢をのづから
あらわり文よる庵嶮の如寺に禅窟肩試なるべく
天山於一院に定侶徒を連ね是則國の宝民の



南山表請







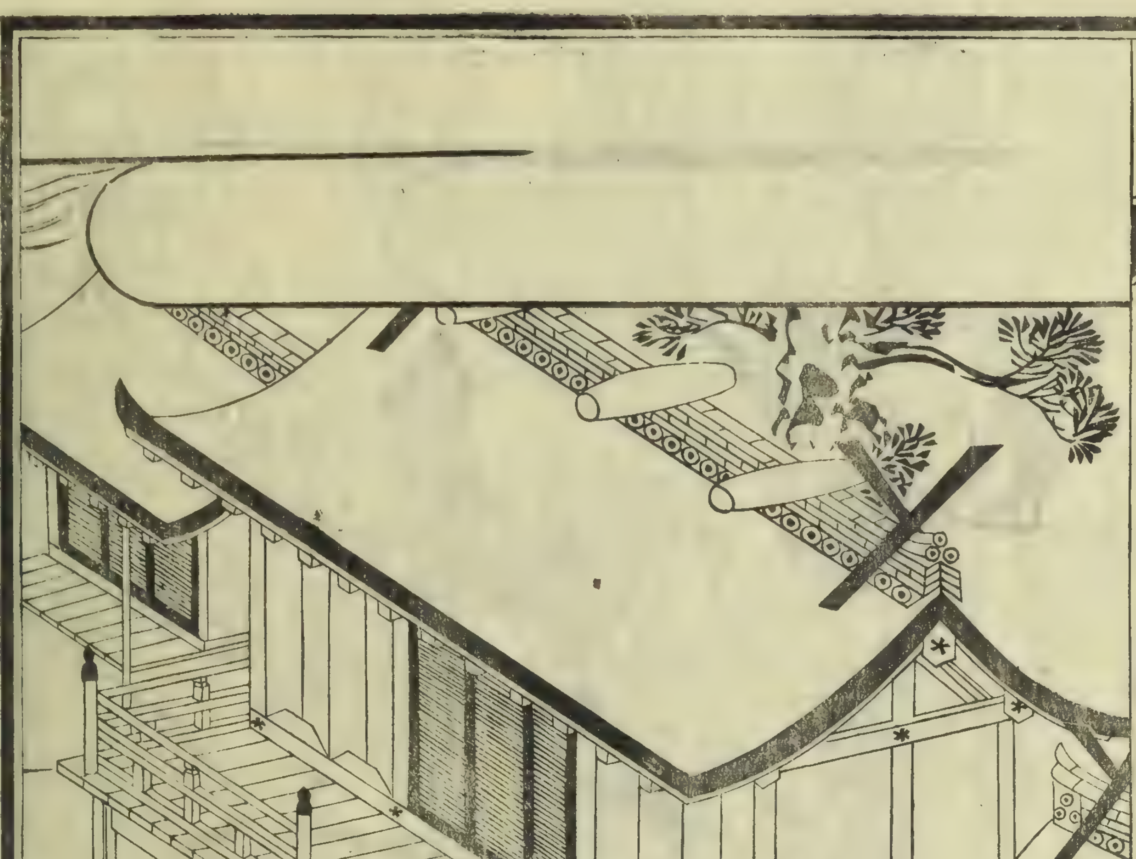
梁より伏惟　我朝歴代の　皇帝心を佛法にとゞめて金刹銀龕櫛の如くに朝野に及び講義の龍象寺ごとに林をなせり法の興隆さかんにして是より徂ら雑むら皇まで高山深巖に習禅錯窟空しく幽藪窮巖に入定の賓まれなり實に是禪教未流さいらず住處相應せざるがいたすところなり今禅經の説に准ずるに深山の平地も修禪によろし今思はく上ハ王家の御ためにハ下ハ諸の修行者のために荒藪を芟薙て精修禅の一院を建立せむ法の興廢ハ悉く天心にかゝる若ハ大若ハ小

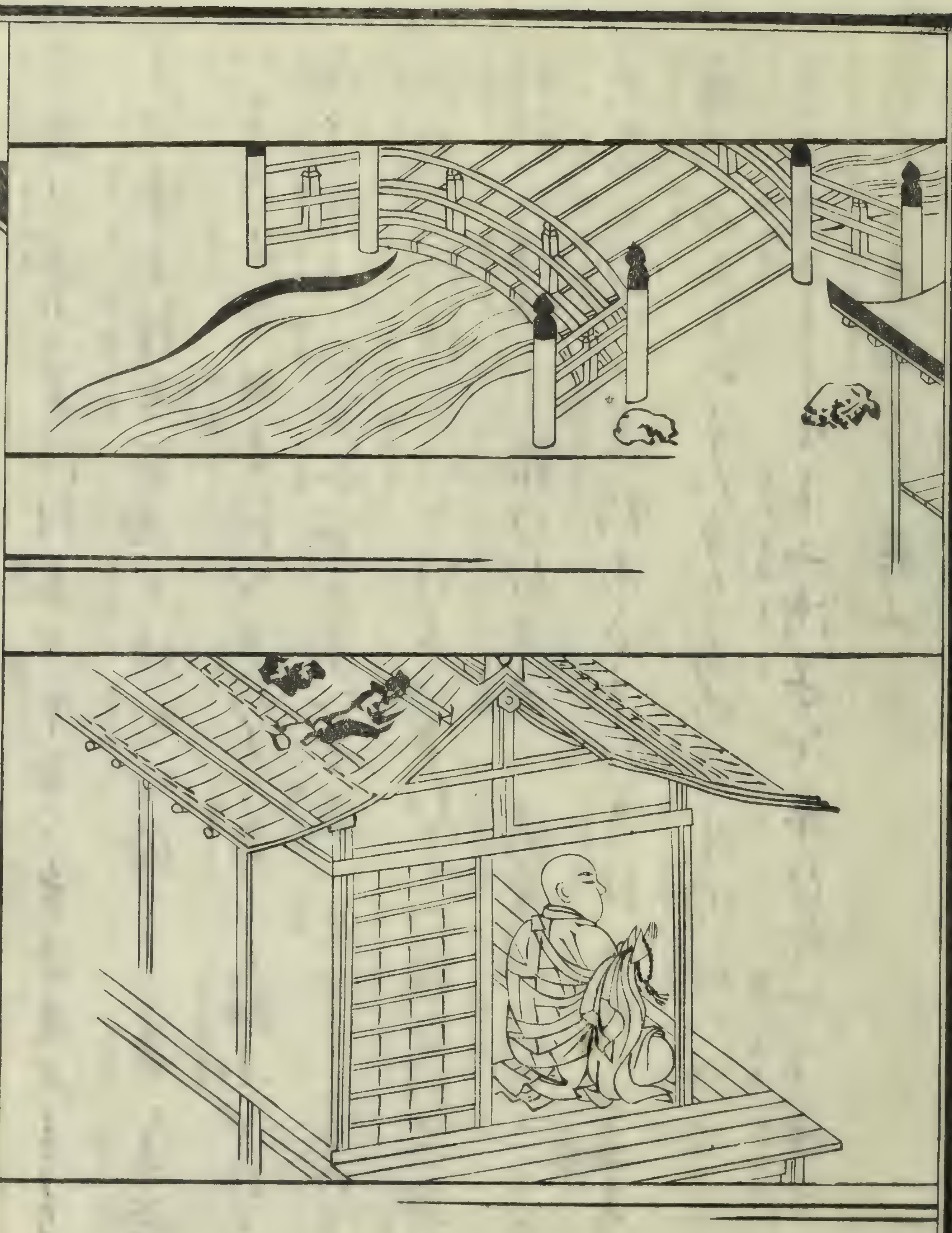
敢て自由ならず豈請らるゝハ彼空地を觸る事を
歎くなるも少願我遂む然則同時り勤念しく爲
露乃恩我答くくまりしむ由云々天許
とゞまり畢ならりしかば同七月八日官裁の
詔旨我下さる大師すなハち泰範実恵ホ北大徒
をさして彼山にむかいしめ荒藪をうりちらひて
且一両の草菴をむすび高雄の舊居我避て南
山の源嶺に移入給になり
大師南山に居住し給時頻に明神形護あり
所地主山王形をあらハして告てのたまはく吾

性山なるによりて穢土にうとし眞是浮雲乃まぐひなり吾も去此山の主也幸に菩薩に逢ふてまつる徳のいくまるなり則此領地を献奉まもく衆生に威験をましまし給へ寔に是丹生津比咩の一乃御子高野大明神誓約をなし給へるなり又大師彼山にのぼりたまひし時山路のほとりに女神丹生津姫の命の社あり其先がりに十町許の澤ありて今天野といふ也故大師山路に留し給しに明神巫祝に託して妾神乃ふかりて威福をのぞむ事ひさしきなり　いま



明神衛護





菩薩此山にして行教善が宰知り弟子昔人ありし
とれ食国鐘命家地万許町を給ひ南は南海を
かぎり北は日本河をかぎり東は大和国をさかひ
西は応神山の谷をさかへり願は是とゝめて
永世に仰信の情をいたさしむとの給ひし大師則
明神に法施し給ひてむが為に天野社のかたはらに
曼荼羅院を草創ましましき後にかのあめく
奥は山にうつされける丹生明神は伊弉諾
尊の御子として十二御子を率ひて一百廿人乃
異神を眷属とし給ふ

弘仁十年に結守と勧請し給ひし是らの神達を
崇たてまつりて此山の護法と定給ひ大師後生の
弟子門徒たらん人日ごとに教王真言経を誦じて
法味をさゝげ奉て道場とまもらしめたてまつるべし
まさに令法久住の策をなさん為まうしおきをたま
へりまさにまりて丹生高野の両所明神を山上
山下にいはひたてまつりて結護法護となる事
神威をまし佛徳をさかりならしめんためと
思しけるにや
大師官符をたまはり給ひて後伽藍を草創し



高野結界







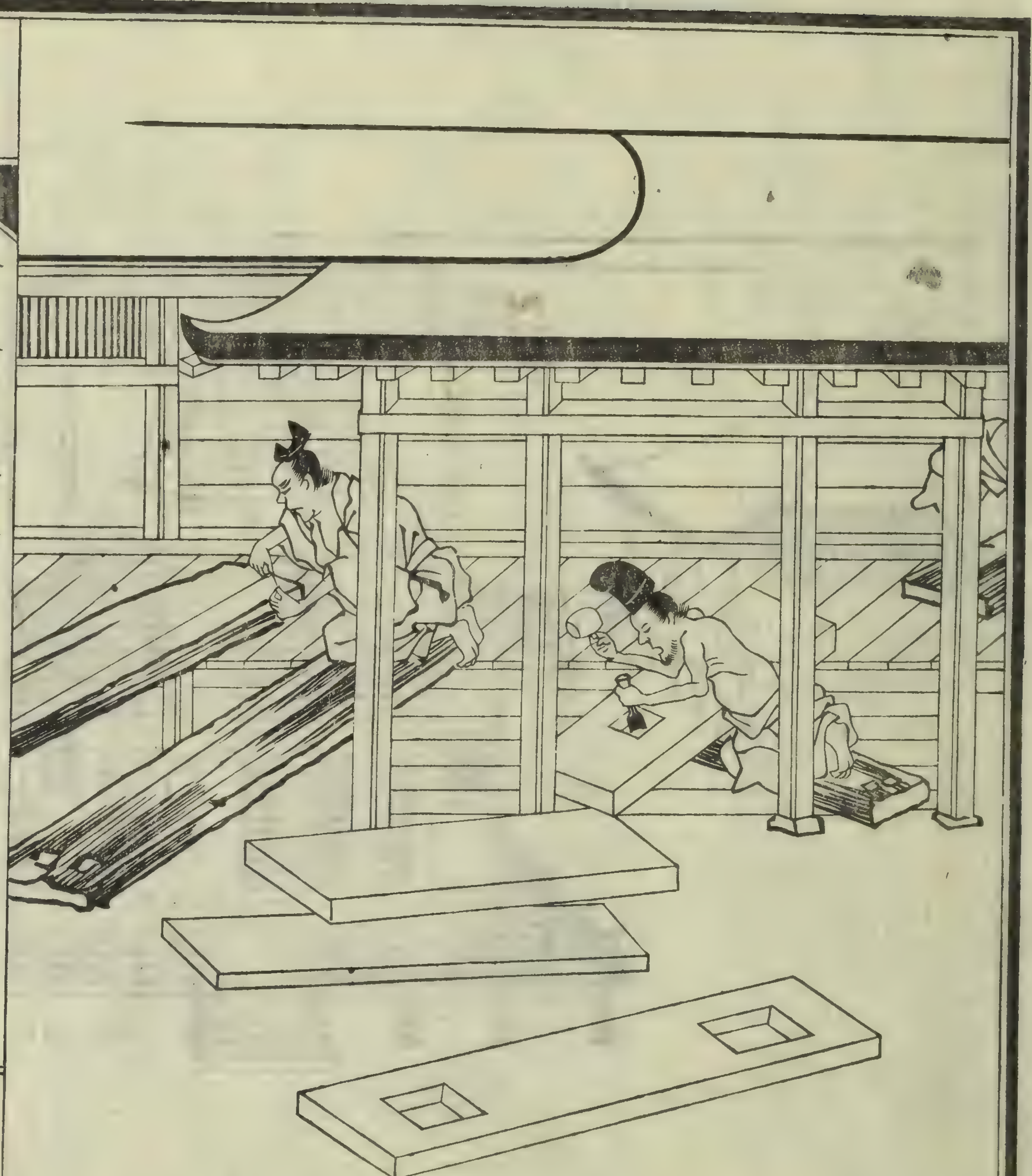
給ひしかば七日七夜大結界の法を行ひ給ひしに
東西南北四維上下七里が内になす障礙
なす悪鬼神ども皆悉善心起りて仏法の
中に利益あるべき物をば守護し給へり
又樹木を切拂ふ時唐朝より投給ひし三鈷
儼然として緑松の梢にかゝり是を御覧じて
いよいよ秘教相應の勝地なる事を知給へり自然
僧正大師の附属として中院を建立してもは
らの道具を崇らるゝとかや
又大師地祓ひにありしき給ひし時長六尺廣一寸

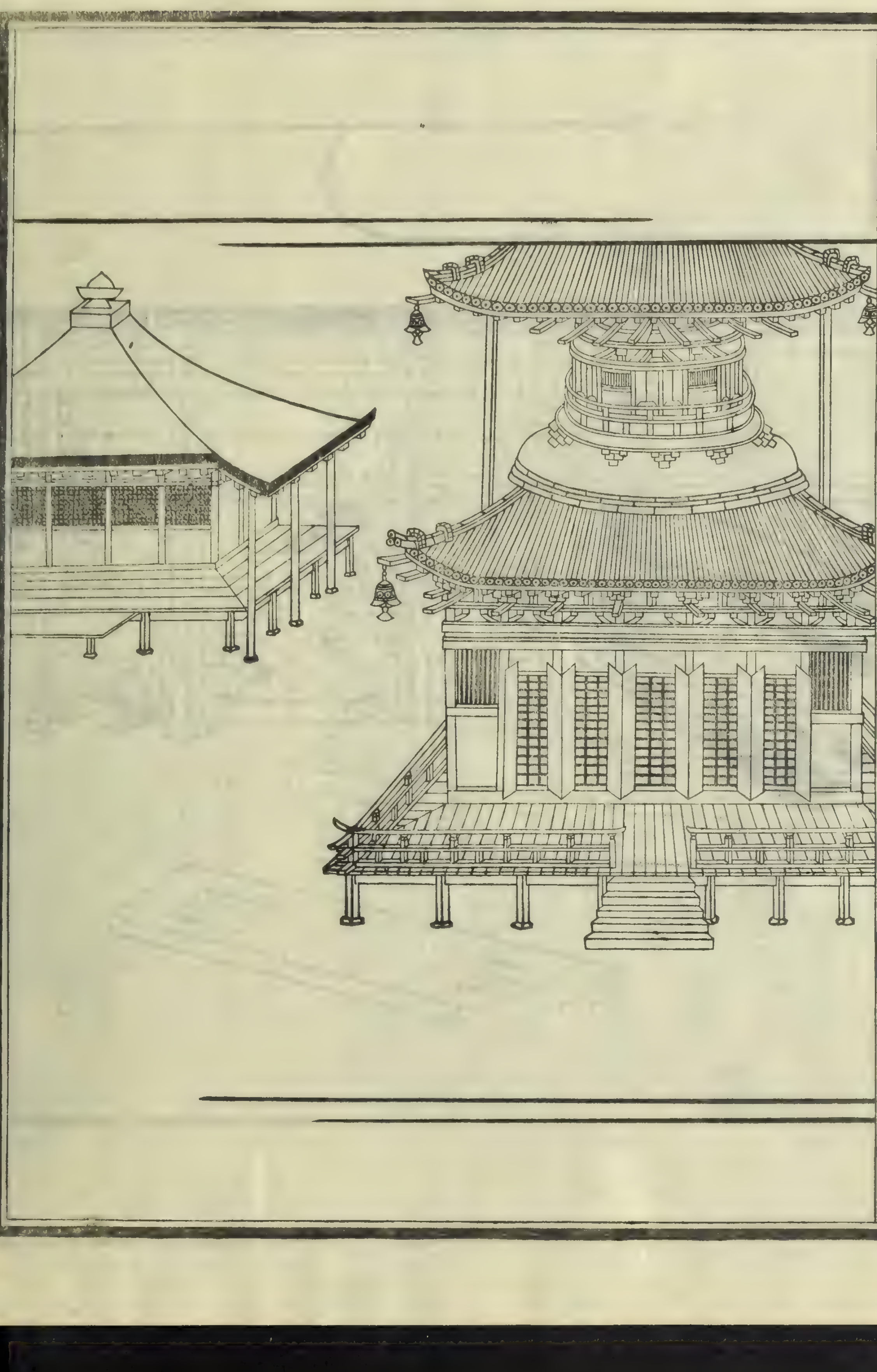
八ふの寳劔と石龕の中より堀出されけり則古紀の指要先仏の舊基なる事を證せり勅りよりて　叡覧に備ふに即ち叡感ましまして後に帰り後にはいさゝか誤りをなさゞること侍なり此石と埋ミけるにかれこれ事まじハ此劔のわざにやとみえけるによりて銅の筒に入てまたもとの如くうつし埋まれけり
大師居住し給ひて後上下の寺院堂塔坊舎多く其数ありけるがのち官に進じ御願の庭と申されて金剛峯寺と名づけ給へり先三間

四面の金堂一宇を建られ一丈六尺の阿閦仏八尺
五寸の四菩薩を安置しけり又理界智界
の樞機とひられ法界智界の仏市をおこなひまし と
思食されく知識を十方にもとめ与善を四衆に
の勧め給ひ小棟宇の荘様以多
寶の大塔を建らるゝ外にも八十六丈の刹柱の構式
拵ばせて内にある八葉院の営宮壇を並べて立
一層の甍雲は中にさしはさみ九輪のかざり花
の外に出でつり朱彩紅欄の操へ銘日に照耀して
わざやうに玉絵金鐸のひゞき晩風に寒亮と

していさゝれなし内外の荘厳秘密の表示を清く
させ給ふ事なし大師倍山志ぜし年始うさね
堂舎おかく清くり増もむと思ほし召ま
どうも　上皇志きりに　勅喚ありて中務省
に補せられ律師に任ぜられ宮中の御祈をなし
されども崇遠に志を遂給ふ事なかりしを思召されけるか
春秋の間一年に一度まうでらればかりなりし清覧
じ廻れり
又天長の聖主　勅ありて大和国久福寺
成されける是太師高野寺へうつし給ひ写の旅宿


堂塔草創

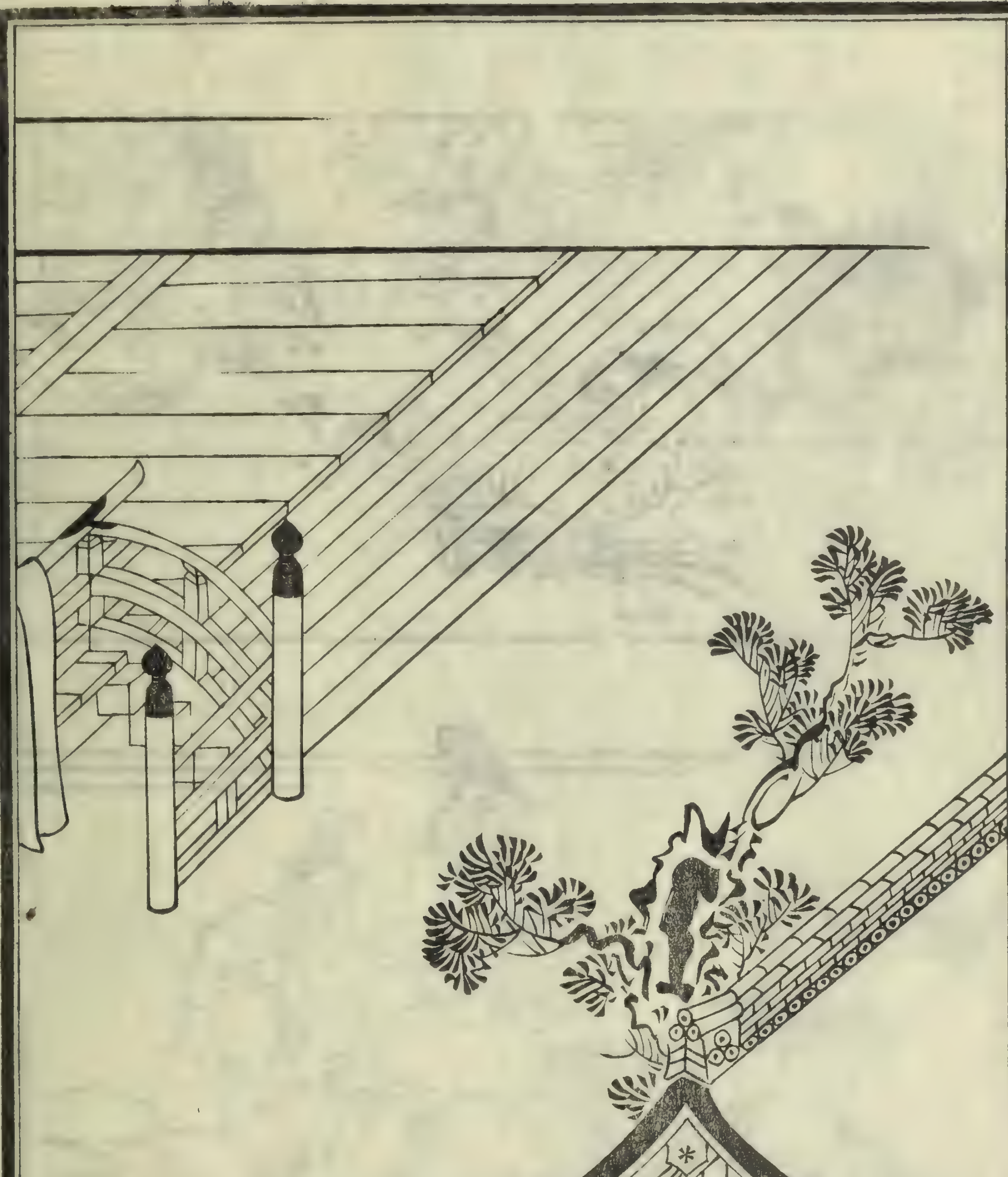


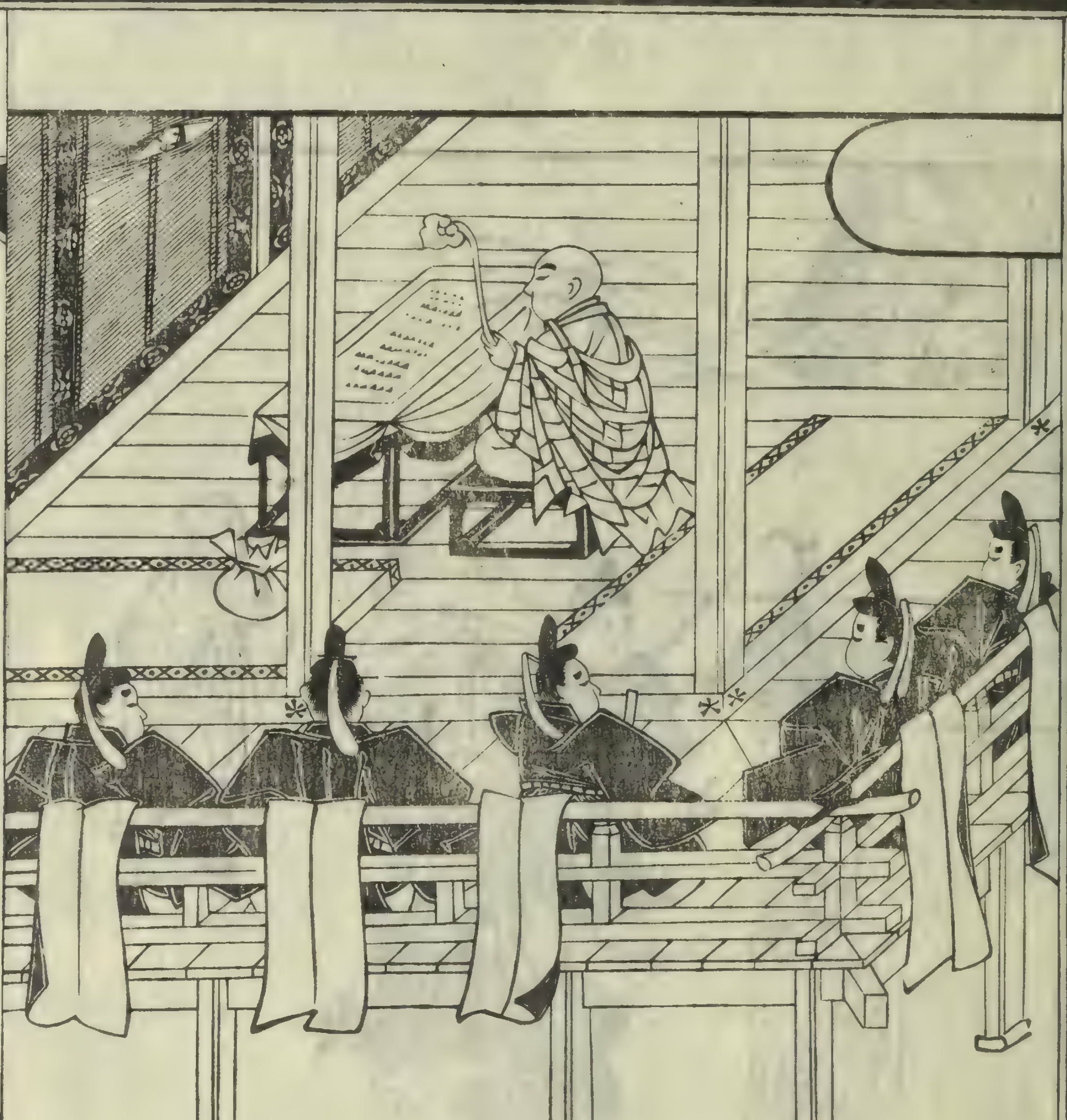


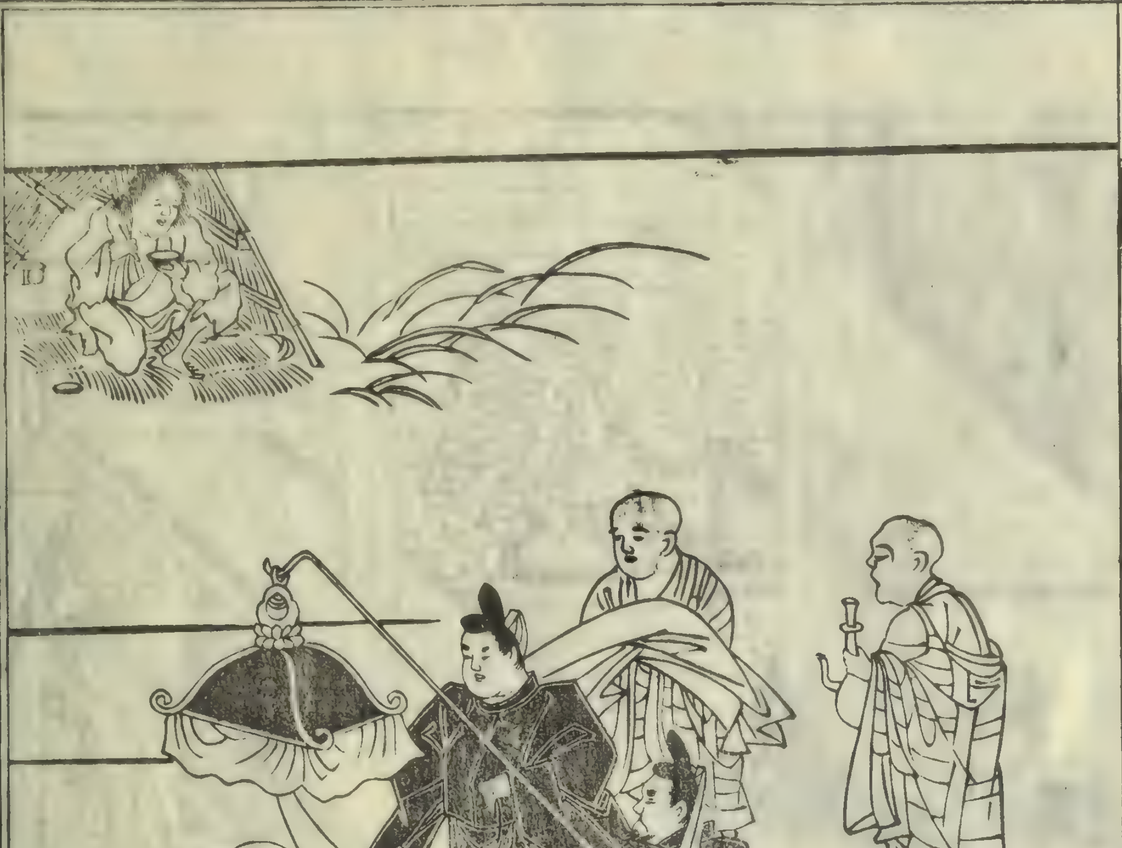
乃ちこれを須ふに河て給ひ世に弘まりし始めと
飛鳥浄御原天皇の御願なり大師に勅給
ありて後師資相承の系となり真雅僧正付属
を得給ひ後年永く東寺の長者に附ていまに
灌頂ある所なり
弘仁九年の春天下疾疫の災地に盈ち国中夭
死の輩多くして原野人ののぞみ禄をいとし閭閻鬼
神ありと成ぬるぞ　皇帝おぼし召しけれと
給ひ　宸襟やすからずで叡慮に懐魔のおもりごと
と担ばしめ玉ひ大によりて玉管をふるひて金字乃

般若心経を大師に請じて開題の唱導とし給ふ時　勅喚に應じて秘鍵一巻を製作あり心経の五分述旨を宣給ふに未結願に及ざるに蒼生のやうやうみちにおもく夜闇忽に變じて日光赫奕たりおのれ此書ハ神明殊に愛味し給ふ故に法楽したてまつれバさうかくば納受ありとかしこくも大師の上表の文に神社に請を蒙ハ此秘鍵を誦じたてまつるべし昔鷲峯説法の莚に陪てまのあたりその深文とこゝきり豈其義に達せざらんやとかゝせ給ぎり


心經講讚









此経(このきやう)につきて解釈(げしやく)をなせる家々(けけ)其のかぎりなし
といへどもはるかに鷲峰(じゆぶ)のむかし北穂(き)との麁く
まのあたりなる尊意(ぞんい)の今(いま)にまがひなしとふ事この書(しよ)
にしくはなしみだりに権化(ごんげ)のことしを称(しよう)し給ふ
なりまことにありがたき事も侍(はべ)るなり

弘法大師行状記巻之七終

弘法大師行状記巻之八

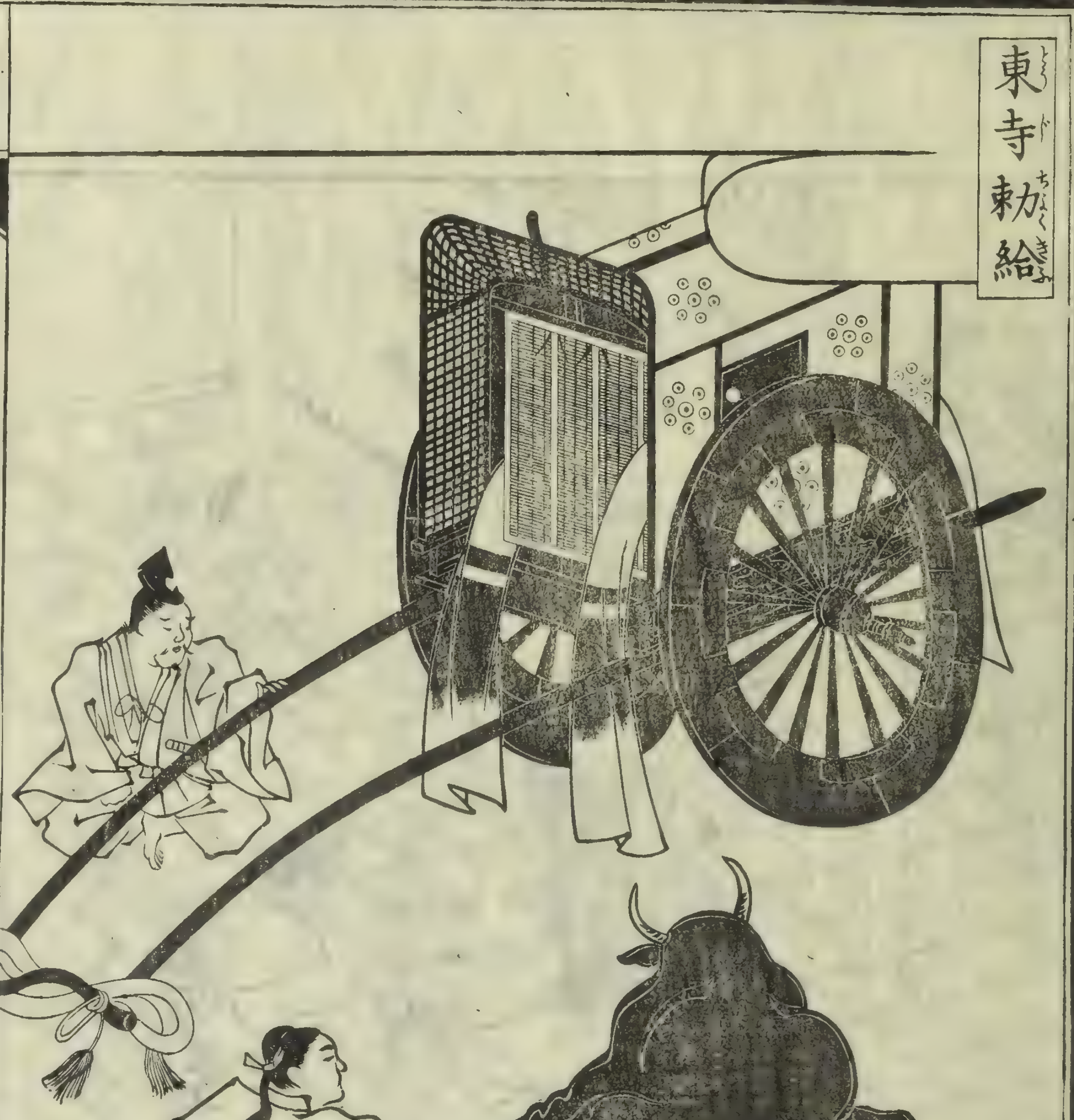
東寺は　桓武天皇平安遷都のはじめ国家を鎮護せむがために羅城門の左右にならべて東西両寺を建られし时延暦十五年藤大納言伊勢人をもて造寺の長官として草創し給ふよし縁起あり

嵯峨聖代弘仁三年十一月廿七日封戸を割て当寺によせられし時清起請符に云代々の国主をもちて我寺の檀越とし若伽藍興複せば天下興複

し伽藍衰弊せば天下衰弊せん若無道の主邪執の臣
はかりて若は違犯し若は破障して如此ならずは此人
かならず三世の諸仏一切の賢聖を破辱し
ぬる罪を得て経に無間獄におちて無数劫の中に
永く出離する事なかるべし十方の諸天率土の
神明共に大禍を與へしながく子孫を滅さしむ
若犯違せざる者ありてまもりて法を興すまで
世々に福をかさね子孫繁昌してともに塵域を
出てかならず覚岸にのぼらんと載られたり又
東寺破壊に及ばゞ日本國中の大小の伽藍を壊

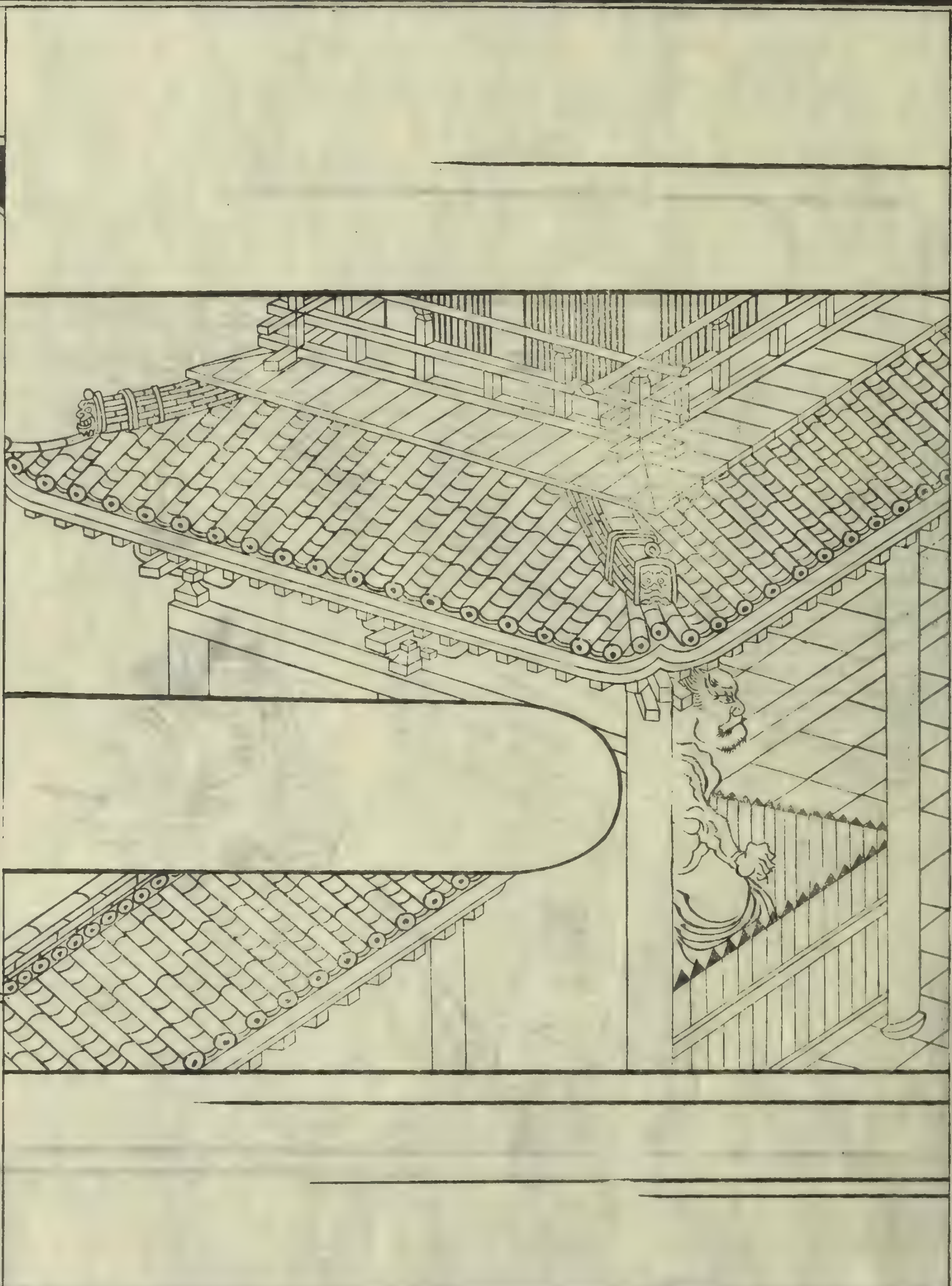
てすべからず修理をもすべきよし 勅宣を下さる
崇重の他にことなるを知ぬべし
弘仁十四年正月十九日忠仁公 勅使として
東寺をもて永く大師に給ひて眞言密教
の庭とし師々相傳して他所とせず是則大唐
青龍寺もと大官道場なりしを恵果和尚に勅
給ひし例也これによりて大師請来一百餘部
の金剛乗の法文并に諸尊の佛像佛舎利阿
闍梨附属の健陀穀子の袈裟道具等悉く大経
蔵に納め宗の長者たる人相續て撿校せ

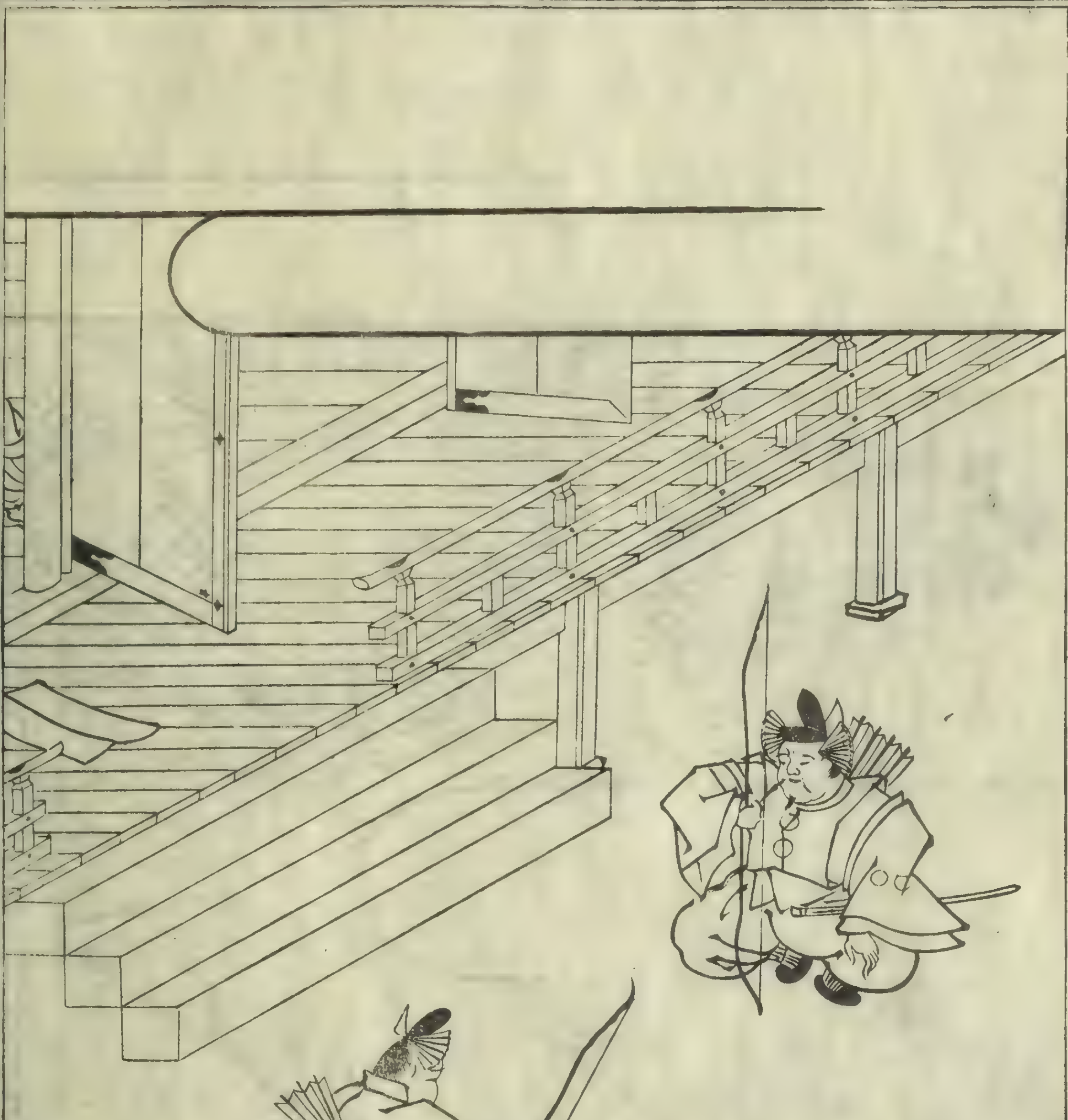
同年十月十日大師の奏によりて五十口の定額僧を
始め真宗の經律論を弘通し他宗異類のまじ
はりをいましめ秘密教根本の道場とすべきむね
宣符をくださる其後堂舎を建立し佛像を彫
刻する事其数やおほし年中の行事僧房乃
威儀儀式大唐興善寺の舊儀をまなび赤縣青龍の
古風をうつせり　淳和天皇の御宇天長元年
六月十六日造東寺の別當長恵大僧都職を辞る（于時少僧都）
へうつされて大師をもつてしくる務の人となし
よりて真言宗長者の始なり。これより[illegible]

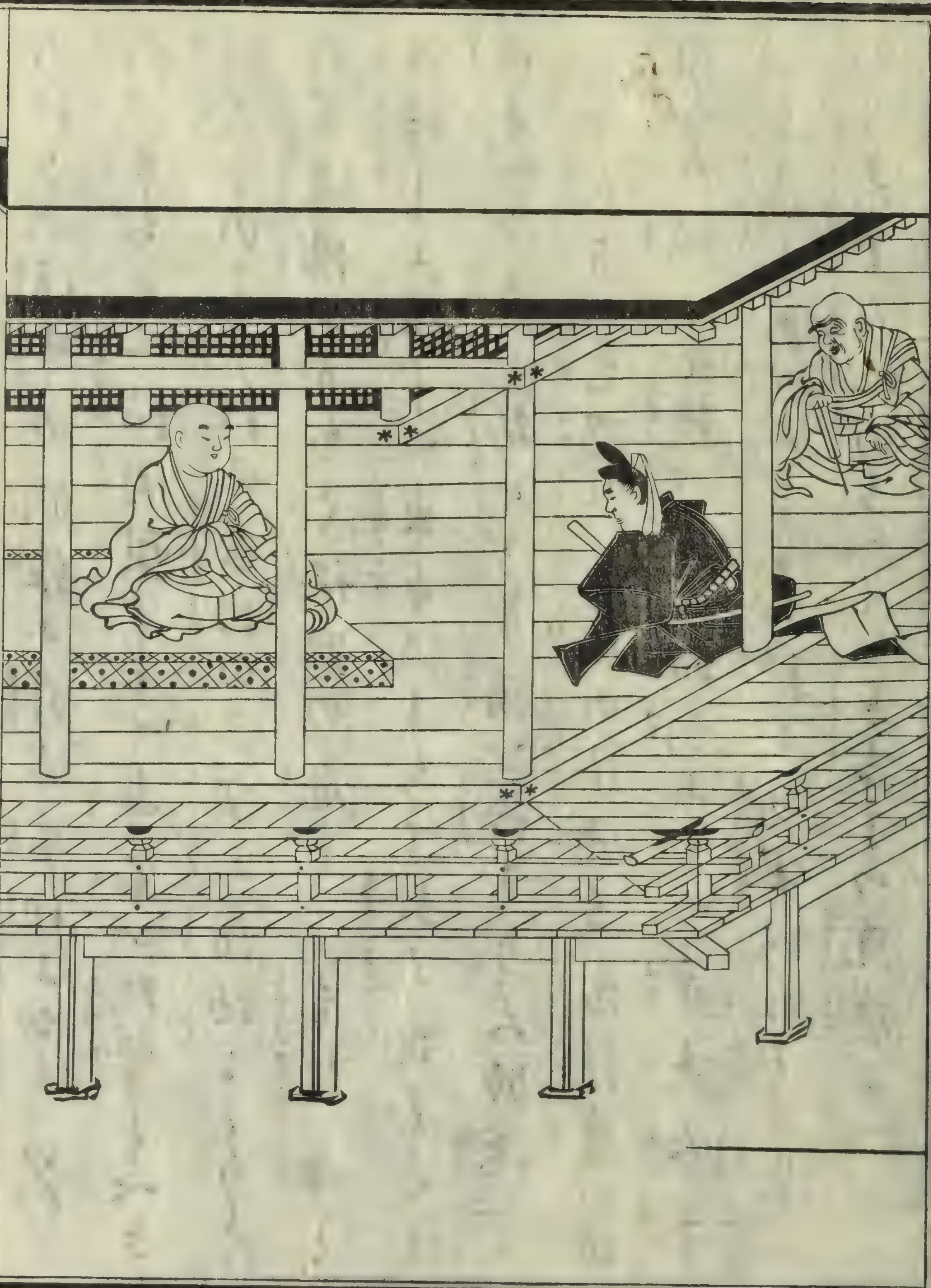


東寺勅給







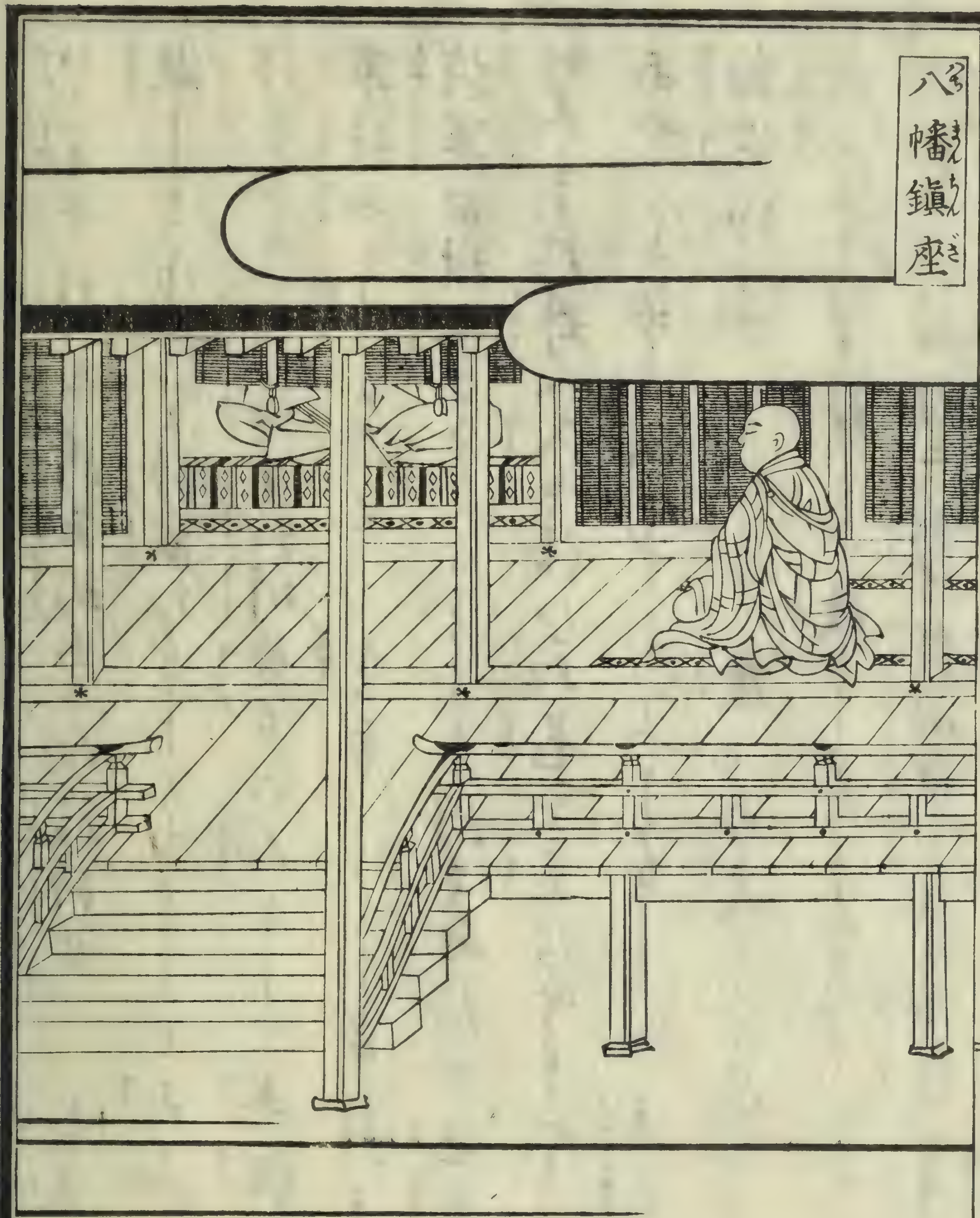


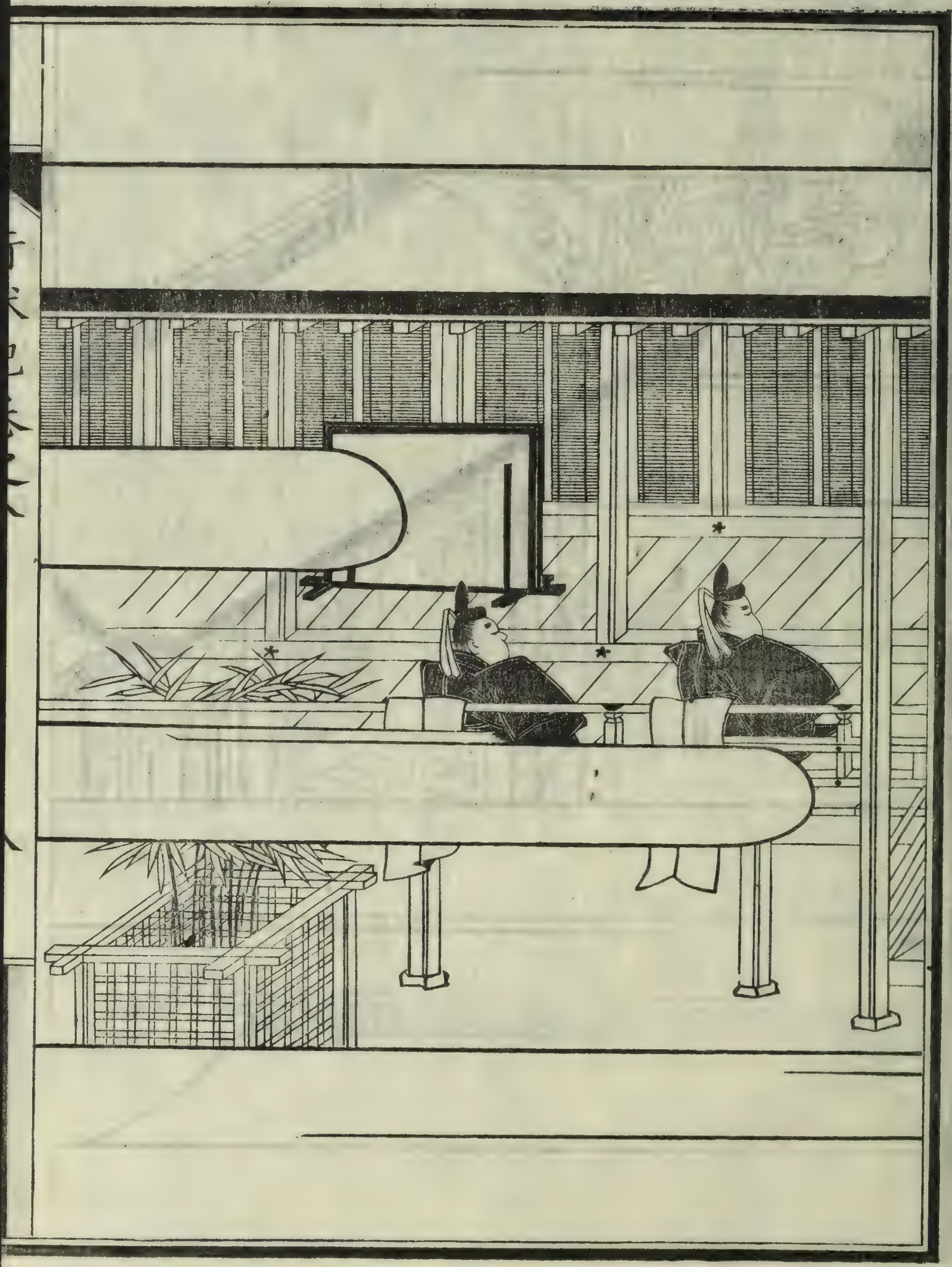
しかるに僧中の綱維不昇にて一切不可なりいづる
人とりなく一阿闍梨として寺家を執務すべき
規式とのこさるゝ又唐朝の不空三蔵勅によりて
大官道場とりなく秘密の庭として青龍寺と
号給しに准じて東寺をもつて教王護国寺と
号すべき旨　勅ありて額を給はり大師謹し
て云東寺は是密教相応の勝地なり鎮護の眼
目なり悔して致ば王化昭明にして華夷太平
なり怠てあがめざれば朝に妖害起り世に災乱
あり天下大乱あるべくば東寺まづ荒廃すべしと

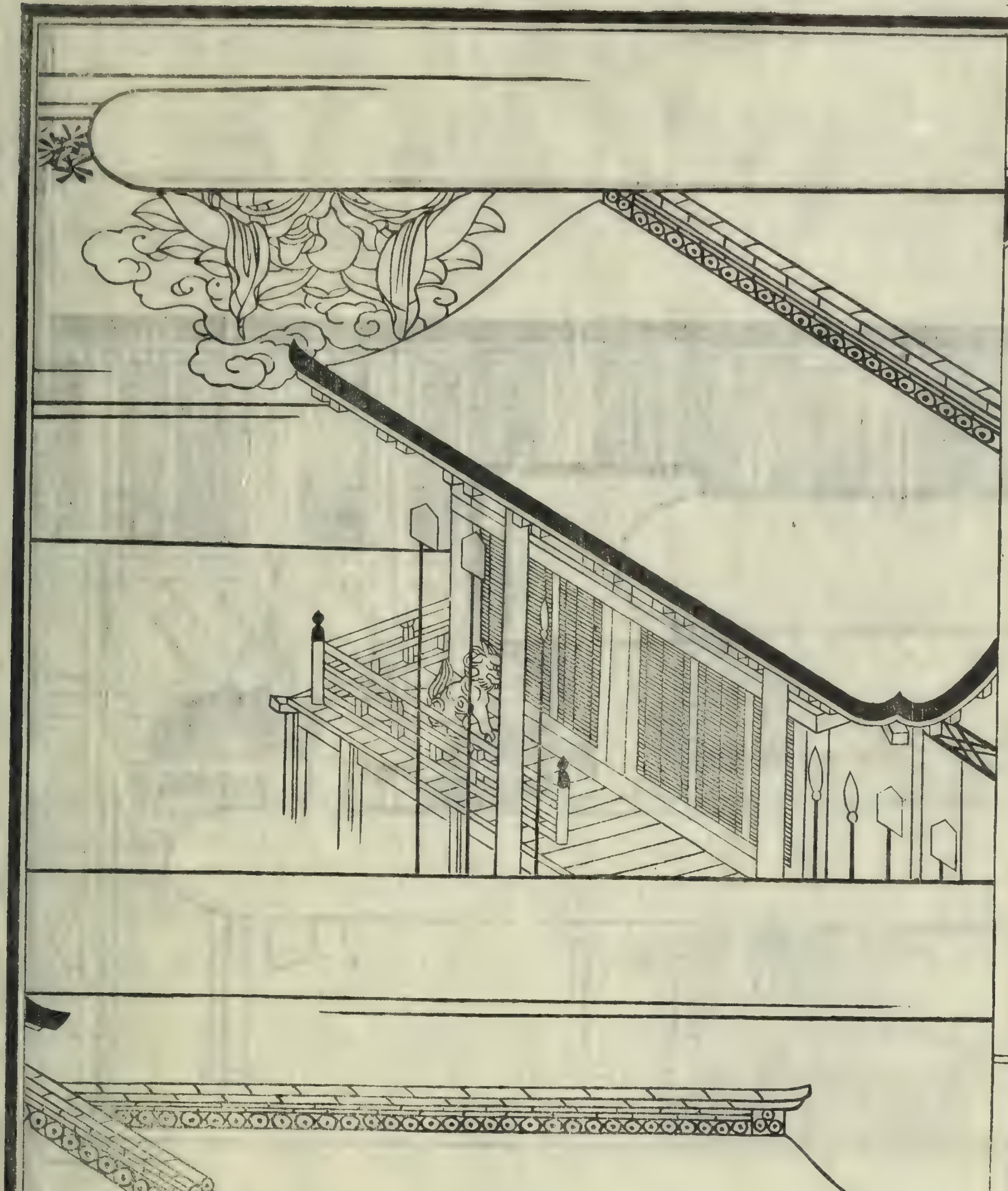
見へたり遠記に杉じ縁ひく先事を考るに保元
平治の比より零落して僧侶山林にまじはり堂
舎傾危して佛像多く露に曝されき是只卒土騒
乱のゆゑに逆浪暴悪のなす所なるべし祖師の
記せるとも縁宛も常をさだめずして平家追討
の後高雄の文覺聖跡の陵廢をなげき東関乃
幕下大功の修造をもよほしよりて梵閣
甍をならべ尊容堂にみちたりしかば王化ますます
古に復し兵權志ずし政をとりて将家の安泰
をねがひ人誰か鎮国の基址を崇ざらんや

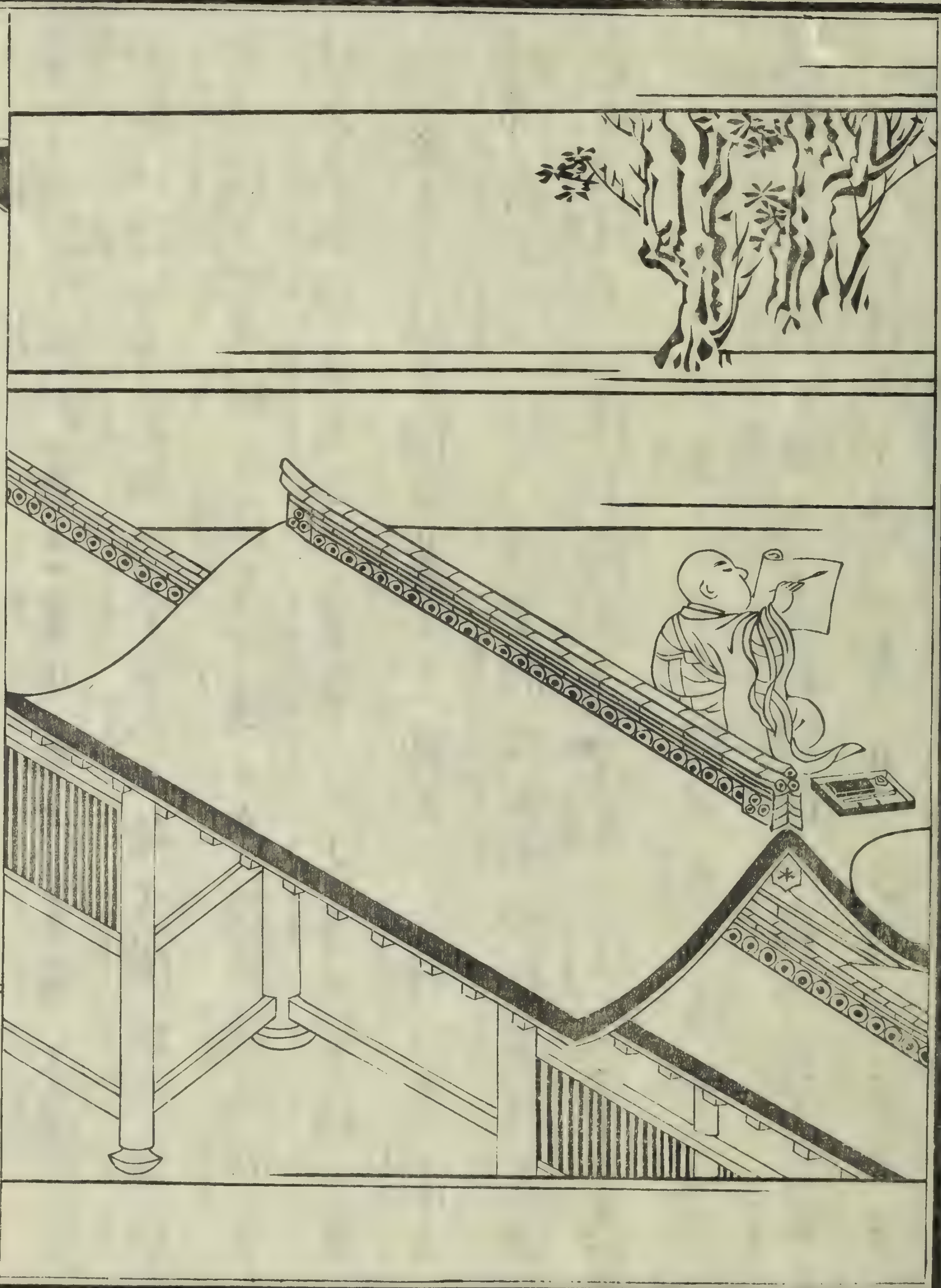
嵯峨の聖代平城の太乱
をさまりし時天皇ひそかに帝徳のいまだしき
ことをなげかれ佛力ならずば速なることをのぞみおぼさせ給し
によりて大師に勅して静謐のいのりをいたさると
とぶらひ給けるに佛法は王法によりてひろまり王
道は神慮によりてまもるべしちかく八幡冥
神の鎮座を花洛にいのりて百王擁護の誓
約を棘府に仰ぎまゐらせば九禁おだやかしく
四海屋をうるべし　皇徳これによりてひろまれ
仏法是がために立もべき旨奏しまうされしかば
東寺鎮守八幡宮は

聖主十ねにて御元服ありて綏靖の叡念武
凝しましくしに仁感もましまさずして天心とどて
僅かる代に遂に江州勢多の石山して平城の皮
軍敗北をしに及て　上皇かしこじ常に剃髪まし
将軍田村丸がちかまとしけれさせ給て士卒に
かくまれ都へ入を給ひね是を見たてまつる緇素
あやしき歎ざ泣かずといふことなし　主上
勅定ありてよ流しを廃流あるべしといへども
天兄にてかくおはしまして優しくたてまつるべしとてかやう
のごとく大和国平城の宮に遷されて御隠遁と號され


八幡鎮座







帝皇彼第三は宮高岳の親王ハ東宮を廢して
出家し遂られ大師の室に入を給て灌頂の法脈
を継後にハ異域に渡りて遙に印度の境に赴き
給ふ眞如親王是なり爰に　天皇御立願を果
し遂ましまさむために大師に　勅ありて東寺
は境内に一宇は社壇を構て三所の和光を崇め
真言は法味を飽し蘋蘩は禮奠を備へ給ひしかバ
靈神此砌に垂應して當體空中に儼然たり
大師則奇特の思ひをなし渇仰は誠をいたして
御躰を花餝にうつしとゞめさせ給ふ木像に

きざみあらはしてかざく寶殿におさめてまつ
らる今の鎮守八幡宮是なり　光仁天皇の御宇
寶亀八年五月十八日託宣ありてのたまはく吾明日
辰の時に沙門となりて三帰五戒を受べし今より
以後は殺生を禁断さん但国家のために免り巨害乃
業出来する事あらん時は此限にあらずといへり
今其託の告にまかせて出家着染は尊儀縁ゑ
となりし真言灑水の道場に跡を垂ましまし
し誠にありがたき神慮なり大師手自額を
造らせ給て入木の跡を遺させ給ふ今に薫るの寶庫に

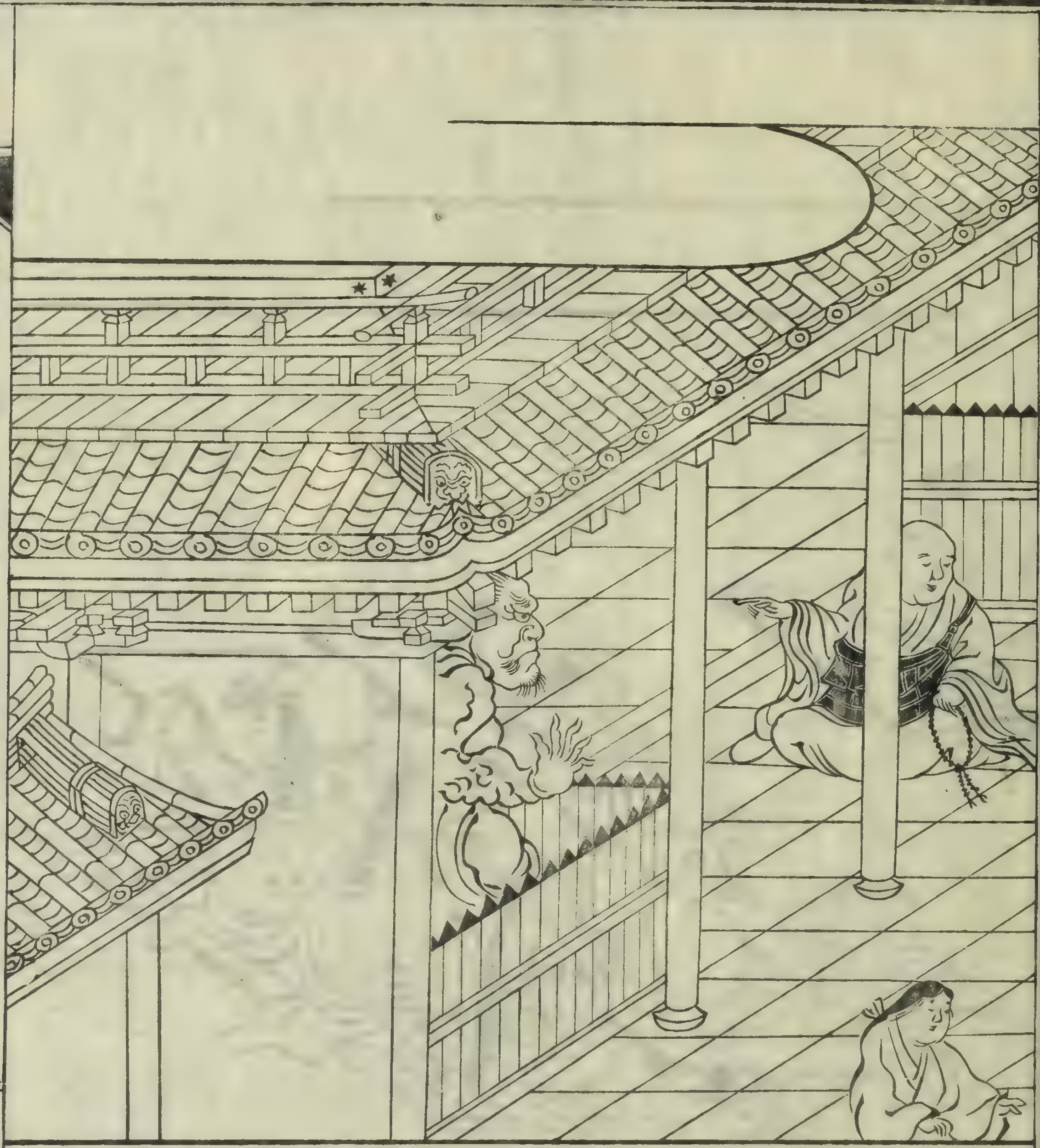
寒まりてまさに神徳の芳躅ハ顕揚りきう
ありしかりきのうき勤請年旧て星霜およし
経めるといへども利生風香しくして和光月明なり
高祖製作の霊雑氷雪のごとくにして古のごとし大師
しん筆の額露顕のありて精鮮なりむかし巨唐の
粛宗霊武に幸し給ひし時不空三蔵に勅ありて八方
神旗の秘法を修せしめ給ひ禄山が乱を拂て収京の
日を奏まふすにたがはずして言のごとくなるとなへたり
今　本朝の　聖帝も是に傚ひさせ給へなと高祖
大師も奏したまふ八幡霊神の鎮坐を勧めしめば平城

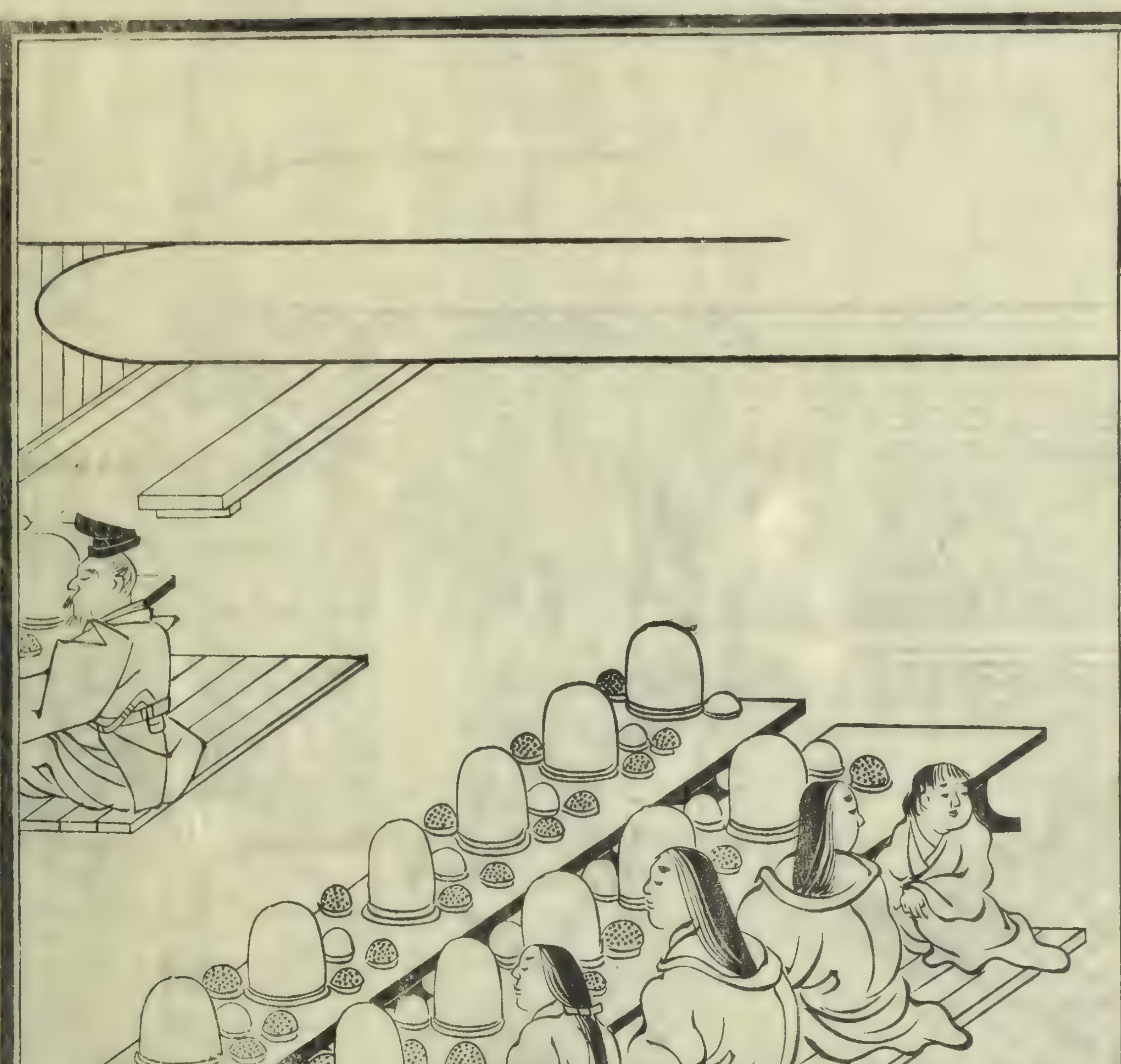
に軍破て寶圖とやまむる事奏事たゞの人と云し
和漢ともに其名まども法威を揚て皇徳とさかり
にするかもしれ古今是非なしれどや猜おもむき
まバ大菩薩を　欽明は聖代豊州宇佐の郡ま
して始く三歳の小兒とあらハれまして竹葉り
立て託しての給ハく我ハ是日本の第十六代
誉田天皇廣幡の八幡麻呂也我名とバ護国霊験
威力神通大自在王菩薩と云て示し而して跡を神
道に垂しの給へり志かれバ八正の幢旗を建て
邪侫の賊を退け八色の綵幡を織て正理の道を

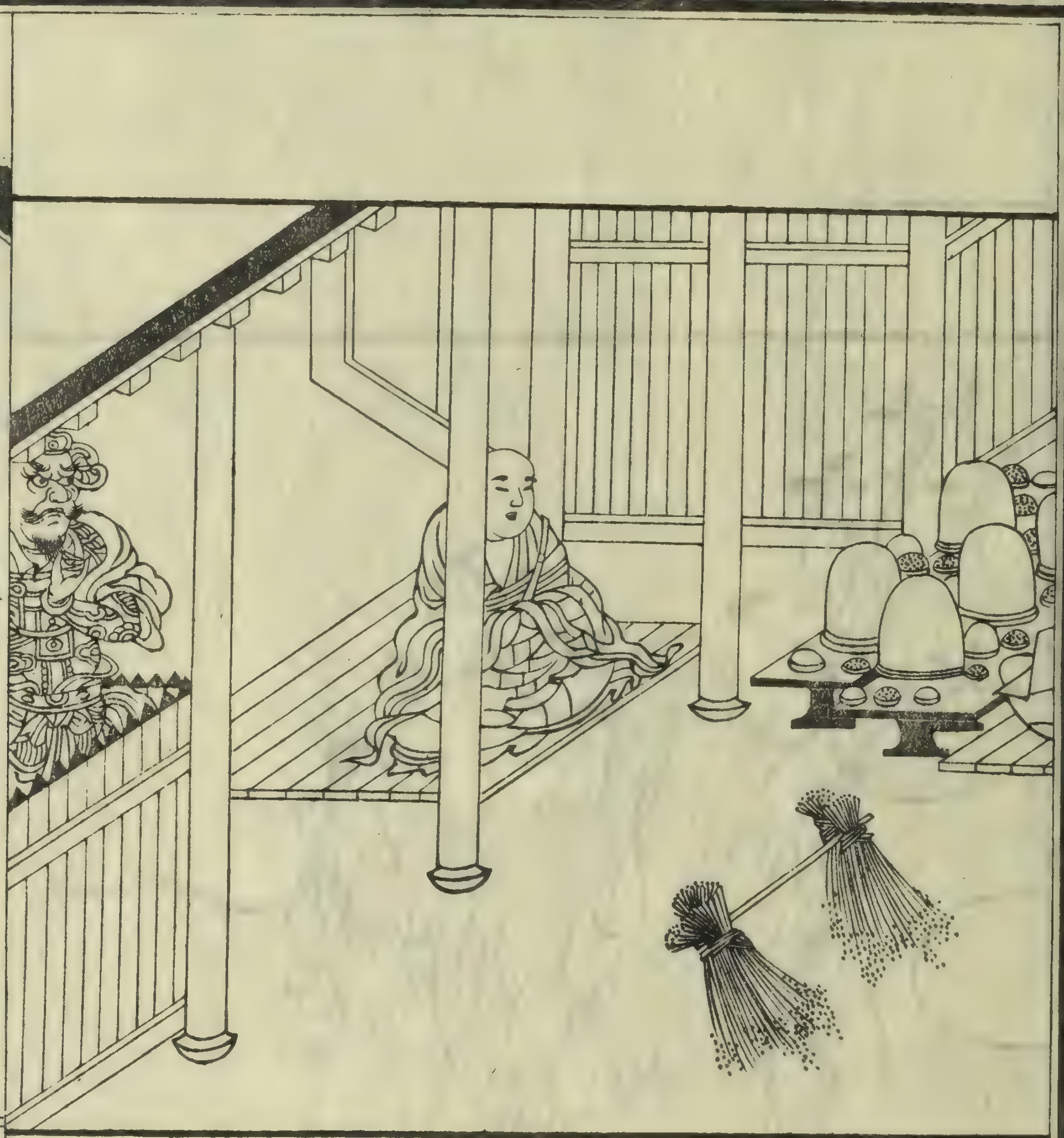
めぐり給ふ故に徳化華夷に溢れ神恵遐迩にあまね
からしむ利物の方便いづれも優劣なかるべきならざ
れどもまのあたり　帝城に来りて　皇国鎮守ま
まし波も貴べし仰べし
嵯峨の聖代玉体清がるくして宝算久しくたも
ち給のみならずして一紀無為の化にかづみて六合太
平に徳を感ぜずといふことなし弘仁の末に及く
脱屣の後　淳和の御門帝位につかせ給ふ其後
深草の天皇　嵯峨第二宮　受禅ありしよりすゑの[illegible]
にいたるまで　継体の天子[illegible]弘仁聖主

の菩薩なる事且神加護の志あらしむる所大師持念
は遠からざらしむるゆへなるべし
弘仁七年孟夏の比大師斗藪の時紀州田辺乃宿
にて異相の老翁にあひたまへり其長八尺許骨
たかく筋ふとくして内に大権の氣を含み外に
凡夫の相を現ぜり和尚を見たてまつりて跪て
いはく吾神にあり聖に威徳いましまさば今
菩薩この所にいたり給へり弟子が幸なり吾大師
のたまはく吾山に有て両部ましし時の誓約いまだ
わすれず此生他生形異にして心かはらじ予に秘

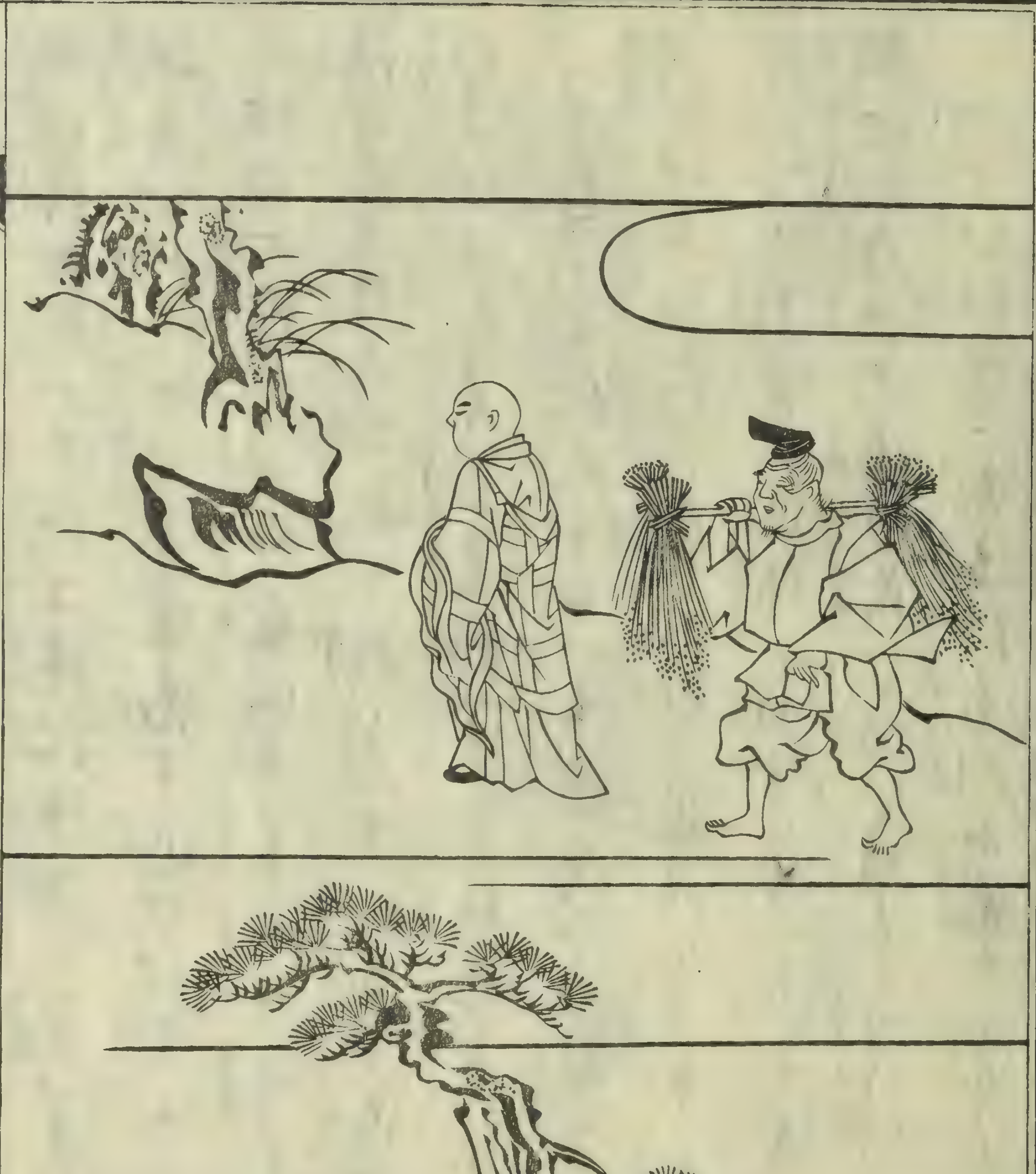

稲荷来影











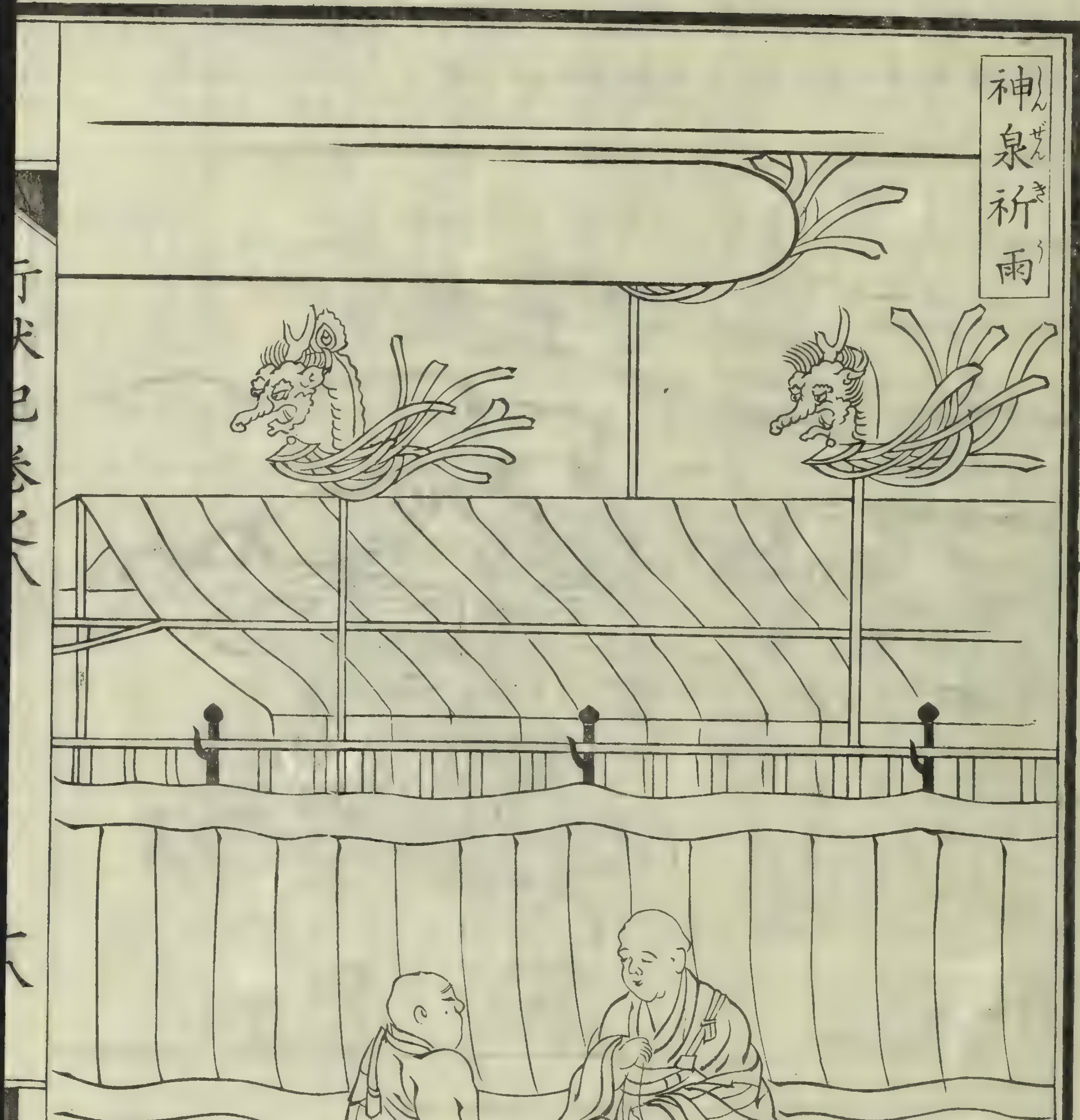
教綱隆の頭あり神々佛法擁護の誓ひましますともに
迷者を利して同く覚岸に遊ばしむ家に　帝都
九條の一坊に一の伽藍あり東寺と号を国家鎮
護せんが為に密教を興すべき勅ありしの所にて
待てましまさん必来給べしと念じ給ふかひ
ありしに化人来るいち盟約を為す時を
同十四年正月十九日大師　恩詔として東寺を賜
はるかく真言の道場となし給へり其年四月十三日
彼紀州乃化人稲を荷ひ椙を持て夫婦となりあひ
二子をひきゐて東寺の南門に来りの拝み給ふに

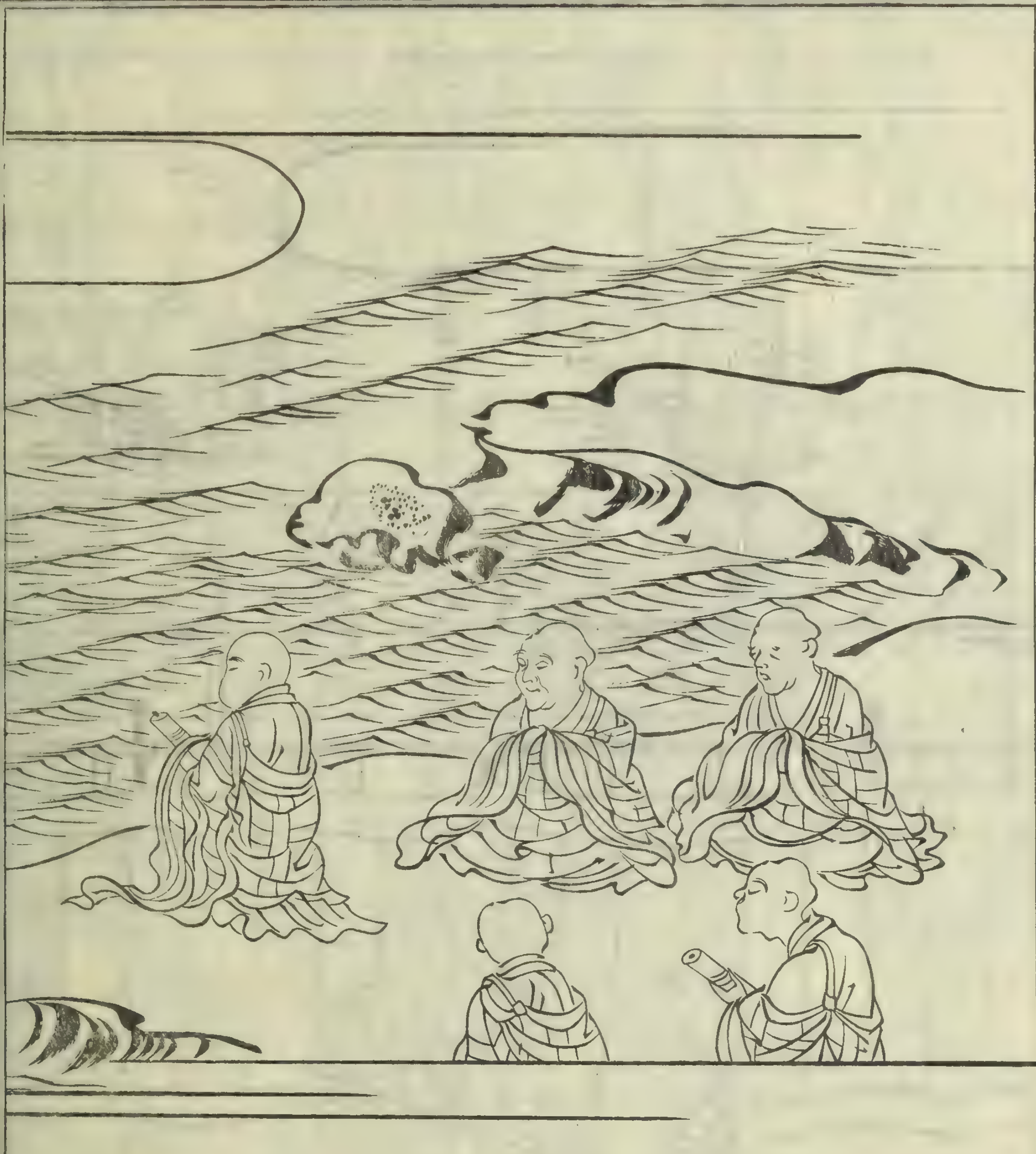
大師遇てまゐりて眷となりし誠を抽でゝ神徳を
うけのみ法味を醍給し時道俗是を敬て瑚璉式依
八箇箇を献じたてまつり其後志づかく八條
二階の宗吉が宅に留し給ふに大師其間帝都の
巽にあたりて松山を点じ利生の勝地をさだめく
一七ヶ日秘の名法ありて修結壇し給ひたる今の
稲荷の社是なり彼八條の二階堂ハ今の御旅所なり
大師神輿をつくり額をうつせ給ひてまつりきしけるが
今の祭礼の時是をいだしたてまつるとなむ
天長元年仲春の比天下大旱日でりす公家

勅を下され大師をして雨をいのらしめむとしける奏に守敏大徳奏し申て云守敏真言を学して同御前なりとも我すぐくに上﨟なり先承りて祈るべしと申によりて守敏に仰ていのらしむるに七日のうちに雨くだるといへども纔なり京中ばかりにしていまだ山外に及ばざりしかば重て大師をして神泉苑にして請雨経の法を修せられしに七日満ずれども雨ふらで大師怪をなして定に入て見給ふに守敏呪力をもつて諸竜を水瓶の内にこめ置く北天竺の境無熱池の中に

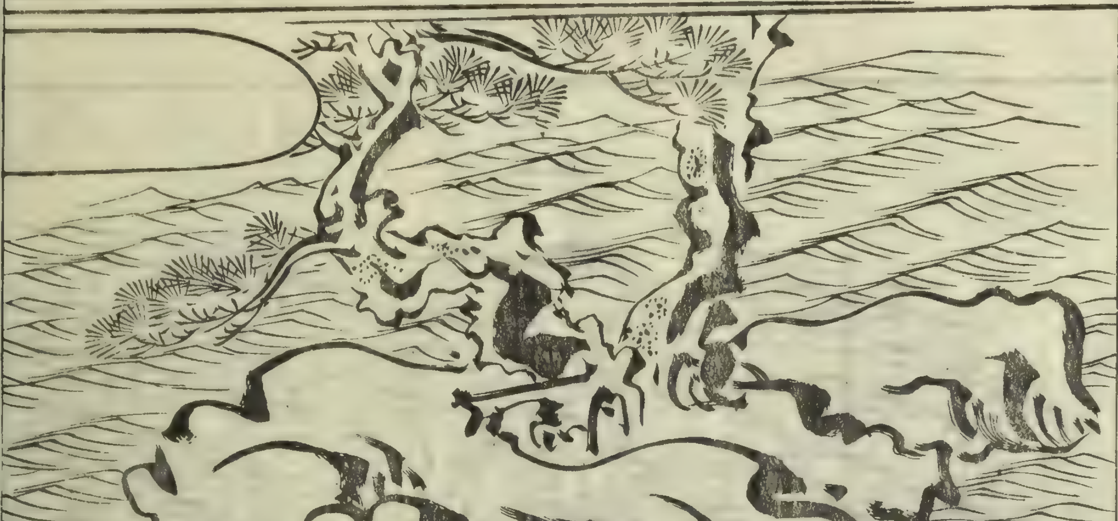
龍王あり守敏が呪召にもれたりと御覧じて公家
に申し奉て修法二ヶ日をのべられしに善女龍王
真言の奥旨をよろこび行精の懇志を感じて
神泉池の中より其形をあらはせり金色八寸の
蛇なかさ九尺ばかりある龍蛇の頂にのぼり実恵
真済真雅真紹真暁真然等の大徳まのあたり
是れを拝し給へり自余の御弟子ハ敢て見ることあ
たはずはつぶさに其状を記して公家に
奏聞し給ふに和気真綱を勅使として御幣種々
の物を奉らせまつりて龍王を供養し給ふに密雲

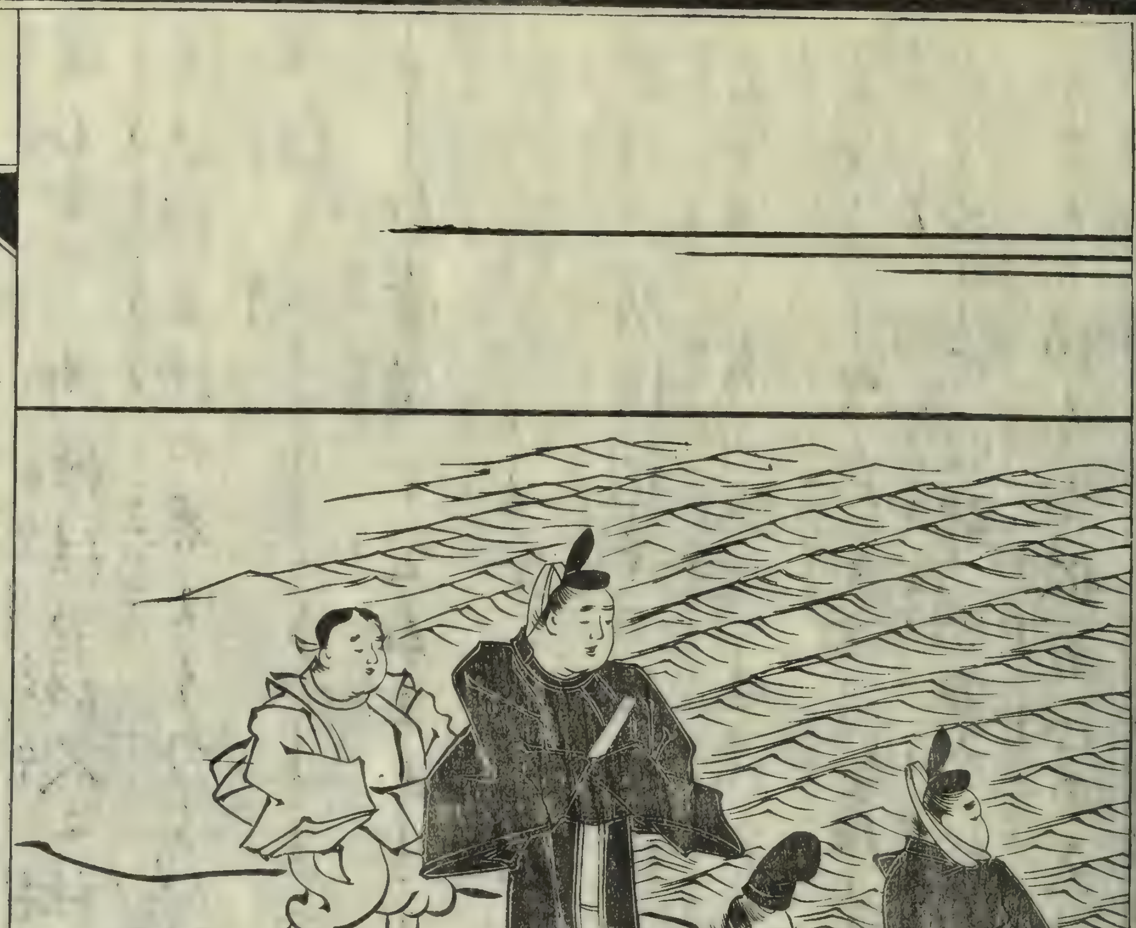
うちまじはに靉靆として甘雨まさに滂沱たり池水湧みちゝ大壇の上にいたれり三日の間洪雨しきりにふりて普天の下炎旱などを休ぬ上一人より下四元にいたるまで首をたれ掌を合せざるはなし真言の道のすぐれたる事あれよろこびさらなり公家賞とせらるなれく上に少僧都に任ぜられ奏辞し給こと再三なりといへども　恩詔志きりにくだりて是をゆるしましませば大師の給はく此の池は龍王元より是無熱達池の龍の類なり慈悲ありて人の為に


神泉祈雨









害なかりし御修法の法人に託してしまを志免せり
若此龍王池の界にうつらば池あせ水減しく
世濁く人とりしうるべし此の時にいたりて門徒
ならむ者須く公家に志らしめずとも私に行
願とくはへ法味をたてまつるべしと經の中に
深位の薩埵利生の相を説として離苦法門に自
在を得る為に阿耨達池の中に入て清凉に慈
雲を起して衆生を蔭覆し鱗甲類中より悲
雨を生して贍部洲の有情類を潤すところを載
なりしかるに彼香山の天池を辞して勅縁ゆるに

華洛の游潭にうつりまします光これ慈念の擁護に
めぐまれ勧請の始まりしより數百年をふるべし誰の
人か渇仰の志を凝さゞらん
龍樹の論に云摩伽陀国に龍王あり阿波羅邏
となづく善心にして佛化を受け世の飢饉は
のぞくべきゆゑに常に雷雨をくだして五穀ゆたか
なりと彼に准じて是を思ふに我朝の豊稔は
当是神泉をまもる龍の威徳にもよるべきものやしかれ
ば代々の御門此処を崇め玉ひ年に亢旱の災
あらん時は此池を灑掃ありて祭奠を龍神にして

まつり大師の門徒とえらばれて修法の規儀をとゝ
のへ給ひ祖風あひつたはりて香煙達しまします青幔
帛幕の宝にして海龍宮の荘厳とうつし宝爐
玉甃の壇につらなる雲輪厳の会場に似たり闍
梨轂擬を継て法を修し僧侶済楚をたえまなく
經試轉も日夜不斷の軌則まのあたりに識にいはし
法のくるまは廢を忘れざり中にも延命院の僧都元果
天禄三年修法の時も香煙の龍形たちまちにつ
宇をうがちて雲漢にのぼり晴天を變じて洪水を
下しけれ

小埜僧正仁海長元年中度々お勤修にハ度ごとに
赤蛇きたりて壇所より入紫雲聳て池上りおほひ
四重靉靆として普天霈霖たり其後成尊僧都覚成
寶成賢等は英匠をもて紫闕の詔を含てしばしば祈雨
天の感をいたし勝てつぶさにのべるにいとまあらず
然れは経大陽突を底めり卒去後さまし人天倚頼
し龍神歓喜するところ秘密の加持に十分なるし
遠を尽し源を窮めつる人の篤信にあらずして法の奥
徳を顕すなり今此所をのぞみみるに池あさく
水かれしかれども龍王此境にうつり給へること

うるびつべし　しかれども大師祈念の冤念より
また神泉苑の誓約をむすびして いまだたえずして
給ハさうふやちられ給ひまでも修法の結ふかう川
より人慮の精誠を抽るごとに甘雨普潤す
ふどおきでとつかまるし　此地はもと乾臨閣と
名付て　聖主遊覧の砌なり　巌泉流涼しくして
氷三伏の夏をわすれ　松柏陰しげくして風一声の
秋をよぶ　歌堂舞閣のよそひ柏梁の昔の跡を
うつし　朱楼紫殿のかまへ驪宮のふるきを移し
を習　歌吹のあそびをもよほし　詩酒のあそび

興をおこし玉大師修法の後まで龍神潜宅乃
霊となりし故に代々の帝王これをいが先
家々に賢聖をうやまひ御後鳥羽院
おとろへを給ふより此処荒れまされ荊棘の
路をとぢ叢のなかまで猪鹿の蛇と害をなすに
たれなる流滴の音護法の聴を驚かし飛蹄
おびれ冥慮の心をさわがし今まで是を見る緇素
如此なるをなげかずといへどもありけれ承久大乱乃
後武州泰時国憲をたもち時宗教の識をとゞし
築垣をかくし門戸をとゞめなかく雑人の往来

ず絶しかども其後涼燠志ばしうつりてまゝに
門墻漸に傾しかど今はたゞ牛馬の牧となりし
を行人の通路となりさへ絶て去りぬ護神乃
冥慮に絶まじきを大師の玄鑒庭すらざりし終
舊として跡として治世の篝を絶ざらさればこそやく
修理を加へ崇重し給ふべきをや此処城坤さゑ
られば国家文坤さまらんべきがゆゑに事乃意と
志らむ人行あらんも行ずるも須く精をいる
して法味とまゐらすべし豈報恩のためならざらむや
弘法大師行状記巻之八終

弘法大師行状記

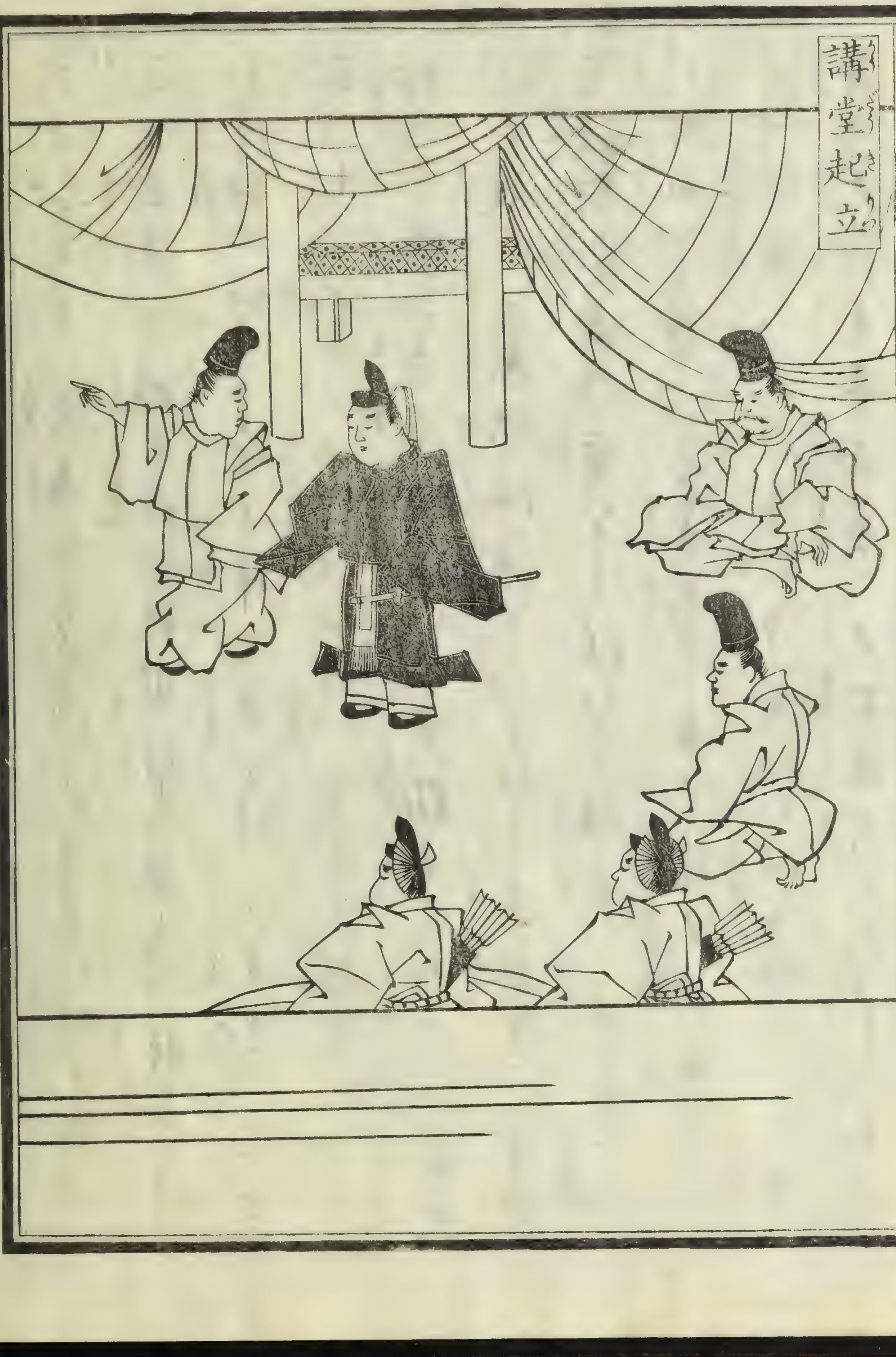
空

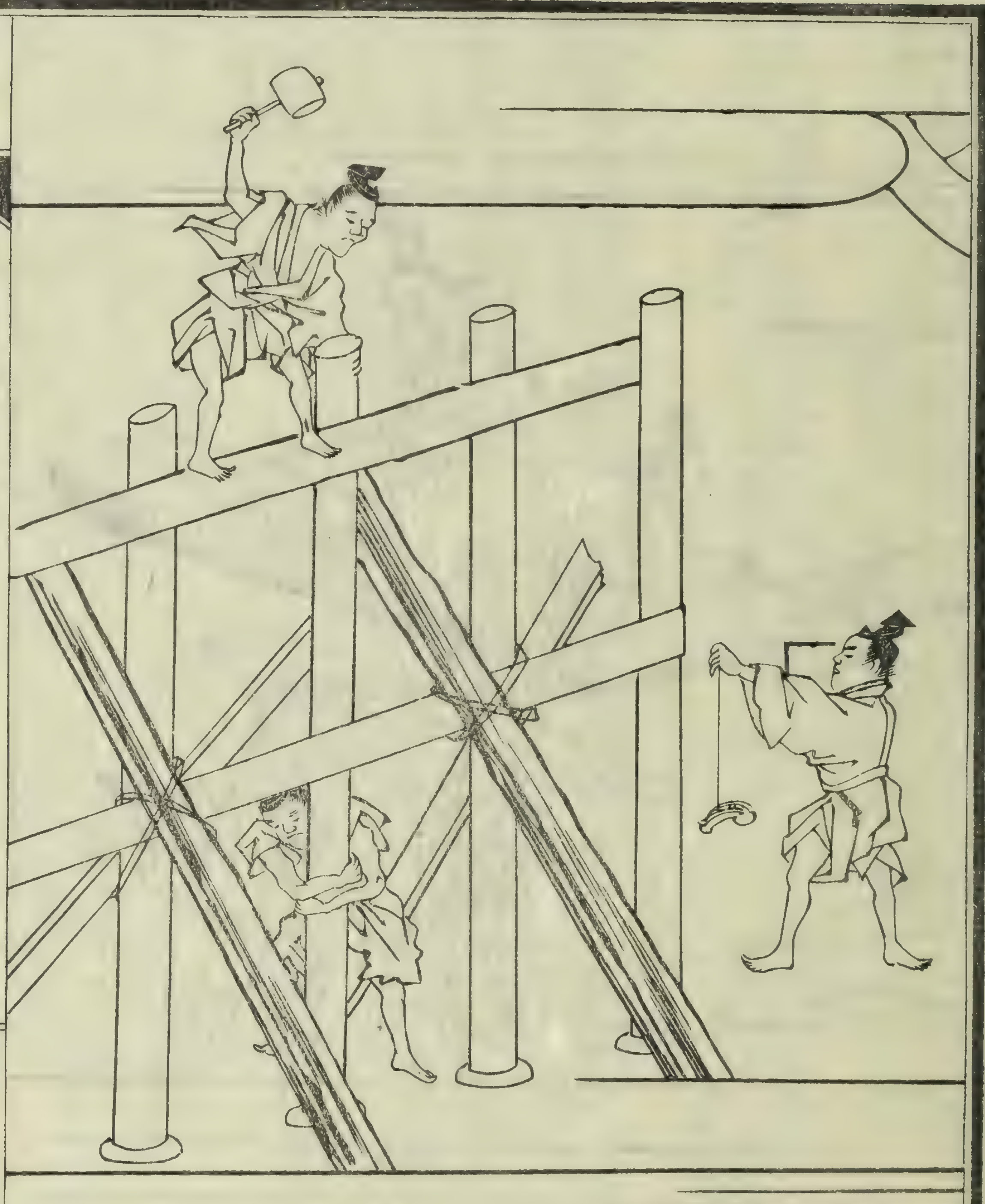
弘法大師行状記巻之九

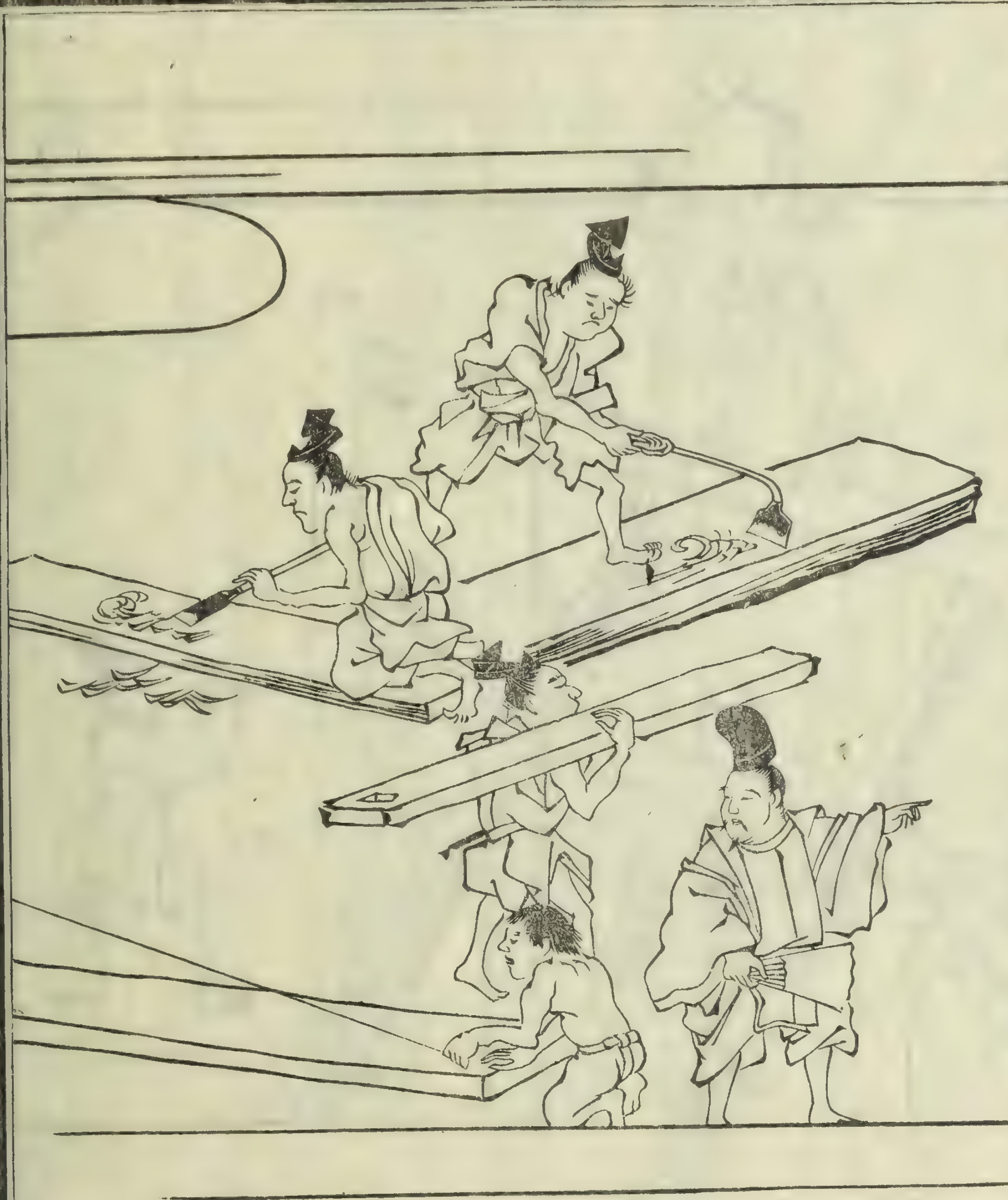
天長二年四月廿日　勅ふよりて東寺の講堂
を建立まし〳〵　勅使参議左大辨直世王俗検
校参議右大辨伴宿禰国道なり　玉體不豫の
と記御立願の事ありしに　聖躬やまひして天心
おぼつかなかりけり則彼御願とまらし給むがため
大師みづから仁王経の一曼荼羅の尊像を造
あらはし此勅安置したてまつりて本尊とし給
が先給ふ彫刻功成て後公家の御為に秘法試

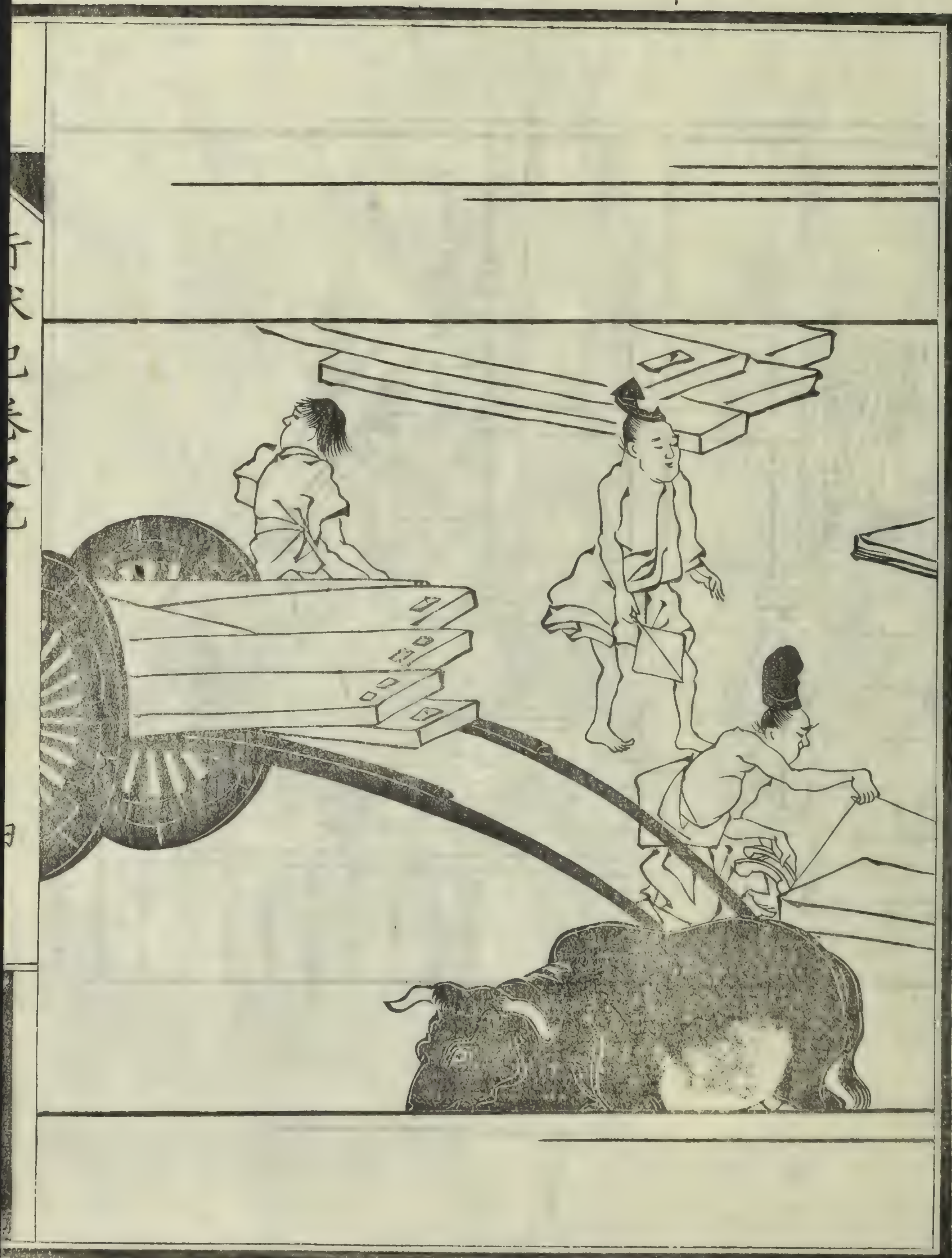
修せられしに杲隣等に掲焉なり実恵真済真雅
等の大徳伴侶に列て小壇の供師たり仏像の剋鏤
道場の厳餝班輪が精妙と極秘密の沖微と云せ
至るまで形儀悉しに清く至る言詞も述に尽し難き
縁覚も及ぶ所にあらじに教王護国の題額もその
ゆゑなりやと誉めかん人倫且凡此法ハ除災乃眼目
護国の将帥なり世もうるはしく人もすなほなり
し昔ハ三光やまさく常にみだれざりしかバ四海に
たつへる波なく一天にたなびく雲なし世澆季に
およびて人奸邪おほくして上ハ仁徳をわすれて先ぐむ

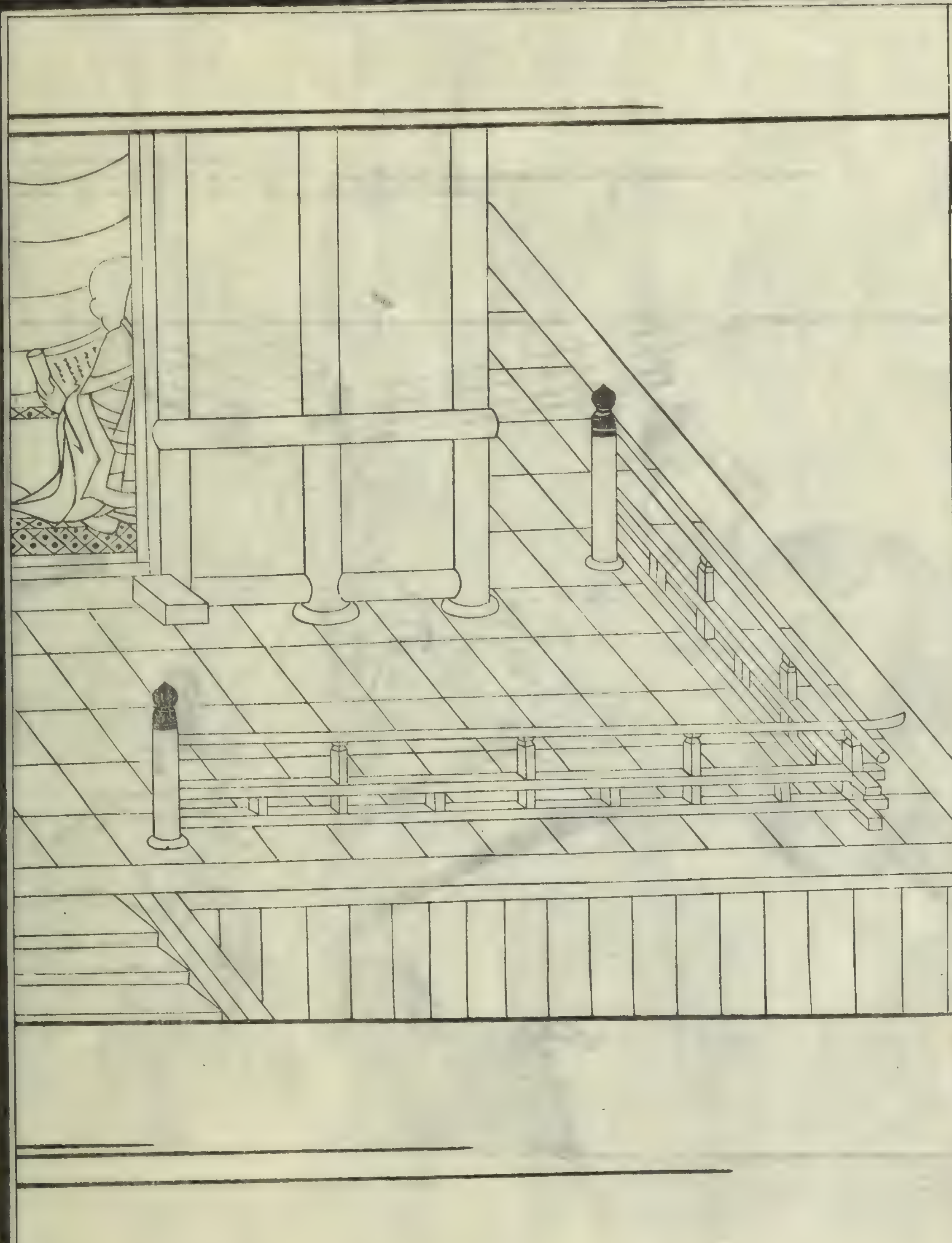
まもらく下ハ忠貞をもて仕へざれバ諸天善神
国を去給し時七難の妖變たちまちに競おこら
む其時にいたりて国中の災をけし身上の厄を
除かむと思ば此経法を修行あらバ佛と是を
給へり縦ひ悪鬼境にいり災難国に起るといふ
とも教令の忿怒焔輪をふるひて魔怨を退け
自性の薩埵性寶とまもりて福寿をまもらむ善
神甘露をくだして草木しげく諸天宿直と護
して国界をさまらむ事なんの疑ひかあらむや昔
唐の天寶元年西蕃の大石康等の五ヶ国安西城

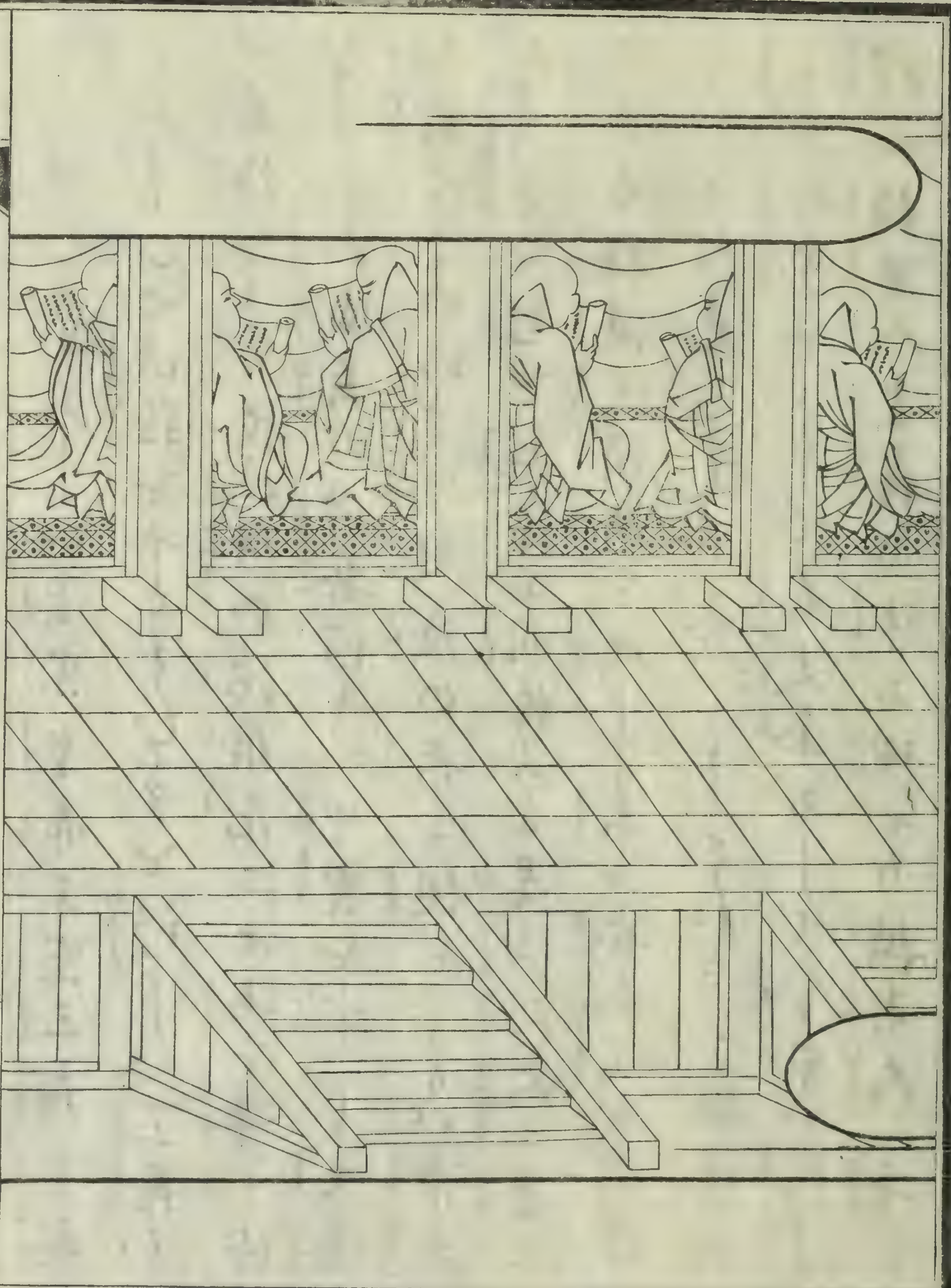

講堂起立











ご勅諚ひらきみしに玄宗皇帝不空三蔵に勅したまひて此經をすくましむるを誦しむ三蔵手に香爐をとりて此經の陀羅尼二七遍を誦し給ひしに五百人の神兵あらはれて甲冑を帯し戈楯を持てまのあたり殿庭の前に現ぜしかバ帝大に驚きて是を三蔵に問給ふに毘沙門天王第二の太子獨健大將兵を領じ来る安西城を衛護せむがため參るよし奏し申されき其後城の東北卅里をさりて長丈余にして金甲を着せる神兵数万人雲霧の中に現ぜり鼓角大に鳴て

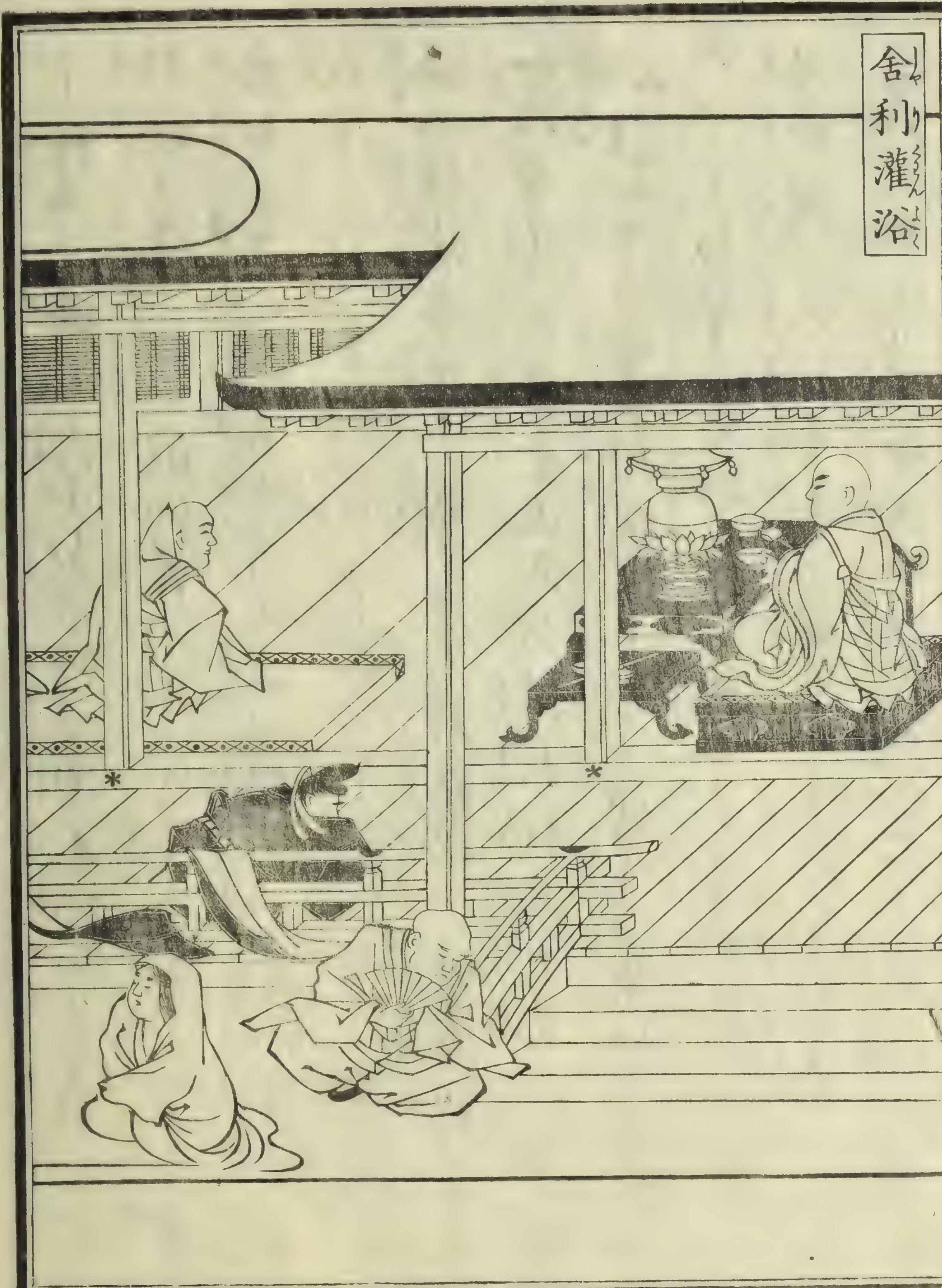
其路三百里にあまる城を三日を経ずして五国の軍
士然我以てもろ/\ことに及ばず志ろはやく
るまじ金毛の毛乱れて帳幕の間に入乱く
弓弩の法る鬼杖をもちひたまひて用るに志かざり
しかバ西蕃のいくさ大に破て然然ひまるゝゆかゝ
是故に三蔵経を翻訳したまひしに代宗
皇帝これをかなしみ給ひて大明宮の内に訳場を
ひらき師を西明寺の講堂とかぎりて百日の法
師とかつ見る百座の講莚を展給ふその時文武宰寮
歌楽を奏し花苑を法りて貝葉終らまで遊床

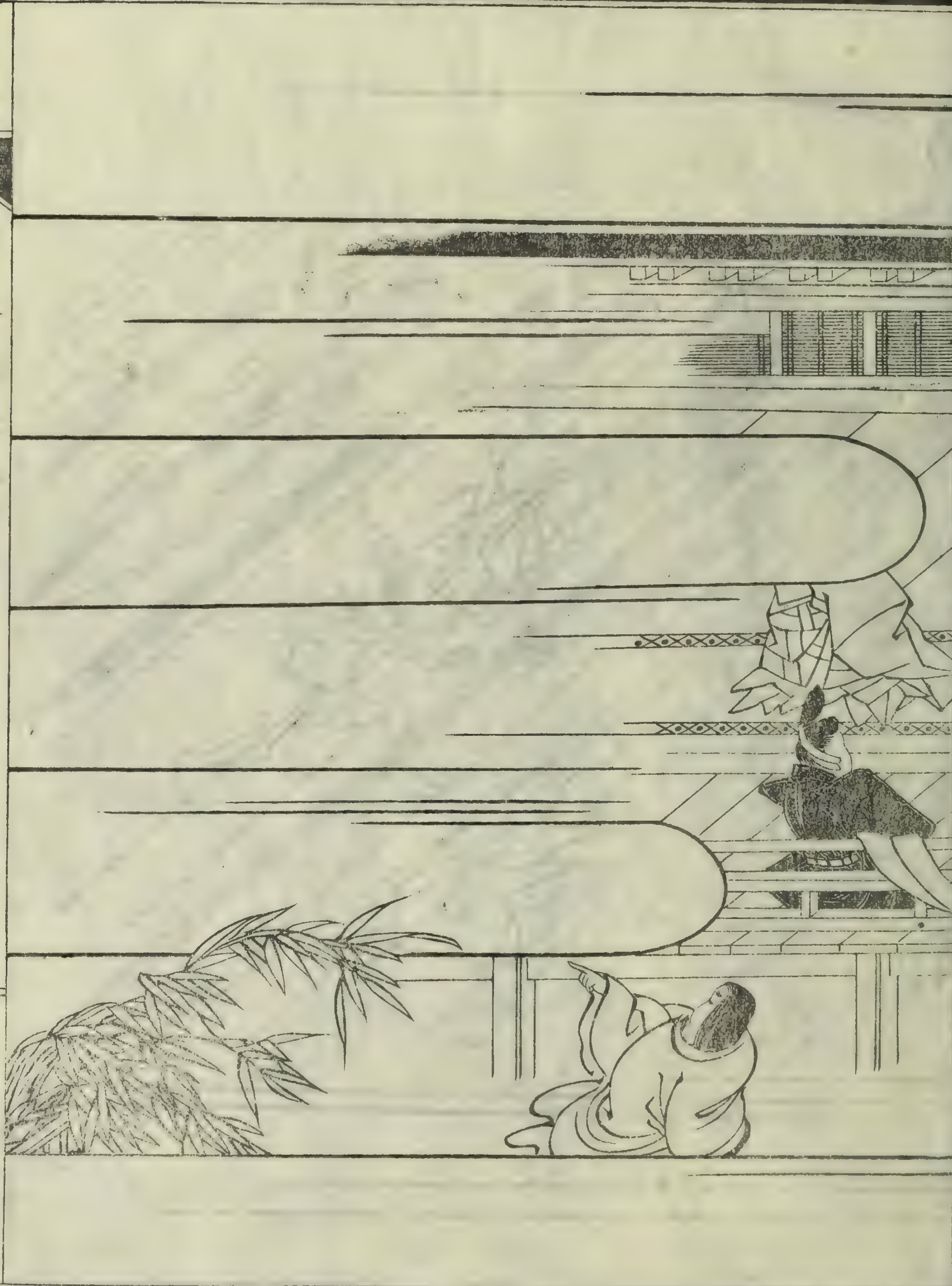
とまうけて大内より講席に迎へし上に五色の祥雲空
中にたなびいて千変万化する事図画も及ぶことなし
三業まことに賀表をたてまつり叡信の應ぜさせ家
ことに讃嘆し給ふ家には皇帝宸筆をくだされ名
額を給ひ資聖の講堂をあらため善法堂と号せ
らる殿最勝講の砌とさだめ給へりそのため遮
不帝釈修羅の軍を摧し忉利宮観の嘉称をうけ
されたりしかば　本朝天長の　聖主講堂
に花構を題じて護国の霊樞と崇めまします是又
康家明時の佳風なるべし　聖人化試度迷運記代

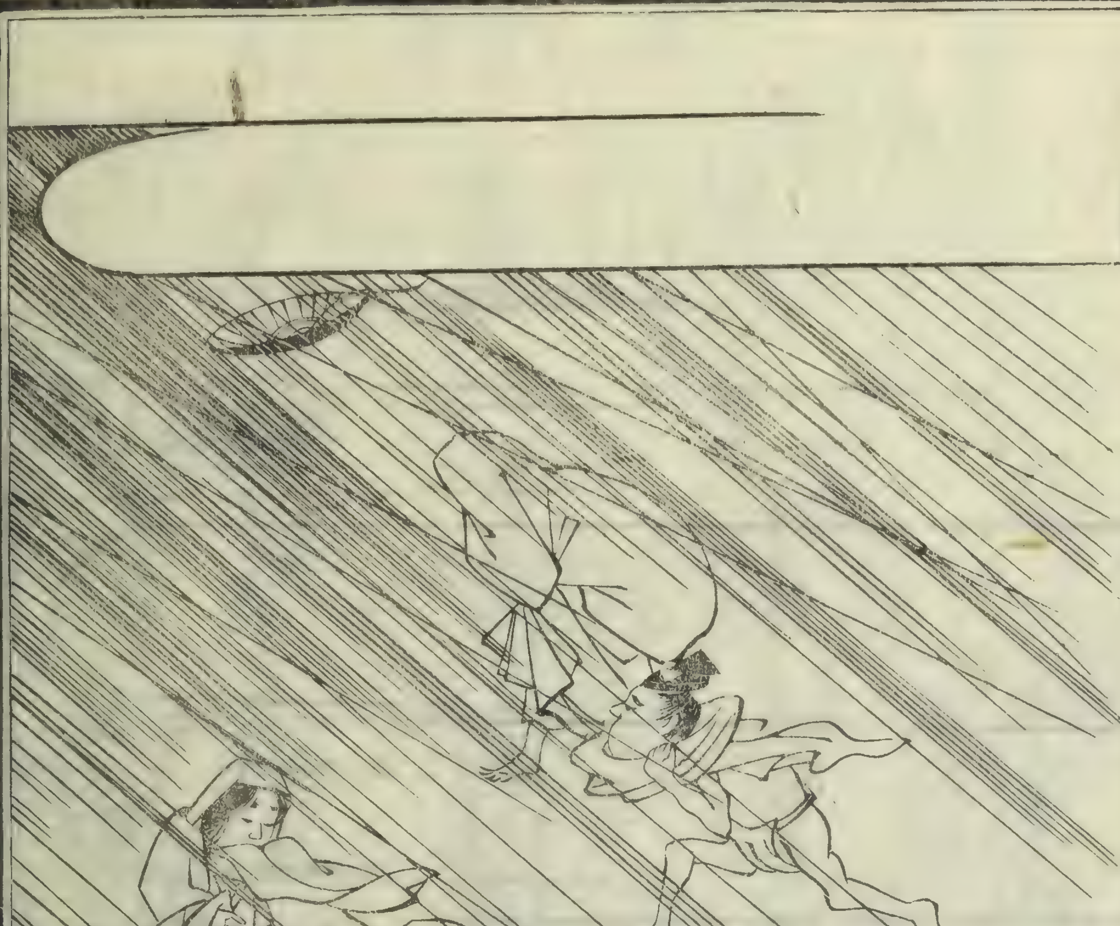
なりて後ち機縁微薄にして法利壅滞す然
いへども古より今にいたるまで異論尚朽ざるはなく
此經にかり大師修法の後四百餘歳の星霜を送り
後堀河院の御宇に及びて寛喜二歳の夏比
長星の變異をあらはしむづかしきは高祖の芳蹤に
よつて籠堂の梵宇を排て詔使を道場にのぞ
ましめ袞衣を密壇におさめられ長者僧正親厳に
勅して攘災の秘法を修せしむるに妖輝忽に隠
没せりそれよりこのかた或は氣序の和順を祈り
或は蒙古の襲来を退けしむるに勢の長者に

人壇と結ぶたびごとに異験あらはる是則祖師
鎮壇の餘力ならたまはずして末資遥代の利益空
しからざらんやと申しはべり侍る
天長四年中夏の比天下炎旱して庶民うれへ
いざなふなりて　皇帝　勅ありて畿内七道諸
国にして奉幣を捧げらるゝまゝ同月の朔より二日
のあひだ大極清涼の両殿にありて百僧延請
し大般若経を講読して雨をいのらしむるに大師
をえらびて唱導とし宮中に降雨を祈らせさせ給ふや
東寺の仏舎利を宮中に請じまゐらされて禮拝灌浴

し給へば油雲天におほひて膏雨地をうるほす事数刻に及しかバ陂池溢々として草木青々たり昔恵超和尚不空弟子玉女潭に雨を祈し時舎利瑞應を感ぜしかバ草樹一夕に蘇とひらけ川原深谷に流泉と溢と僧史乃中に載たり大師精誠の蹤跡推して知ぬべし凡唐堯九年の洪水殷湯七載の旱魃佛法いまだ世に行ぜざりしかバ旱澇年をかさねぬといへどもむなしく轉禍為福のまつりごとを失へり摩騰漢に入僧會呉に来りしより舎利の霊験あらはれしによりて帝王正法をあがめ道士邪計を翻


舎利灌浴





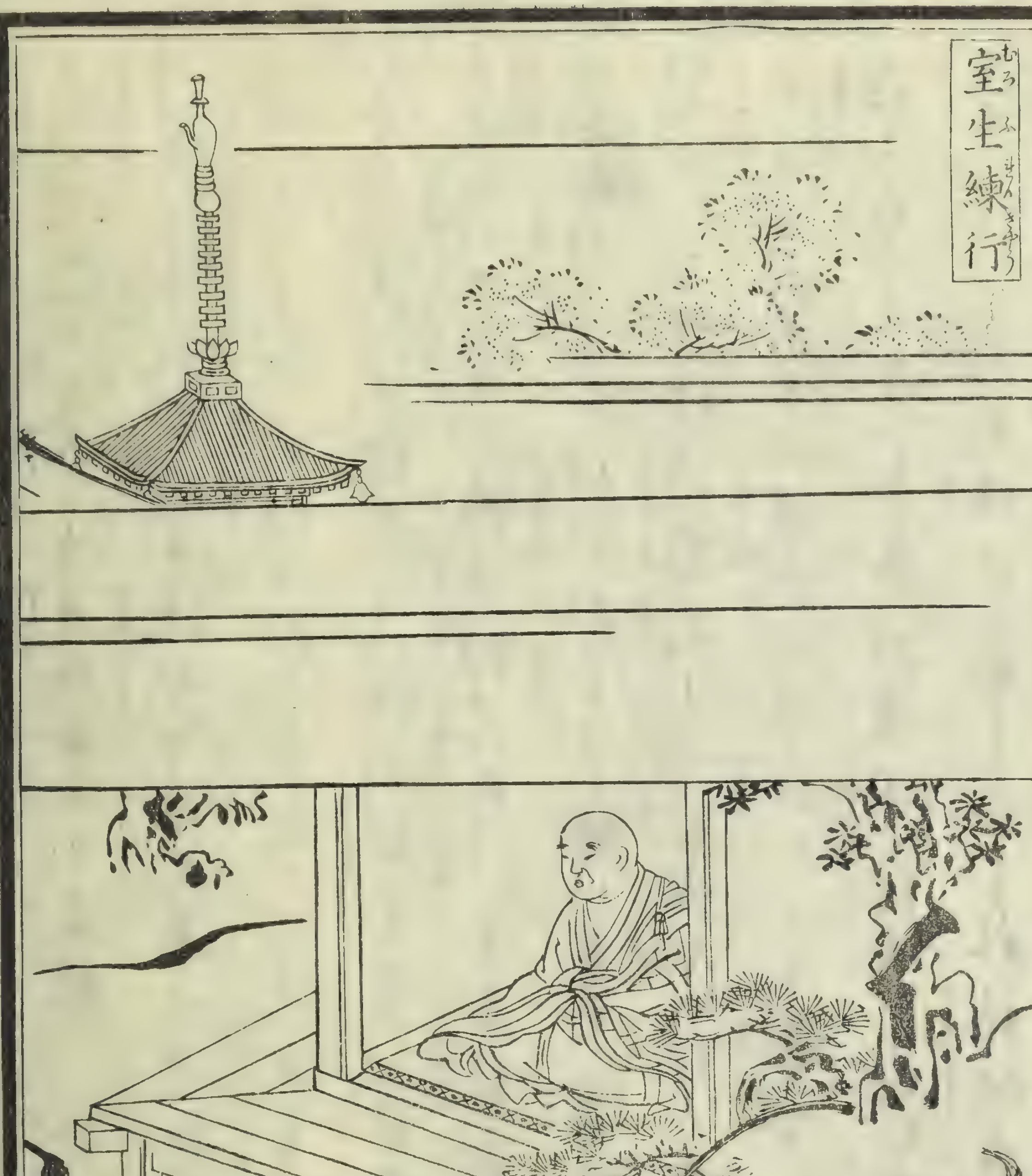


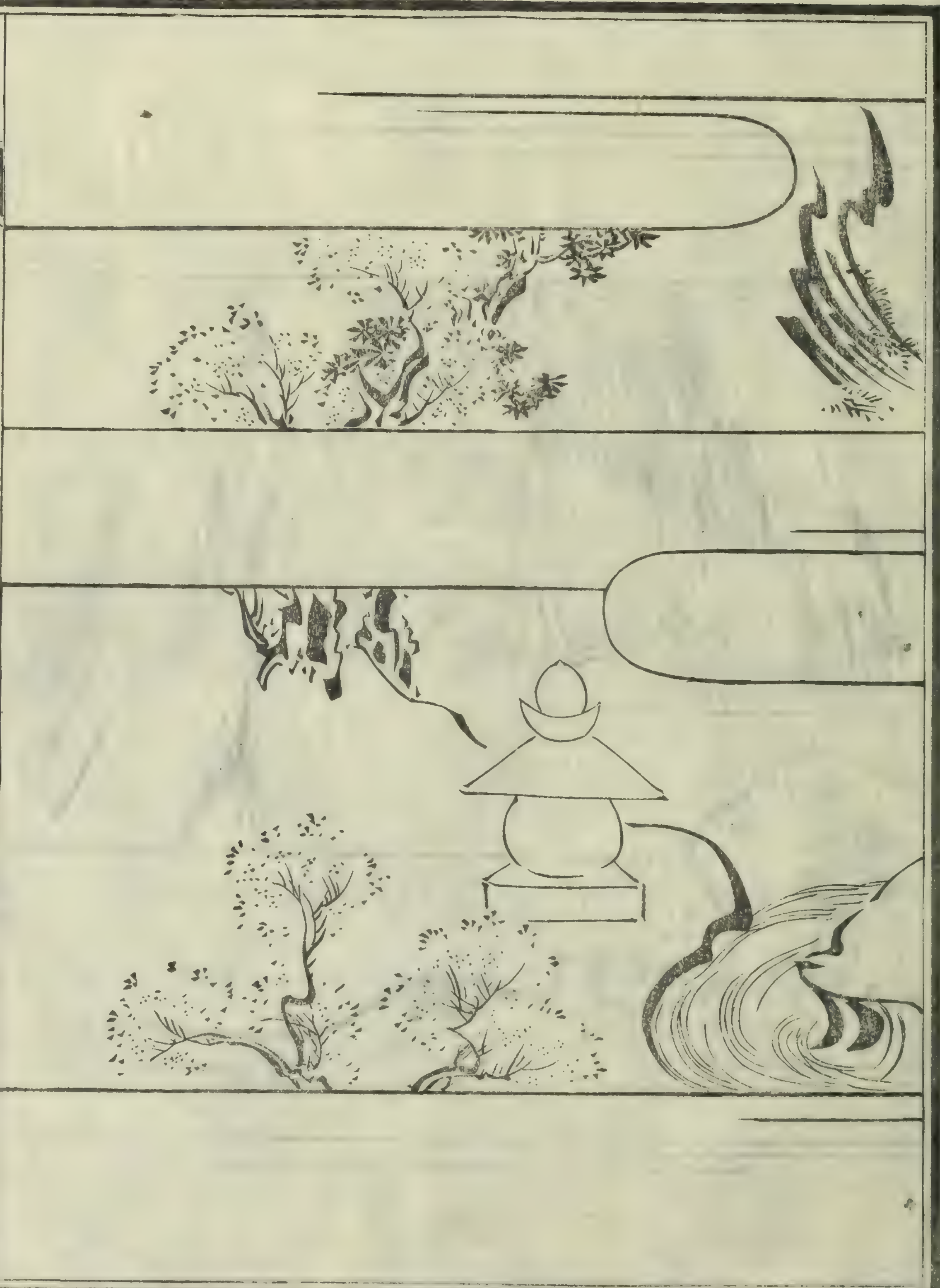
きり縦に是氣をはらひさいもひ拭拓を摩尼丸
おいで聖に入據鍾ゐるとや中にも東寺の御舎
利は大師請来して紫宸の運と終列祖教藏し
て蒼生の利とます昔南天竺の三藏金剛智觀音
於去よりて邊州とすくましかば万里乃懸隔
と凌き大唐の聖境に来り給ひし時猛風俄に地と
まて捲とおり浩蕩忽に激く山と列しに及びて
三十餘隻の商舶波になきぐひて行衆を志られ三
藏和尚の附給へる船又漂没をむとせし時船主
おどろきあわてし船中にて寳物瑜伽の大和本

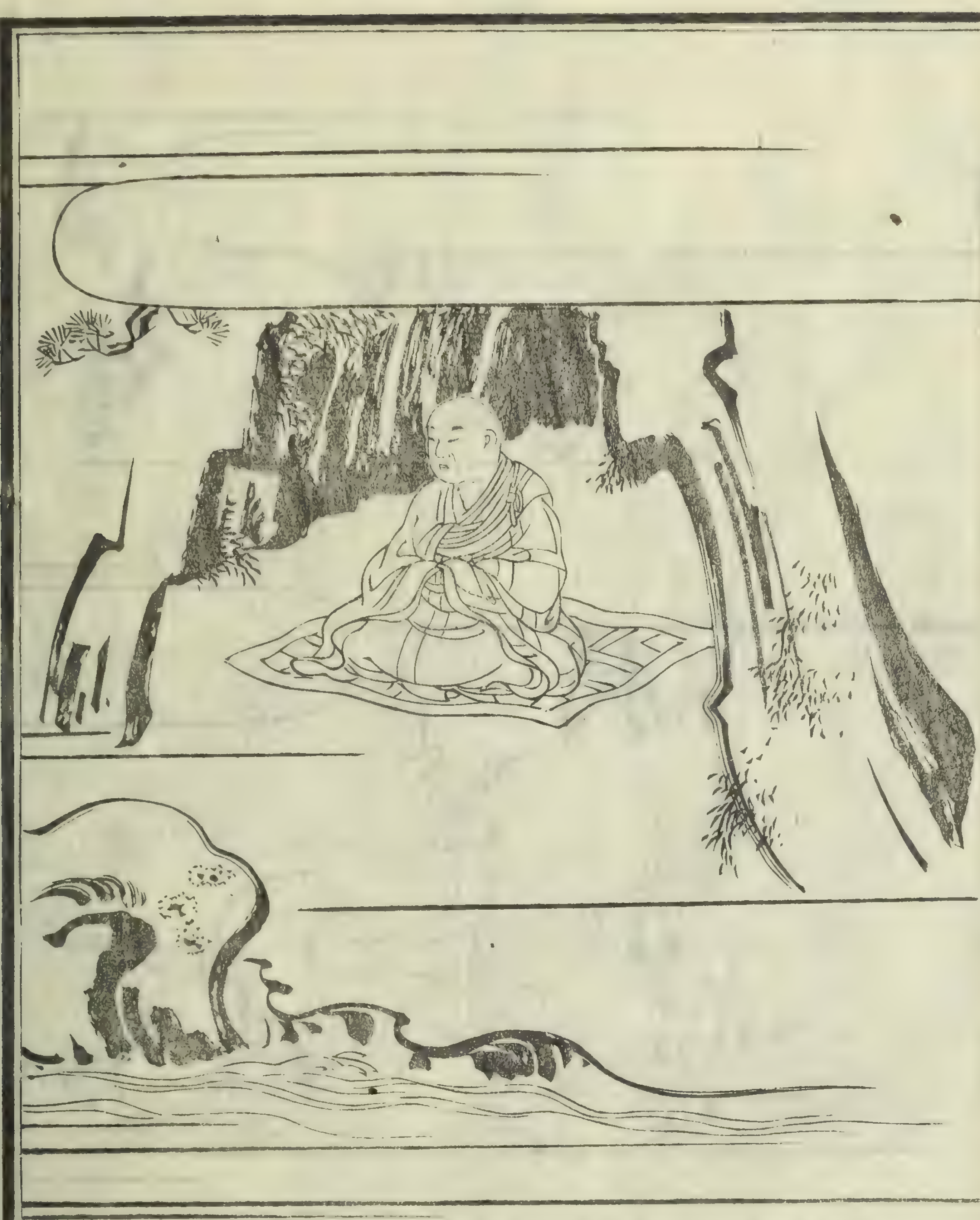
と浪になげしむといへども仏舎利に於ゐてハ和尚
はらいて牙とまなこ給ふを一心に祈請ありて除
災の法要を念じ給ふに船の進ざり一許里の風
波動ことなくして着岸速になりしかバ東夏にそうじ
発て南天の風と仰ぎ一鉢鑿に三密於数流宗
たり彼御舎利終に伝法の本靈として不空三蔵
に鐫錫し給ふ三蔵又書詔する於和尚に授く和尚
是を得て弘法大師に伝へあたふ大師則賞来して
ながく東寺の宝庫に納め於かれしより今に一鉢
於是宝として衆生の福田となり仰て現当の悉地を

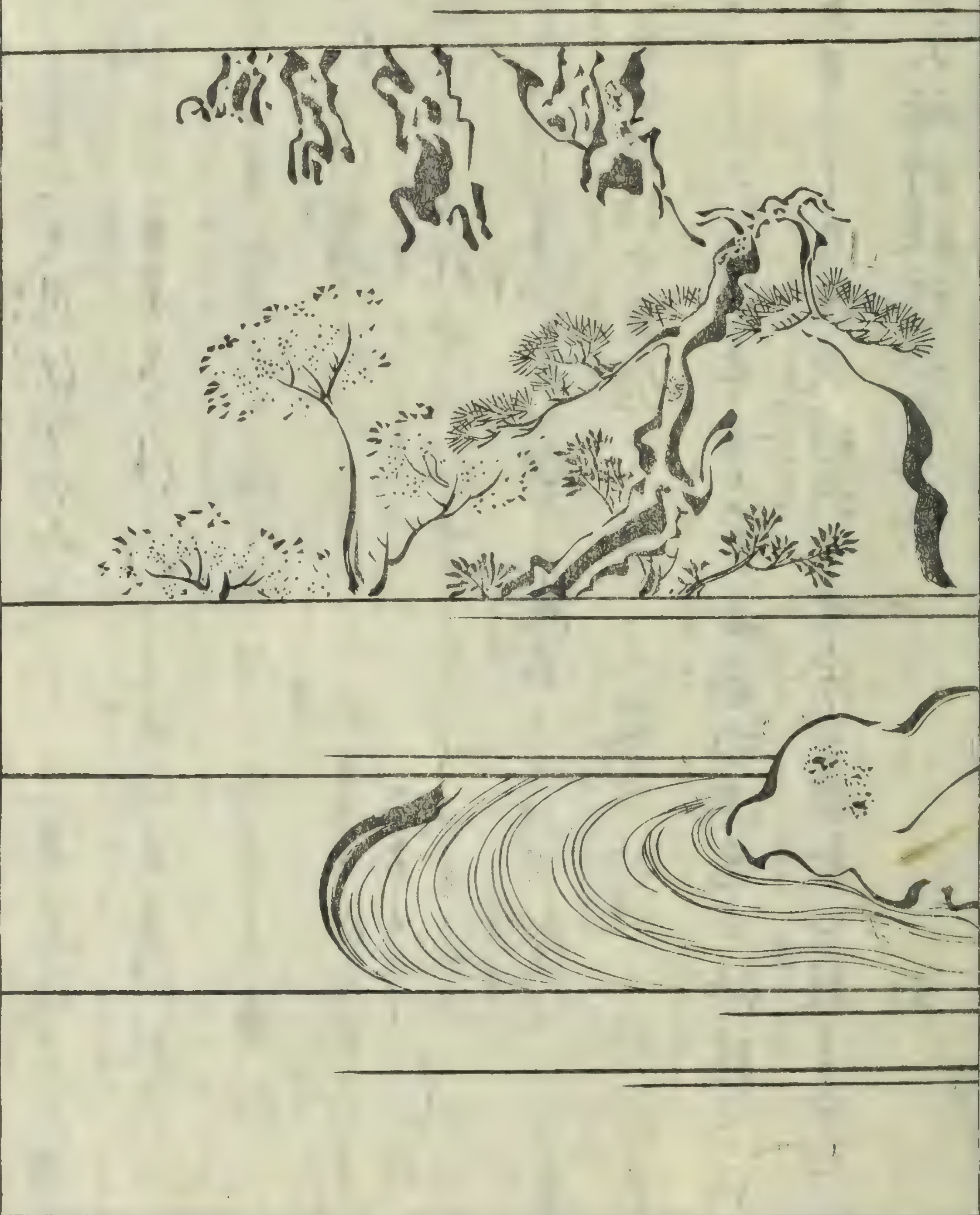
成就して博く率土の平安を祈る一粒といふとも他
穀育べからざるもの言祖まのかぎり厳識せのこ
さまかり定て成られ御意趣かなふべし亦大師
祈雨の賞によりて天長四年五月廿八日大僧都に
転任し給ふ同八年五月の比病悩に入て三泉
忽にいたらせ給ふ悪疾もだへおはりて吉桐現
せざりしかバ綱統の官職を奏辞して表をたてま
つるといへども　皇帝志ざし慰労ありて是を
ゆるし給はず　勅答の旨ん゛ずる事具に
載にいとまあらず

大和の国室生山は日域無双の霊樞　帝畿第一の
浄場なり大師殊に御手を留らせて密教の恵命を
まもし流塵の薄殺とだえさむがため先に堅慧の阿闍
梨に付属し給ふとまいふの秘本尊と此華にいさ
まり籠まりて渡海同行の弟子堅恵法師に
此鈿に住しめて修行持念し給ひあり道肝に崇給
へるなへにや神詫霊宅して霊感今にいちじるし一天
無徳とあふぎて風雲の感應たゆる事なく四海
益にあづかりて雨露の温潤かゝる事あし氷府陸地
ちるもちらねも福田にやしるまれ動植飛沈の命


室生練行







てもいまにまでも恩沢とのみ受られ凡奇巌怪石の勢ひ萬般なる筆墨もうつしがたく霊樹異草は綿々乃千百なる色書扣葉より織に選佛の場として塵俗に境ふかく依らしめ依りん人よりも崇敬きびしくその山より伽藍なり菩提寺妙法寺となづく天長年和の比菓剣ありしかども今におひては礎石のこされて知人なし大師御入定の後縁の奥継といひし人堅恵法師と師檀の契となし嘉祥二年に及て本家の御為に佛殿を建立ありしより信徒結構して今に崇敬と翫となむ

弘法大師行状記巻之九　終

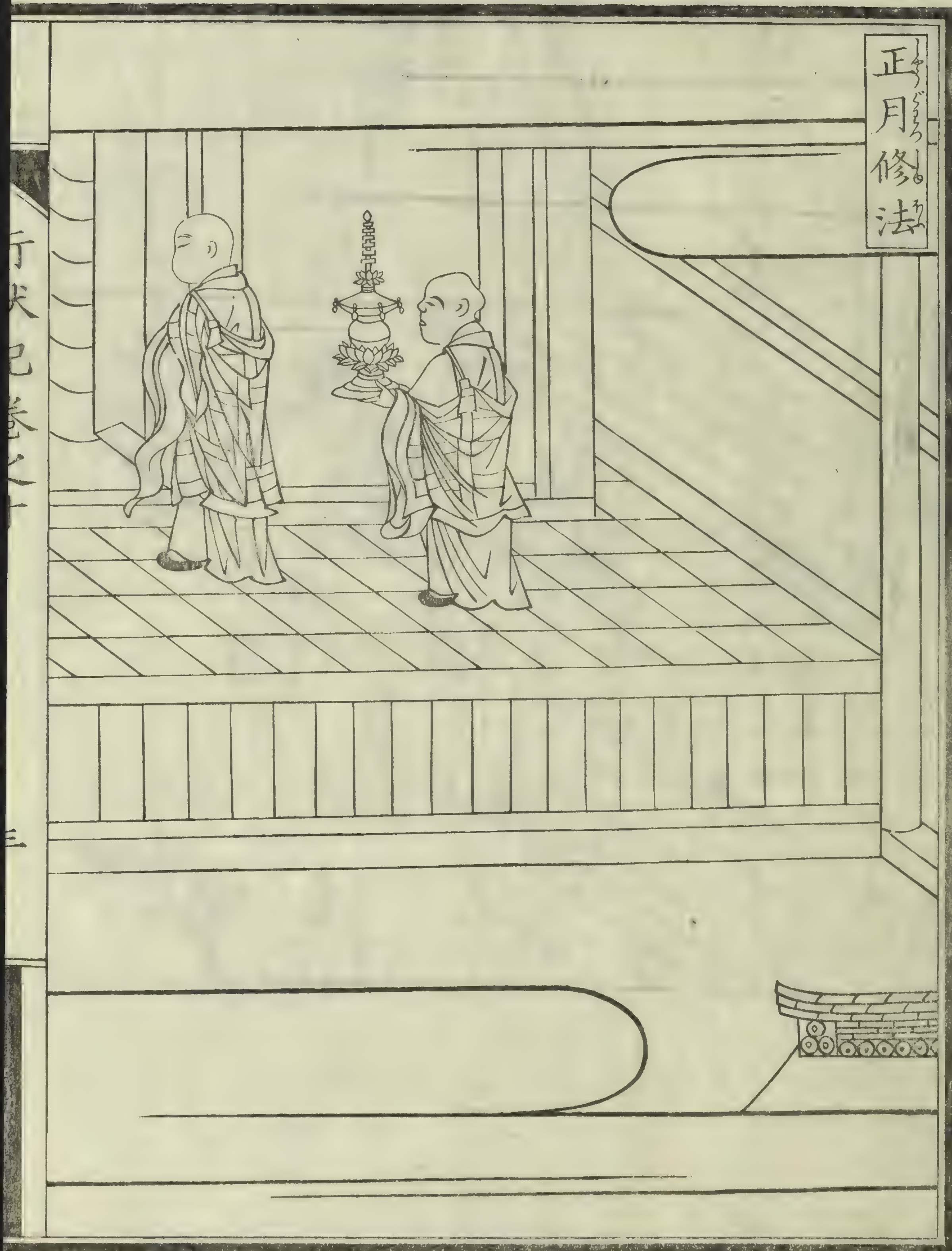
弘法大師行状記巻之十

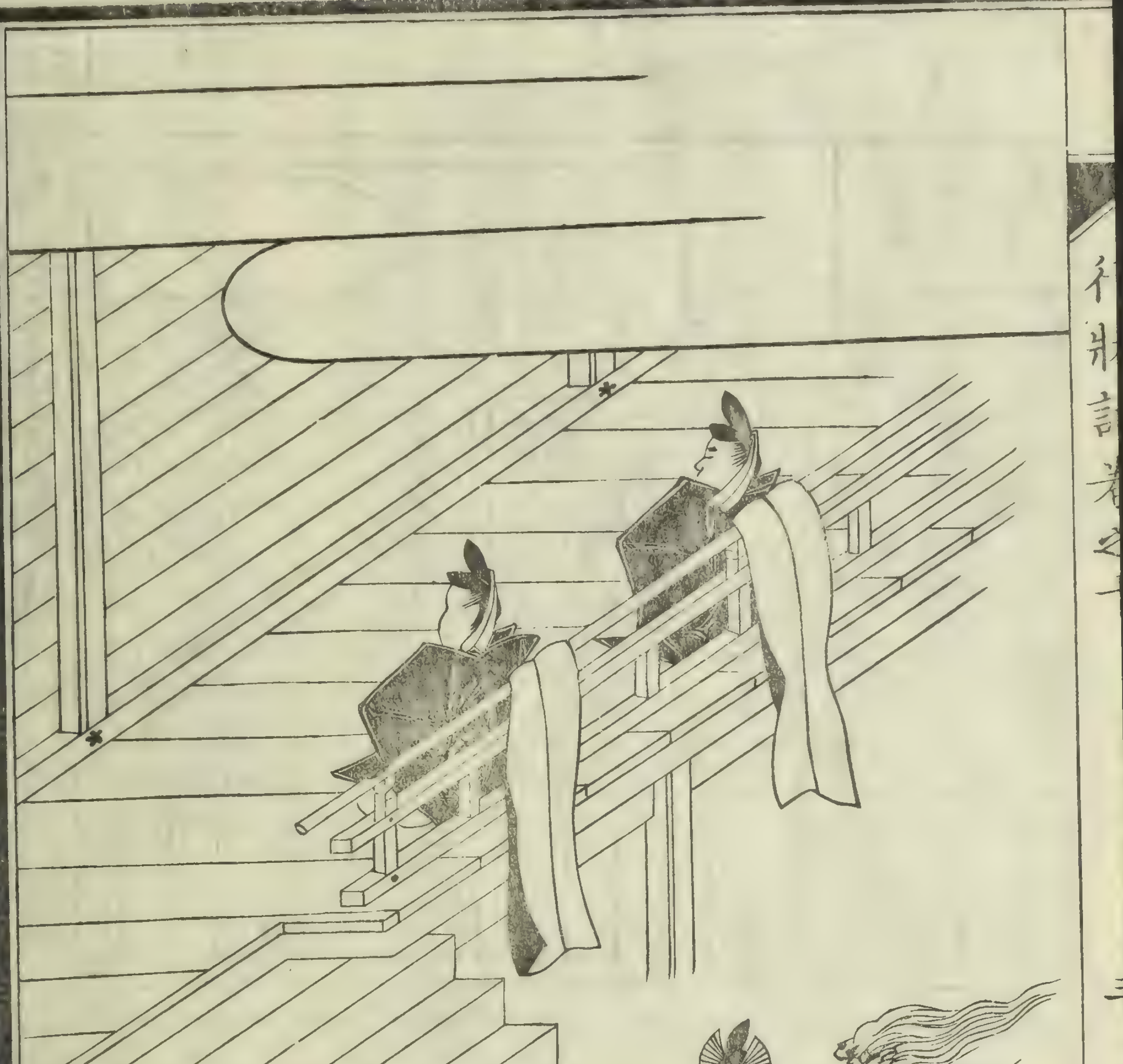
深草帝御宇承和の始に及で大師　勅奏により
まづ大内中務省にをいて正月後七日の秘法試
修し給ふ其後表をたてまつりて永代の規式と
奏し申されしかバ勅許ありて勘解由司の廳をあらためて真
言修法院を建られ曼荼の尊像を安じ秘密の
壇場とひらきたまへり承和二年正月に大師其の
處として修法の軌儀を貽されしより以来長者
と阿闍梨として定額を伴僧として名籍と

朝廷に奏し　勅使を道場にのぞましむ毎年
不易に嘉躅今にいたるまでたゆることなし誠に
是天長地久の謀理世安民の基なり倩其由来を
尋ぬれば遠く仏国の風範を仰てまのあたり日域
乃天威をかゞやかすことありいはゆる三長斎の月は王大
盡浄戒を守り恵施を行じ曼荼羅を建て護摩
於法を修せしむれば災殃を滅し福利を増べきむね
如来の誠説なり然るに西域印度の王侯卿
臣も是を敬ひ行へり流風遠く東土に
震旦にはうひに及びしかば玄宗代宗乃聖明

金智廣智の徳行とひゞき禁闕に於て神龍精舎
とさて内道場の剣あり城中に灌頂の梵閣をひらき衆生
殿とおもて内道場となされ解法の備を見て念
誦の法を行ひし鋒九重万葉つねに智の色を観じ
闕庭官寮ことごとく三密の印を結ぶ今彼の内道場
に准じて真言院となして勘解由司の廳を點じて
秘法瑜伽の壇とかざる竊に傳来の由緒を尋るに
織に盛時の規模なるを知り此法を大師ことに
深く思召入せ数日叡慮ありてはじめて思召し
御願なり顕密の義趣をあれら先内外の支に試

ともの人法理に順じて修行せば玉躰安寧の基攘災
招福の計是より宜なるハなし志かるを世澆季に
及び往昔の儀に異なり精舎頽毀して雨露をかれ
房舎く坊宇顛倒して風霜さけがたし瑜伽の壇
場香花のそなへとこのかざりたえ曼荼の尊容丹青の色
化きんとほいうに況や諸堂の什物名のミ残て実なし
諸卿の加法廢絶して幾の年をかふる君とし信と
して陵夷の甚しき傷嗟ふかくなるべし經の中に云
新をつくらむよりハふるきを修せむにハしかじと然
祖師建壇の基跡を崇め累代不易の威儀我集


正月修法





されバ定て臨時鄭重の齋行にも超過し新き営作の善業にも瑚璉者類又大極殿の金光明会ハ称徳天皇より以来　皇家歴代の御願として顕宗諧業の為一切経論ひあつまりて法義を商確せる事其儀已旧たり天長年中大師謙辞して選ばれ別て性学の宏材を施し給しより後叢宗の長者聴衆と奉仕して論場の光縁とす撰士ハ東寺院の修法いまださかりしかど年始の齋会など文義を議論あるといへども空しく醍醐の味を嘗ることかけたり粗し方經を披読して丸薬を服せざるが

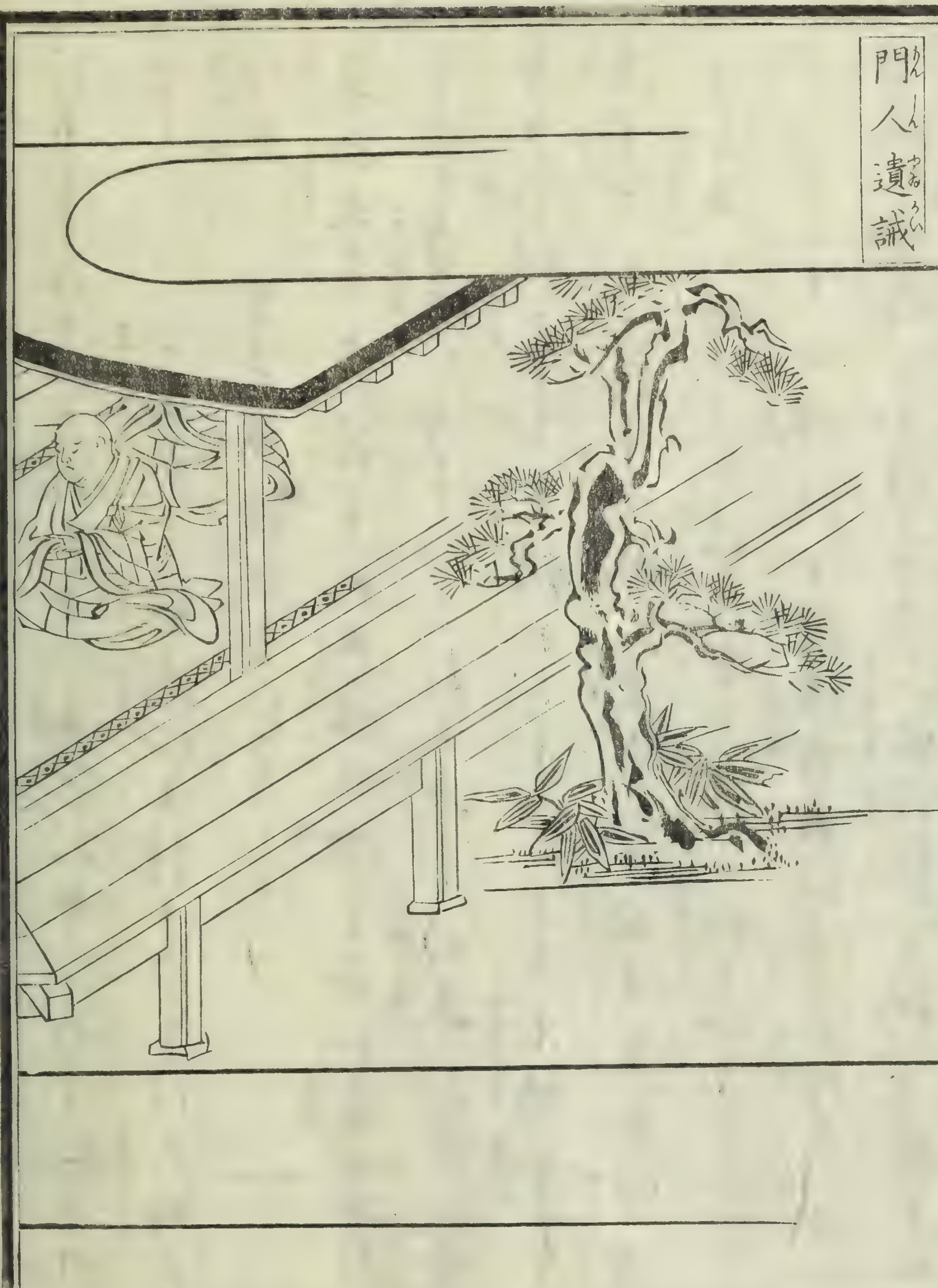
おほし大師此旨をおぼし召によりて上表奏
達の後講經七日のあひだ吉祥の秘法を修しま
しより以來顯秘の二教ともに如來の本意に叶ひ
て現當の福聚あまねくして満てり我宗の禪徒同く
鳳闕に陪て　皇朝の寶祚をかたく蘿粟にいのり
たてまつる方藥相合て花實葉根はるものをや子細
具に八表の文にみへたり大師はひろく深く顯密の道を
傳り權實の美をつくして龍尾壇に法鼓をうち
真言院に密印を揮給ひ後天延年中に大覺寺
の定照僧都昔の跡をつぎて我箇の御願に志ざ

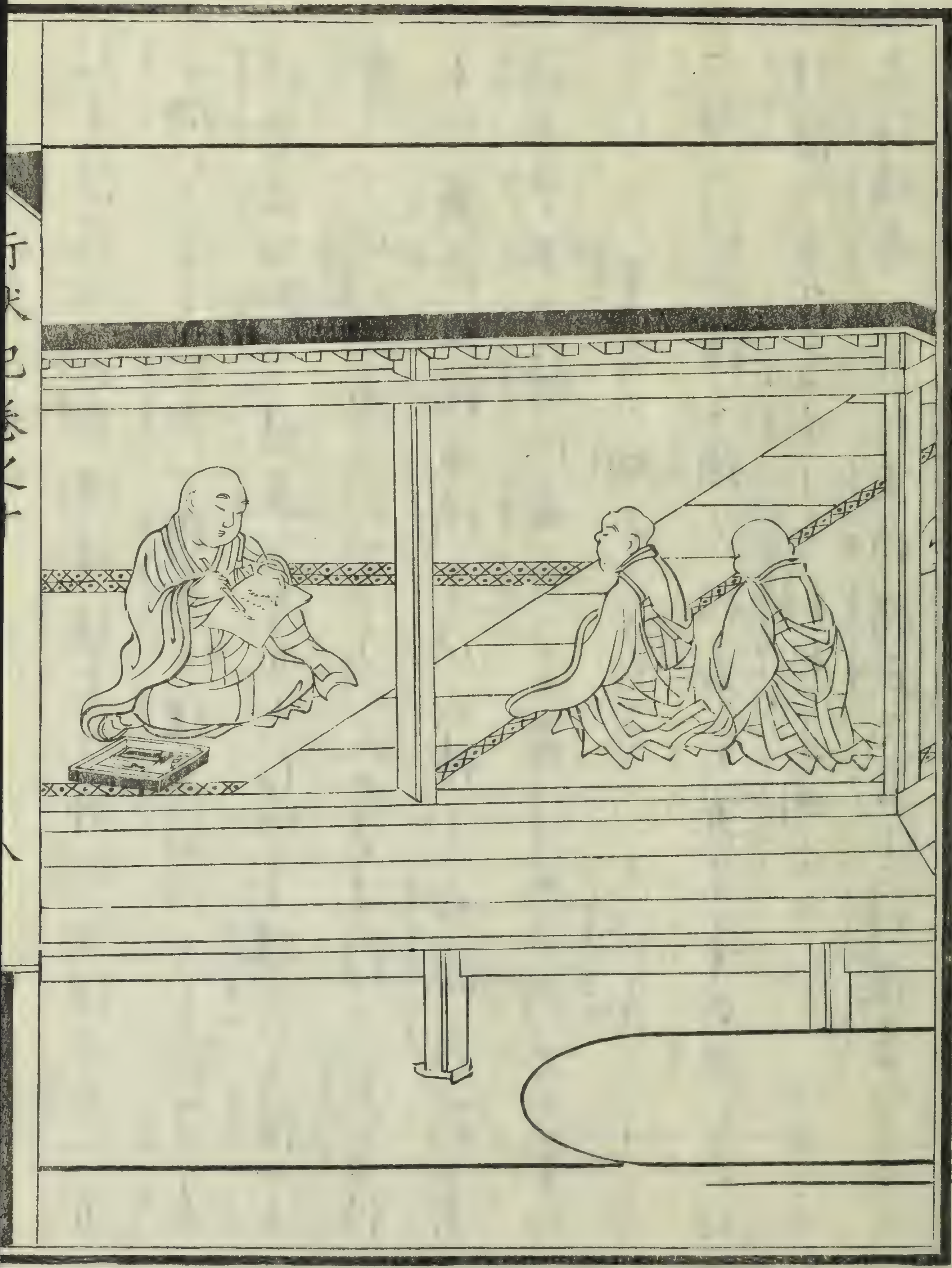
へりされば涅槃後二百餘歳まで跡をふむ人なかりしに
永治二年に及て勧修寺の寛信法務二度の公役を
勤て天延の芳躅を継より其後兼元の成宝仁治の
定親両宗の請に応てつとめしに涅槃後八百人頻稀
なり又正月十四日修法の結願にいたりて真言乃
長者大師請来の衲衣を着し曩祖附属の五鈷
を持して御殿に参じ　玉體に近づきて二篇
の香水を加持し一人諸侯に灑ぎてまつり賞
禄を蒙春の旦に拾き栄珠を千里の外にはしふ
是又大師の伝へ給し旧儀なり金光明会乃

僧侶論義を参勤し八宗の僧名ハ真言宗の
人選を上奏し諸宗をしりぞけらるゝ也かるが故し
又二間の夜居十八日の観音供晦日の御念誦等
同く大師の始給へるところなり是皆万乗乃
運祚をのべ八埏の煙塵をしづむる秘術なり凡
平城　嵯峨　淳和　仁明四代の朝に仕へ国家
に御在世に壇を建て法を修し給へる事凡十一
箇度なり倩大師利生のありさまをおもんみれば方便
善巧微にして甚深なるこの故に東寺の仁祠を護国
に果縁を崇て遠く七難の災孽をはらひ万民の

神池に无熱の龍王を請じて普く一天の慶雲施
覆ひ宮中の精舎に七日の秘法をのこし宝生の
錫地に三密の道肝を抽き給て皇朝を劫石と
やすからし　帝徳を巨海とひとしからしむ
遂に禅定の窟をしめて慈尊の会をまちたまふ
是又遺法を守て後生を恵み給ふはかり也
なりされバ　白河法皇大御室に　御対面
ありけるに法をとひ給て心をまゐらる高僧以下
人もおほく侍れども　名利に誇り恩恵
ふかれ東寺籠の大師に志く侍らじ也まて

なりきれるゆゑのふうれ有とたがひしやし知られ
ける　十哲の　叡慮いかばかりうは大師も
納受し申させ給ひきとぞ
兼和元年十一月十九日諸の御弟子に告ての給
まはく吾世をはやくもとおもふを明年三月の頃
なり金剛峯寺草創ありといへども未功半なり
及ばずしかるに我入定せんと擬す実恵禅師
は国王の師として徳天下に満て私にいとまなし
ぎしんと真如禅師は絶境の意なり真雅真済は
別人の契約をうけたり真紹禅師は別所建立の


門人遺誡

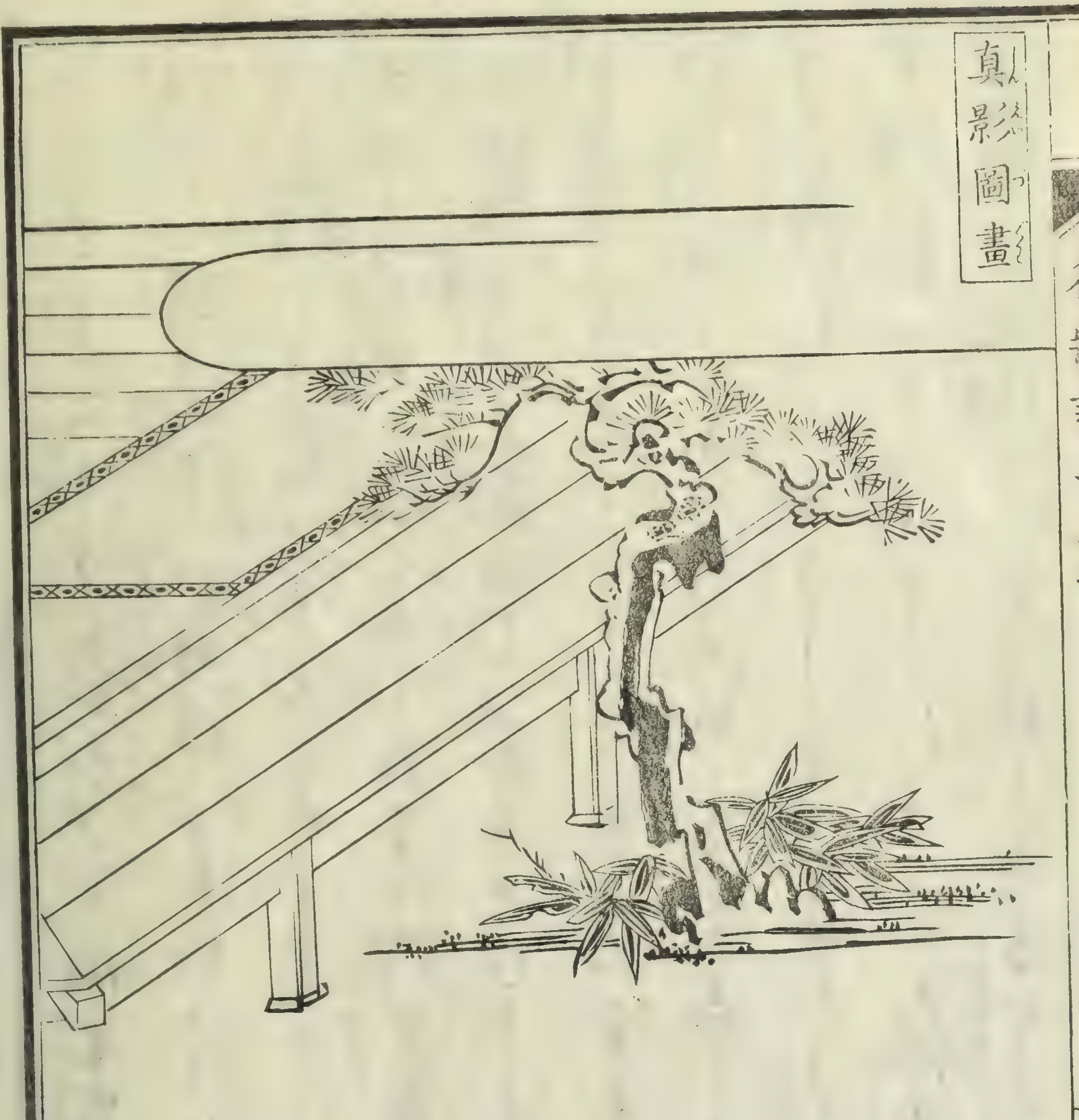


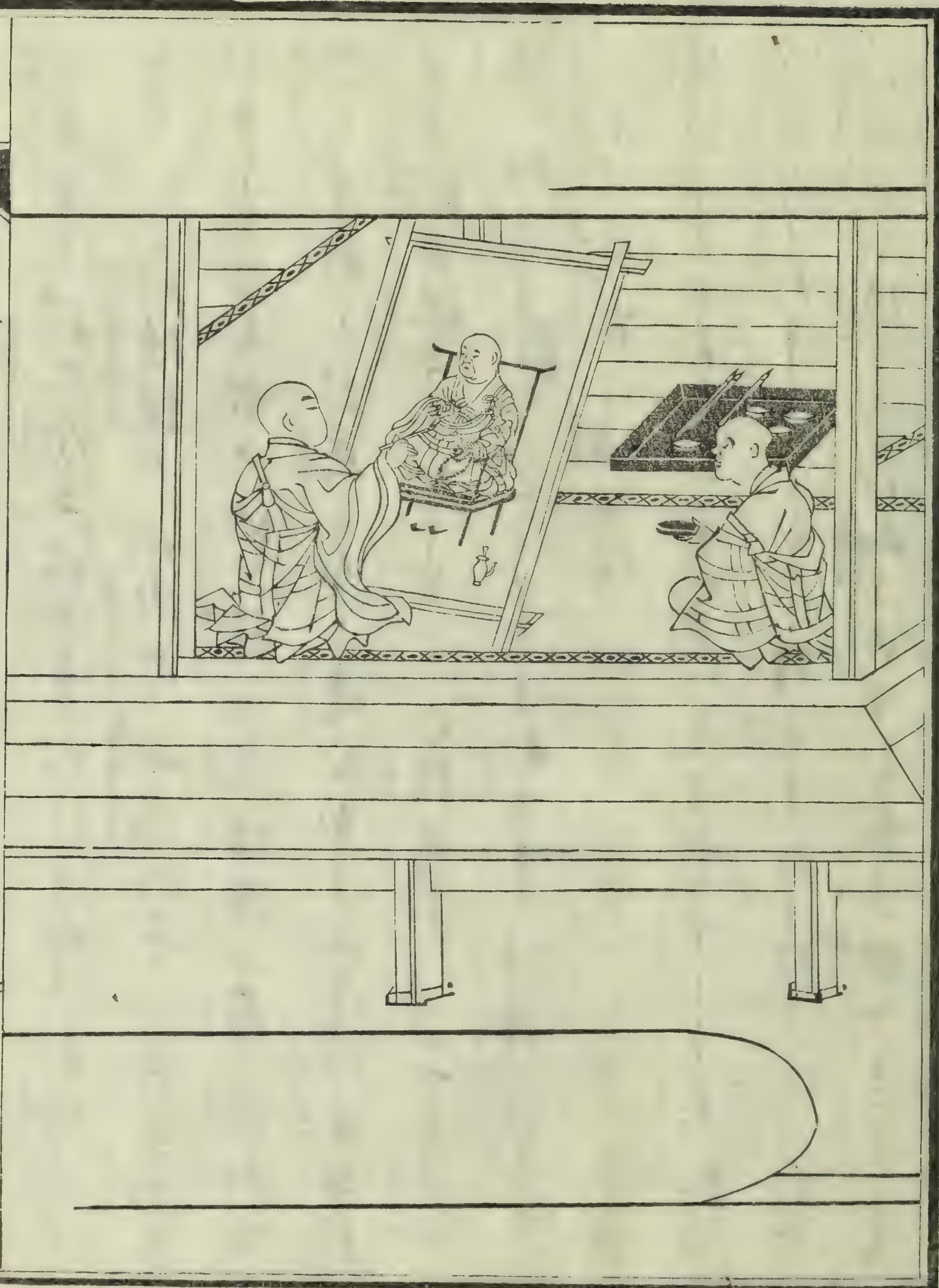
おもひけり真然禅師ひとり師蹤を継ぐ念ひあり
此師よりく此山と附属を依力あらうんば実恵
禅師徳を加へ建立をなさしむべし眼前に陳ずる
如くして山門をおこしべうに又のさまはなく東寺の
りて実恵大徳に預く此大徳を密蔵厳にあづかりて
諸の弟子の依師長者たる厳し人の師主の寵を
らむる豈その師に志うひや仍大経蔵の志を
一向に此大徳に預く但若実恵不幸の後は真雅
法師よりて処分して封納し開合すべしと云へり
又弘福寺をよりて真雅僧正に付し補護すをとめて

真済僧正に預け給ふ同二年三月十五日かさねてもろもろの御弟子たちに遺告ありけり天長九年十一月十二日よりふかく穀味をいとひもはら坐禅をこのむこれみな令法久住の勝計なりならびに末世後生の弟子門徒のためなりと仰し御弟子等ゆめさらさらにきけ汝等よく志をもて教法をまもるべし吾入滅す擬するは来廿一日の寅の刻なり諸弟子等悲泣することなかれ吾たとひ世をさるといへども両部の諸尊と心契をば自然に吾にかはりて眷顧し給ふべし吾初はおもひき一百歳世に住して教法をまもらむ

ところなれどもなむぐちとたのみて急て永く即世に擬するなり門徒数千万なりといふとも係属後生は貴子にして祖師の顔をみざるといふともなほむかしはからば師の名号をきゝて恩徳はふかれしく志は是師白屍の人は人はいつはりをえむと思ふみをはらば密教の寿命とまもりはぎて蓮華の三座にいたる志むべきはなり南無は師の開眼の後かならずまさに都率陀天に往生して弥勒慈尊は御前に侍るべし五十六億余の後必慈尊は御ともにて下生して師の先跡を問べし又かつし

いまだくだらざりしむかしだにも微雲官より来て
信否を察すべし此時法をうけたりける者も補試
得不信の者ハ不幸なりとしいへり
大師御入定の期ちかく成りて御弟子真如親王
末世後生の者恋慕の心をやすめむがために御影を
うつしとゞめんとてまつり筆を忍食く写しけり
少々持給ひけるにどれ大師うしろに来り給ひて開眼
なさば我くはへ置きましやうせたまひけれバ親王
其時御影をかゝしたまひて後ち大師すなはち筆
を染りて眼精を入させ給ひ高野山御影堂に


真影圖畫



安置せられて今にかゞやきたてまつる影像是なり

一條院の御宇正暦五年七月十六日

はからざるに雷火地を掃て雁塔煙に昇し時軒を

覆ふ羣樹ことごとく灰となり甍をならぶる諸堂こと

ごとく煽に化しかども其の影堂におゐては艮の

隅に火のくるまでいづくよりとも知ざるに神僧二人のまうで

出来て単衣の袖をひるがへし熾炎のなかへ入て

掛ひしよりて密宝かまへのうちをもぬらずして真影を

さらにかりたまふことなし餘炎まぬかれしにおよびて

神僧跡を隠しゝかバ切ものがれも緇素怪をなさゞりき

なるらんか其後　近衛院の　御時久安六年仲夏
の頃ほひ至て天火の災ありしに大塔金堂并ニ
坊舎数宇の華構ふたゝび一時の煙ふまじハりけると
いへども宝龕わづかに相残て霊像今ニ清く世に隠し遐代
不朽の美徳定かにまします親王篤信の感ふ答る由な
るかとおぼへ侍り
嘉和二年乙卯三月廿一日寅剋ふ宴坐して秘印を
むすび恬然として禅定ニ入給ふ其時御弟子たち
弥勒の寶號をとなへらるゝ御眼ひらきとづるとみて入定
の期とはひとへに生身のごとし春秋六十二夏臘四

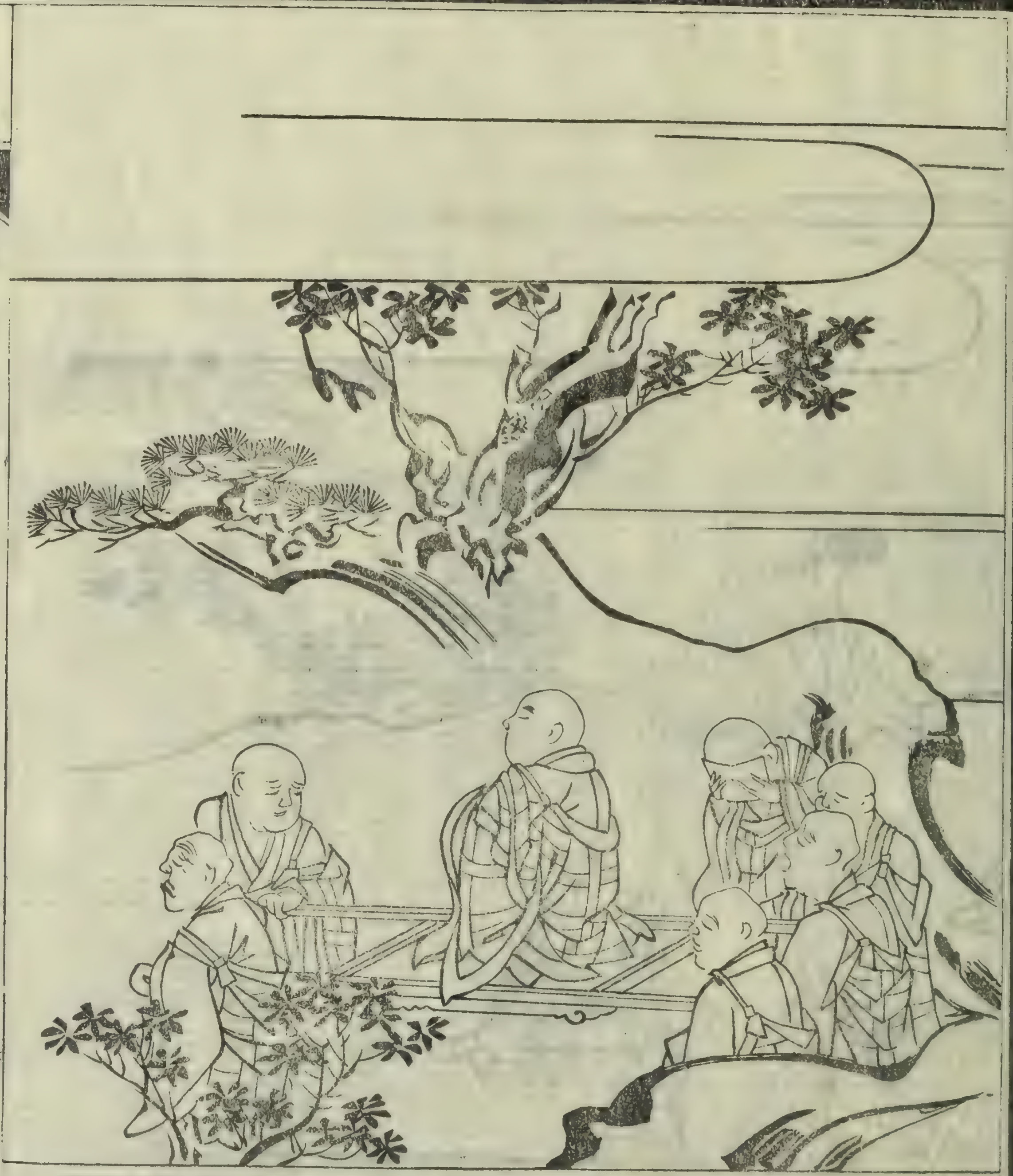
十一日則御庵室より奥院へうつしたてまつるに実恵
真雅真如真済真紹真然御輿をかき奉給ふ世間の法
のごとくにて七日の御齋忌をおこなはる七日すぎて尓
御弟子ら悲まつり拝みまいらせられければ顔色
おとろへず鬢髪ながくのびさせ給けり後に石壇を
こゝみくまつうに人の出入まそらむどにきり其後は
石をもて五輪の塔をたて種々の梵本陀羅尼を收
兎又さらに宝塔を立て仏舎利をも安置奉られ
ける加様の事ども皆真然僧正のいとなみなり同
廿五日公家勅ありて内舎人清友新をつかはされて

大師の終儀をとはし然給ふ微音わづかに瞑く縄
床せられし其時じ慧炬光をかくして法雷響を
屈む三密寂寥として四衆哀慟し中使奏聞を
なふ　宸悼いと深くして　朝を廢し給ふ事
三日を經たり　太上天皇かくじきれを
宸筆を染て弔書を下され遺弟孤露の悲緒を
慰勞し給ふ事懇なりおよそ法體堅固にして
無来無去なりしかれども機縁に応じて八人世
に出づく道品を證して入圓寂にうつるも聖人化度
の法様の風なり家に定力をとりすましてかの依身


南山入定











とゞむる事大士利生は方便に以て奇異なる
かな宝積経に菩薩の修定に十種の勝利を挙る中
に第十にハ續正法と興し三宝を紹隆して断絶せ
ざらしむと説たり古の叡達も法をまもり世に
まくんのおろそかなるにいたらざれどもまのあたり
生死分限の慮識にいたらずして遥に当来慈尊の
会にお継しむる物のことはりもまれなる哉や雲居
寺の瞻西上人所持の大師御筆の金剛般若経
の批文に云我昔遇薩埵親悉伝印明発无比誓願
陪地獄畫獄悲万民経普賢悲情肉身證

昧結慈尊下生といへり弘誓のちかひぐふかく定
力の志ばし感ずるところ以て志りぬべし竊ニ
おもんみれバ修定多途にして顯密殊と異にせり
一心の利刀を翫ハ顯教なり三密の金剛を揮ハ密
藏なり昔飲光尊者の釈迦の附属を得し定室
を雞足の洞に點じ今發光大士の遮那の秘教を
まもる禪窟を庵の嶺にしむ令法久住は芳猷
入定留身の體儀やゝ相似たりといへども彼ハ遂に
化火膚を焼てまさに三會の說時に滅盡し是ハ
まのあたり金剛の身と成じて妙に又智は覺位に

安住をはらひ辺域にして弘生の地をさり末代澆季にして正法の時隔たりといへども金剛定の巨益特しまさに同日の談にあらざるをや其全身を禅窟に留めのちには猿子が影向と遺迹に加て擁護と遁迹にまかし利益を華夷にかうむらしむる志あまねくと真迹の文にのせ置去寛治二年のころにや東寺の定額僧禅実と云し人讃州善通寺の別当に補せられてぞ下向しける彼寺にして大師の筆跡を感得あり其文に云居卜二於高野樹下一神遊二於兜率雲上一不レ闕二日々影嚮一検二知処々遺迹一とかゝせ給へり

さればぞ高祖菩薩の御棲息經行の所其地をのぞむ人は芳縁のあさからざるにやとたのもしくはべるのみ

弘法大師行状記巻之十終

弘法大師行狀記

識

弘法大師行状記巻之十一

東寺の灌頂院ハ大師在世に聞いまだ造畢せられざれども也法しかも傳燈の御法を修ぜしめられよりて実恵僧都にゆづらへつかはさる御入定乃後かの大徳も寺務に長者として寺家に土木の成風を修給ふ一堂の構へ安壇のかざり大師の修坊に給ふとおなじかりしかバ大唐青龍寺東塔院は道場とうつさる曼荼の尊像儀軌として密厳の舊容にむかへるうとおかん萬徒の荘厳赫奕

として華藏のゆかしくにひらけるがごとし承和十年十一月十六日僧都表をたてまつりて國家の御ためにまた眞言宗傳法結緣兩箇の灌頂を行ふして修すべき規式を奏し申され同年十二月十三日眞紹大法師のために傳法阿闍梨職位を授らるまた東寺具支灌頂のもよほしあり大師齎來の道具惠果附屬の衲衣をもちて時また國給へり白眉青眼の須徒蘿襟とまじへて會場につらなる絲竹簫角に綺綸挑延にのぞみて威儀とゝのへく色衆四十人 爲讚衆頭 惠峯眞紹 樂衆三十人俗乃

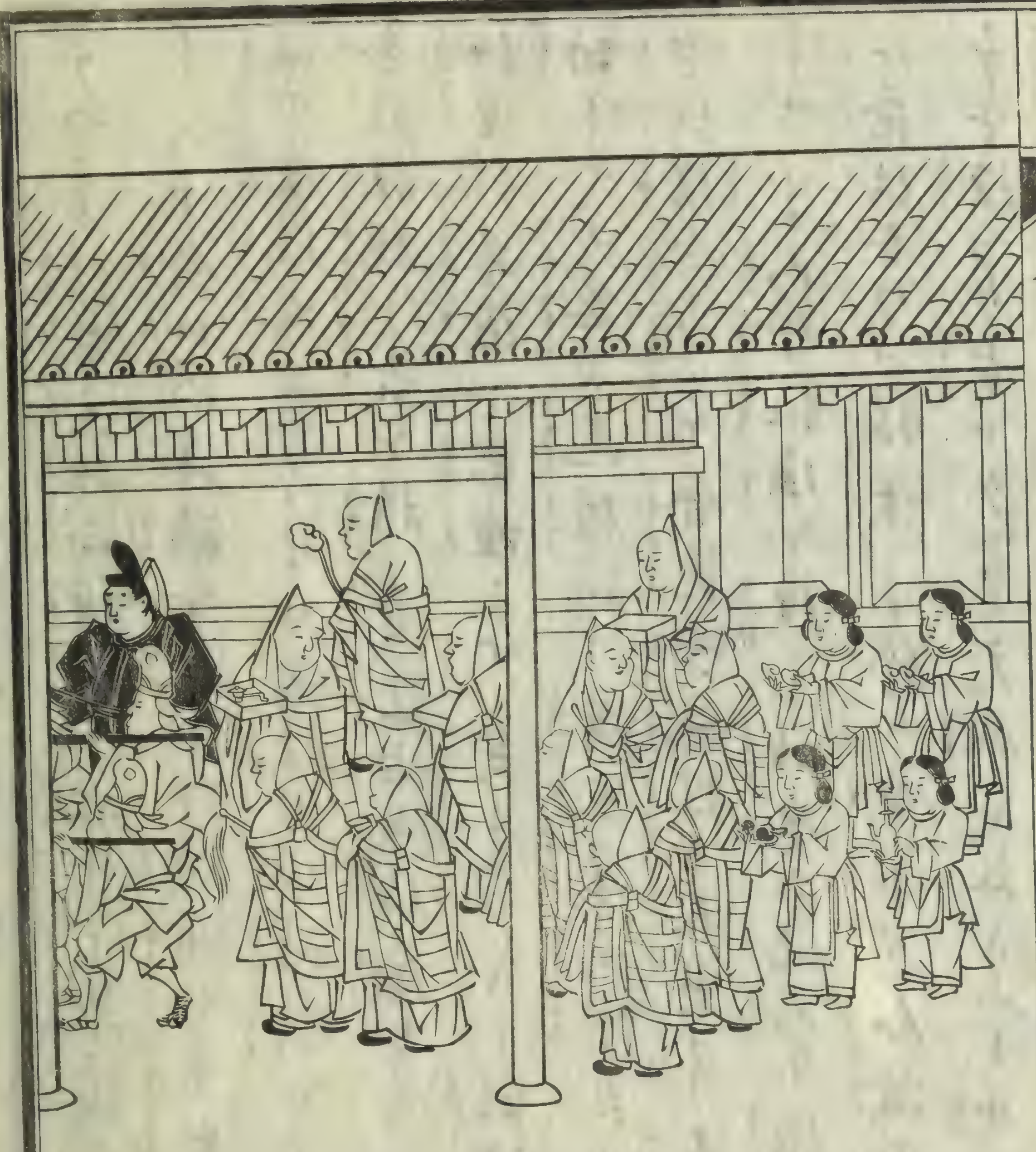
御前十人楽の御前四人勤請師一人阿闍梨の
弟子十二人御後の童子四人都盧百有余輩両院
より列を整へ大馬道より灌頂院に入る梵讃空に
和し音楽地に満て々人感激し見る者
随喜せずといふ事なし実恵大徳戒場に
御にのぞみ高座の前にすゝみ給ひしかバ高祖大師
忽然として法筵に影現し給へり大徳奇特の思
をなし屡まじろぎもせず眼を閉て踟躕せりときに
足をそろへてまつるに威儀宛然として猶ありとの如し
此時舞踏をなし高座の傍を廻りたまへり

大師の慈顔余人あへてまみえず大徳一人是を許したまひけるとなむ聖者の出没ハ機縁の有元によりて権化の隠顕豈凡愚のはかる所ならむや志かありしよりこのかた高祖の君素試かへりみ先皇ハ牒符をまかりて宗ハ長友なる人ハこの精舎として叙く授職の壇とかざれり中ハ
継體の天子忝く帝座をさりて仏家も
ニ入り祖師の遺跡を尋て灌頂の大道に趣く或給ふ事
宇多法皇はじめて其の規模を継さる所謂延喜元年十二月十三日園城の僧正益信

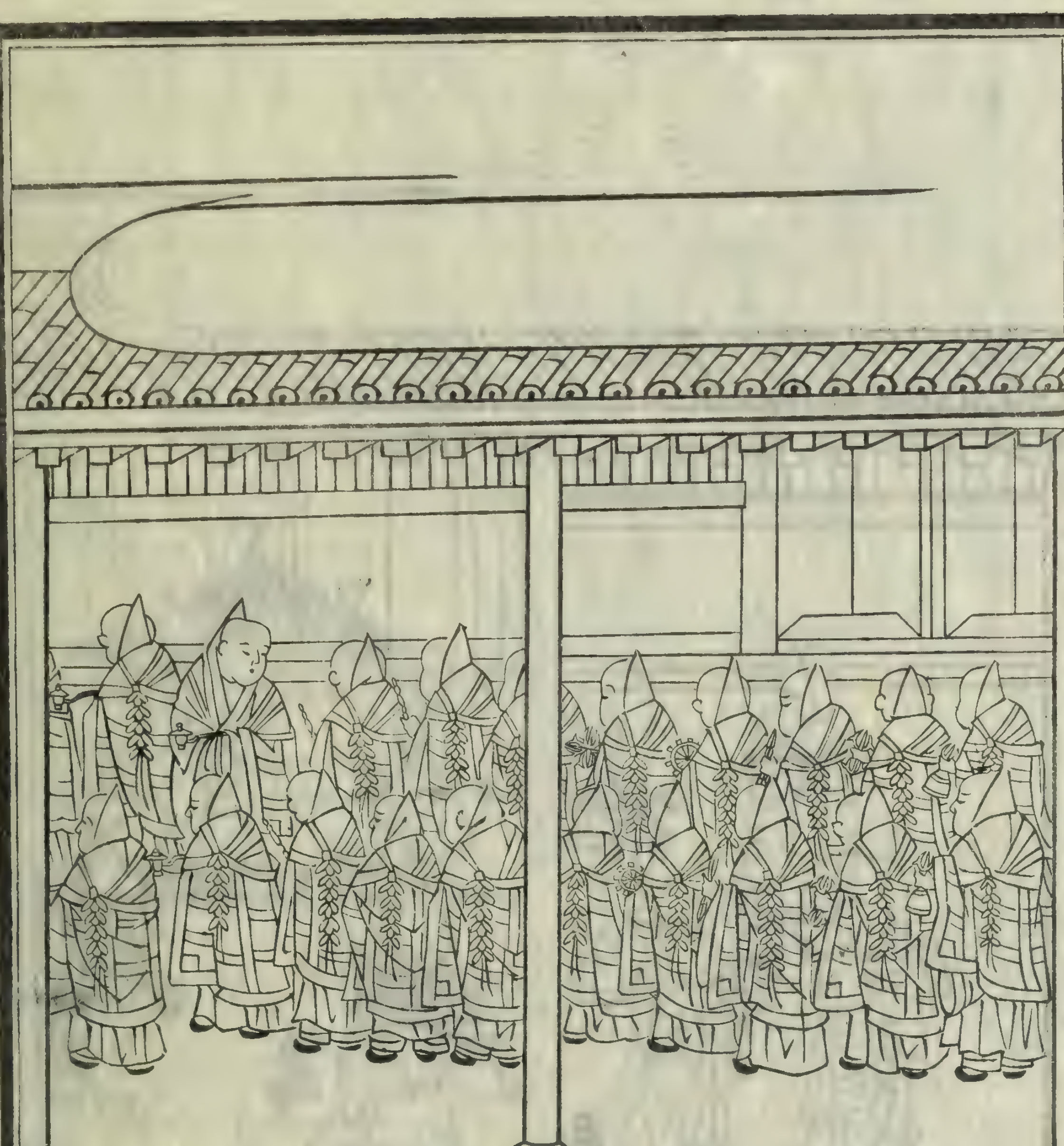
と于時一臈長者して大阿闍梨として醍醐の當師聖寶
于時大僧都二長者と選く嘆徳の和尚として入室は上足神同
律師となりて教授の大徳として亀齢八十餘に及ぶ
あま法嶺の龍象恵苑の琳瑯たり　親王公卿
侍臣官寮威儀庵従雲成なし地として勢りたゞ
堯風の遠くひらくめしに及びて又佛日の宗中今
まさにあらはれなんとや背光畏三藐の帝位と辞
して法苑にあそび給ひ又智圓明の月光と中天の
雲に朗かし今禅定仙院の王家と遁て道林にいり
給ふ四種曼荼の蘂にあひと東寺の庭に薫り

西域東密土境へ至るといへども又玄宗乃瑤圖我
未てら三密の印璽と仰ぎたまふ風範やひとし
これそのとや又永延二年三月九日　圓融院乃
法皇廣澤の大僧正寛朝を師として灌頂の壇に入
王給ふまでひとへに　先皇の嘉蹤とつぎ給て
延喜の芳躅追へり三台九棘の賢臣劔珮を帯し
て綺羅とかし南京北嶺の釈衆法具を捧て威儀
を整ふるまゝよりおほよそ三百餘廻の涼燠を送り
徳治三年の孟春を迎て禅定法皇遥かに
宇多　圓融の曩蹤を慕ひ延喜永延の往事と

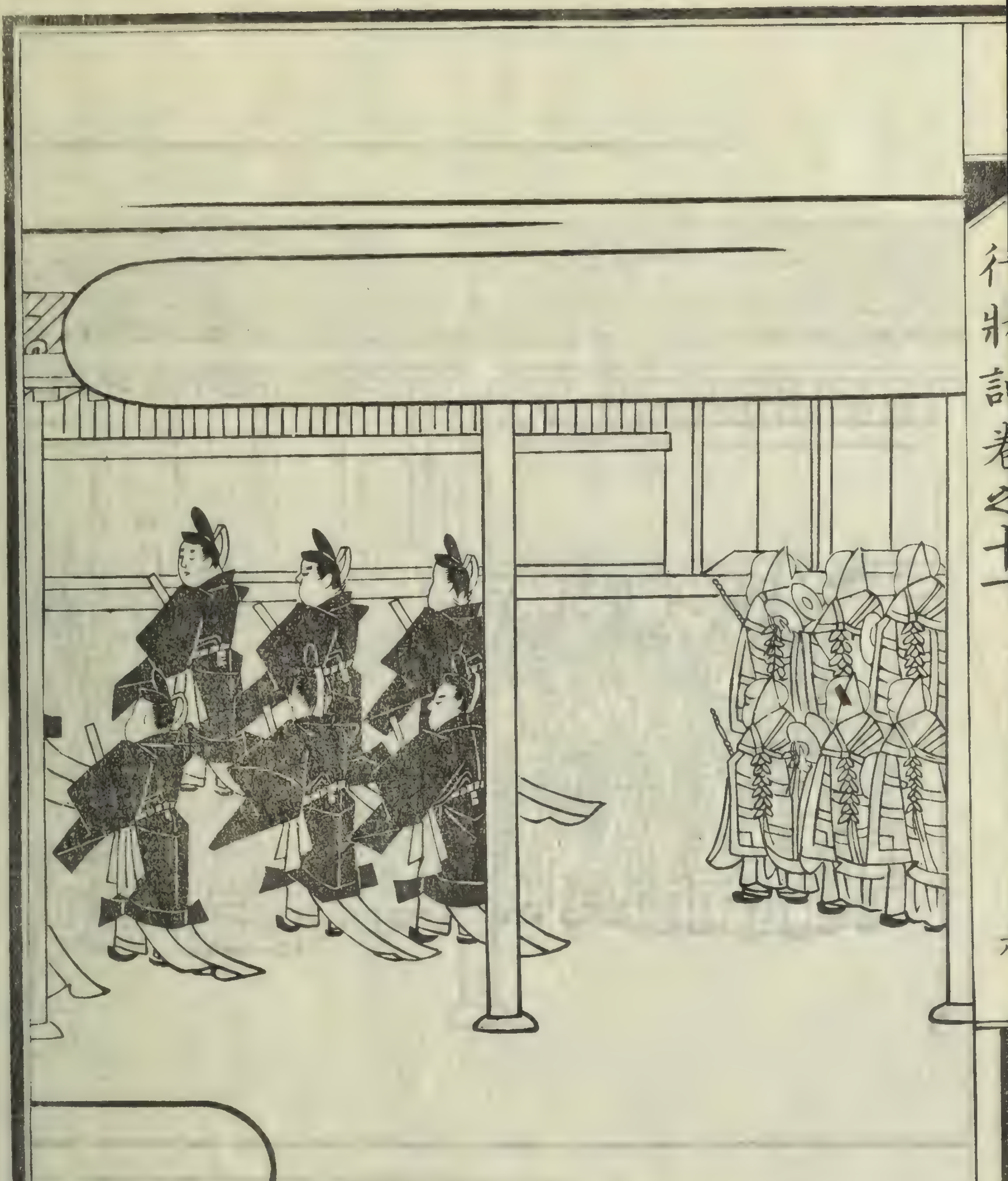
うつさる法務大僧正禅助を請して授職の軌範とす
し八十余口の薛衲を率して道場の色衆とし蘭
坂の瓊枝旌につらなり緇林の頭枝襟をまじへ大
会の壮観上古を模して上古に碩徳あり
法皇尊儀を密壇にすゑましまし時地大に振
動して天忽に光耀ありし昔巨唐天宝年中開元
寺の精舎にして含光索元琮がため不空三藏
むかしに五部灌頂を授けし時其の地大に振しかバ
三藏はなはだ称嘆し給て弟子が心識の感ずる
ことを悦べり古をうらやまん今をおもふに世露流傍

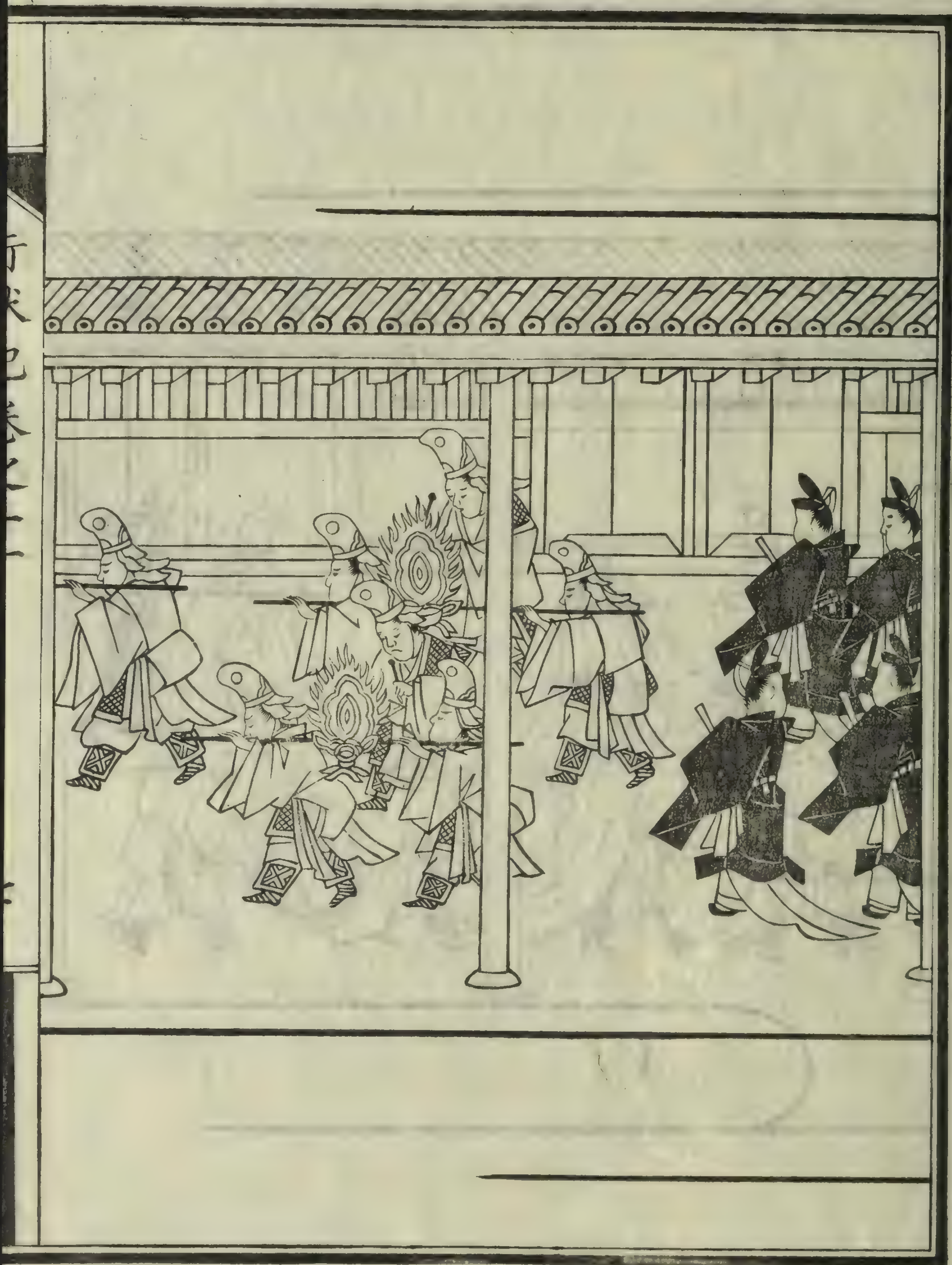


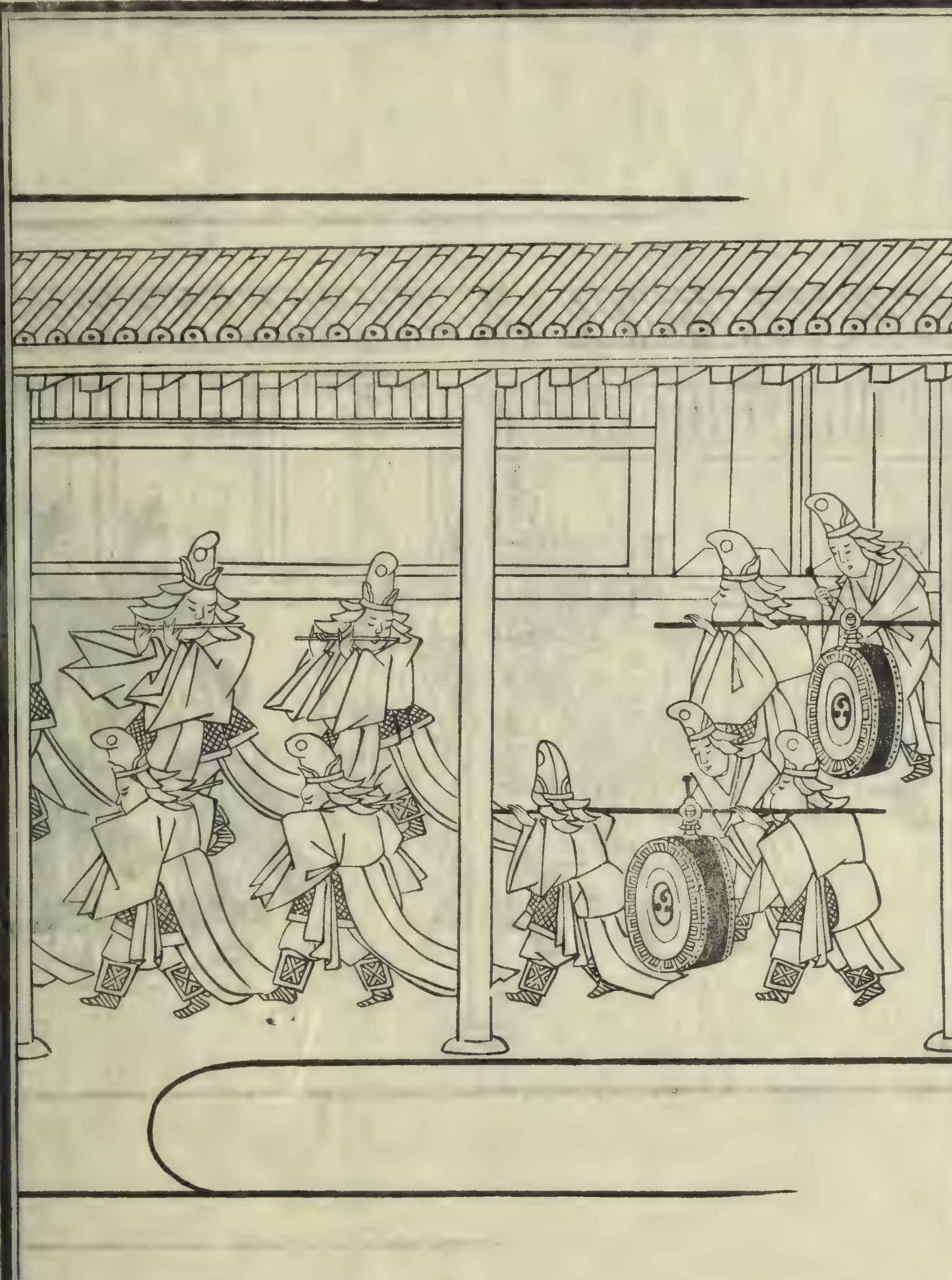


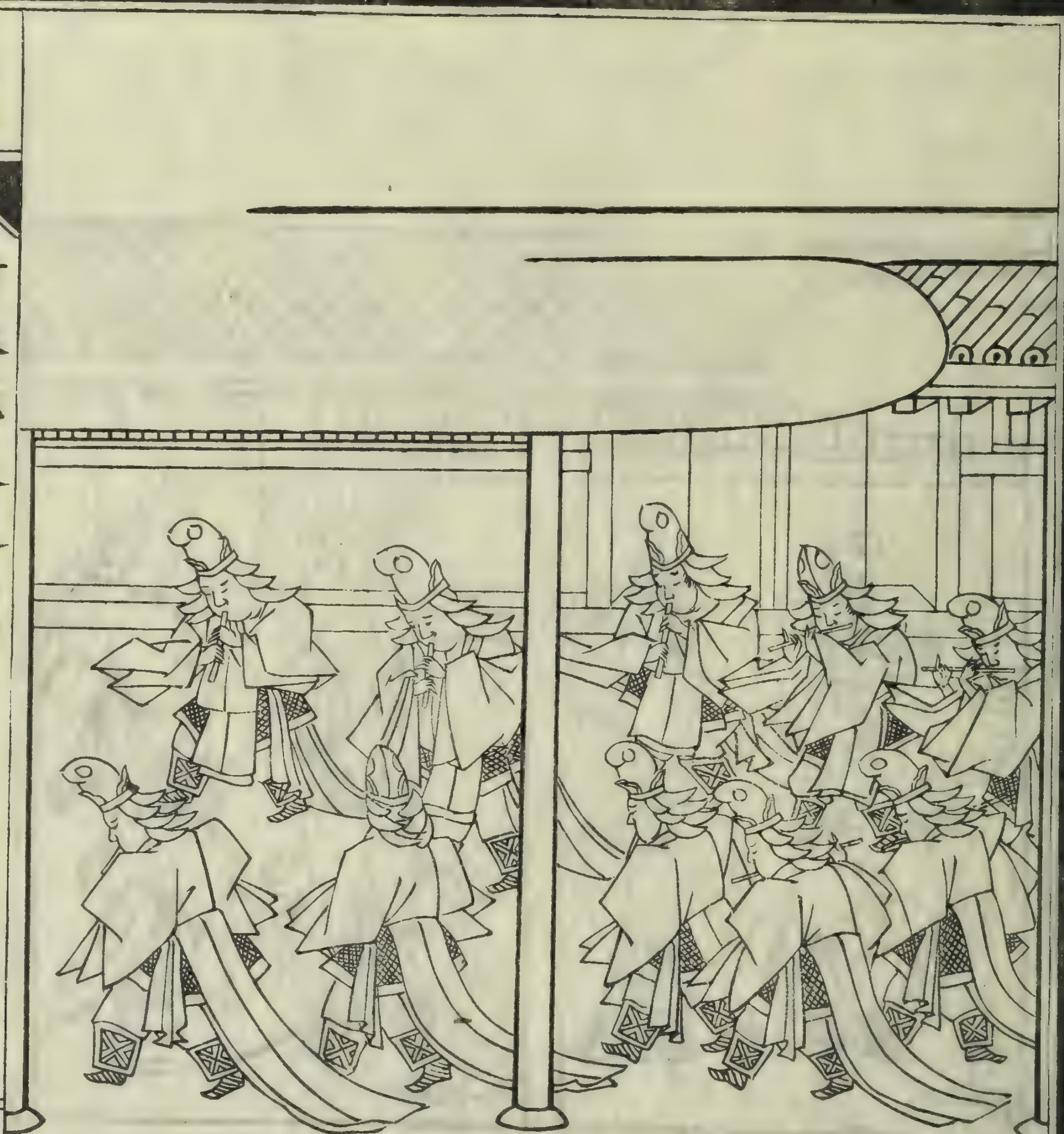








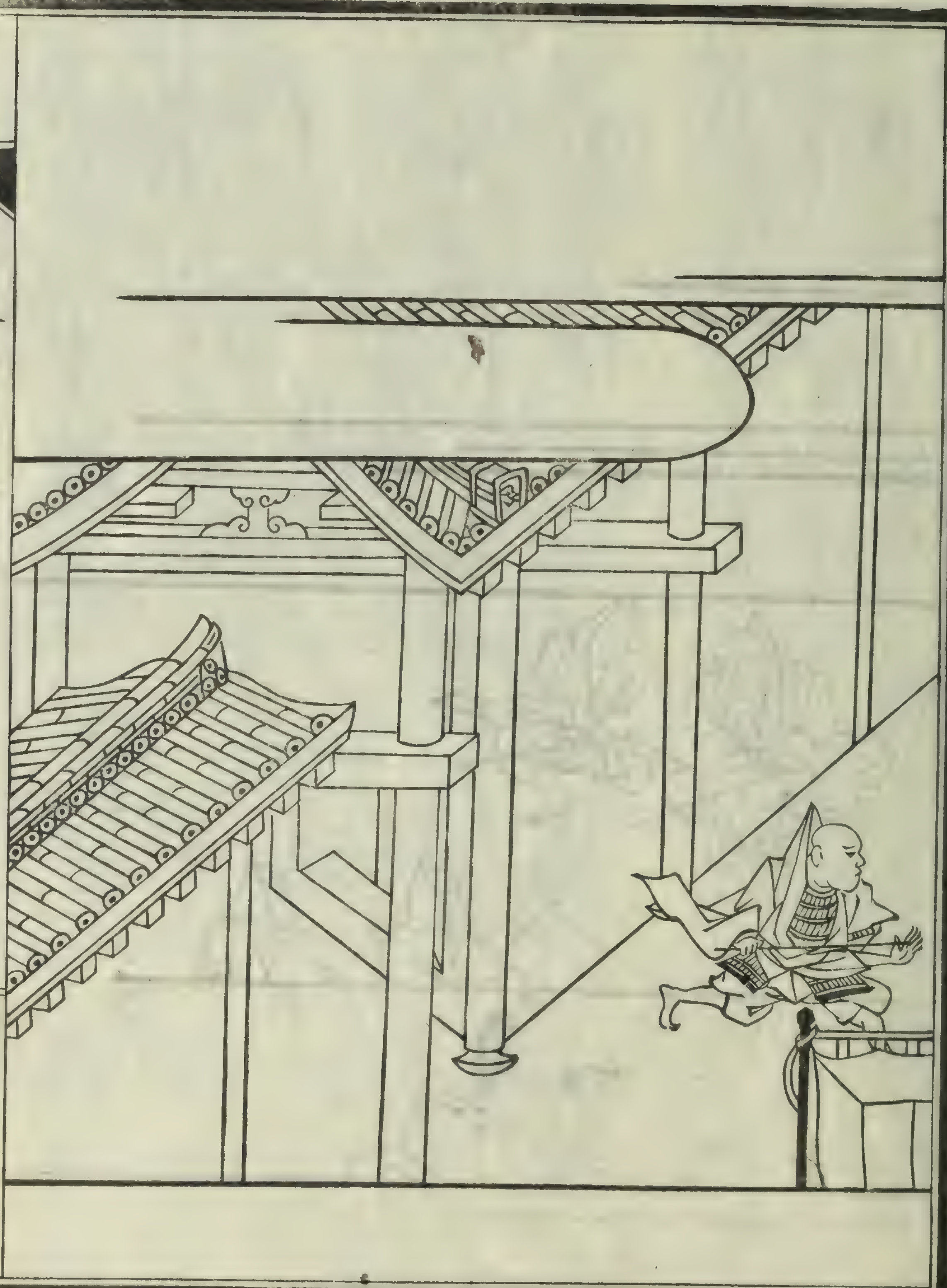


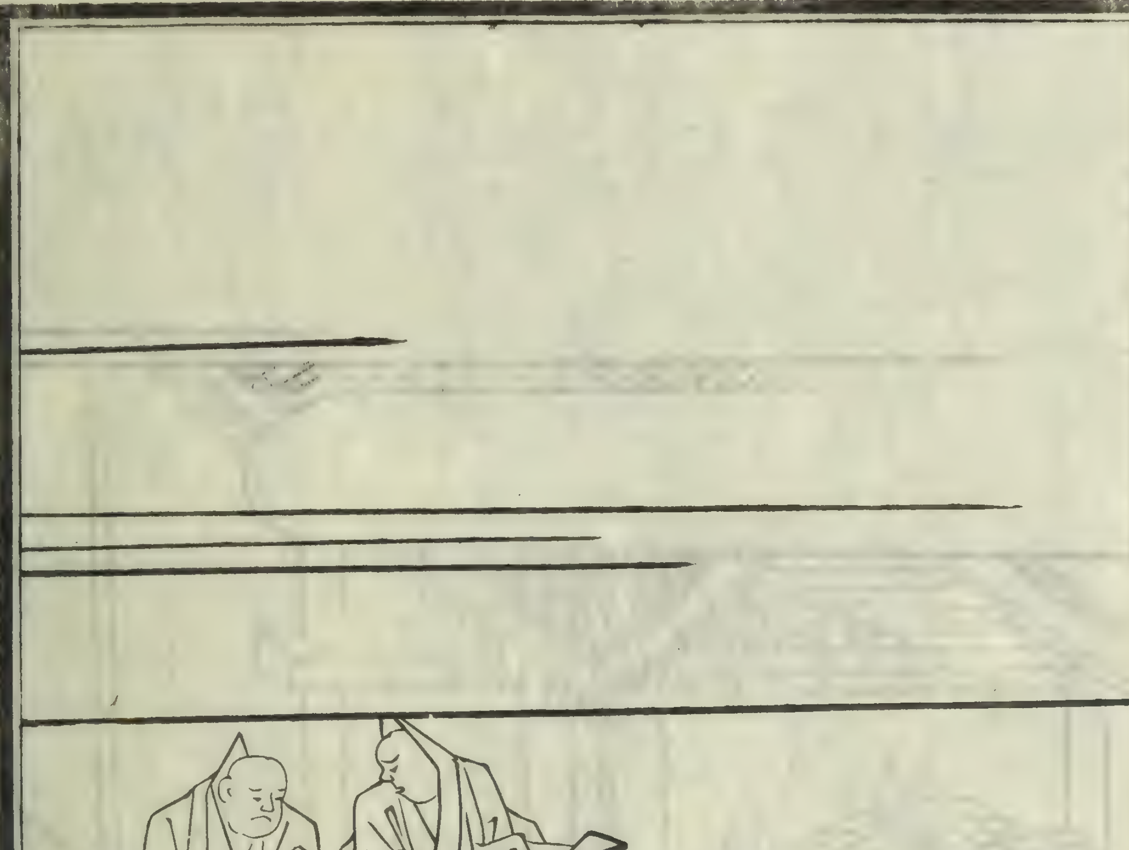




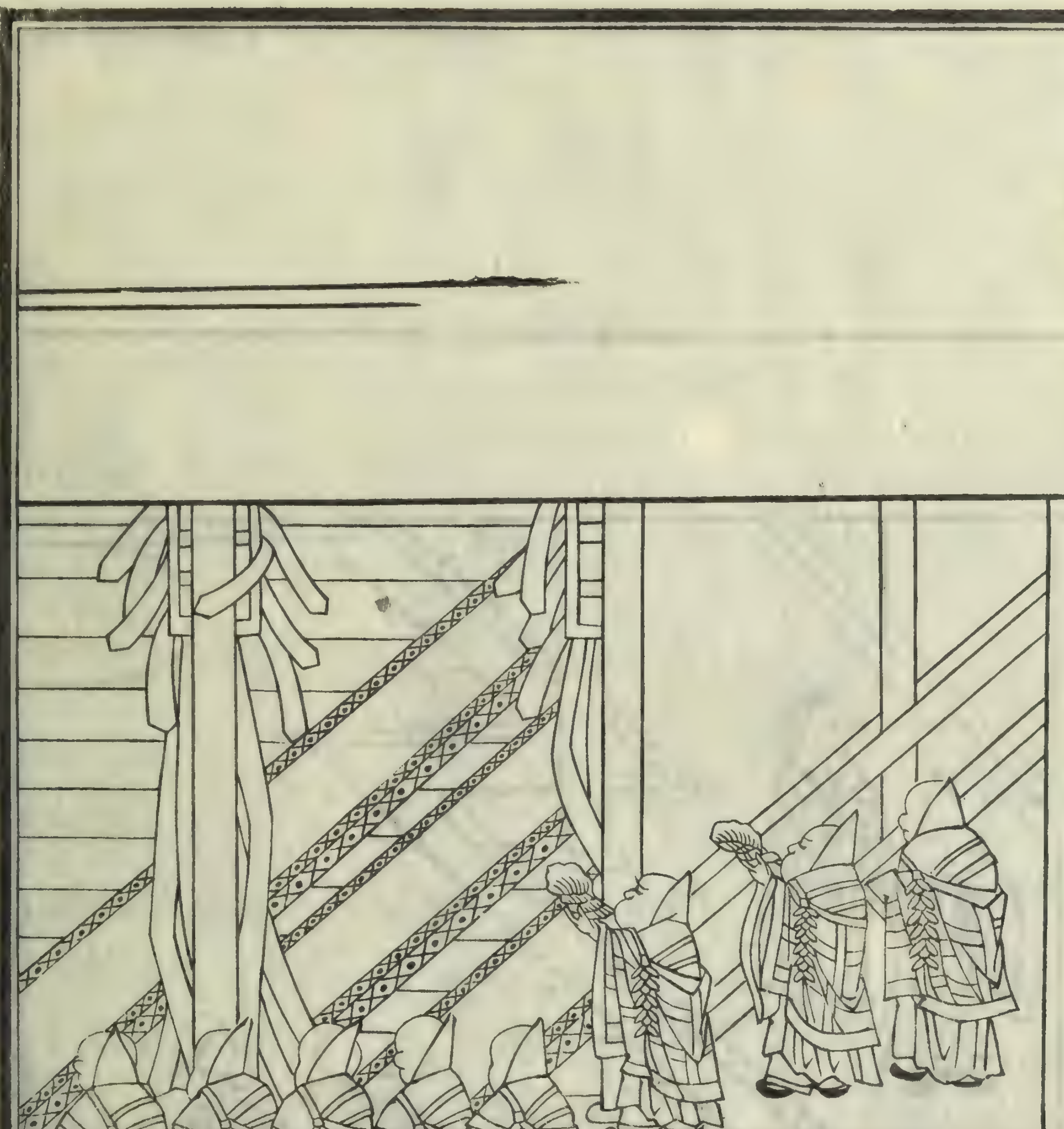


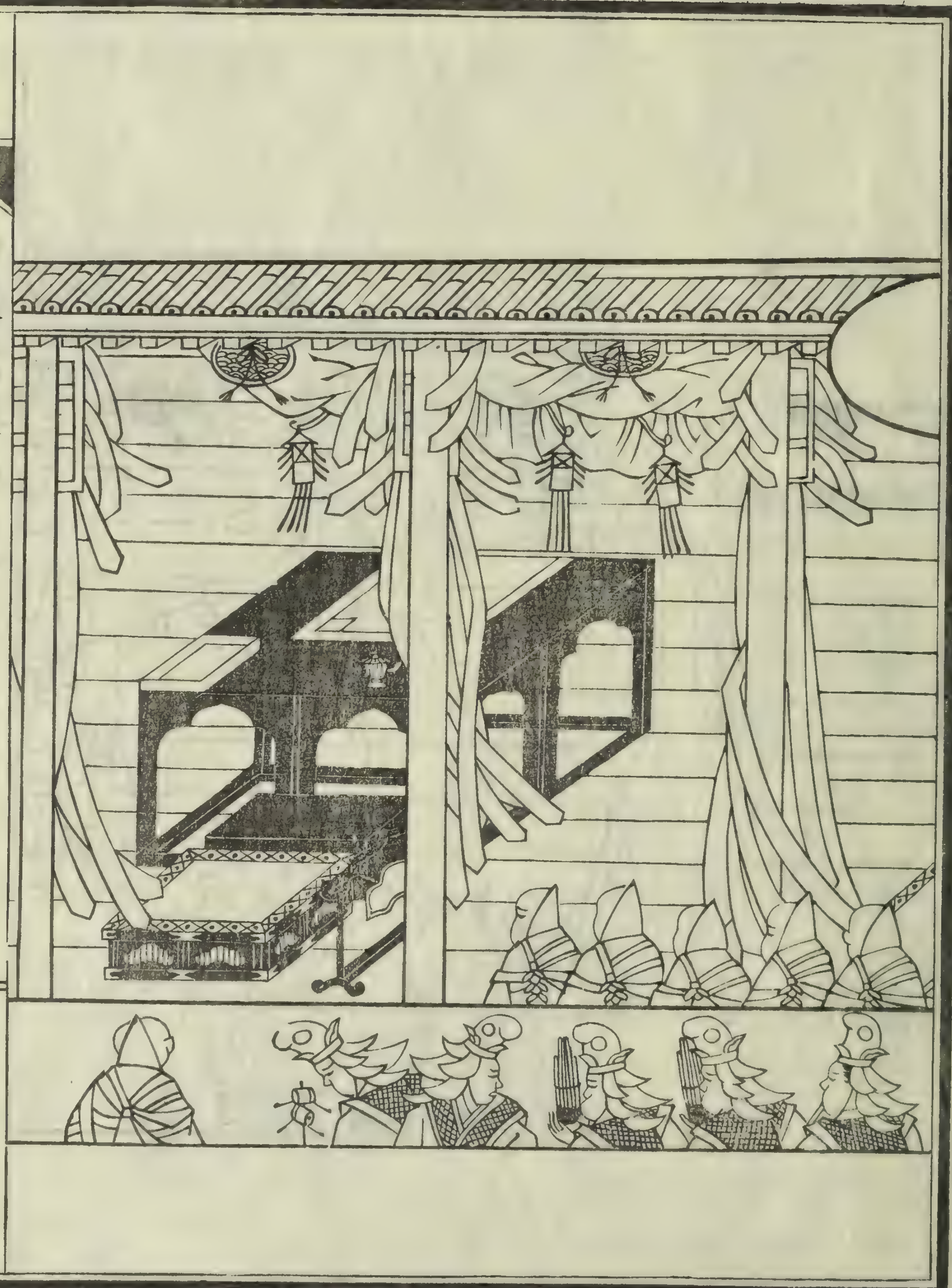


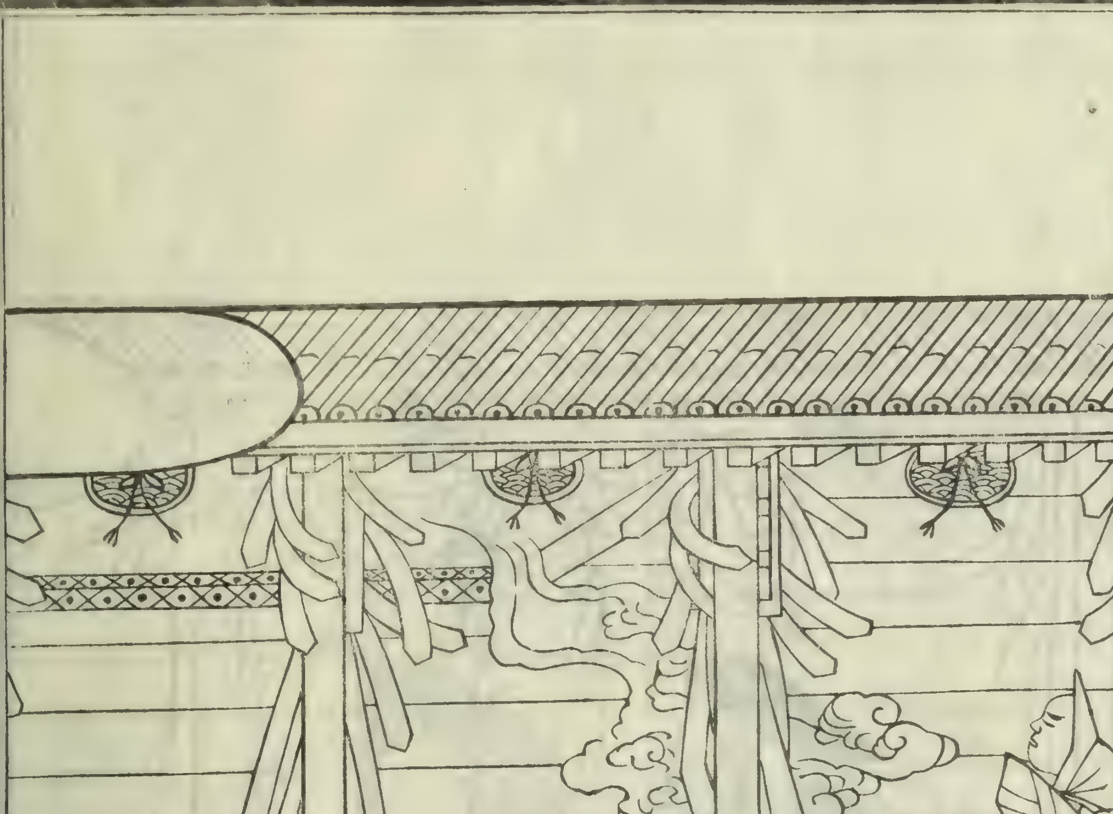


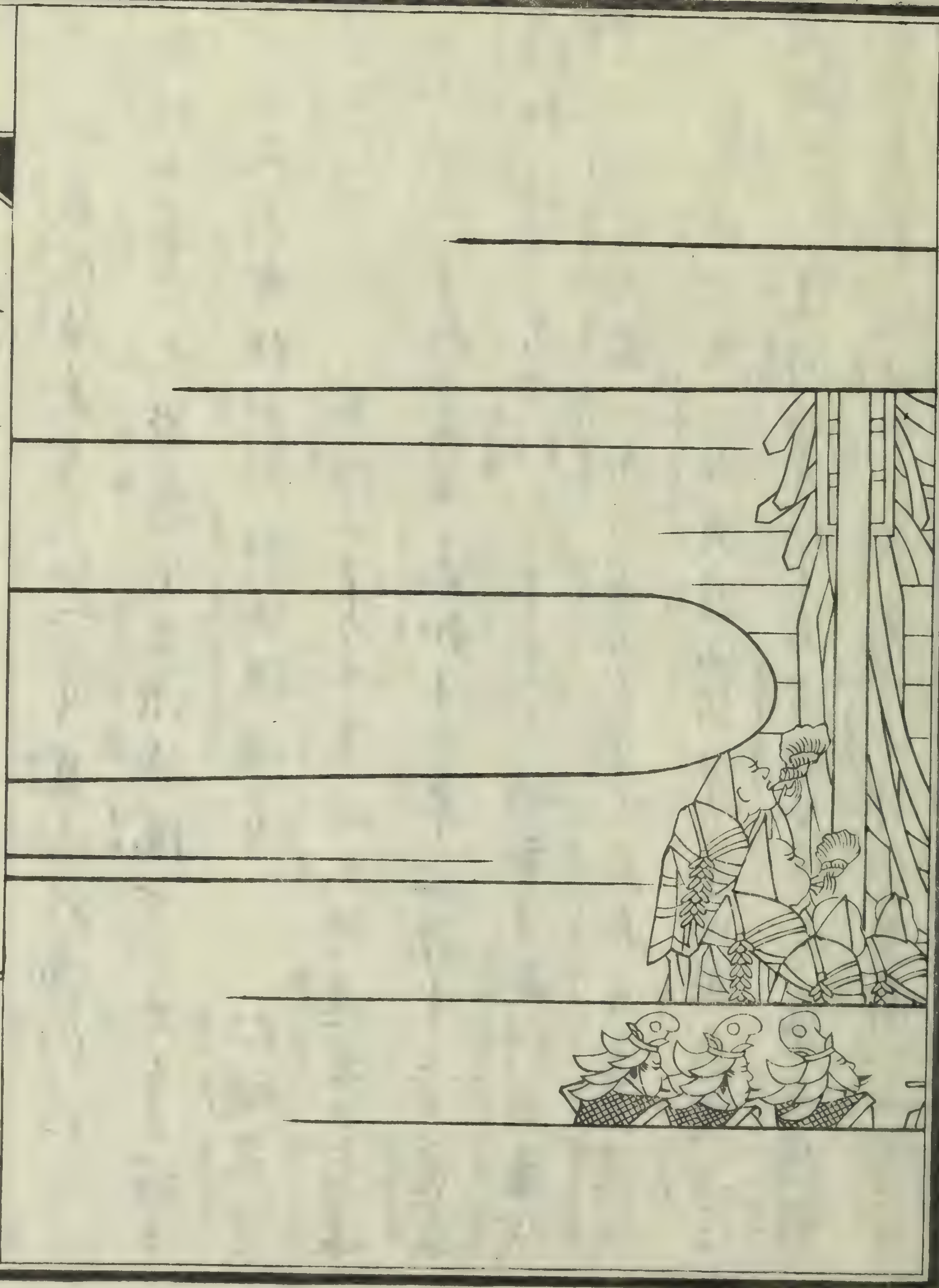










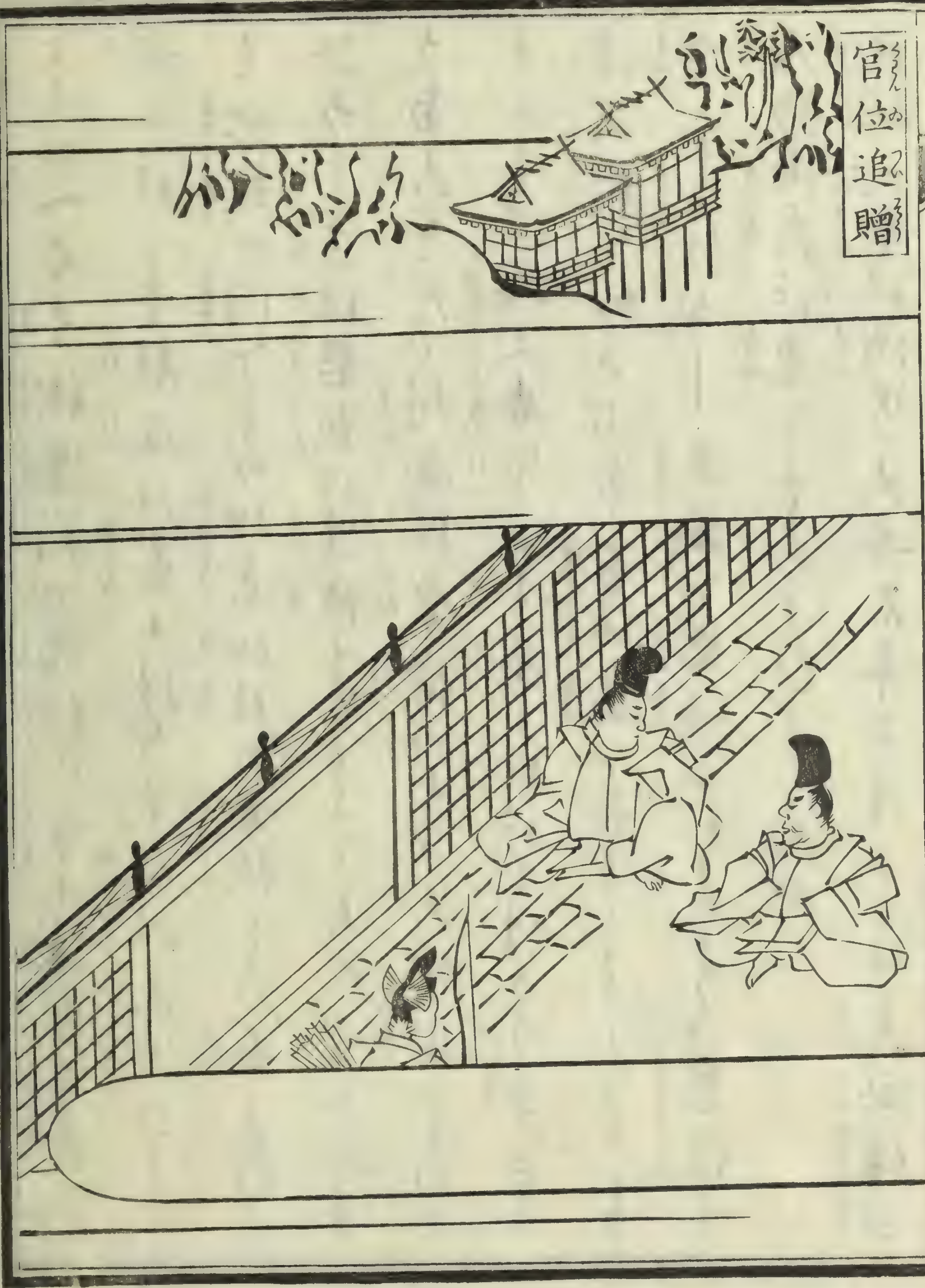


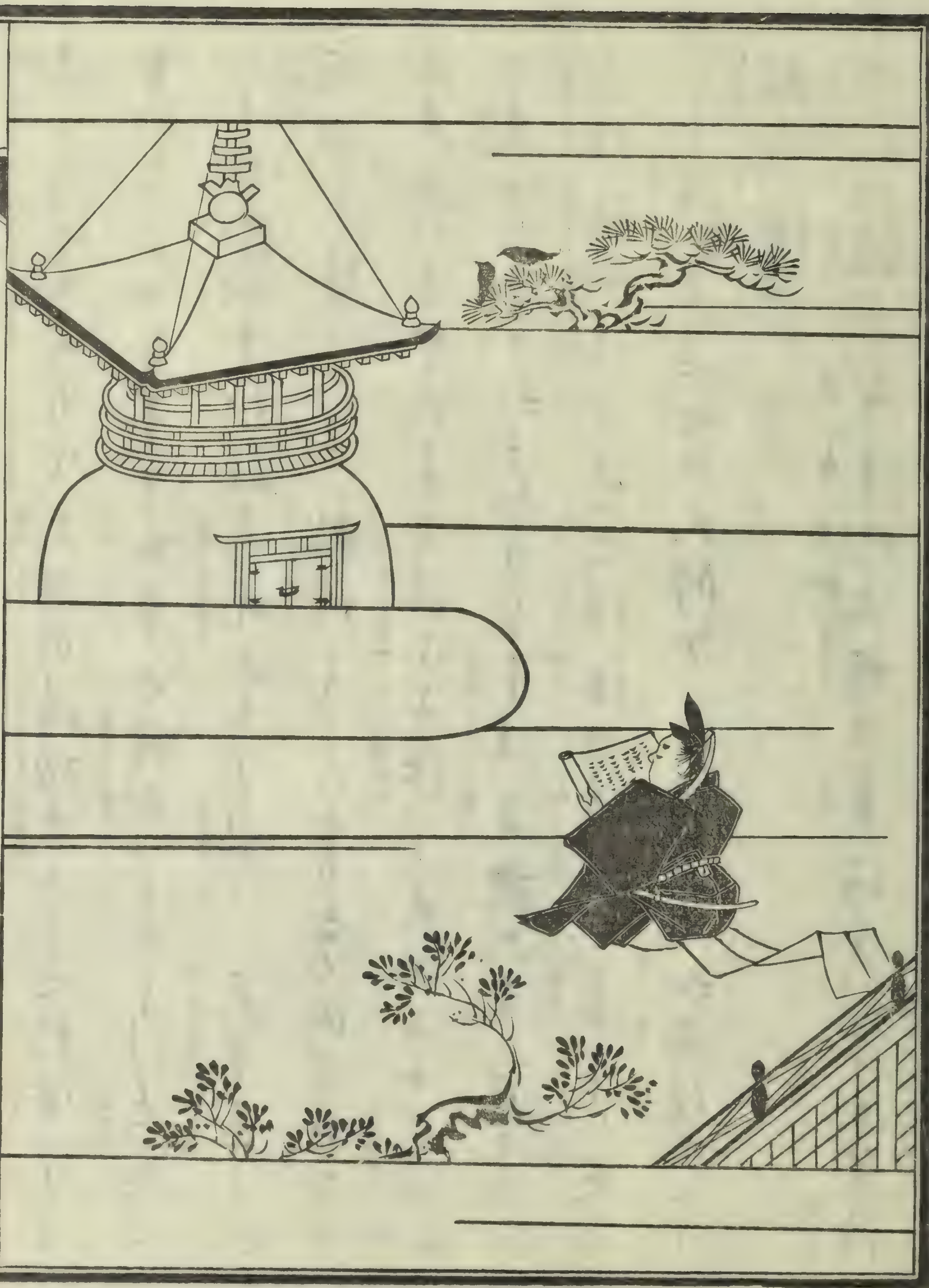
みしく〻教風陵夷すといへども豈これ渇仰の
叡念に答て天衆感應を垂地祇瑞をしめさゞらん
や又東寺恒例の結縁灌頂は仁明天皇
鄭重の　宸詔によりて高祖大師遺告の素懐
をとげられんとするに承和十一年三月十五日実恵
僧都はじめて行なはれしより是則巨唐代
宗の御暦不空三蔵の表によりて大興善寺の灌頂
道場を建じて三長齋月に行はれて四衆咸臨壇に
入志発し佳例なりはじめ官牒を蒙らる青陽節
ともろへ素秋時いたるごとに両部の曼荼をかざりて

入智の瓶水を挹ぎしむといへども寺務を繁くして
公役擁滞せん事を恐れて忠仁公奏達し
給ひて承和十三年より始めて春節に灌頂を試
みて若くは修法の儀に轉ぜしも秋季の一會
としを経てや荒さし忘らるゝを鳥羽院の
御宇永久元年仲秋の頃　聖體不豫の御悩に
よりて寛助僧正　禁中にして孔雀經の修法
ありし時法験の賞を蒙りしに及て東寺の灌頂を
して南山の齋會に周準せしめ自宗の英雄を撰
て講會の小阿闍梨とし維摩の講匠に擬して宗

衣の崇班に任ぜしよりこのかた上卿八座の臣雲路蘭台の容法筵に列く道俗をうごかしましし後保延六年の夏の頃　皇子降誕の御祈ありし時　二品法親王覚性御室修法の賞としてゆるされまし伝法灌頂会としてま兼和の旧儀に複し然春秋二季になせらる春節は一会とさだめて仁和寺観音院にはじめしよりこのかた一宗の大業として両寺は規模たる事なれば儀皆旧きを備しは会の儀式とおもひしより尽く尸羅の梵筵とのべ緇素戒珠を慚愧の袂にうけ瓔を曼荼の荘厳と

こゝのへくき繊覚苑を渇仰の掌に捧げ是機非
機非ならしく解脱は毫にむかず有性無性ひとし
く悪趣の門をとぢ如来加持の方便その益あるべき
ひろし高祖慇懃の遺誡まことよりもちてゆゑ何ぞ
うる志あるたゞ利益は群機にあまねし要とるのみ
ふかくば摂文安寧を国家にいのるはかりごとなり
諸天影をかうぶる善神迹をたすくることあまねり
貴なるかなはるし良縁を密壇にむすばん業継ろ
大師雨露の恩をかうむらざらんや
文徳天皇の御宇天安元年十月十七日真済僧正


官位追贈

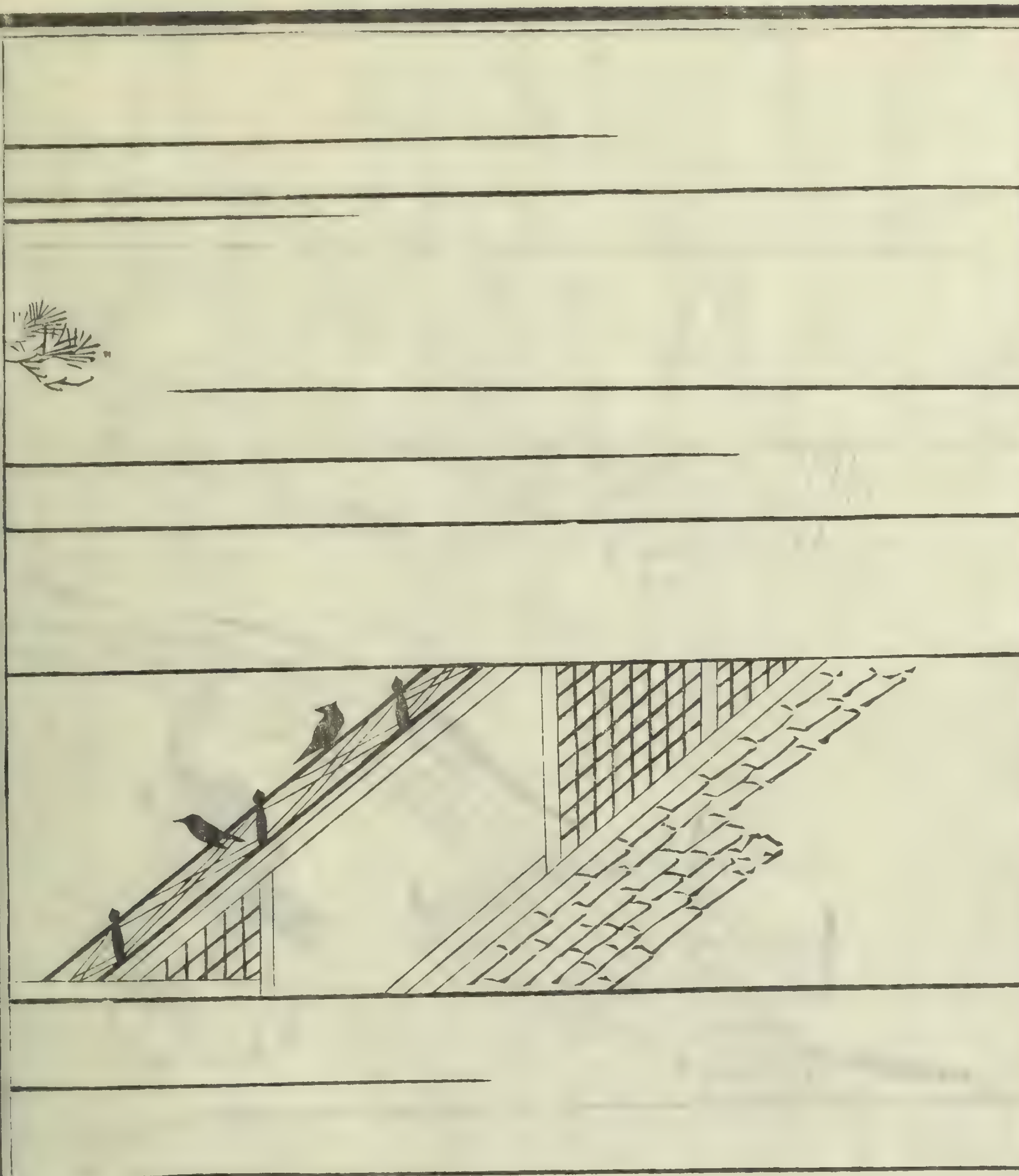


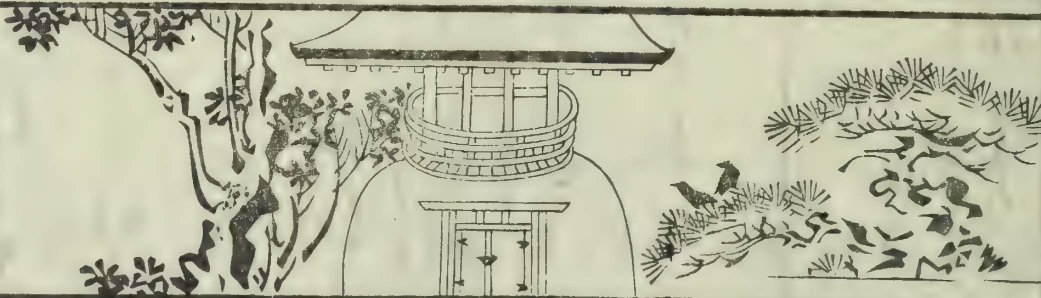
表をたてまつりて先師の徳功大にして寵賞すべく
なれなくとなるべき所帯の僧正を申うけ大師に
おくり給べきむね奏聞ありし時　天皇ことに
感激し給ひ　勅許とゞまりなく同月廿七日
真済ハ申のごとく僧正に任じ大師を大僧正
の友とおくりたまひなり其後貞観六年二月十六日
真雅僧正はじめて僧綱の位階を奏し定めら
る同三月廿七日大師をして法印大和尚位に申
叙し給へり
延喜の頃　聖主御夢想の事ありしにより檜

彼亀の御装束一襲を高野の廟窟に納まり給し
時僧正覲覧　勅使ともなひまゐらする彼僧正ハ
尊師聖寶の付法高祖五代の嫡嗣なり顕密の道
致ときは智行傍倫に越へたり　朝家乃皈依
あつく鑽ふして　聖主の叡信たぐひなし
されば恵りけるに入定の禅窟を開て大師乃尊顔を
拝ミ奉し給ふに蒙霧へだつるがごとくして尊容
見へ給ふ事能ハずあつに僧正悲涙をながし懺悔
を凝して我ハ欲の境に生るといへども三業乃遼遠
我が法所なし何ぞ御體をみてまつらざらむや


大師諡號







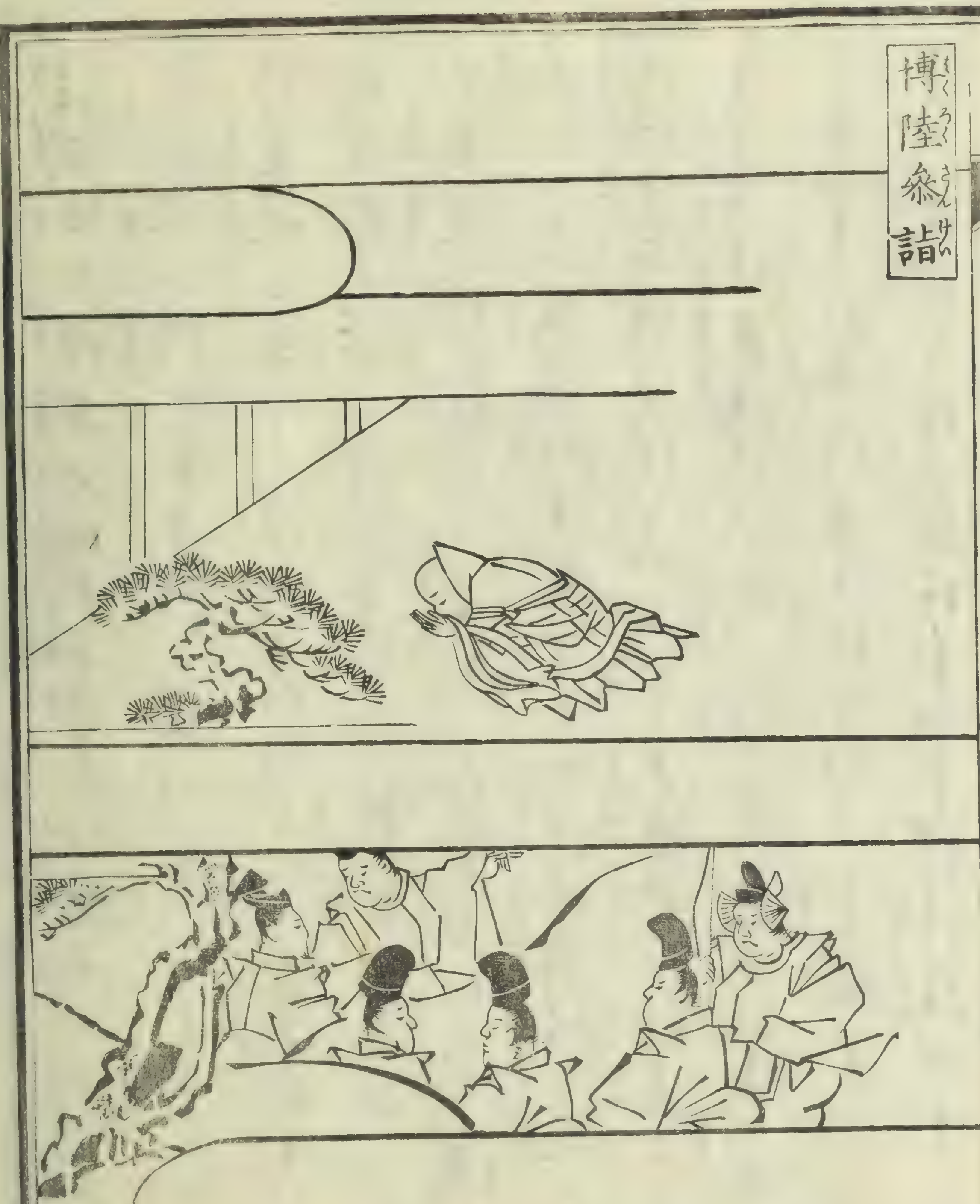


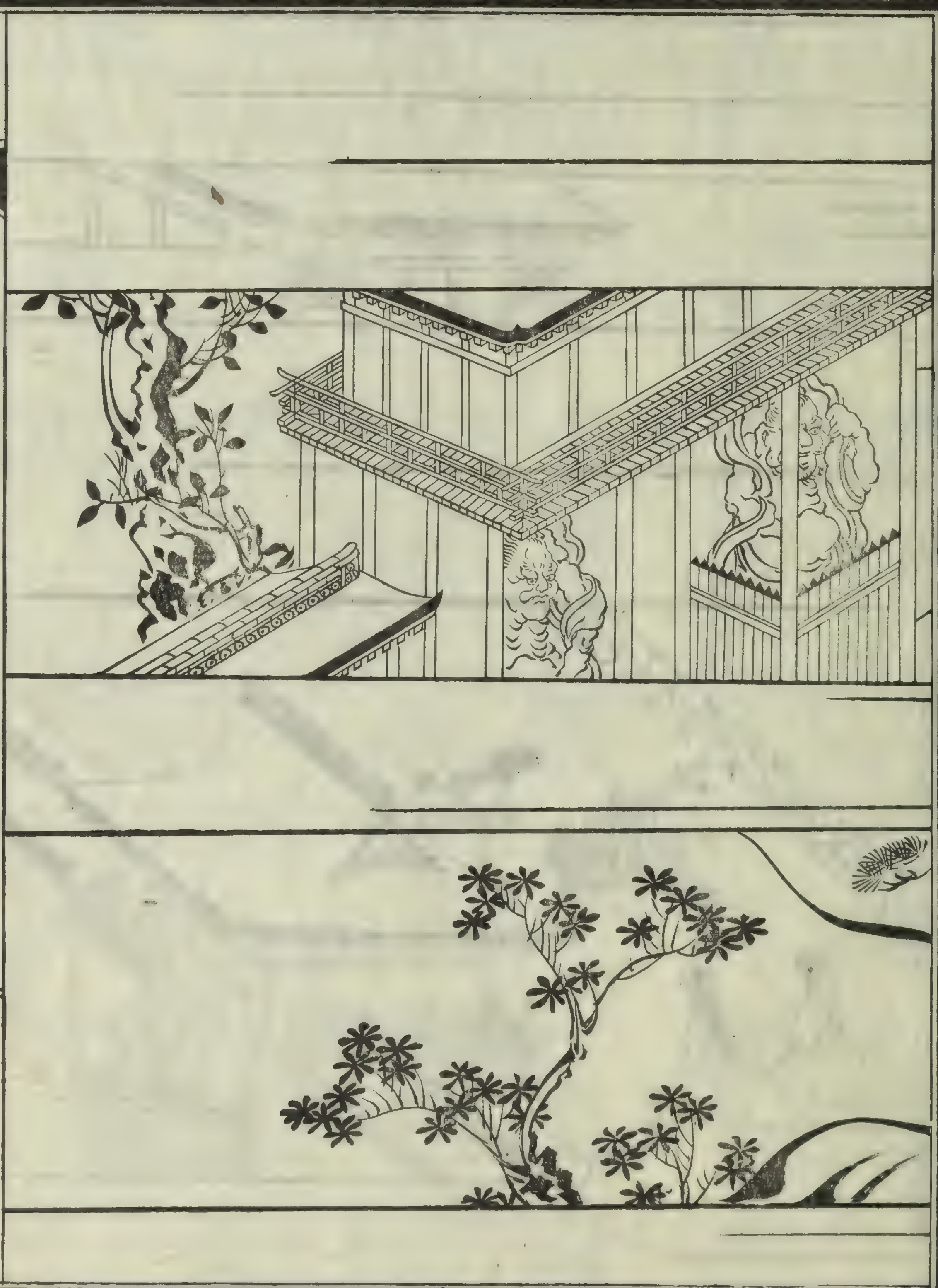
とや志ばらく念といふして記念ありしかば同
は霧といかくちは繞ふらへるがごとくして入定
の容儀またおはしまし龕窟の中におはしまし給ふ頭
髪ながくぬけて衣袴破損し給へり僧正悲歎の
涙交流して則新衣をたてまつり御髪を剃除し
給ひけり僧正は弟子石山の淳祐その傍に祗候せ
られけるにおがみたてまつるやと問給ふにみえたま
はねはしかるを師は手をとりて大師の御膝に
触まゐらせ給ひけり其手かうばしくして沈檀の香
匂ひ超まり一期の間除薫ならずうせざりけり僧正

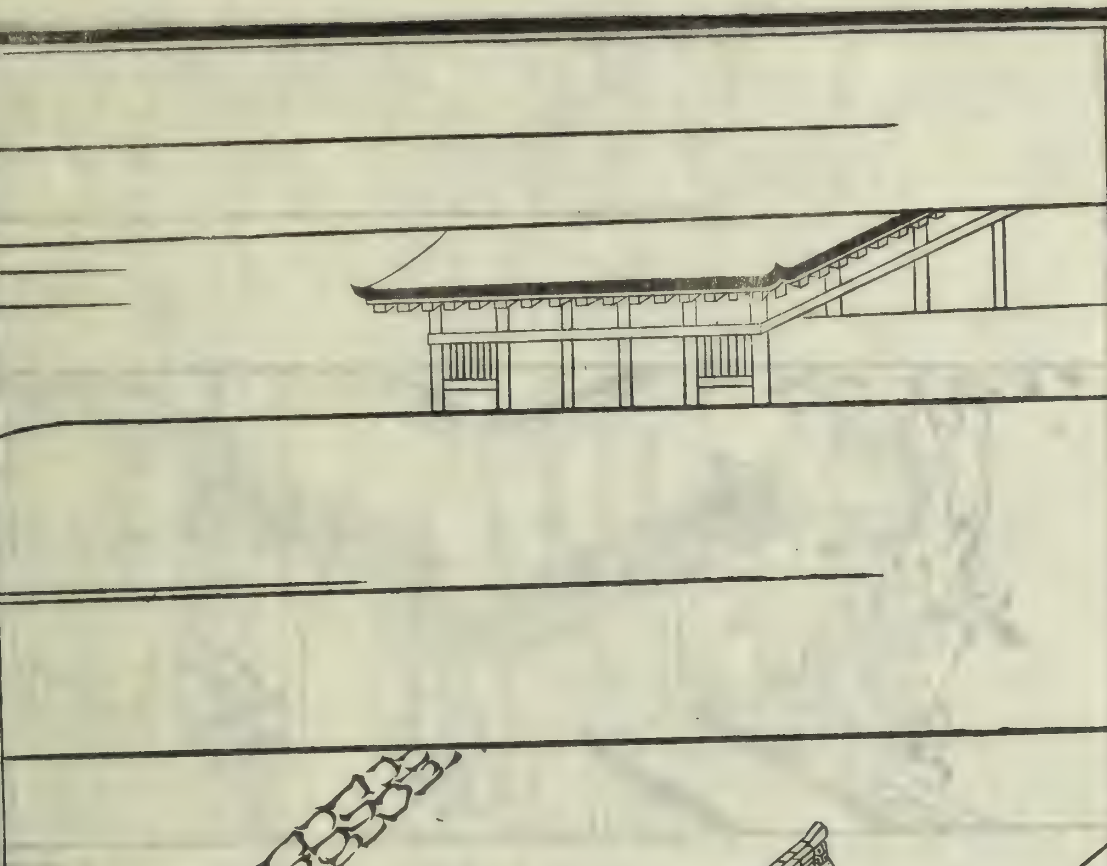
おもひ給ひて我慚愧の衣を着し戒行の珠をみがく
ることなれバ幸に太師の生身を拝まうるゝを名けり哉
将来不伝の業なりてさらに扉窟にのぞむ者は
とも業霧はらひがたくて弥観の望をとげずば久
まで入定の威儀をうたがひつ歴しとて其後よりは
緇素拝みまゐらする事をとゞめて巌石にてみたまひ
みだりに人の出入を戒められけり又僧正表をもてまうし
く温顔遂に拝しがたく後にて贈位は勅なれど
いへどもいまだ禮謚の栄なかりければ奏しけるに
ば延喜廿一年十月廿七日 八十七年 御入定以後 崇膀の典に加へ

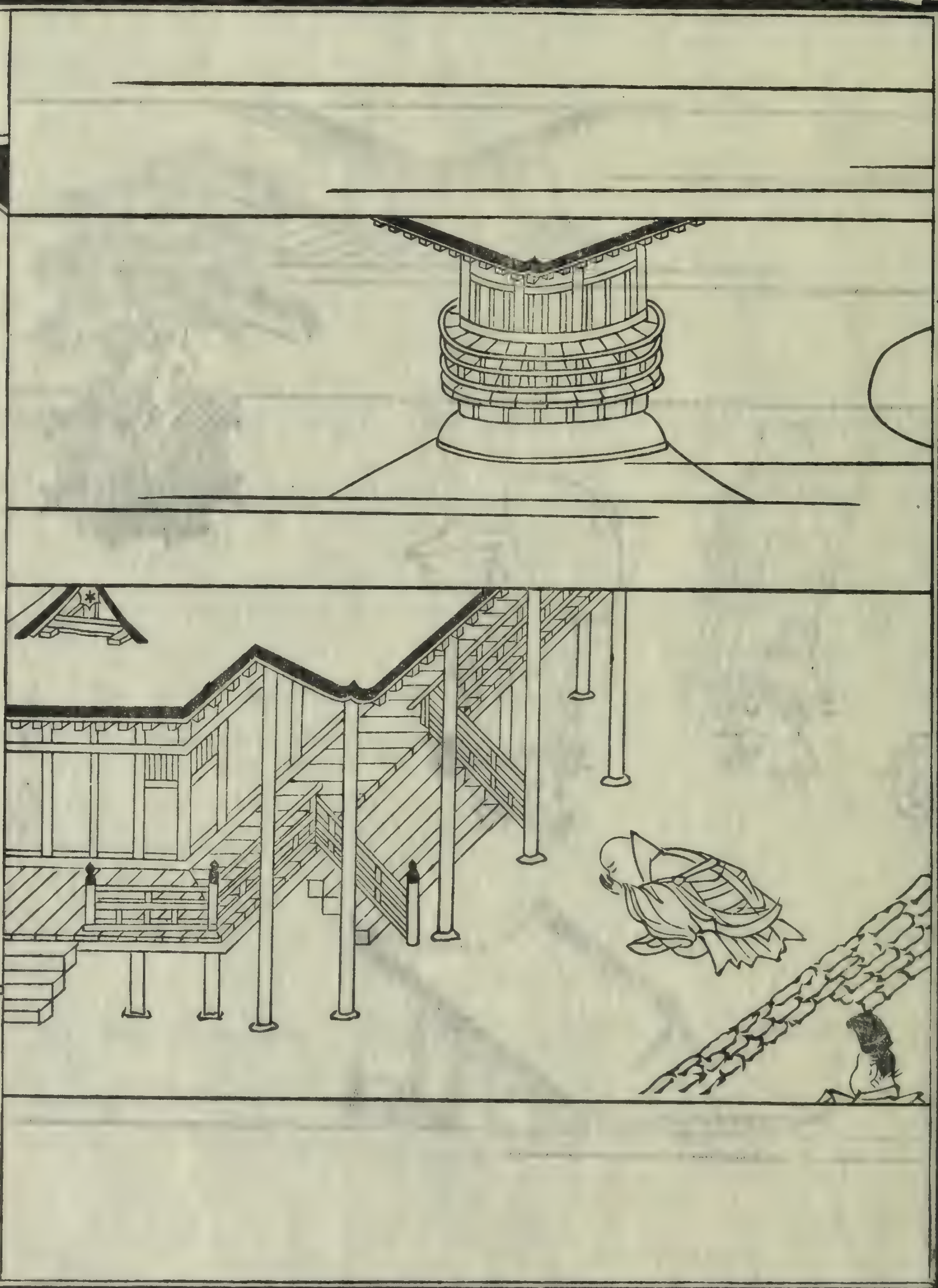
弘法大師となづけたてまつるべしと旨宣下あらる
少納言平惟助小闕の詔使として遥に南都の巡途
小野のむきうきり表の文には本覚大師と申しける
らるあれども詔書に二度まで弘法大師と下
されたると申伝へり昔金剛三蔵の震旦に来り
秘教とひろめし永泰の天子識謚と東海の墳墓に
送りし今高祖大師は本朝に出て真宗と立る
延喜の聖主崇を南岳に羅洞にくだし給ふ
故をもつて称号をあたふるに謚をおくり遠を遂にためし
古くは厚徳の志しるゆへなるべし

法成寺の禅定太閤と小野の仁海僧正〈于時律師〉に御對面ありし次に仰せありて大師の生身まさしく高野の奥院に坐しますといへども星霜すでにつもり時運おし移り時遠くして拝観の望たち喪ふ感見ある人罕なるべしと僧正答給ひく密教の心をもていへるより法佛常住の説を傳へ人法々爾にありては物とのぶ生身應化の利益に異なりして正像末法の時變と論ぜば志らば流布によるべからず只信力に任すべし其機よく純熟きば證理うたがひなかるべからば清信のまこと然


博陸参詣(はくろくさんけい)

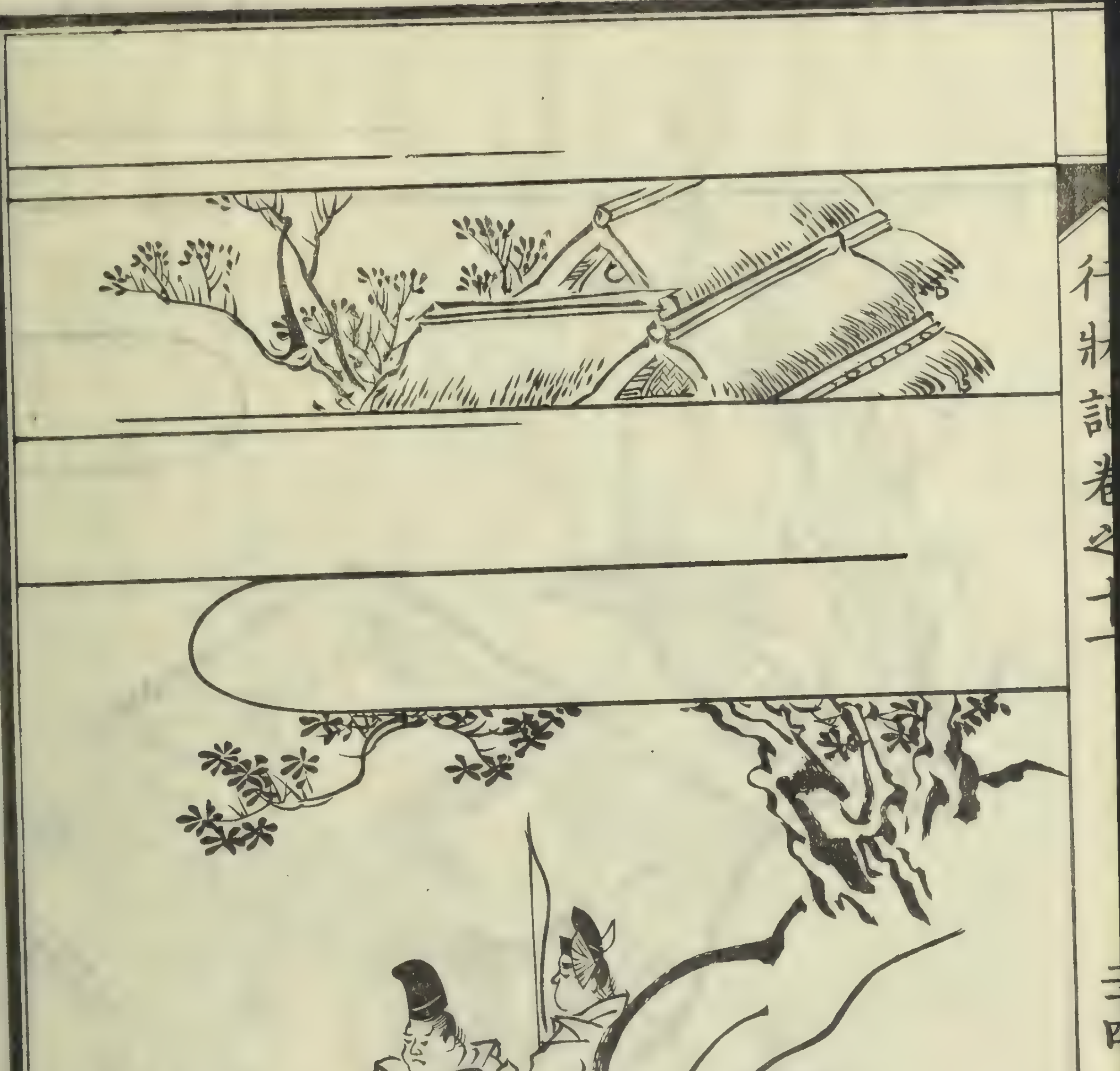




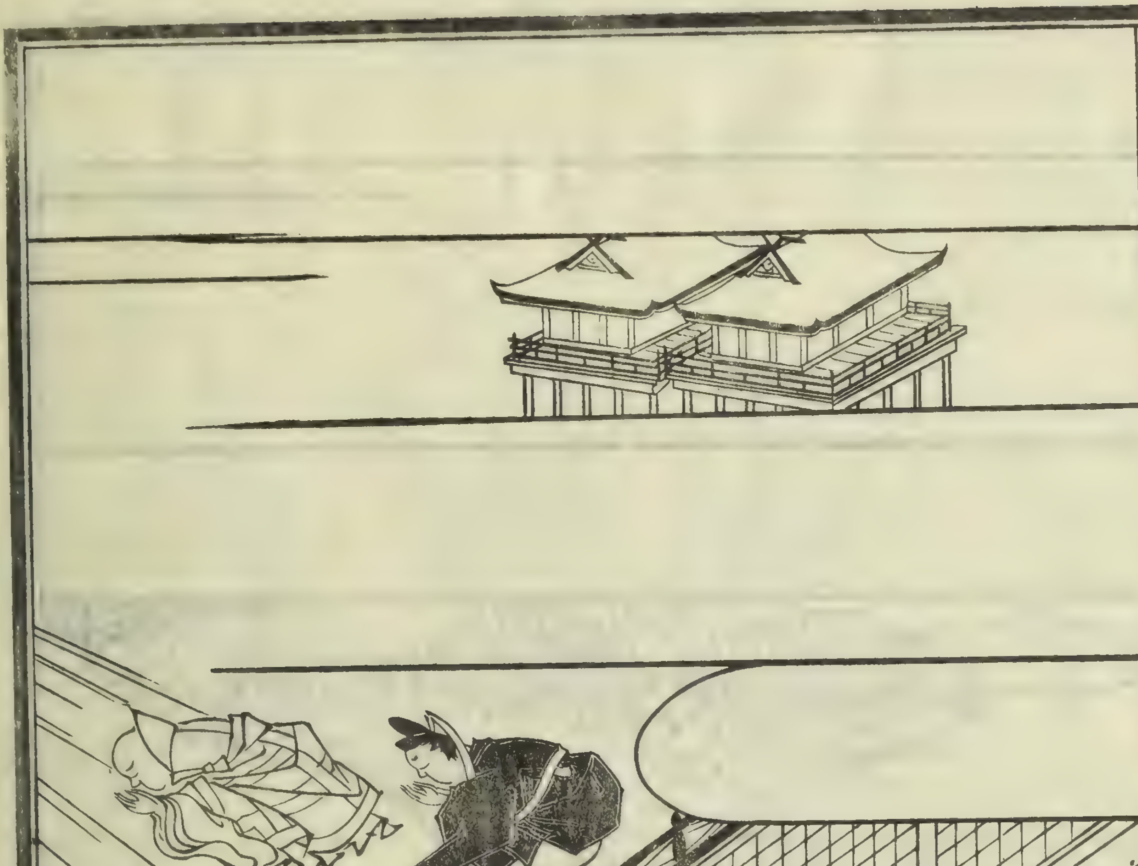


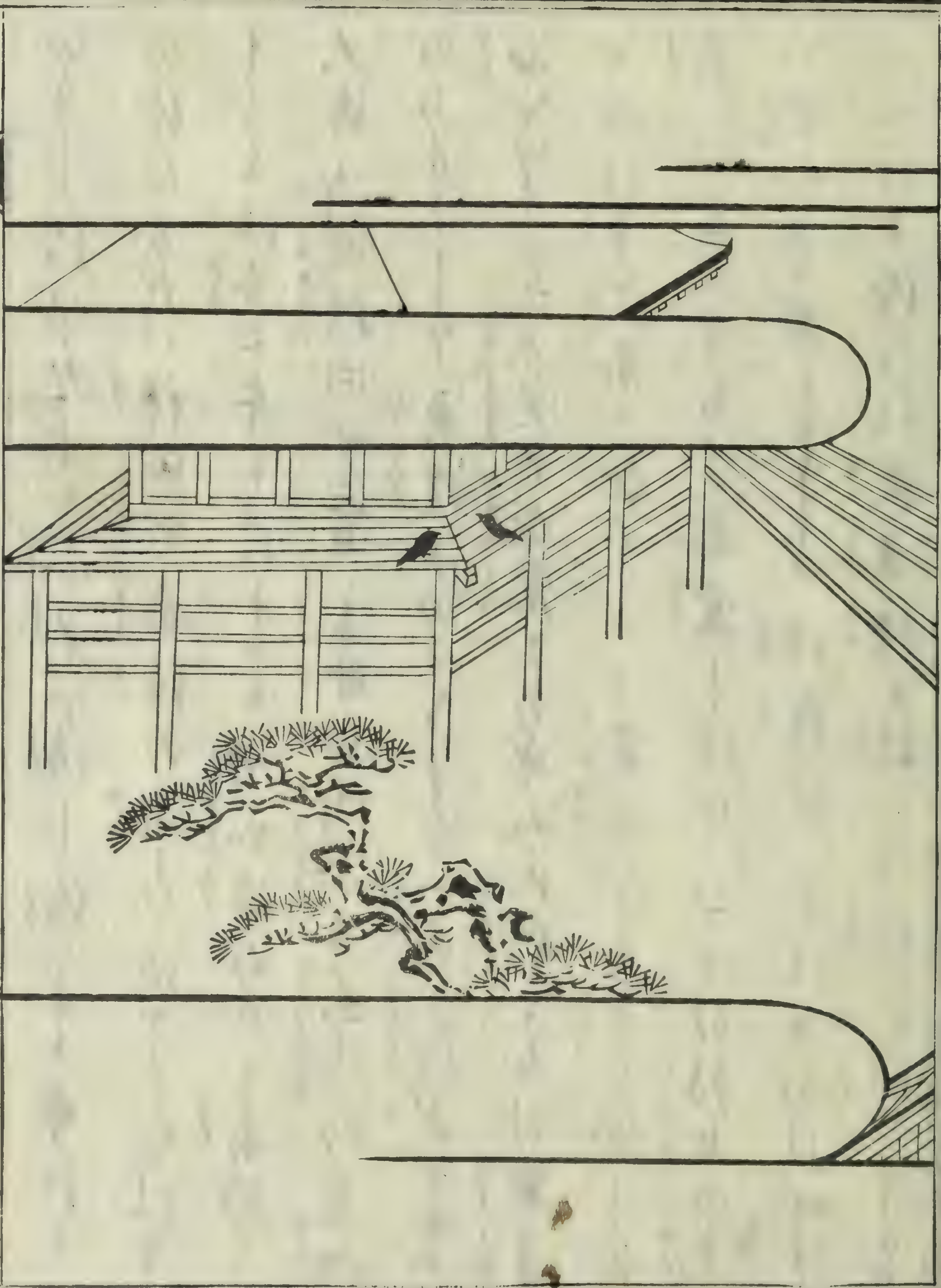












いたし給ひなどゝ全身を拝し給ひざる無紀と
の給ひければ禅閤聊参詣の御こゝろざしとはぎ
まさる治安三年十月十七日御出洛ありて南都七
大寺御巡禮同廿三日高野の御山に着御ありて山
のふもとより奥院にいたるまで一歩三禮をなさせ給
ひ所をいたして入定の廟窟にのぞみ五體をなげ雙手
をあはせて良ひさしく懇念とまうし給ひしに
靈風窓をふきて廟堂のとぼそひらけ朝日の光
と發するがごとくにして禅座おはしければまのあたり
みへ給ひければ感嘆肝に銘じて悲涙袖をうる

なせり渇仰ましましたりしを信心あふかし当時
は鎮守末代の規模なるとやまた時三間の礼
堂を廟壇の前にたてられ金泥の法華経一部
墨字の理趣経三十巻三千の般若心経を写し
て講師として開題供養の斎莚を展しめたまふ
ありしよりおほくの代々諸陸の賢治治安
の佳躅を尋て気洽の光縁ととものへるはふさ
よ志ぬるま遑あらじまことにいへどもかきし事
ながらもあり

弘法大師行状記巻之十一終

弘法大師行状記巻之十二

高野山金剛峯寺ハ峯八葉にならびて華蔵と心海に観じ山両部とうけて曼荼羅石壁にのこるされバ大師結界の文に云その東西南北四維上下あらゆる一切は正法を信ずる毘那耶迦および悪鬼神等を始悪我結界は方七里が外に出去若正法をまもらん者鬼神等我仏法のために利益あらむ者ハ意にまかひてまちは伽藍に住し擁護となすべし相応の金剛界は法門

流布ましますそれ時なり機應納是處なり故に
鎮護國安民の爲にこの叡原において除災祕密の道
場を建立し院郭十方にはひこり本朝の大天台方
をさむる結界七里の間地主山王權現かたくちかひて法を
守り給ふしかのみならず勧請したてまつる朝中の
霊社一百廿所四方に名冊社毎月日別に各一社幾
壇を出して人法をたすけまもり伽藍を鎮將し
給へと書きをき給へりはなはだ知れ魔界打ちくしけり然
れ善神擁護し法をまもり人をたすけ給へしむ
又元慶七年に真然僧正陽成天皇に奏し

中ざまに金剛峯寺は凡位の境界にあらず諸神の古跡禅聖の舊基なりあしき獣はあれ類ありといへども毒害となす事なく煩悩菩提のことはりを観じ法べし谷ふかく峯たかくあれども径途はげしき事なし生死即寂静のむねを察し法べしとなされし事又この山は嶺軸山摩尼峯などいふ異称あり摩尼の峯は大師みづから如意輪の像をつくりて安置し給へり嶺軸山は仙宮にして時として深山に入人あまた試みるとかたり傳ふりしらばあまた人界にして聖境にあらず穢土に

して浄刹とちきりたてまつりの契り貞観僧正
の尚記の詞に周遍せる蓮峯は法然の華臺を表し
正乗たる遊系は化仏の浄土に類せる悪人もつてに趣け
ば愚谷に入がごとし毒獣情ともうしむるの金山
は鳥に似たり纔に影をさす梢を楼閣と据べし獄
して止その八前業と恨べしと書まうする誠に故ある
そのいやあかにを崑山一顆の石と濁人を却て壊
七劫悪趣は苦報とまねかるべきも坏殺泥洹乃意
典に出たり彼にならぶらんやあまねくなれに曼荼動
浄の霊峯衆聖都會の遊窟一禮一瞻その益もあれ

うるべし若ハ行若ハ住持利益豈むなしからんや是
にありて　白河院の御時近習の雲客　御前に
祗候つかまつりけるになにとなく御雑談の次に
勅定ありけるハ其　日本国ハ辺鄙粟散の境なりと
いへども　我国主として天下に自在を得たり当時
如来ハ在世ならましかば天竺はたとひ遙なりとも諸国
の王の中にて参詣せむ物をと　仰出されたるを
されど江帥匡房卿　御前に候けるが恐あることと
なくハ候へどもその　勅定いかゞあるべく候らむ仏
は在世にて出現候まゝども　我国の内に霊地勝多

なれにつけては高野山にましまして弘法大師全身を
とゞめて入定あり是三国にまれなる勝地なり
帝都をはなるゝ事纔に三箇日京師を遠ざからずまた
はるべく卅余里なりしかるを　我君いまだ
臨幸ありし況十万余の煙浪とほのぎて中天の境に
行啓ましまさん事文にかなふべかりけれと申されけり
されバ　仙院深く甘心の　御氣色ありてすなはち
南山の　御幸おぼしめし立ちて如来の在世
に諸国の王参詣ありしにむずる御心地なりおの〳〵
たかひをよそほひて行粧をかざるべしと　仰下され

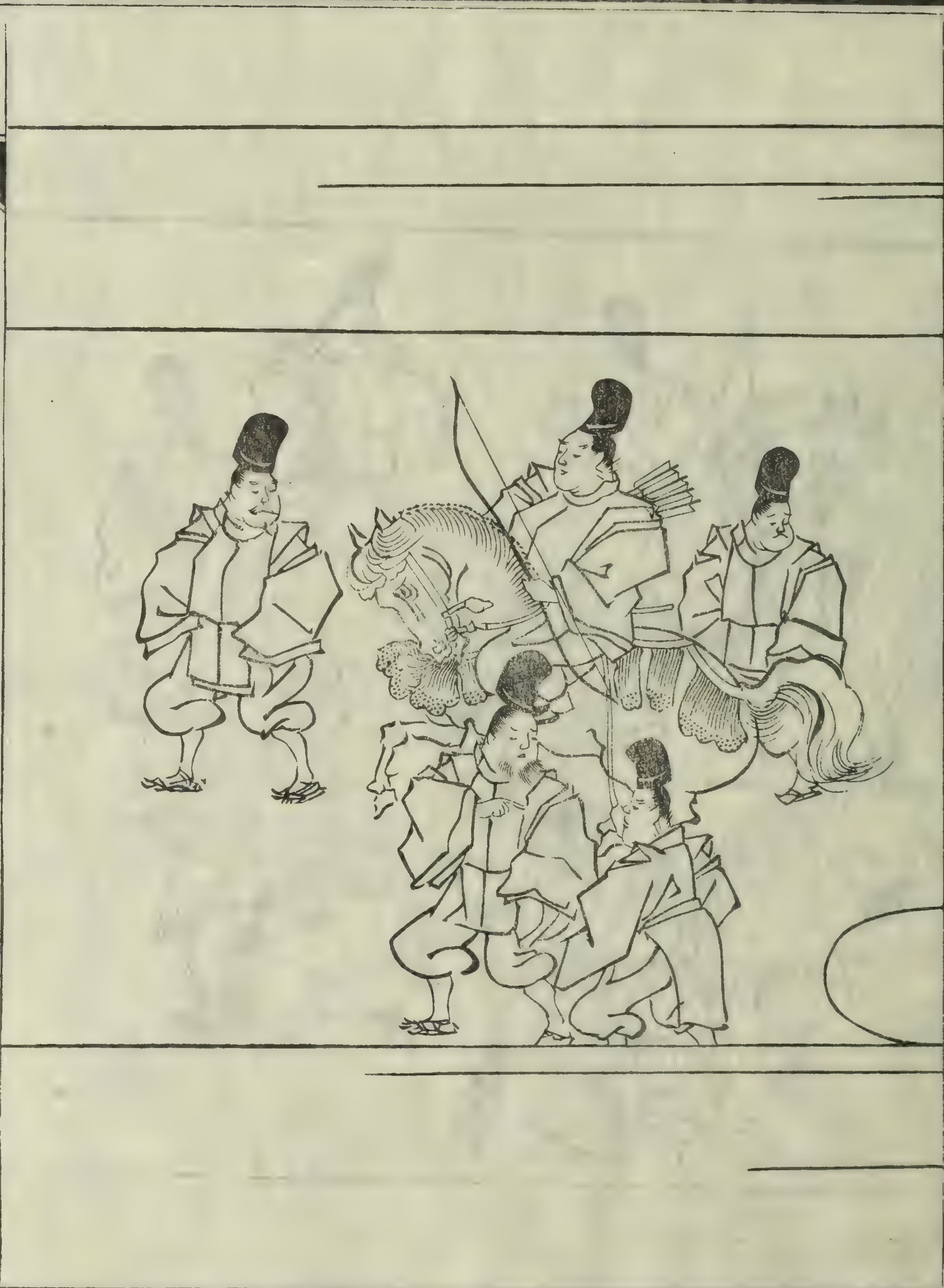
きれバ金銀をちりばめたる鞍をかざり錦繍をたち
く服飾をとゝのへ畫龍雲にあがりて旌旗天に翻
る文鳳野にいたるまで綺羅地をてらし　明王の倹
約も此時ハしばらくゆるされて　御幸のありさま
誠に大国にもはぢぬ程なり即寛治二年二月廿二日
大炊殿より　御進発あり　御供の公卿右大臣
右大将顕房源大納言師忠権大納言雅実左衛門督
家忠左兵衛督賢皇后宮権大夫公実右宰相中将
基忠右大弁通俊三位中将経実殿上人内蔵頭師信
朝臣以下十四人蔵人所武者所の輩十余人其内童子

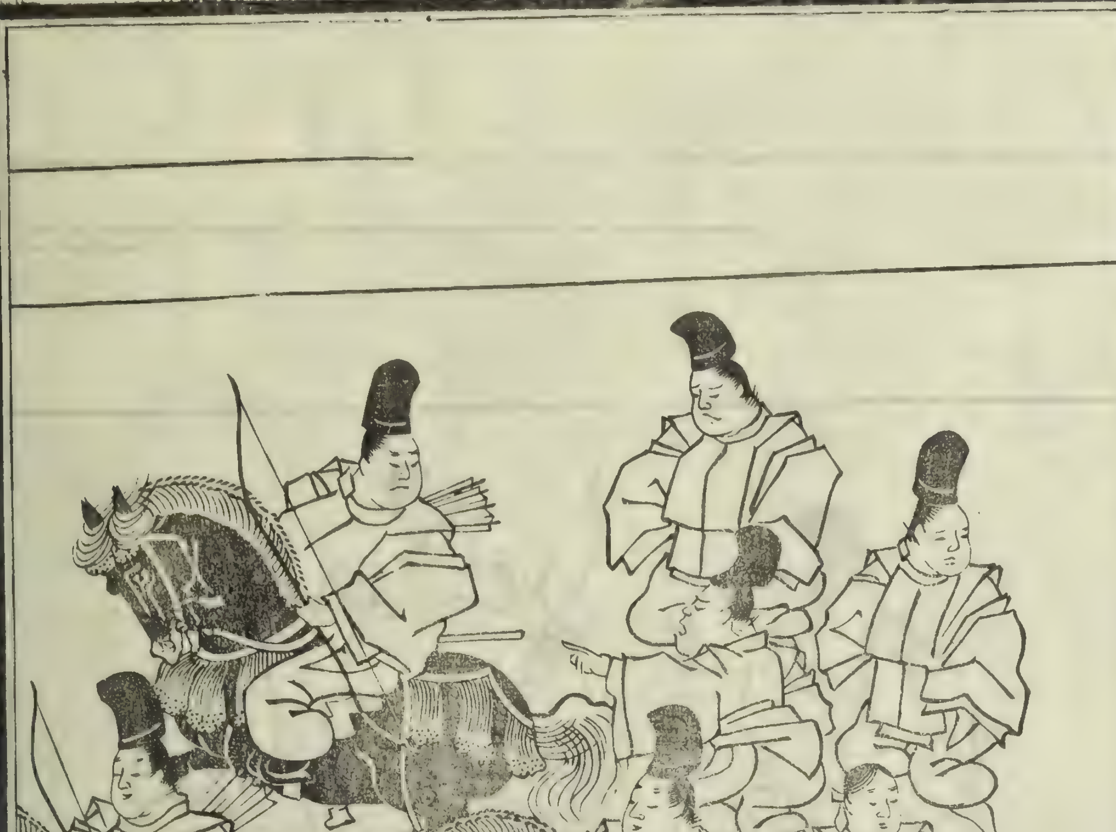
平子平九武者所に候して銀の水角をかゝて供奉
又権僧正仁覚権大僧都隆明権少僧都寛意廟堂
乃法会をたまけ羈旅の護持をいたさんがため各
同道を経て共に中華を辞き是皆高僧なり御共
なり其外京中の供奉人には摂政京極殿　左大臣俊房
内大臣左大将師通　按察使実季右衛門督俊明　左中将
保実　左大弁匡房侍従実隆以下卿相雲客数をつ
くして　威儀をかざりたてまつり宇治まで供奉
せしめけり当日午剋に　上皇平等院へ
入御摂政御馬を引に御剱をとりてまいらる　上皇又

御馬と摂政献ぜられけり今日ハ南都に
御一宿東大寺別当慶信法印が住房東南院に
御留あり東大寺興福寺　御巡礼あり廿三日大打
崎へ　着御廿四日に高野は政所へ渡らせ給ふ木
御酒当玉司御膳と備へ綺とはり茵としく又悪
木は仮橋とかまへ多く雑人等流を紛慈尊院へ
入らせ給ふ御堂の小坊やと御所とし同廿五日の丑は
刻に　御歩行にて　御登山あり夜の中なるに
よりて御陣以下松明をともし権大納言師衣仲実朝臣
時に　当儀をたすけたてまつれる奇巌険阻乃路



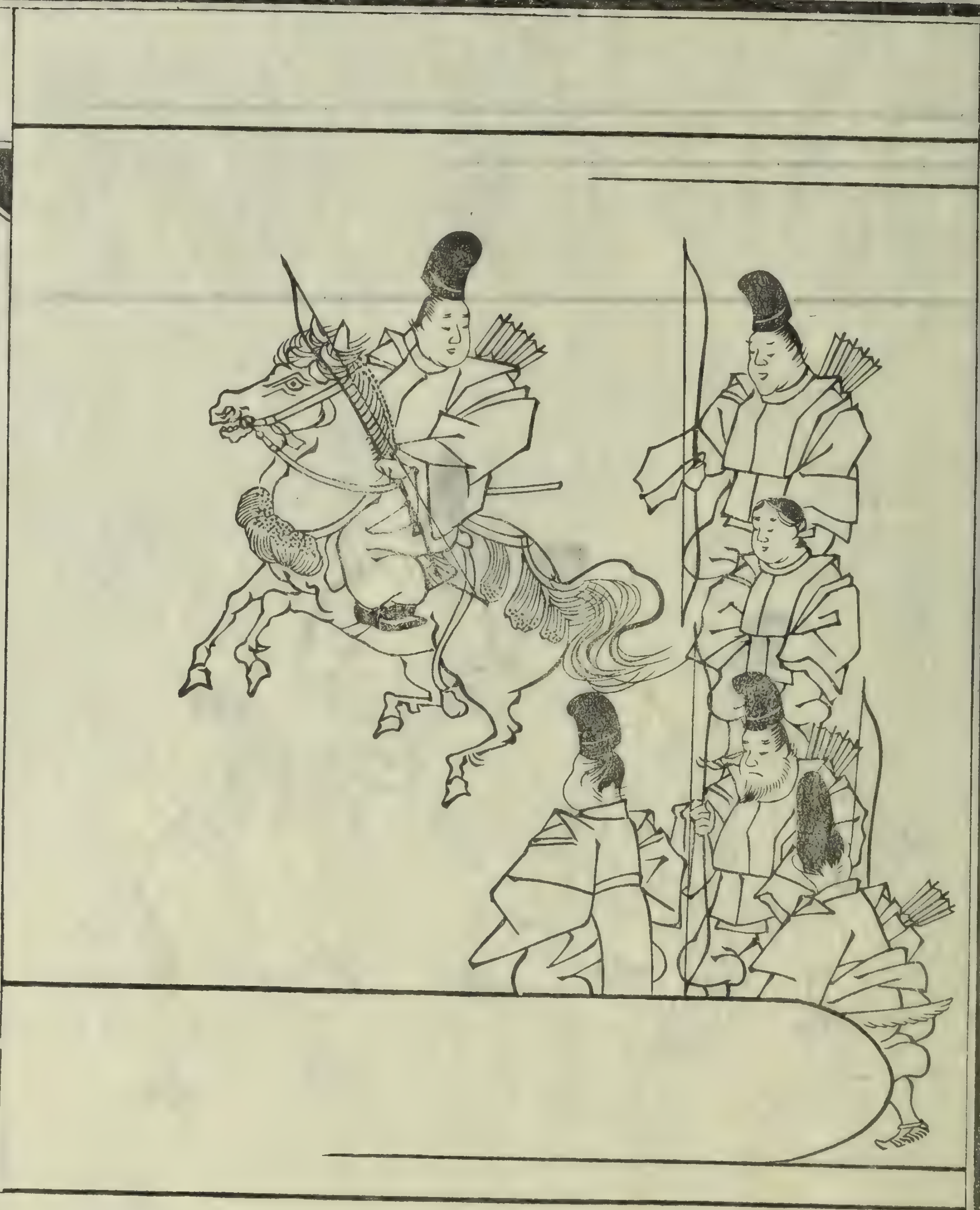
仙院臨幸

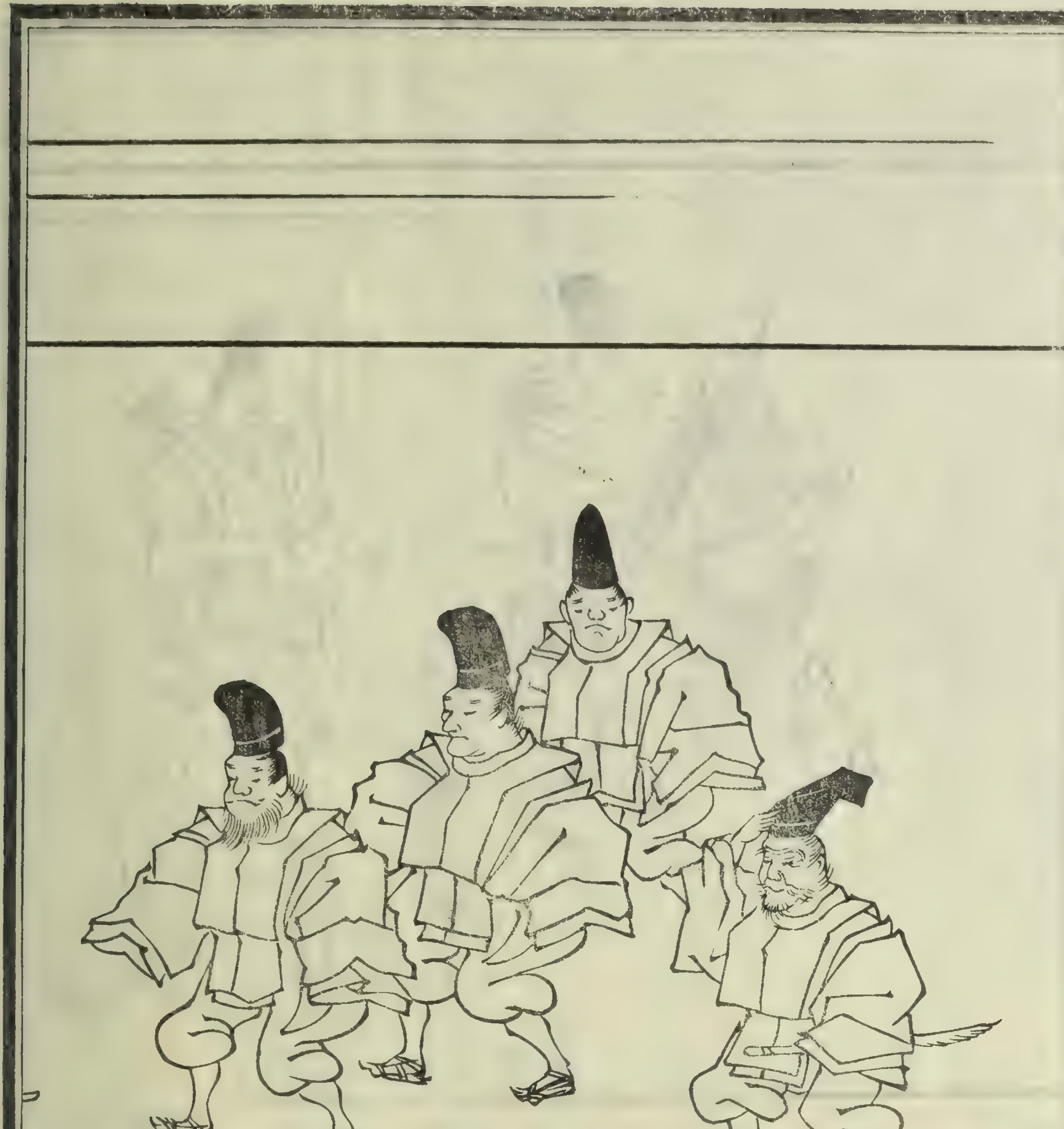


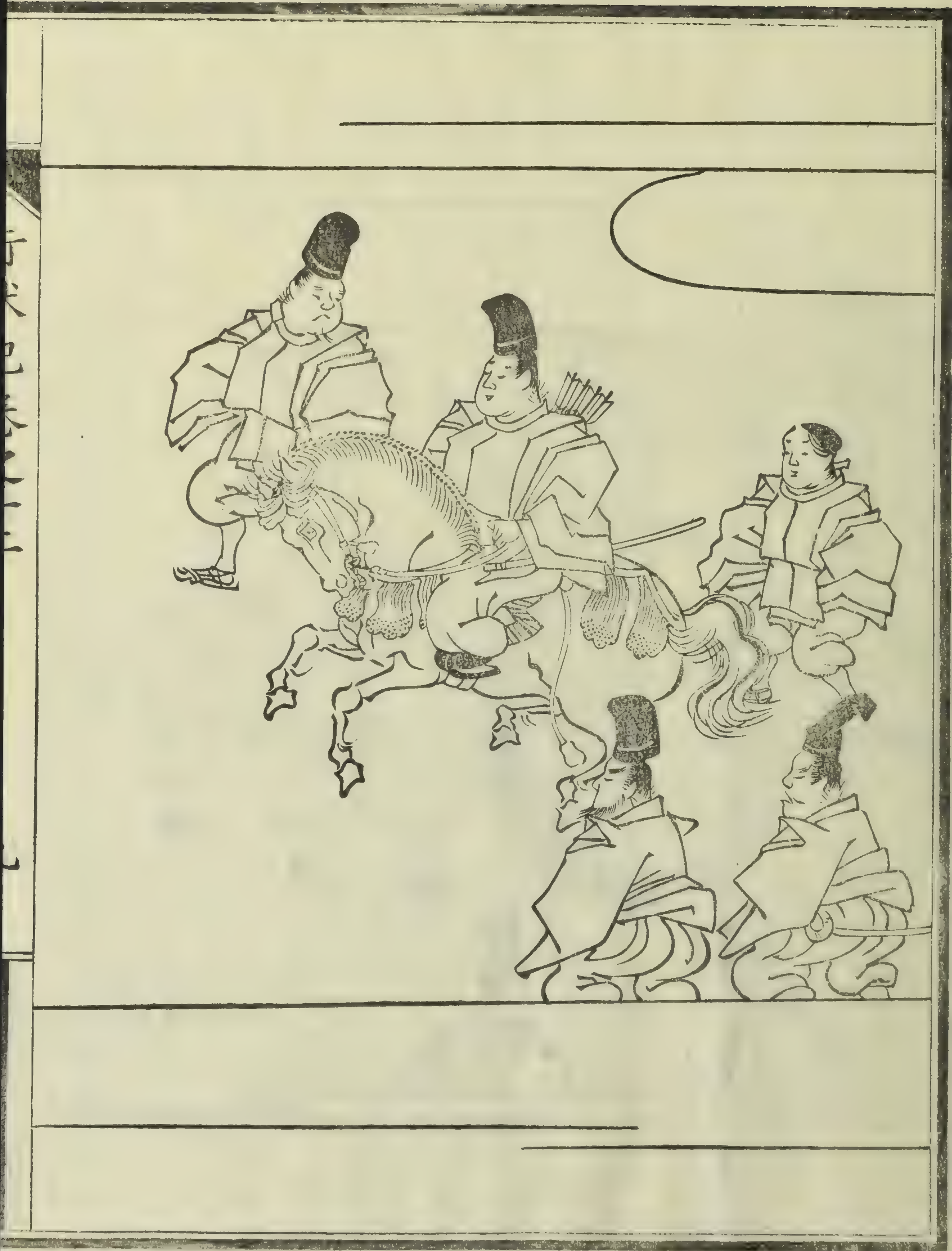




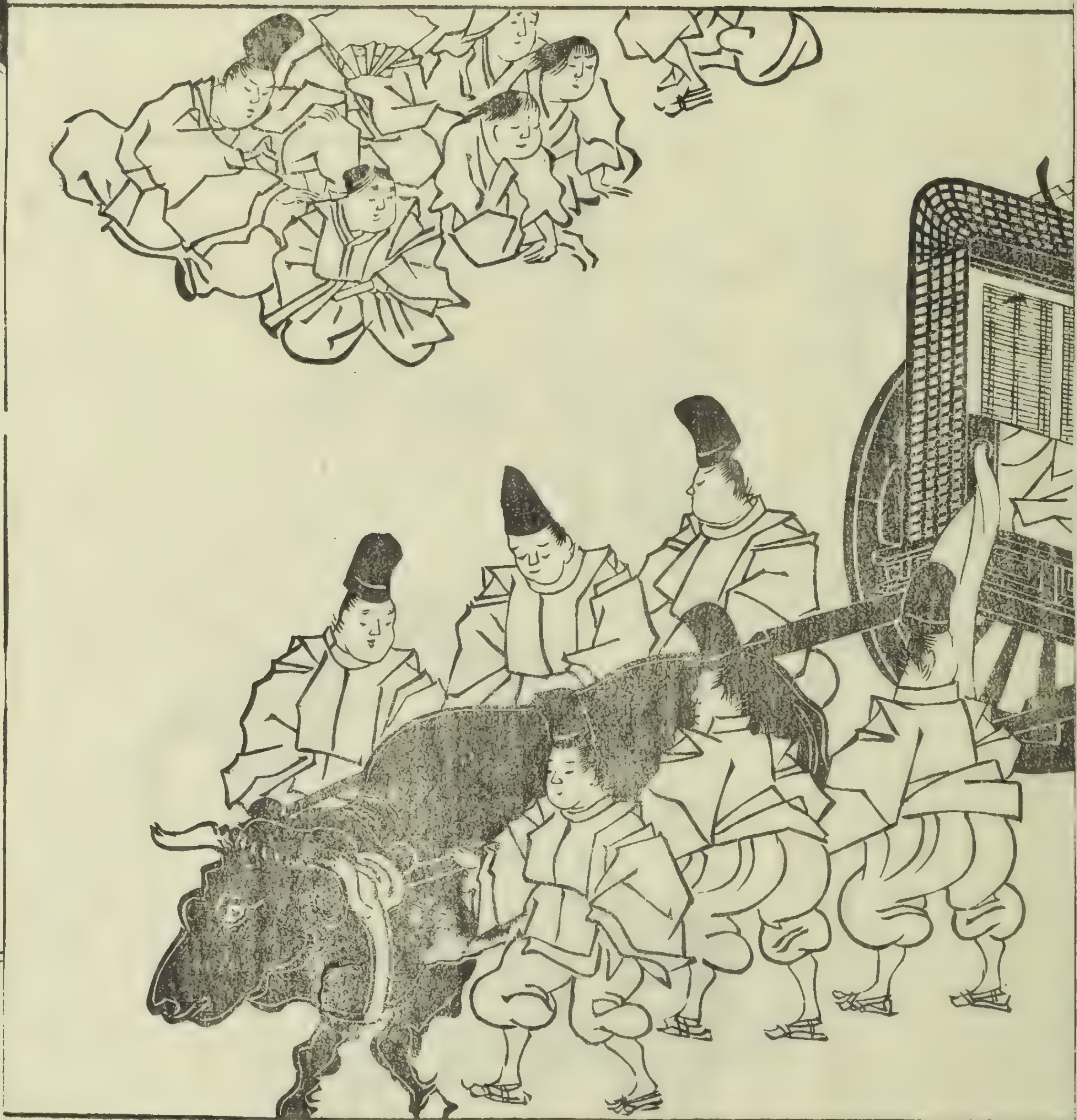


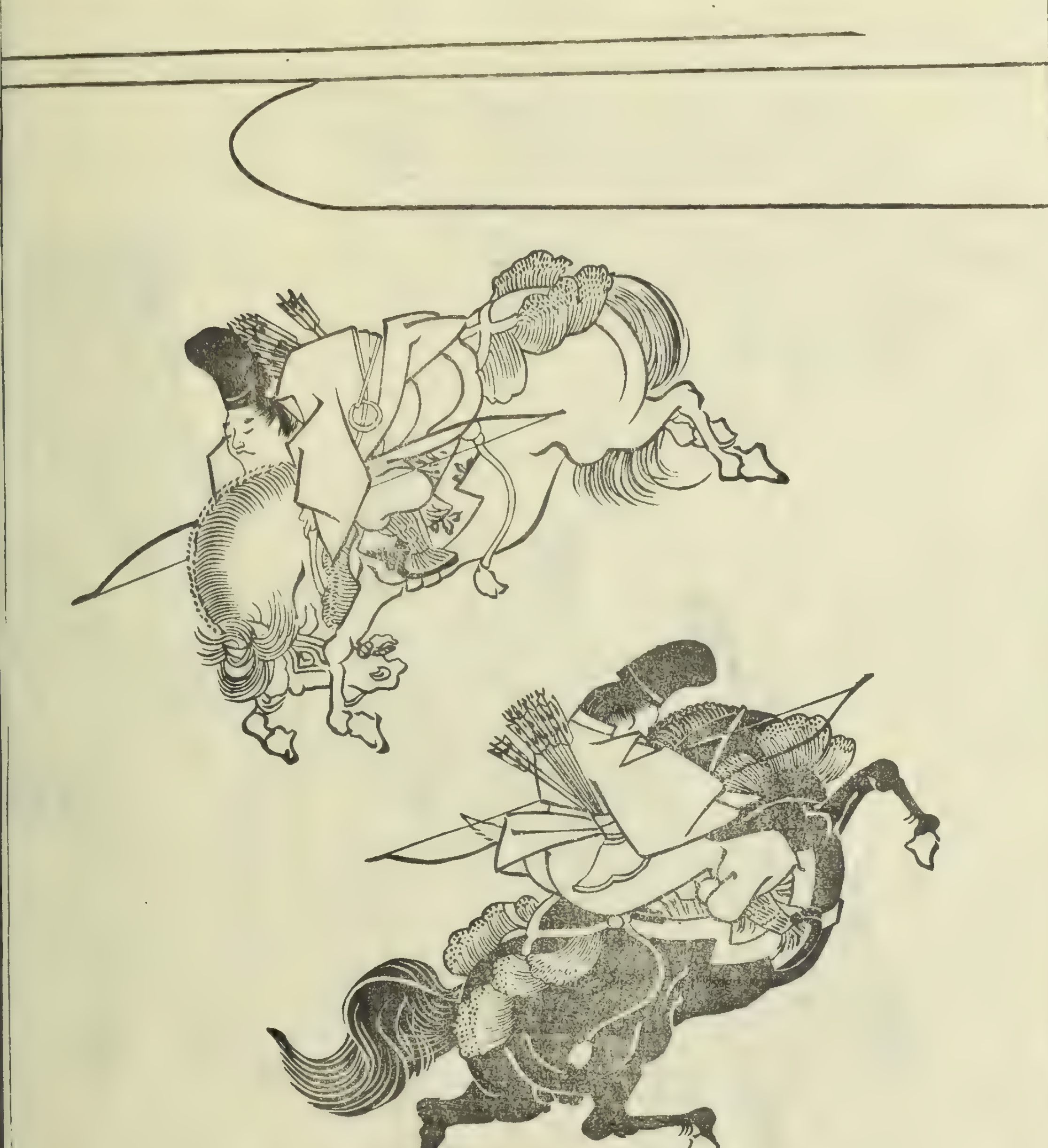


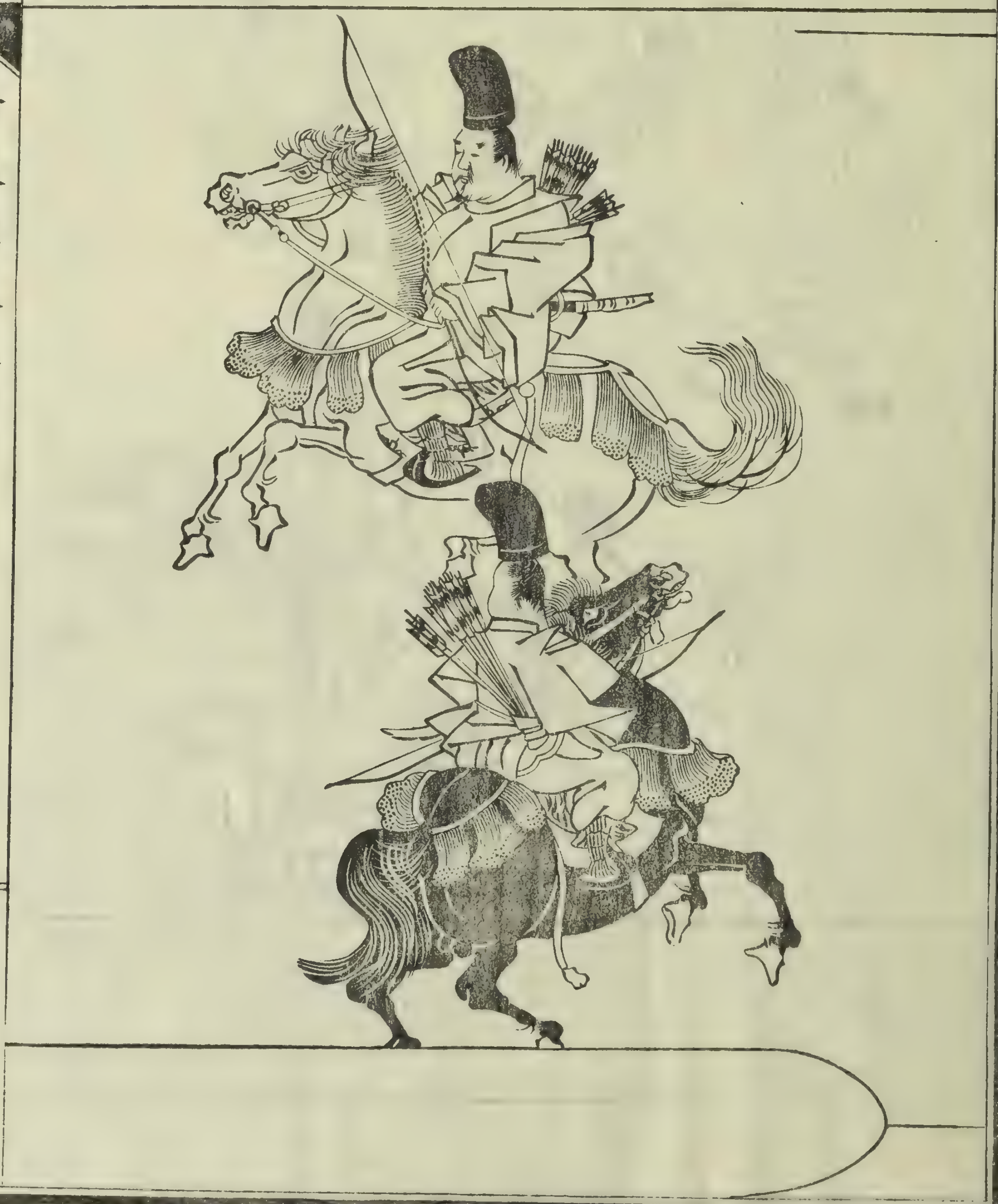


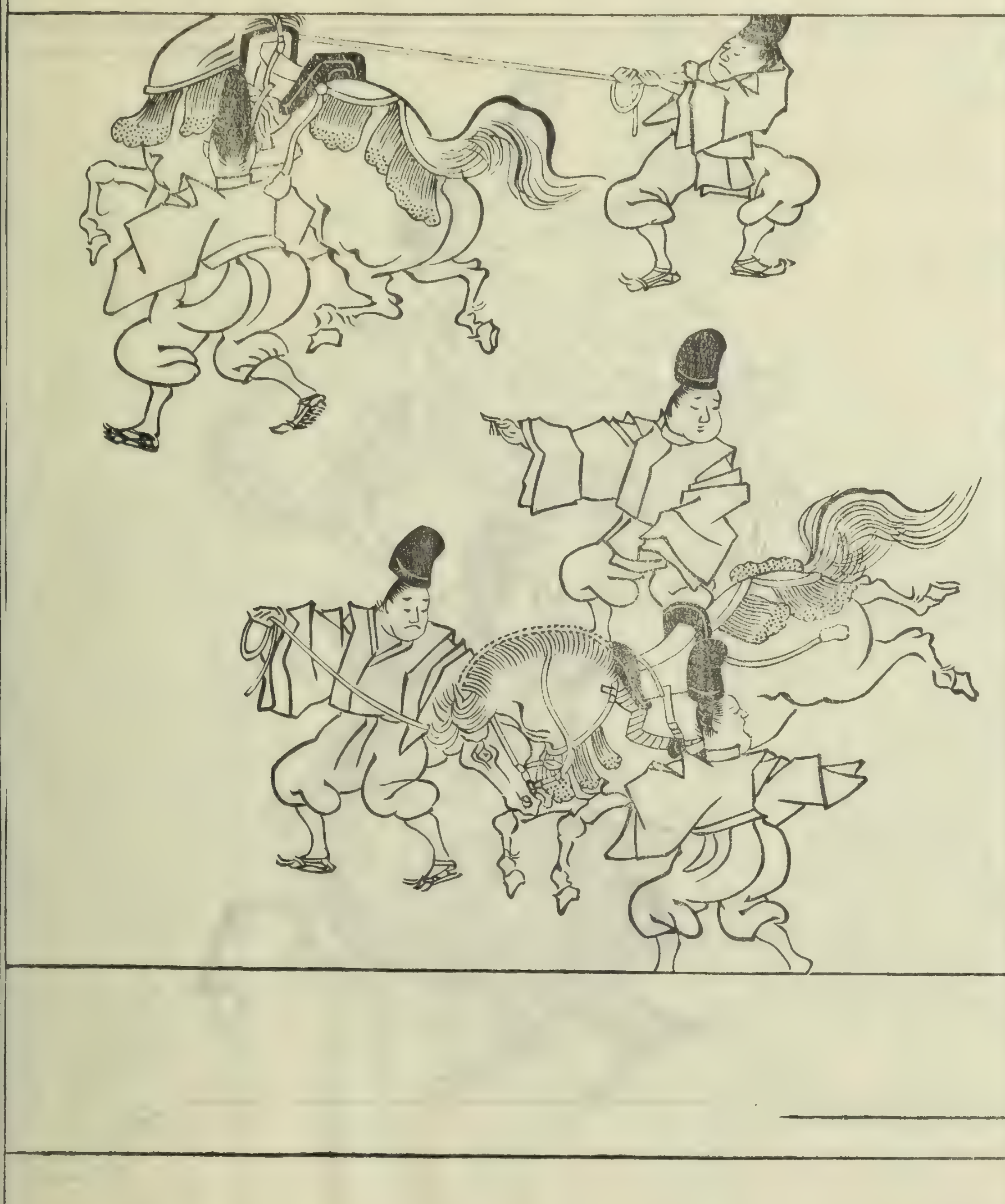


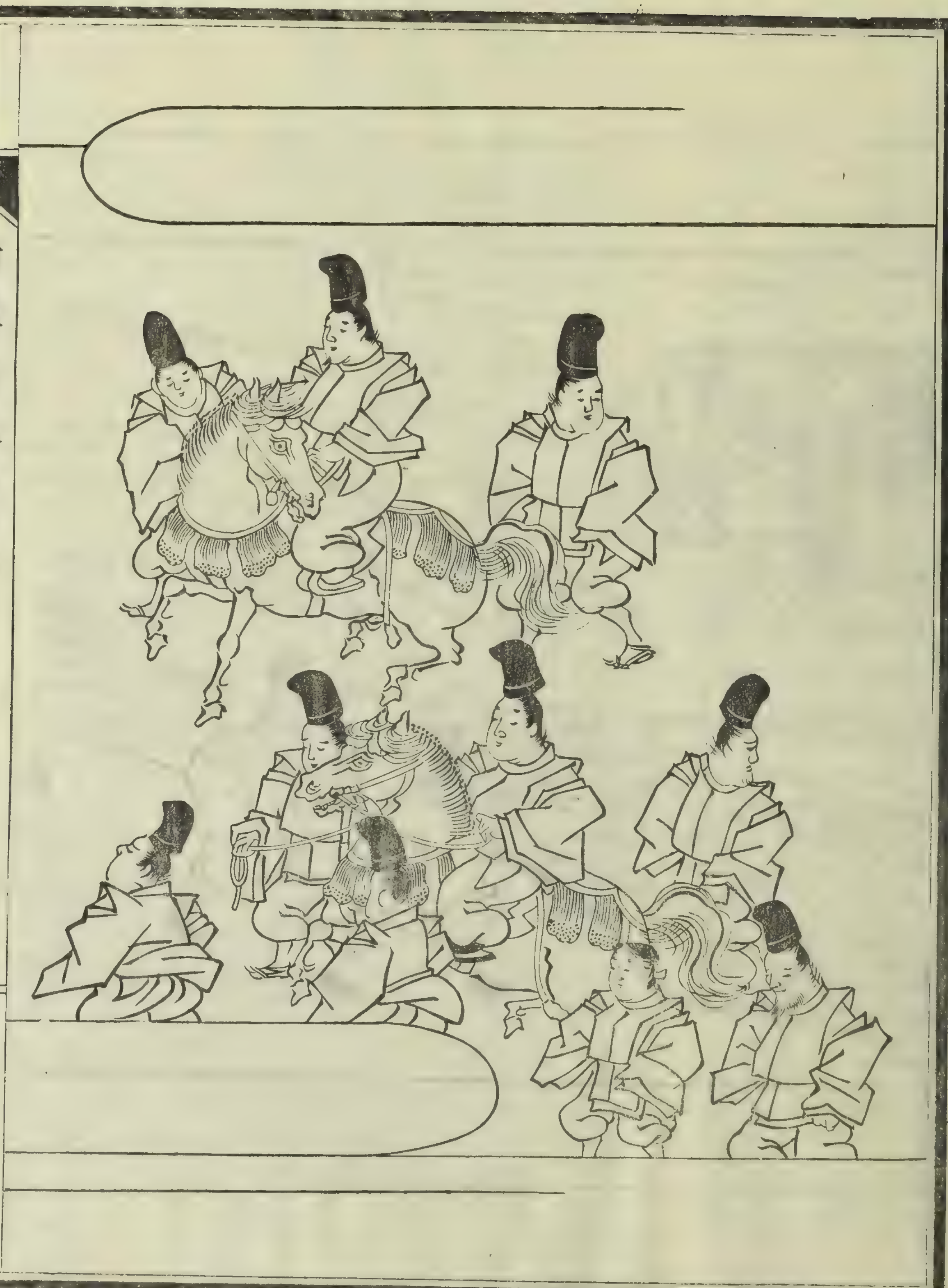






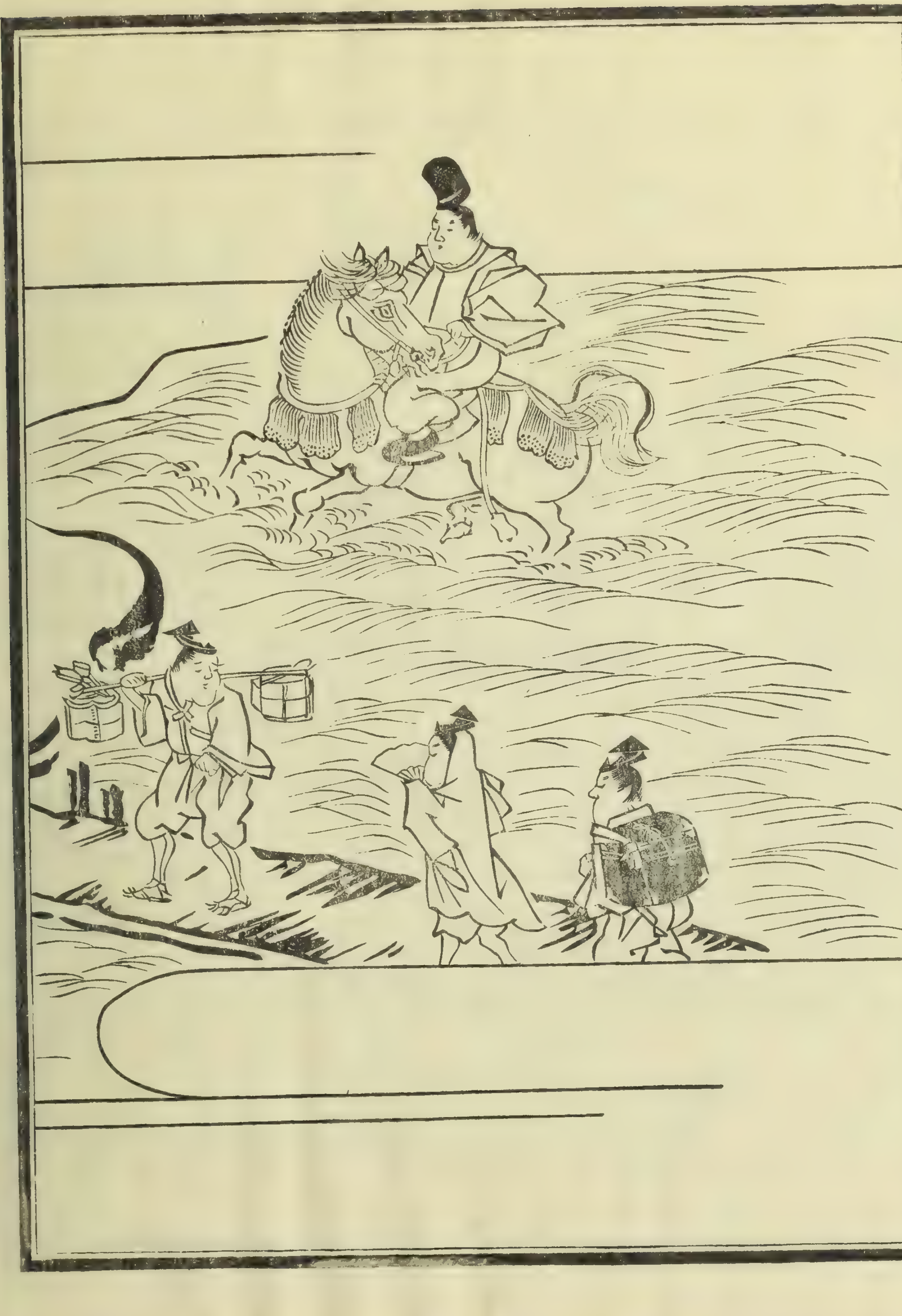




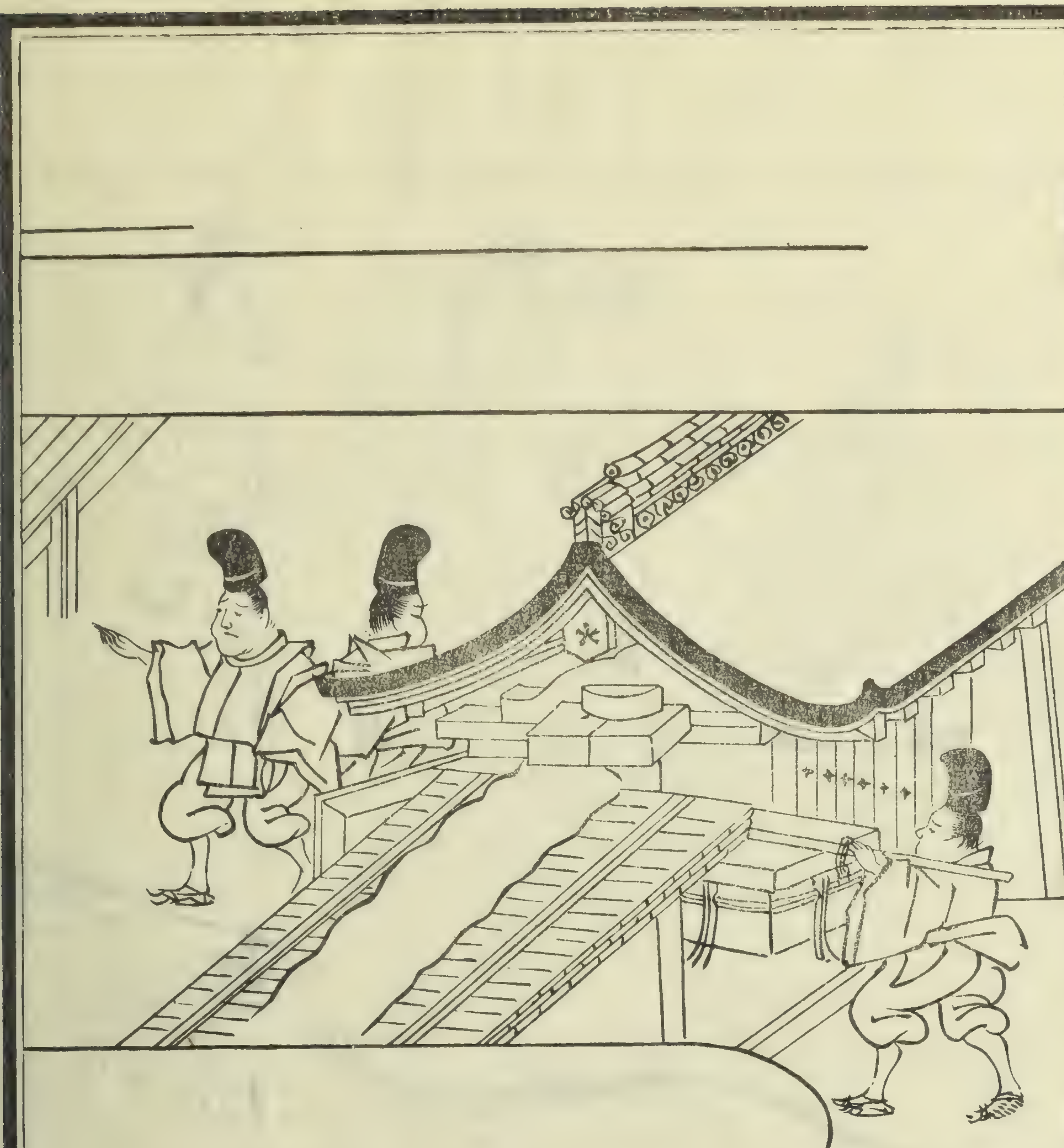


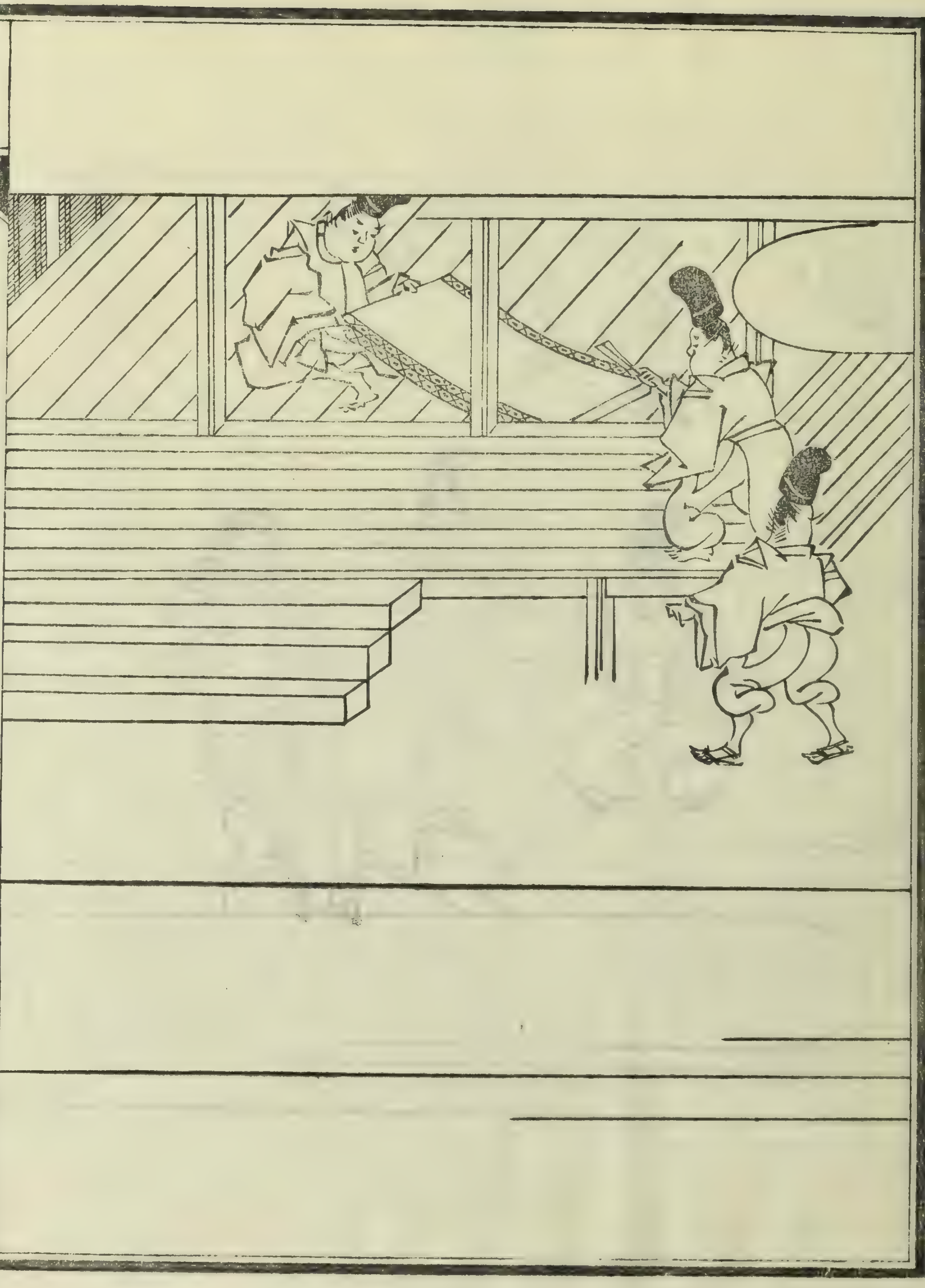




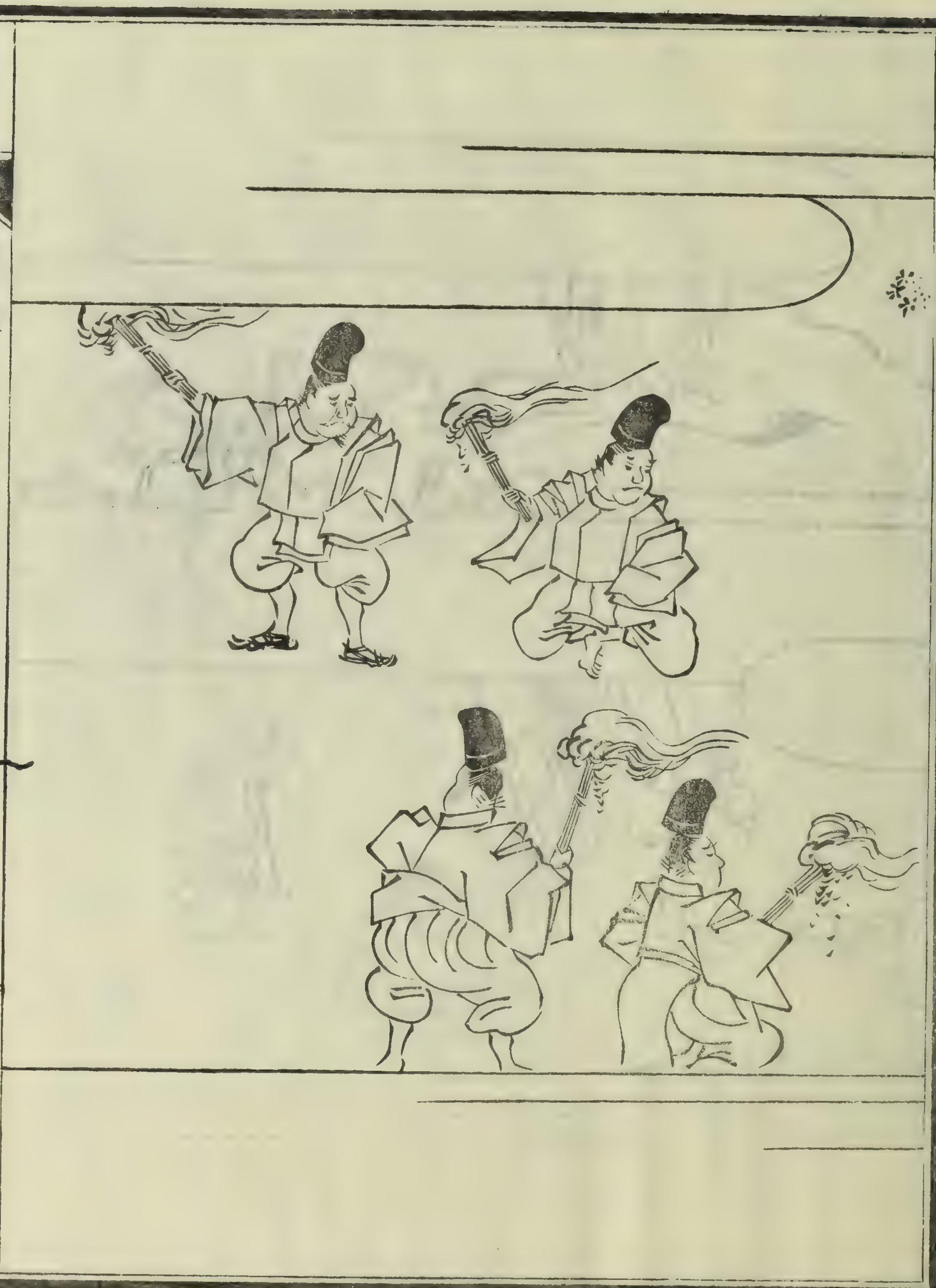


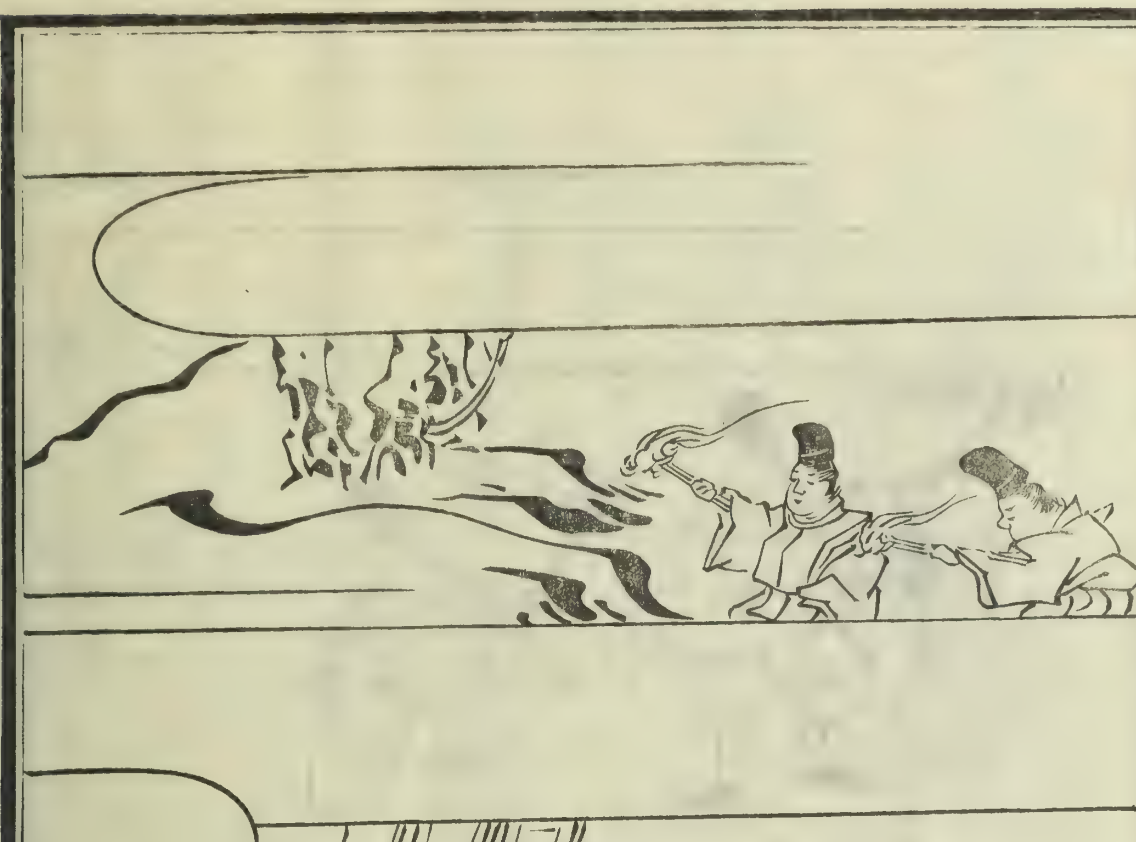








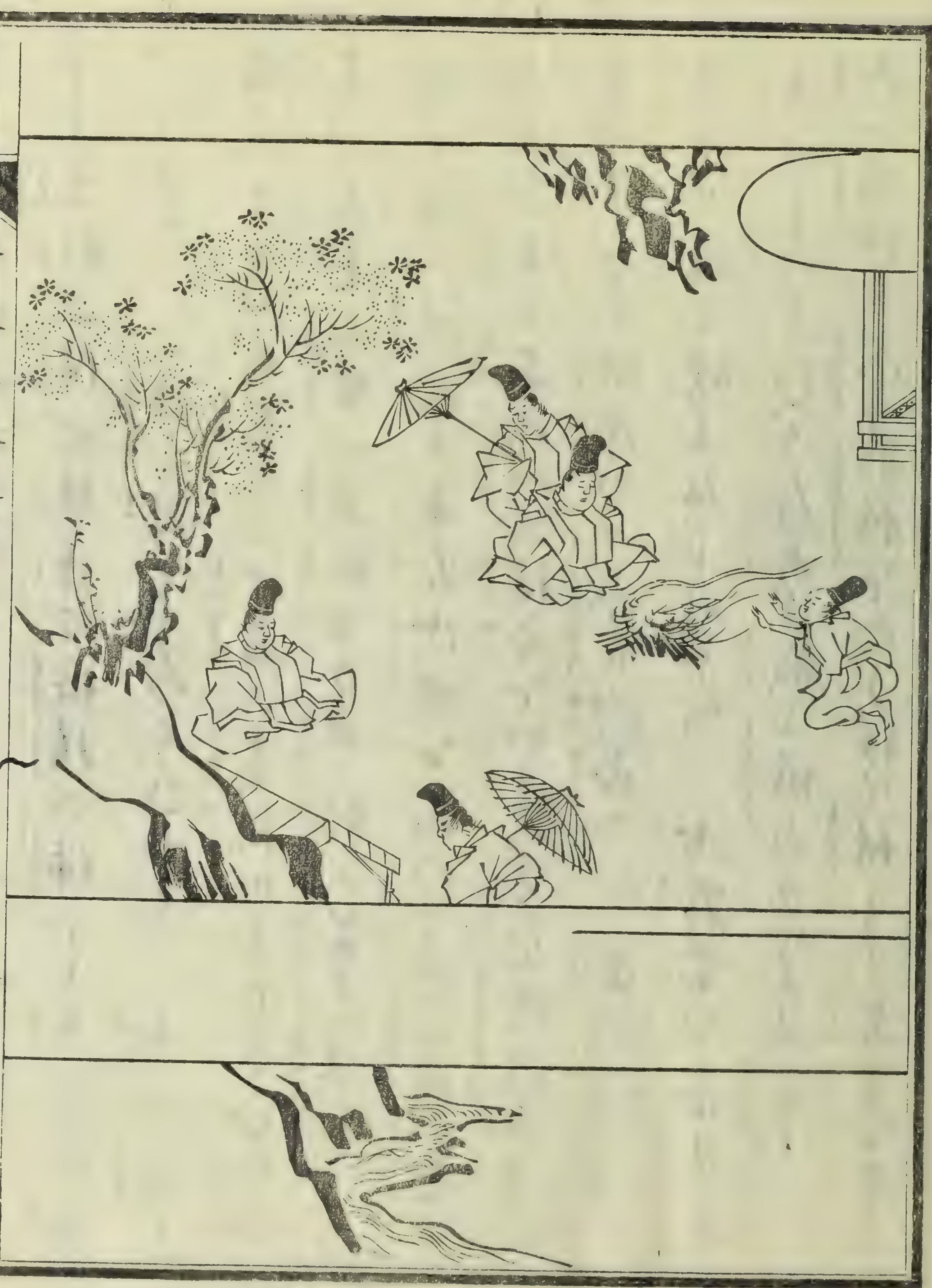








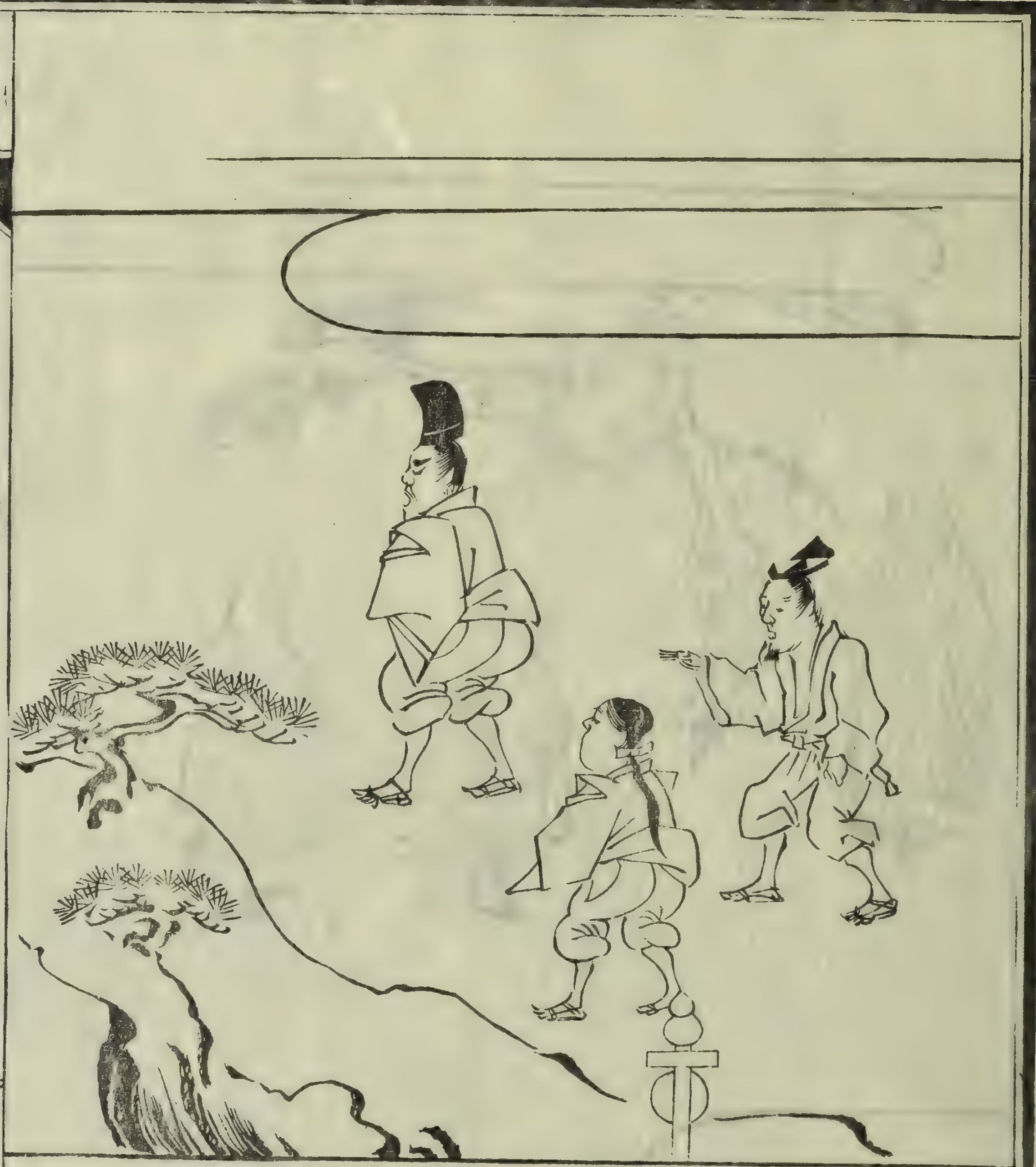


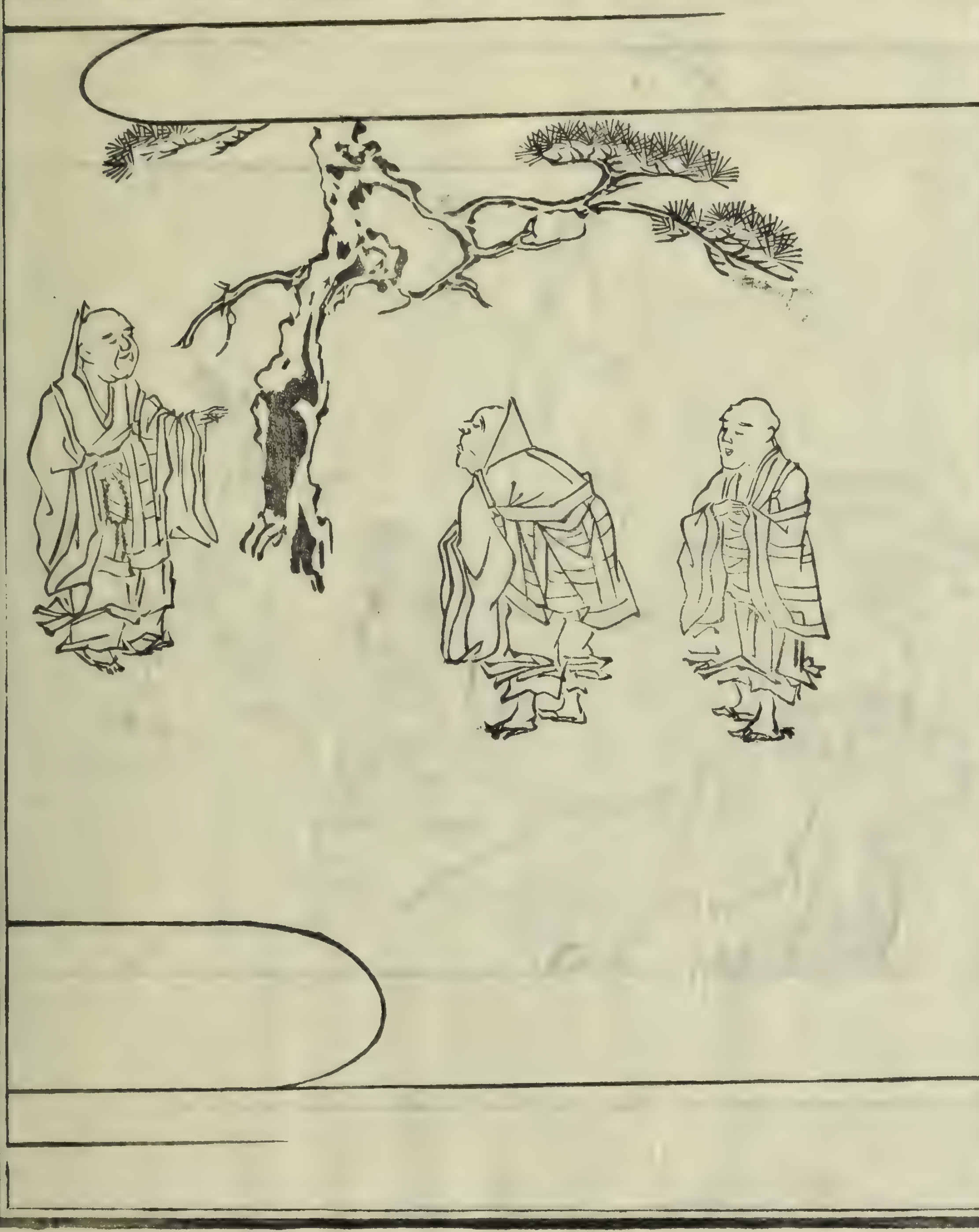


とも雲影に伴て攀深谷縦横の様ども鳥跡紙漏
でけるる　御顔忽に
仙顔殊くもづらひなく
盛んとかずも豈ゞで十善の宿因のゝなからむや多
なるる事三寶の冥助なり申刻に笠木坂に
着せ給ふ彼處に寺家御所とてつふに三間一面の
御所兩方に各五間の板屋をかまへて公卿侍臣の座
とく皆もて假屋なり今日御山へ
處に日既に暮かゝりぬ　御窮屈をいたす先
まてまつくむかためにて儀に職ありて其の所に
御一宿なり人ゝ荊棘をもて枕とし莓苔をもつ

ひく莚とし侍りけり
同廿六日笠木坂の御宿より山上中院へ
入御寺家の沙汰として御所は新造せる同廿七日
ふ先奥の院へ　御参御経供養あり金泥法華
経一部墨字の理趣経三十巻開題ましる廟壇の
前に導師呪願の高座として東西南北に七僧の
座を設く七僧の座の東に三十人の座をまうけて
住山の僧題名をよぐ石壇の上に卅萬燈をともし
さる禅殿の北の庇に　上皇は　御座成し
給ふ御導師法印権大僧都隆明呪願長者権少僧

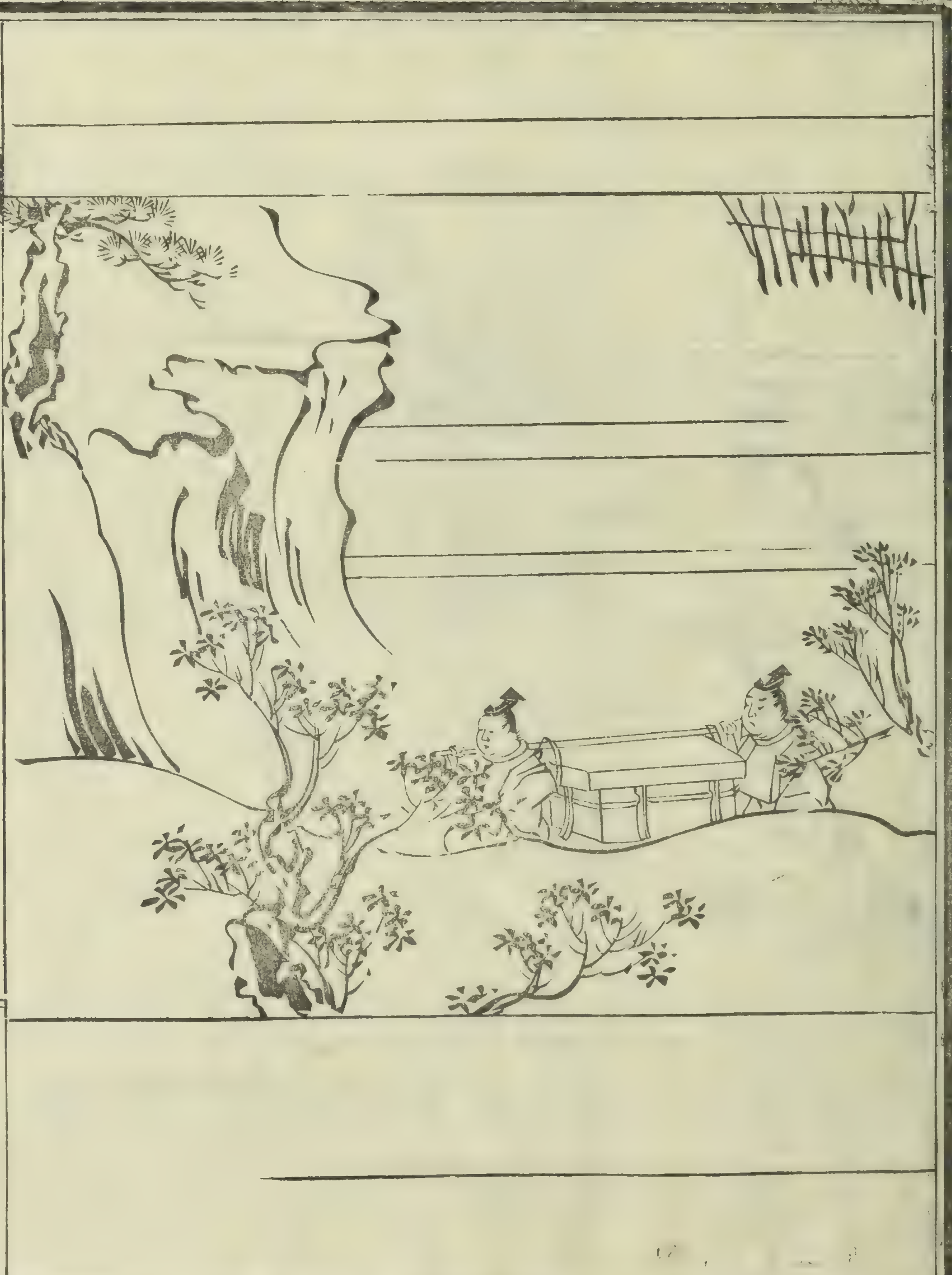
鄒寛賢之禮権少僧都寛意あり頼昭澄成承尋継覚
唄散花等の役をつとむ時に御導師の表白ニ昔釋
尊の恵達太子たりし時皇城を辞して道を修し今
太上皇の寶位を抛て是涅に攀躋往昔未聞将来又
可疑きの詞いまだきかざるに隆明列づらね浮注を
貴賤遊覧とのおはぢしいふ事なりし是風月の金句
みなりしなれども道理のいたり感志とおもしめすなり
此間公家より頭中将源雅俊朝臣を　勅使として
御誦経物とたてまつらる又　上皇権大納言師忠
をもて勅賞と仰らる三口の阿闍梨を寄て修法灌



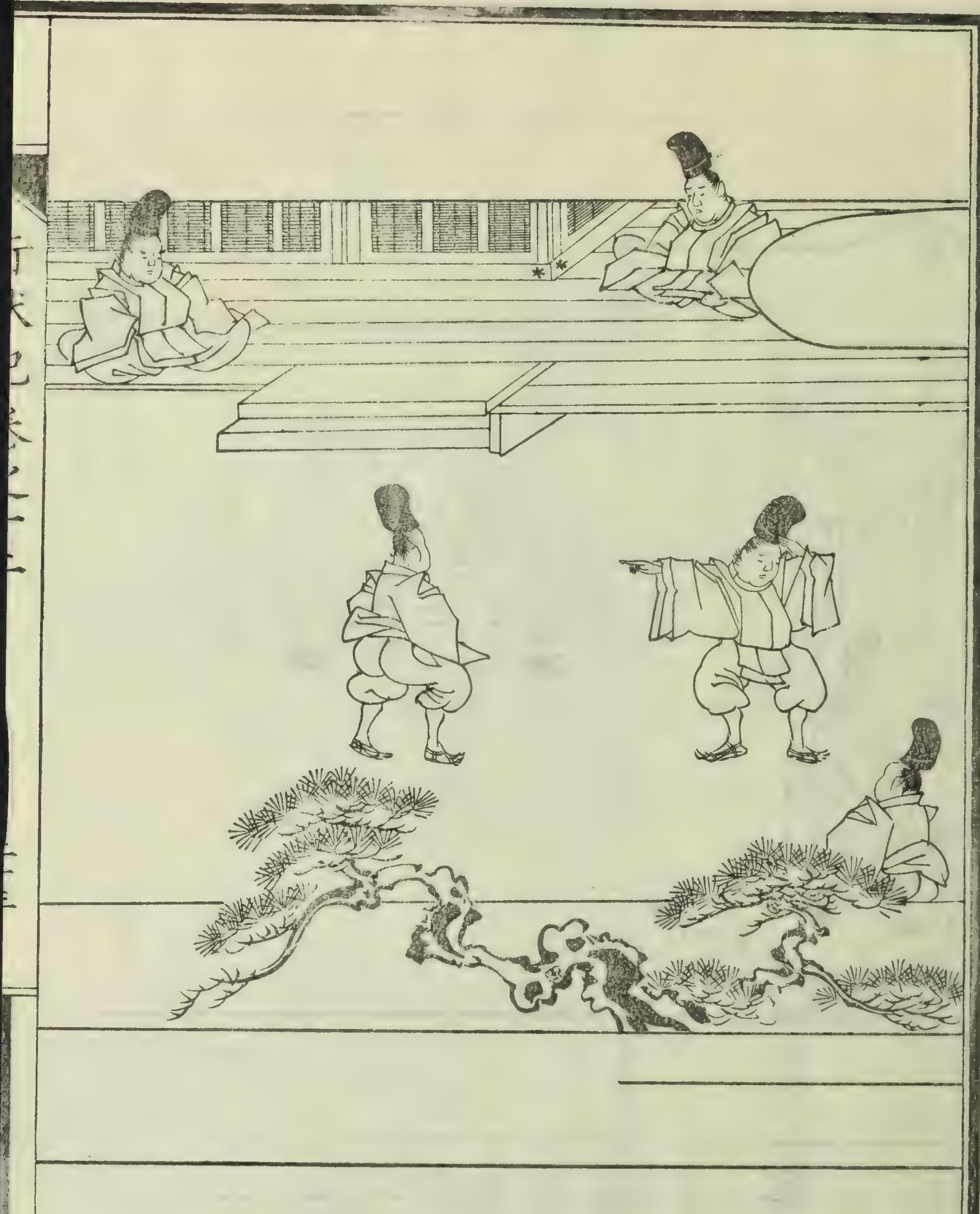


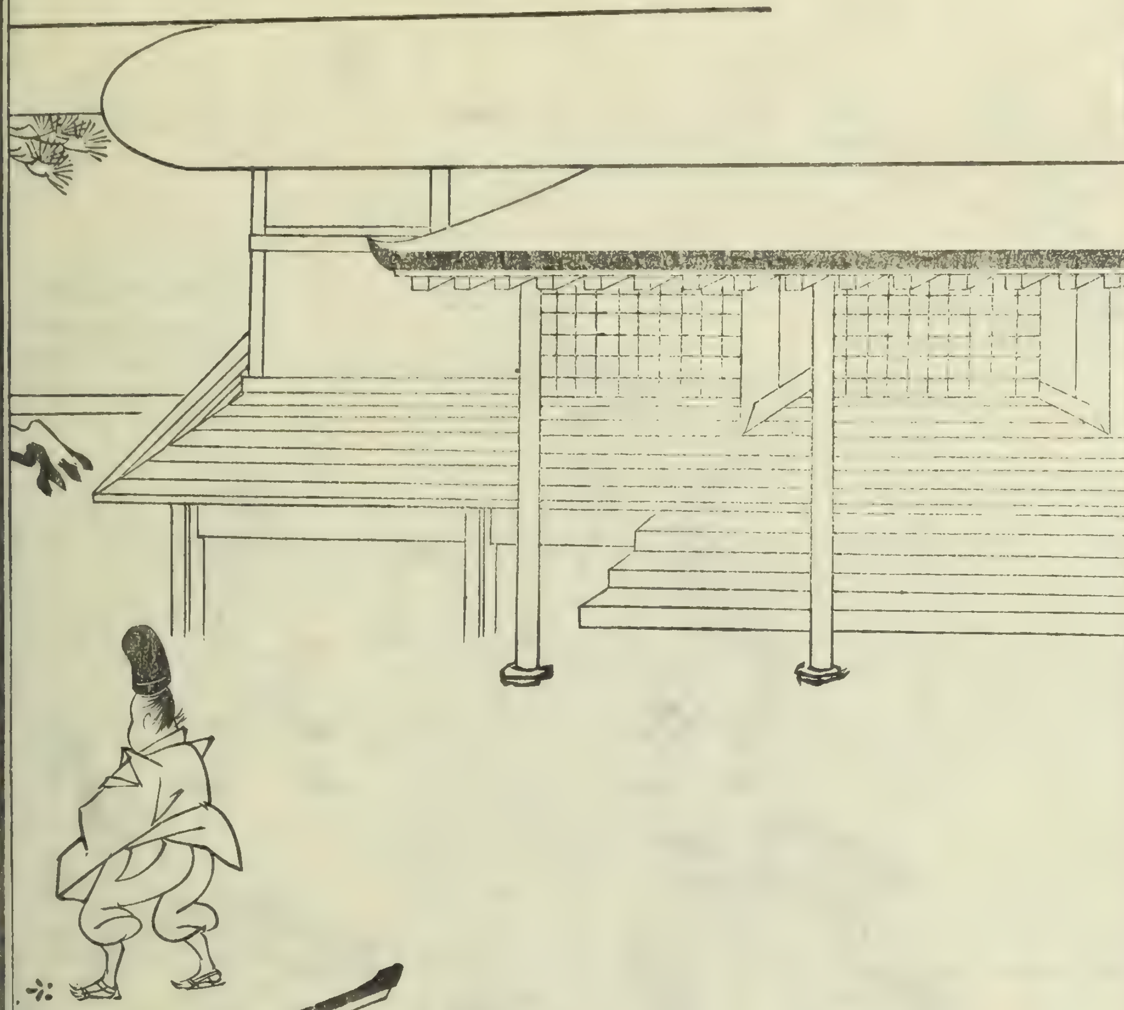




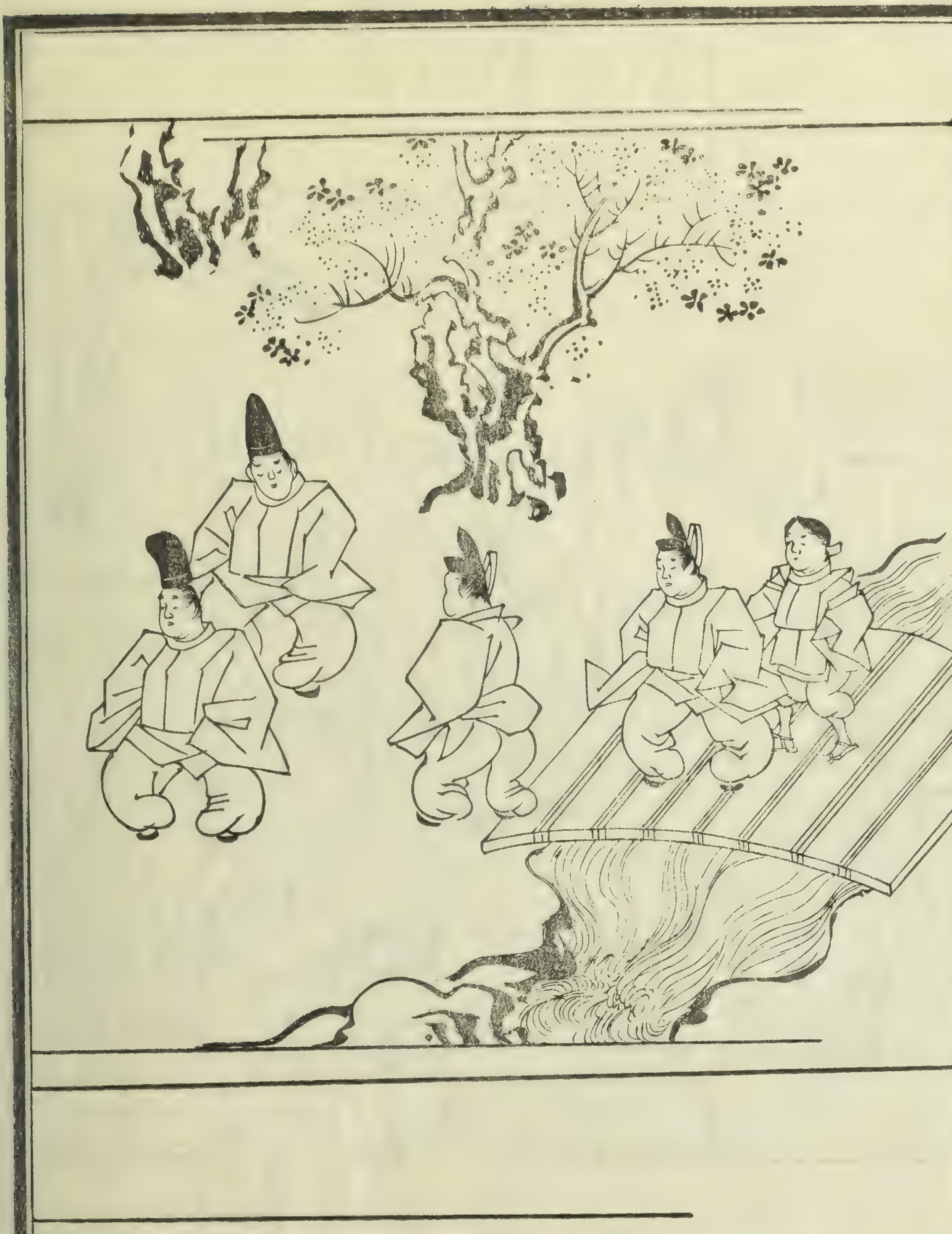


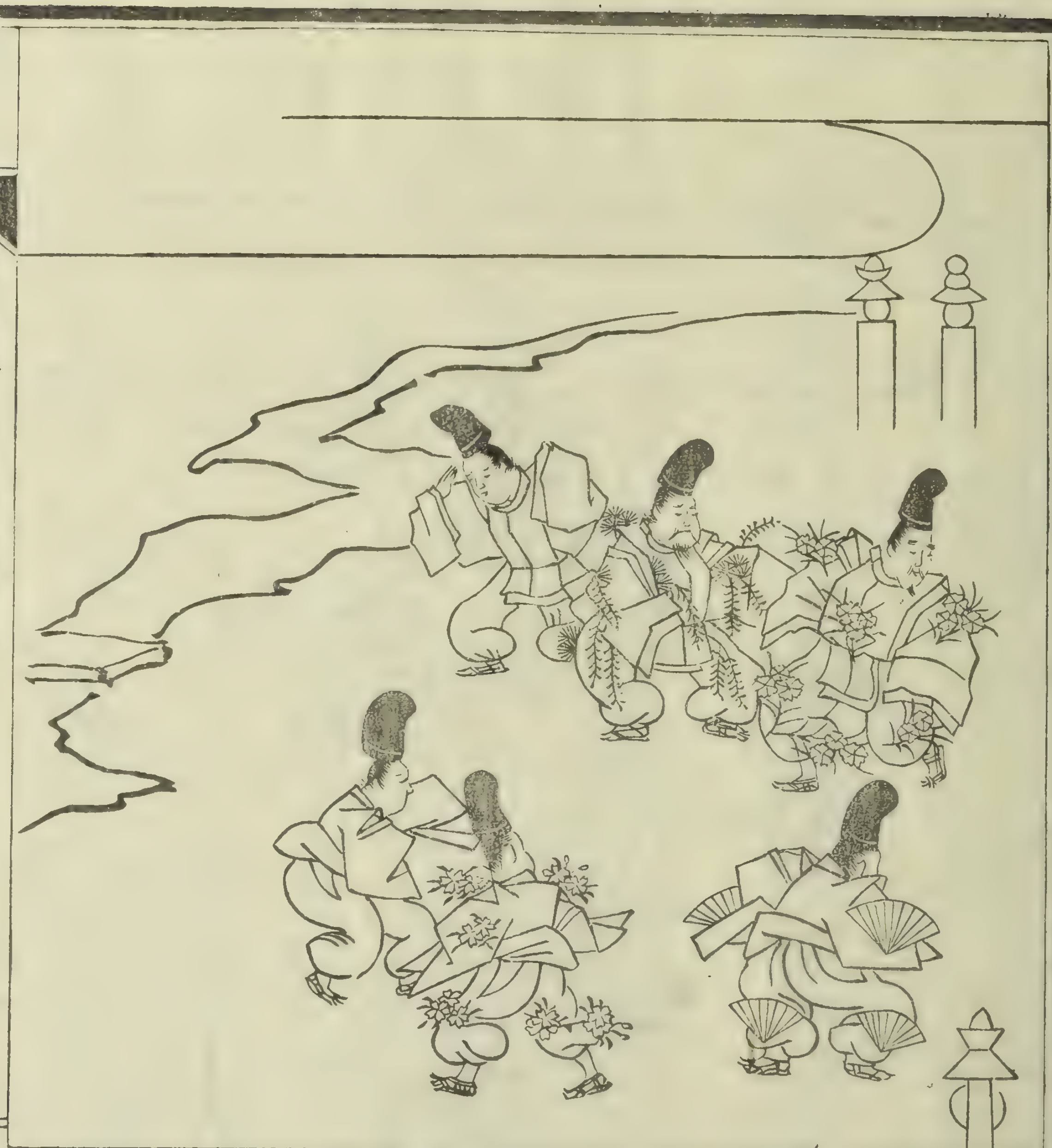




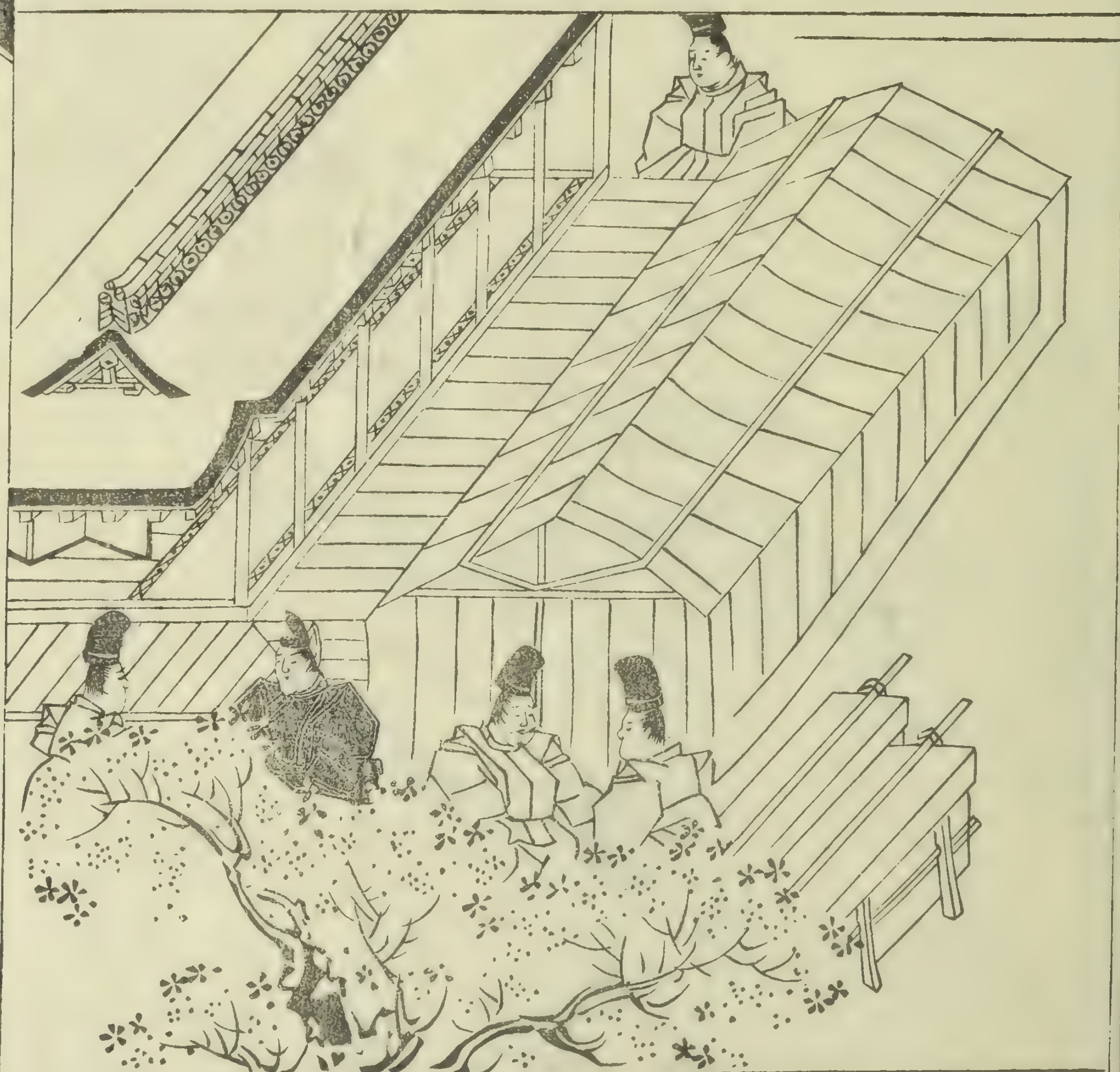


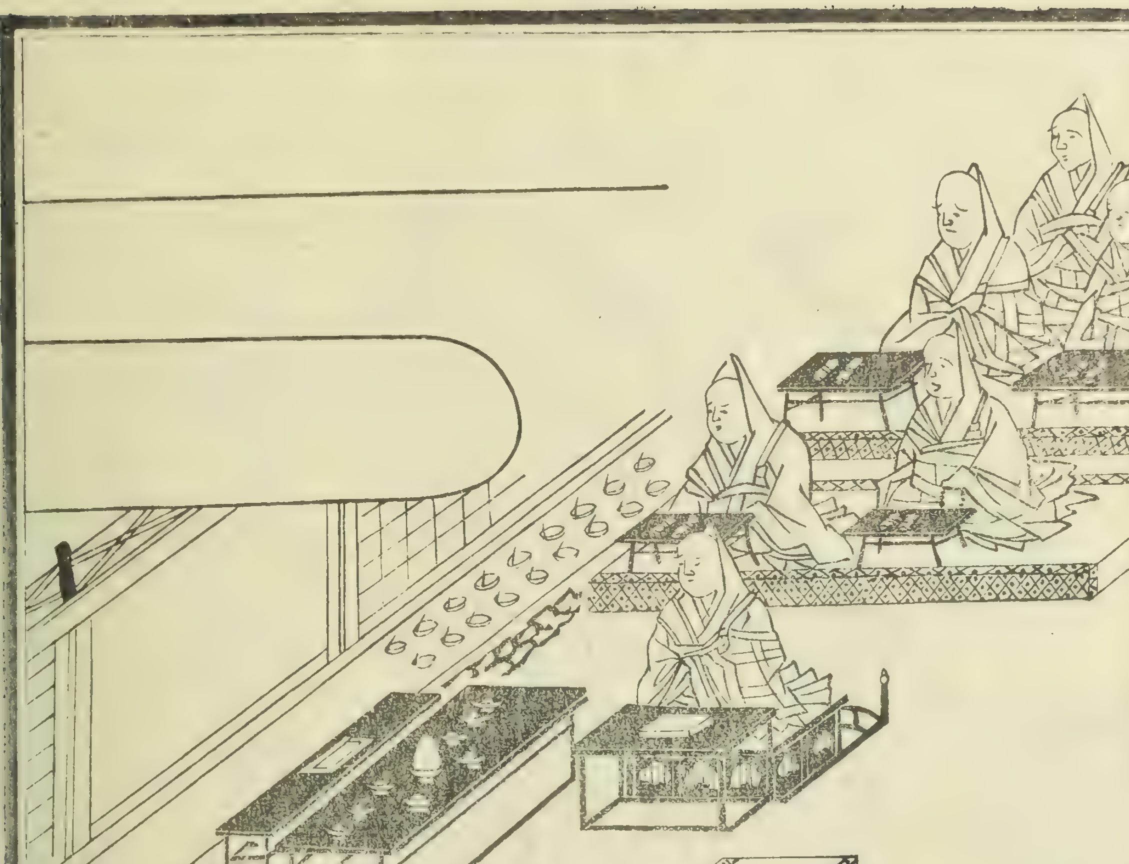


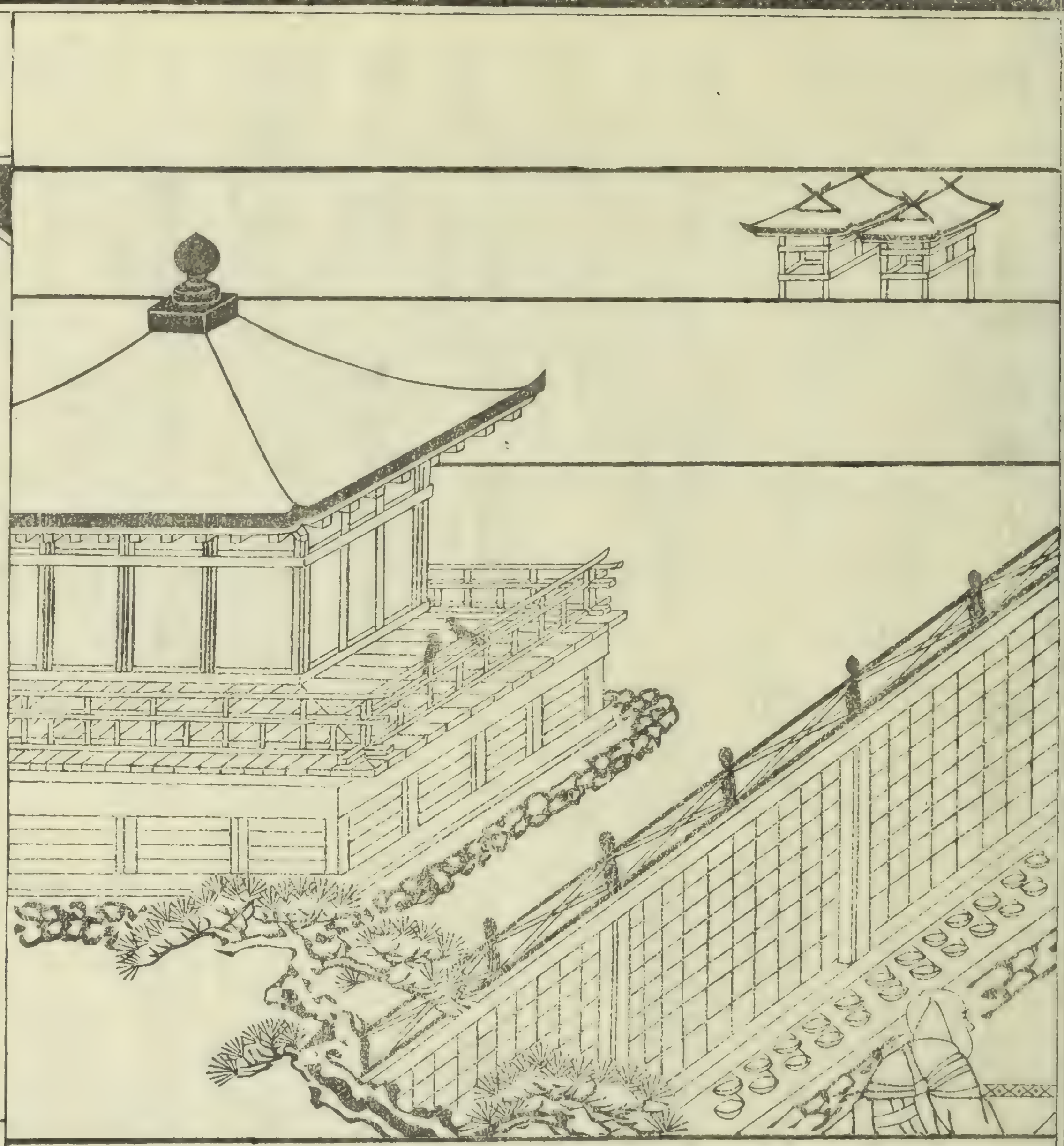




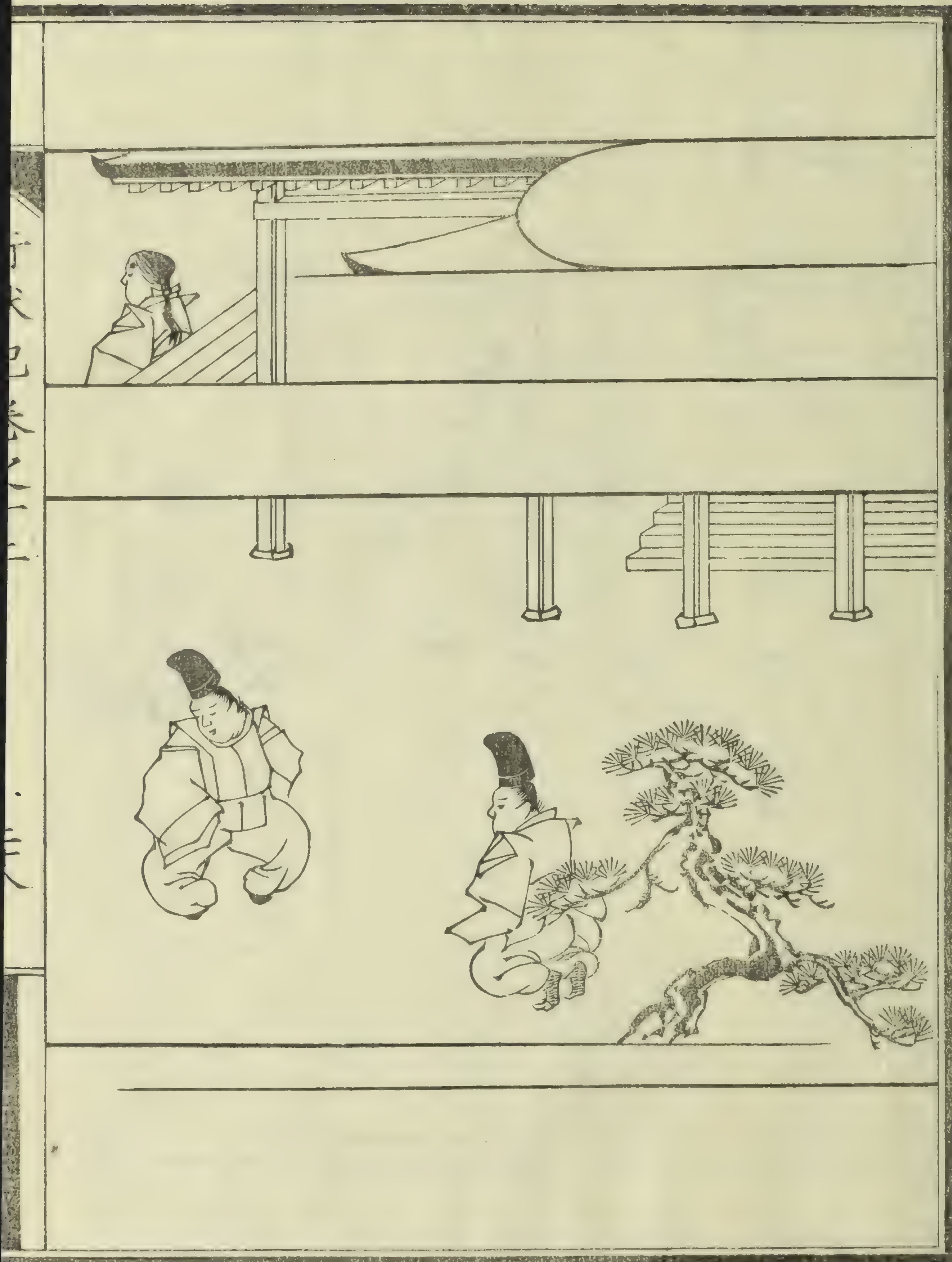


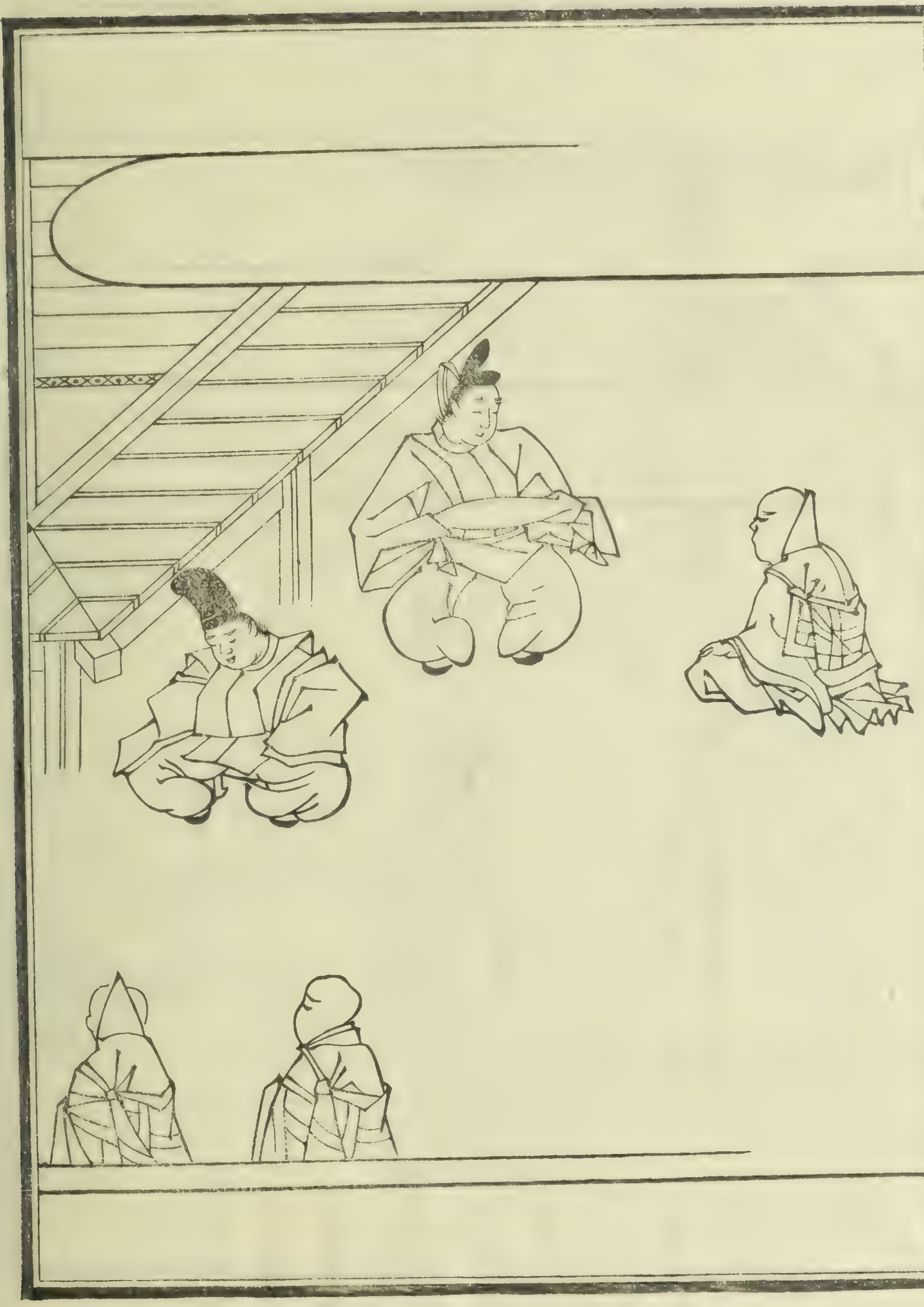






頂を法じ先大塔を遶立して舊儀に復すべきよし
なり御経供養の後礼殿にして卅口の僧侶ありて
理趣三昧をおこなはる礼殿の南の方に三間の假
屋を立て　御聴聞所とし其後長者定賢僧都大師
御筆二巻をたてまつる権大納言雅実卿これを伝
へ進ず事訖て　上皇中院へ還御ありける
同廿八日に御影堂へ　御参ありて執行良禅をりと
いへども凡鄙の者　御前へ進ぐることなかりし寛意
僧都仰によりて堂の戸をひらく大師の御影を礼
拝し奉る什物を　叡覧あり御共の侍臣座よりに







仔細して三井の松は由来をとひ聴て結縁の為
に各其枝を折て懐にし此旨長者並に三綱等乃
録物を給てのち薬師堂へ　御参するに中院へ
入御あり廿九日に　還御すべく始中終乃儀
式まちしを注まうしけれバ大師入定の後二
百余廻におよぶといへどもいまだ　上皇は
臨幸なきうへ叢林の　聖代より以後一十九代を
歴しかども尚この山は　御ゆきなかりしに寛治
いま帝代の例とのたまはるまゝ一旦の叡信の
みならず定て多生御宿因たゞりむかし遥に

都城の霞と出て紀州の異地に幸し遠き深
山は露とわけて坐禅の窟崛に詣給へるふれ
御志太師いかばかり御納受ありけんそれより
うち明時の佳例として代々は上皇仙蹕を
從きつみじかりし車ども多り誠にもの山を諸仏
菩経の峯冥衆守護の洞なりバ一度あゆみをはこぶ
人は須いのく三途のとがを泳とち一念信心とる者ハ
必二世は重ばとぐ心ある人は欽仰の志を深くし
誠ふ行ん類は参詣の願ととぐべきふや
弘法大師行状記巻之十二　大尾

恭惟昔在
皇運之隆斯吾　高祖大師出焉實
始揭三密之慧炬重昏肇曉茲级
五智之法水涸鱗普潤盛哉青龍
之真教廣被四海遠及于今殆千歲
如一日也然而世之稱其德紀其事者
謬多錯襍寧屬蕪銑奮欲以揚其

德遍足以累之豈非一大闕典歟幸今吾東寺有　大師行狀繪詞者十二卷雖未審其誰撰要亦五百年前所筆其辭則藤紳公卿其畫則土佐光宣事蹟覈實畫様典雅識足以爲真傳今茲甲午正曆千年之忌辰遂梓之以公於世蓋使世之瞻事蹟者據

是以秀之欽且悟者因是以識之則其
大師之所以為　大師益以顯然矣是
則前世撰者之意而亦無儕所報於
師德之微衷也已矣冀世之向斯道者
潛思而觀焉
天保四年歲次癸巳冬十有一月
東寺十輪院住持慧乘謹誌

於東武之客舍

玄憲謹録

平安 樋口與兵衛刊

彫刻助願　東都神田　御薗八良兵衛養成
前六巻縮圖　京師佛画工　中西誠應
後六巻縮圖　東武日本画師　喜多武清
筆工　江府大岡候藩　渡邉源三
彫刀　同　神田鍋町　勇　吉